

Historical Library of Matsue City

松江市歴史叢書 5

2012年3月

松江市史研究 3号

- 絵図と測量図に見る大橋川の歴史 徳岡隆夫・高安克己・大矢幸雄 (1)
- 2000年代に島根半島沿岸域の定置網で漁獲された
魚介類の季節変動および年変動 勢村 均 (17)
- 松江市沿岸海域の魚類 越川 敏樹 (33)
- 島根県の弥生時代鉄器集成 池淵 俊一 (43)
- 出雲の子持壺集成 池淵 俊一 (59)
- 出雲国司補任表(稿) 大宝元年～保元元年 大日方克己 (75)
- 島根県立図書館所蔵「桃家資料」
— 解題と目録 — 宇野田尚哉 (87)
- 寛永期に2度作成された中国筋国絵図
— 寛永10、15年出雲国絵図の比較 — 川村 博忠 (109)
- 松江市史編纂日誌 史料編纂室 (121)
- 松平直政論
— 西国における政治的位置 — 三宅 正浩 [1]



寛永10年出雲国絵図写、南葵文庫本



寛永15年出雲国絵図写、島根県立古代出雲歴史博物館本

松江市教育委員会

は じ め に

松江開府400年を記念して、地域の歴史を顕彰する活動が多様な場面で繰り広げられている中で、「歴史叢書」は「埋蔵文化財調査報告」「ふるさと文庫」「歴史資（史）料集」に続く歴史シリーズとして、松江市に関わる歴史事象の調査・研究成果を適宜集めて発刊するものです。

現在、松江市では、歴史を振り返り、未来への展望を見出す契機として、『松江市史』の編纂に取り組んでおり、「松江市史研究」をとおして、編纂事業での調査・研究成果や活動記録などを適宜紹介いたします。

今号では、松江市史編纂過程で明らかになった自然環境、原始古代史、近世史、絵図の各分野の論文や目録などを掲載しております。

今後とも、この「歴史叢書」に対し、多くの地域史研究者のご参加をいただくことで、地域の歴史がより一層明らかになるとともに、その成果が未来に向かって歩む地域の人々の生き様に大きな示唆を与えてくれることを願ってやみません。

2012年3月

松江市教育委員会

教育長 福 島 律 子

『松江市史』刊行計画

(平成24年3月21日現在)

発行年度 (平成)	巻のタイトル	本体価格 (税別)
23	史料編5「近世Ⅰ」	5,000円
	史料編2「考古資料」	7,000円
24	史料編3「古代・中世Ⅰ」	未刊
	史料編6「近世Ⅱ」	未刊
25	史料編4「中世Ⅱ」	未刊
	史料編11「絵図・地図」	未刊
26	通史編1「自然環境・原始・古代」	未刊
	史料編7「近世Ⅲ」	未刊
	別編2「民俗」	未刊
27	通史編2「中世」	未刊
	史料編8「近世Ⅳ」	未刊
28	通史編3「近世(一)」	未刊
	史料編9「近現代Ⅰ」	未刊
29	通史編4「近世(二)」	未刊
	史料編10「近現代Ⅱ」	未刊
	別編1「松江城」	未刊
30	通史編5「近現代」	未刊
	史料編1「地質・自然環境」	未刊

絵図と測量図に見る大橋川の歴史

徳岡隆夫・高安克己・大矢幸雄

はじめに

今から 1200 年余り前に編纂された『出雲国風土記』には中海側から宍道湖まで深く湾入した入海の光景が記述されている。現在の大橋川はその入海の狭窄部にあたっていた。その後、中国山地のたたら製鉄の興隆によって大量のマサ土が運び込まれて入海の西縁部は埋め立てが進み、ついには斐伊川の東流をもたらし、大橋川はその下流域の一部となった。

斐伊川本流が東流して、完全に宍道湖に流入するようになるのが、寛永 16 年（1639）と言われている。以後、宍道湖には従来の 3.3 倍以上もの広大な集水域から水が流入するようになり、埋め立てによる貯留量の減少とも重なって、呑口にあたる松江城下は頻繁に洪水に見舞われることになる。松江藩は洪水対策として、元禄 2 年（1689）に天神川を開削するとともに、堀川と宍道湖をつなぐ末次土手（現在の市役所西）を切り開いて城下の水流を促した。一方で 18 世紀中ごろ以降になると藩は松江大橋の川下に広がる中洲や湿地帯での新田開発をさかんに奨励し、大橋川の地形は大きく変貌するに至った。

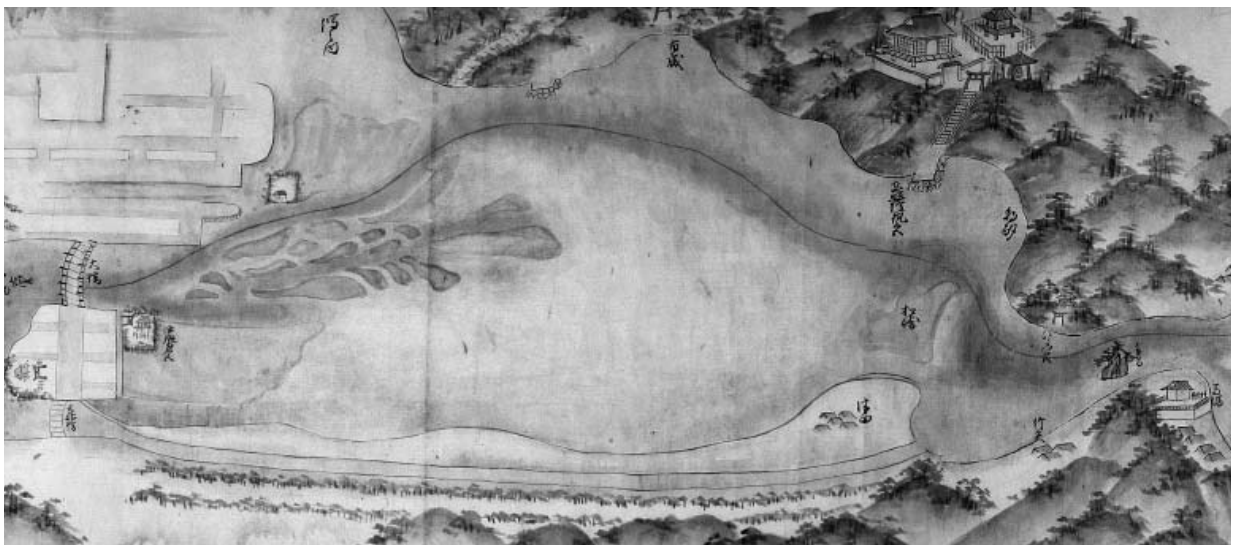
ここでは江戸時代以降の大橋川の状況について、おもに絵図と測量図にもとづいて考察する。

なお 1 章は大矢、2 章は高安、3 章は徳岡が担当し、全体を 3 名で討議してまとめた。国土交通省出雲河川事務所および島根県には、協働して検討中の図面の一部を本稿中で利用させていただいた。2008 年から続く島根大学白潟サロンでの松江の昔絵葉書写真展・収集検討会参加各位からは色々と御教示を得た。記してお礼申し上げます。

1. 絵図に見る大橋川下の開発

(1) 新田開発以前の大橋川下

大橋川下（ここでは、現在の新大橋付近から朝酌川との合流付近までをさす）の新田開発以前の地形は、18 世紀初頃に描かれた『大坂より松江航路図』⁽¹⁾（第 1 図）に垣間見ることができる。



第 1 図 『大坂より松江航路図』（中山家蔵）1700 年頃

この絵図は、実測図ではないが、もともと船の航海用に作成されたもので、水路に面した村々や水域に広がる中洲などが描画されている。

絵図には、北部に「潟之内」、中央部に樹木に囲まれた屋敷、南西方向から南東方向に細長く並ぶ中洲群、南部には東西に延びる天神川がある。つまり、北側には内湖（現在の島根大学の南方）があり、中央の大橋川沿いは葦で覆われた中洲が広がり、南には天神川がほぼ直線的に東に流れている風景である。大橋川本流は現在と違って、中洲群の北側を流れており、流路には航路が描かれている。

中洲の形・配置状況からは、中央部分は網目状の流路になっており、水深は浅く流速も緩やかな場所であると思われる。こうした土地は、洪水時には冠水しやすく、大洪水の後には土地の様子が大きく変貌しやすい場所でもある。

さらに、年代の異なるいくつかの松江城下図を眺めると、大橋下流（現在の「くにびきメッセ」付近）は、19世紀頃までは葦に覆われた一部の島が描かれているに過ぎないが、文化年間（1804～1817）頃より水路や耕地などが描かれるようになる。

(2) 大橋川下の新田開発と洪水対策

A) 大橋川下絵図の比較

現在、大橋川下を描いた絵図は、島根大学附属図書館（桑原文庫）、明治大学附属図書館（蘆田文庫）、地元の中山家の2幅、松江市誌附図を含めて5枚確認されている。それぞれの絵図は、大橋川下の新田開発や水利用など、表現内容がかなり似かよっていることから作成年代が近く、いずれかの写しであると思われる。

第2図は、島根大学の『川下辺絵図』である。中山家文書の中にある同系統の絵図には、「天明6年御普請所積り場所」とあり、松江藩が1786年に土木工事を実施した際に原図は作成されたと推定できる。^[2] 絵図には、水門の開閉や土地の開削、水代の存在、慶応年間の新田、明治の埋め立て地などと書かれた張り紙があり、かなり長期にわたる耕地の変貌を描いている。また、他の絵図と違って地名や新田名の記載はほとんどなく、川や堀川、水門など水路関係の名称が多いのが特色である。

第3図は、明治大学の『出雲國天神川口新田ノ圖』であり、裏に朱書きされた絵図名からして、大橋川下の新田開発に関わる絵図であると思われる。作成年代は書かれていない。絵図は、中洲を含めた平地は黄色に着色され、周囲にある寺社は黒を基調とする木々で囲むなど、5枚の絵図のなかでは最も表現豊かである。

中央を網目状に流れる水路は、他の絵図と比較して閉塞部分が数か所あり、水路を開削する途中の絵図と思われる。その意味では、この絵図が5枚のなかでは最も古いと思われる。

中山家所蔵の絵図は、『大橋川流域新田及び御立山之図』、『大橋川流域黒田新田之図』の2枚で、両者に描かれた新田名はほぼ同じであり、水路形態は概ね島根大学所蔵の絵図に近い。絵図の描き方は、後者の方が前者より色彩豊かに丁寧な描き方が成されていることからして、後者が本図と考えられる。後者には、松江城西北の黒田村が別枠で描かれており、水路や水門の表現方法は、大橋川下付近に共通している。

松江市誌附図は、図中に『大橋より下川繪図面』の名称、さらに「2枚の内1、南田町米村氏縮写」と記載されている。絵図は縮写図であり、全体的な水路形態は島根大学蔵に近いが、堀や水路内に名前を挿入するためか、他の絵図よりは水路幅がかなり広い。しかしながら、図中に描かれている「川津川尻」の水路は、他の絵図には記載されておらず、後の時代に書き加えられたように思われる。

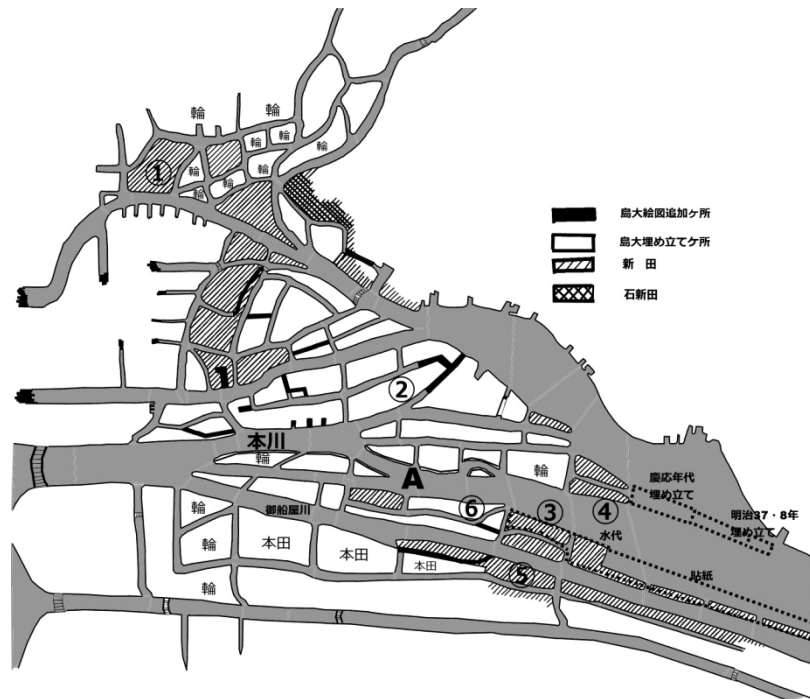


第2図 川下辺絵図、島根大学附属図書館（桑原文庫）蔵



第3図 出雲國天神川口新田ノ圖、明治大学図書館（蘆田文庫）蔵

第4図は、『出雲國天神川口新田ノ圖』のトレース図に、図中に書かれている新田、石新田、輪を記載し、さらに『川下辺絵図』に描かれた水路を重ねた。



第4図 『出雲國天神川口新田ノ圖』のトレース図（大矢作成）

第1表は、4枚の絵図の特質と作成年代を比較するために、第4図中の土地①から⑥に書かれた地名を比較した。絵図には概ね共通した地名が書かれているが、絵図によっては地名が、「賀加屋」が「賀加屋」、「御茶屋」が「御茶道」などと写し間違いと思われる箇所がある。さらに、②の水路が、明治大学蔵の絵図以外に記載されているという違いがある。

第1表 大橋川下絵図の比較

番号	土地利用	明治大学蔵	中山蔵・含黒田	中山蔵・含御立山	島根大学蔵
①	新田	乙部新田	乙部新田	乙部新田	乙部新田
②	水路	なし	あり	あり	あり
③	新田	賀加屋新田	賀加屋新田	朱書加賀屋新田	貼紙
④	新田	御茶道新田	御茶屋新田	御茶屋新田	地名なし
⑤	新田	森広新田	森広新田	森広新田	地名なし
⑥	新田	北出来嶋	出来嶋深津新田	深津新田	地名なし
	記載年代	なし	なし	なし	天明6年(1786)

③の土地は、明治大学は新田が存在、中山家は水路中に朱書き、島大は水路中に張り紙ということで、開発年代に差がある。しかしながら土地②に代表される水路の存在を優先すれば、それぞれの絵図は、作成に数年ないし十数年の幅があり、絵図によっては作成期間が一部で重なっているように思われる。

島根大学の『川下辺絵図』が、天明6年(1786)頃に作成されたとすれば、明治大学の絵図は、水路開削の規模から推定すると10年以内の時代差と思われる。

B) 新田方の設置と開発

松江藩の新田開発は、斐伊川・神戸川の三角州を中心として、松平期に入って本格的に進められた。特に財政窮乏した松江藩では、新田開発は農業生産を高めるものとして三代藩主松平綱近の時代(1675～1686)になってきわめて積極的な奨励策をとった。⁽³⁾

大橋川下の開発は、「新田を開発することは、歴代常に奨励する所であつた。而して宍道湖より吐き出す泥沙は、大橋川下に堆積して、自然に多くの島嶼を作ったのを、元文（1736～1740）の頃に大橋下新田方を設け、新田化することに努め、宝暦（1751～1763）の頃には一段と盛んになったらしい」と『松江市誌』（1941）に記述されている。⁽⁴⁾

第3図は、現在の島根大学付属小学校付近から学園通りにかけて伊豆屋新田、乙部新田があり、さらに田町の東側には柳多、大橋の家老名がついた新田がある。付近には、乙部、柳多、大橋の中屋敷がある関係で、新田開発に携わったものと推定される。

『雲陽大数録』には、伊豆屋新田の造成について、「西川津入江享保五、六年の頃より新田初る、是を矢野原新田と云、又伊豆屋新田と云」⁽⁵⁾とあり、1720年頃から松江城下の豪商と思われる伊豆屋などによって、新田開発が行われたと思われる。

明治大学、中山家の絵図中の新田は、伊豆屋以外にも靴屋、岡崎屋、貞屋、加賀屋などの他、平田の豪商木佐屋と思われる名前があり、松江藩は新田開発において商人の資金に依存していたことが窺える。耕地に関する用語としては、水代、石新田、本田、輪の名称が地名の後に書かれている。水代は、将来、新田開発の予定水面に区域を設けるもので、埋め立て後に年貢の負担が課せられる。さらに、開発された耕地は、土地の安定性・生産性の程度によって、反新田→石新田→本田の順に検地帳に登録される。

輪は、松江藩が年貢を取り立てるため、一定区域内の水田を「〇〇輪」と称したもので、いわば水田の地番のようなものである。輪は、水路、堰など水との関連、一定の地味などを考慮して区域を決めている。つまり、「輪」がつけられている場所は、新田より早い時期に水田化し、すでに年貢を納めている場所ということになる。

以上、大橋川下地域は1720年代より開発が進められて、宝暦(1751～1763)、明和(1764～1771)頃には、おみこ島、南鷺島尻、鷺島、剣崎等の中央部の中洲にも石新田が出現している。(永井文書)⁽⁶⁾

C) 新田開発と洪水対策

大橋川下の新田開発は、1720年頃より始まったことを述べてきた。『松江市誌』には、松江藩家老朝日丹波・郷保は、度重なる洪水対策として、「明和7年（1770）秋に大河の中島などを除去し、大橋下の新田、水行に障る所は残りなく取り捨てた」、「安永2年（1773）秋迄3年間を費し、人夫百萬人を投じて竣成させた」と記述されている。⁽⁷⁾

第4図には、明治大学の絵図に書かれている石新田、新田、輪を表現、さらに、島根大学の絵図にある新たに開削された場所、水面に張り紙された場所を図示している。

この図からは、中洲の閉塞的な水路が何ヶ所かで開削されて、水流や舟の通行が出来るようになったことが見て取れる。また、輪・本田など早くから水田化された場所は、主に菅田村などの北部と売布神社から御船屋川下流と本川流域の周辺部に多い。よって、明和年間の洪水対策は、主に中洲の中央付近から下流部にかけて広く実施されたと言える。

『川下辺絵図』において、現在の学園1・2丁目付近に貼られた付箋紙には「伊豆屋本田之内、去々年ハ明ケ有之、當年ハ閉申候」、「三次堀、去々年ハ明ケ有之、當年ハ閉申候」の他、舟の通行、汐抜などについて記載されている。年によって水門を開けたり閉めたりして、水害や塩害に対す用水の管理が行われていたと思われる。

図中の記号Aは、本川に沿った一部の中洲に描かれた曲線を指しており、明治大学以外のすべての絵図に記載されている。この曲線は、本川に沿った堤防のようであり、また細い水路のようにも見える。

中山家の絵図には、一部に堀川名がつけられていることから、本川の流れが速い場所に何らかの水路が並行して設けられていたと推定される。その目的は、淡水の確保か、土地の浸食を防ぐためのものか、

季節によって土地への給排水路となるのか不明である。

萬延元年（1860）の『嶋根郡村絵図・川津村』（明治大学蔵）には、中洲のほぼ全域に「輪」が出来ている。つまり、かつて大橋川下の葦原であった中洲は、新田開発が始まってから約150年後には、年貢が納付できる豊かな農地に変貌したと言える。

2. 伊能図に見る大橋川

伊能図は全国を網羅したわが国初の本格的な測量図として知られている。

伊能忠敬を隊長とする幕府天文方の測量隊が松江周辺を測量したのは、文化3年（1806）の第5次測量と文化10年（1812）の第8次測量の折であった。それは、前章で述べたように18世紀を中心に行われた大橋川下域の新田開発が一段落し、明治の河川改修事業へと引き継がれる間の時期にあたる。

(1) 伊能測量隊による大橋川沿岸測量

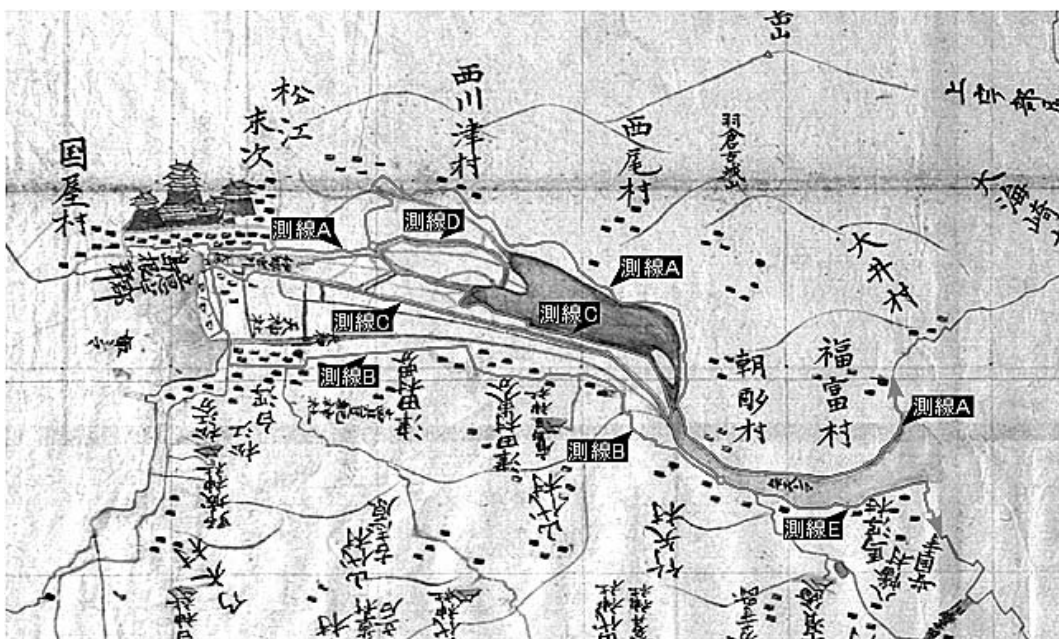
伊能図（第5図）には実際に測量を行ったルート、つまり測線が朱色の線で記入されている。^⑧ このうち大橋川に関連した測線は図中に示した測線AからEで、いずれも第5次の際の測量である。

『伊能忠敬測量日記』^⑨の記述によれば、測線Aは伊能の一番弟子である坂部貞兵衛をリーダーとする班が文化3年6月19日（新暦で8月3日、以下同様）に美保関に向かう途中に測っている。

測線B、C、Dは伊能忠敬本人と隊員の平山郡蔵が、脇亭主（宿の世話役）の沢田屋幸助と隠岐屋勝助を連れて、それぞれ同年7月27日（9月9日）、28日（9月10日）、8月1日（9月12日）に測量したものである。伊能は持病の瘡（おこり）が毎日発症するようになったため、隠岐測量と島根半島の測量を弟子たちに任せ、やはり体調不良を訴えていた平山とともに約1ヶ月の間松江に逗留していた。この測量は弟子たちが松江に戻ってくる数日前に行われたもので、体調が回復してきたので足慣らしのつもりだったのかもしれない。

測線Eは8月7日（9月18日）、島根半島から帰った隊員とともに松江を離れ、山陰道を東方に向かって測量を再開する際に、弟子の下河辺政五郎をリーダーとする班が測ったものである。

第8次測量では、少なくとも松江周辺に関する限り、街道筋の測量と近傍の寺社などへの導線の測量が主で、水域を意識した測線は見当たらない。



第5図 伊能大図第155号『松江』の一部（アメリカ合衆国議会図書館所蔵）に加筆

(2) 伊能図に描かれた大橋川

そもそも伊能測量では、『日記』には川を渡渉する際に必要な川幅や橋の長さなどの記載はあるものの、川筋を意識的に測量した形跡はほとんどない。たまたま川筋に沿って街道があった大阪の淀川や斐伊川の一部などの例はあるが、基本的には測線となった街道などから目測などで位置を見通しながら川筋を図化していったようである。大橋川の場合も測線から離れて描かれた川筋は基本的にはこうした考えで伊能図に書き込まれていったものと思われる。

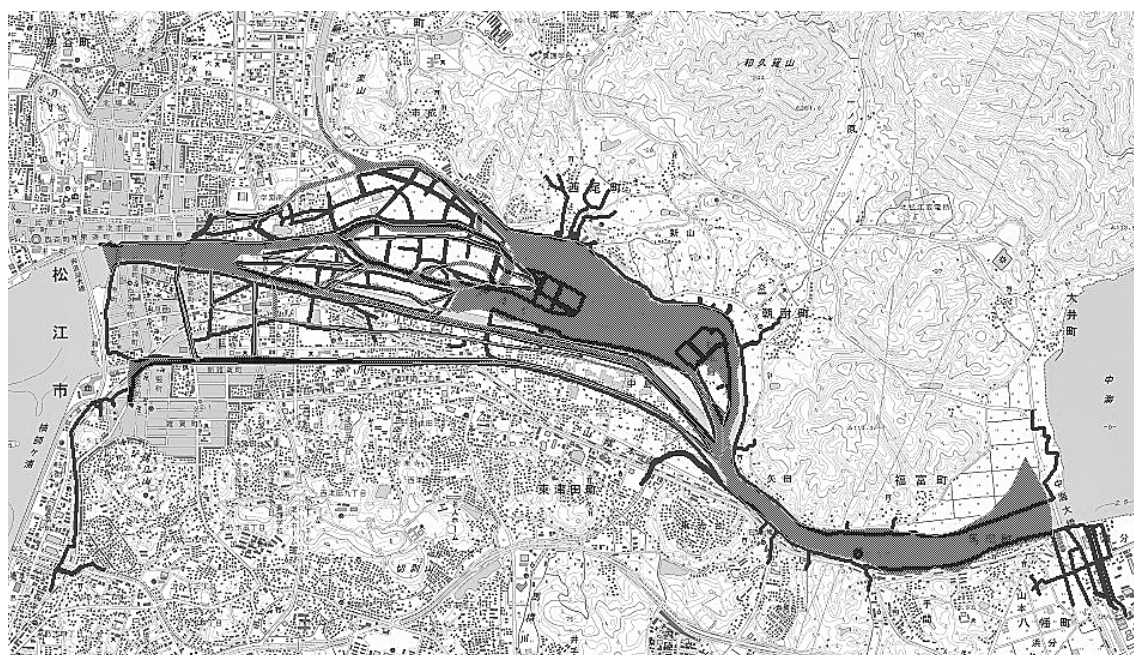
また、限られた人員と条件のもとでの測量であり、精度を上げるための交会法や横切り測量などが併用された形跡はない。例え伊能本人が測量したとはいえ、大橋川周辺の図は他の地域と比べて精度が良いとは言い難い。こうした事情を考慮しつつ、伊能図を現在の地形図に重ね合わせ、当時の水域の広がりを推定してみる。¹⁰⁾

第6図は現在の地形図（2万5000分の1『松江』）に伊能図に描かれた水路・水域と、合わせて後述する関屋忠正測量による明治27年の大橋川図の水際線も記入してある。

まず目に付くことは、朝酌川と剣先川の河口部に、西に開いたカニのはさみ状の広い水域が広がっていることである。その面積はおよそ79万平方メートルと推定される。ここは18世紀を中心に行われた新田開発（前章参照）が及ばなかったところである。この水域が現在のように朝酌川と剣先川の川下が分離されて多賀神社の西で合流するような流系になるのは、前出の『川下辺絵図』に貼られた付箋によれば慶応年間の埋め立て以降、明治時代に引き継がれた新田開発や河川改修が進行した結果である。

もう一つ注目したいのは、現在の大橋川本川が剣先川筋よりも明らかに細く、また直線的に描かれていることである。このことは天神川と同様に、大橋川が当初は人工的に掘られたか、あるいは自然流路を改修することによって人工的に直線水路化したことを示唆する。『川下辺絵図』では大橋川筋は「御舟川ノ内 伊勢宮川」と書かれており、『伊能忠敬日記』でも伊勢宮川と記述されている。

さらに『川下辺絵図』では現在の剣先川に「本川」と書かれているが、伊能図の水路の太さに反映されているように伊能測量の頃も本川は剣先川筋であったことが窺い知れる。この状況は明治27年の関屋図（次章参照）でも同様である。剣先川筋、すなわち本川は、元来は松江大橋を過ぎるあたりから幾



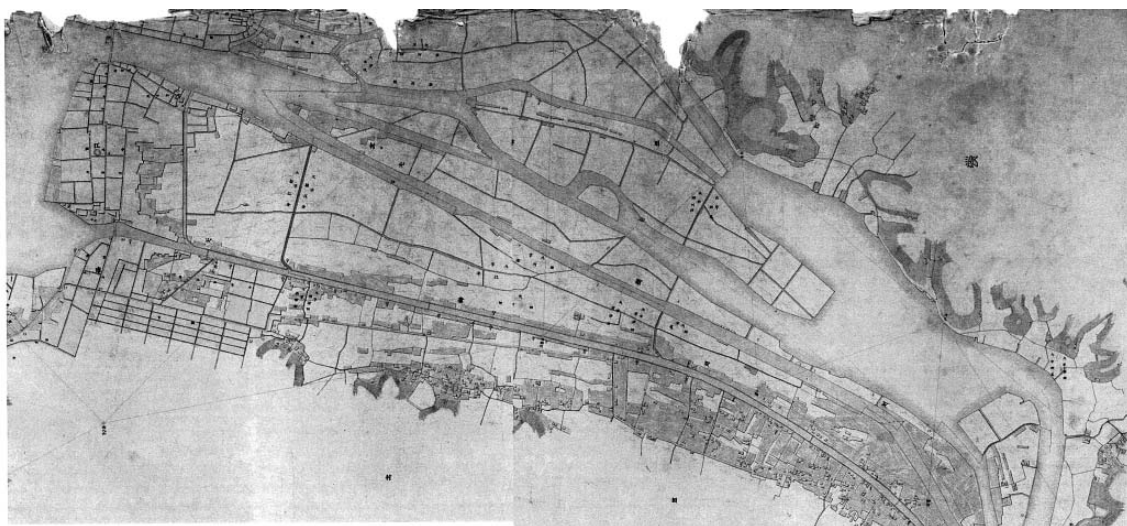
第6図 伊能図の水域（網部分）と現在地図の重ね合わせ。実線は関屋図（明治27年）の水際線

筋かに分かれて大きく蛇行しながら東方へ流れていたようである。前章で述べたように、18世紀を中心に行われた新田開発と洪水対策に関連して水路の直線化が進んだが、まだ曲線流路だった名残が伊能図では読み取れる。鷺島に見られる北に湾曲した水路や測線Dのあるテグ川（『川下辺絵図』では「手工堀」と記述）の川下部の曲線水路がそれで、特に前者は関屋図でも、また現在の地図でも明瞭に描かれている。

3. 明治以降の測量図に見る大橋川

旧藩以来の重点課題であった斐伊川・大橋川の治水事業は明治新政府に引き継がれ、それに伴い流域の正確な測量図がつくられるようになった。¹¹⁾ 大橋川と中洲、およびその周辺地域の状況の変化を知ることができる資料としては以下のものがある。なお、明治に入ってから松江市街図などがかなりあるが、省略する。

(1) 3000分の1測量図（関屋忠正らによる、明治27年（1894）；島根県公文書センター蔵）



第7図 関屋忠正による3000分の1測量図（部分；島根県公文書センター蔵）

関屋忠正は明治25年に斐伊川の治水計画の作成のために松江に赴任、明治26年10月の大洪水の後に斐伊川下流域の3000分の1測量に着手した。作成図面（通称『関屋図』）は3つに分かれていて、1）大橋川の中海への出口にあたる馬潟から大橋川と宍道湖南岸側（宍道湖大橋川平面図）、2）斐伊川平面図（本川下流）、および3）斐伊川・新川平面図で、1）は島根県に、2）と3）は国土交通省出雲河川事務所に保管されていることが、また、これらの3つの図面（および未発見の宍道湖北岸域の図面）をもとにして作成された「斐伊川治水調査全図」（1万5千分の1、明治27年）が出雲河川事務所に保管されていることが最近になって確認された。¹²⁾ 大橋川下については、地形、水路、集落が正確に表現されている。伊能図から100年弱を経て、大橋川下での新田づくりはそれほど進んではいないが、陸域はやや広がっているように見られる。前章で述べた伊能図に見られる大橋川下流域に西に開いたカニの鉗状の広い水面は、ほぼそのままの形が保たれている。大橋川の範囲では、図中に浚渫予定線とみられる2本の線が並行して引かれているのが注目される。1章で述べた『川下辺絵図』でわかるように、大橋川の本流は中洲の北側で、現在の剣先川的位置にあったが、関屋は大橋川のほぼ中央部を通る形での浚渫を想定していたものと考えられる。大橋川にかかる橋は第15代大橋で、明治24年完成のトラス橋で、南岸の橋の両側に船着場があり、まだ船運が盛んであった時代である。

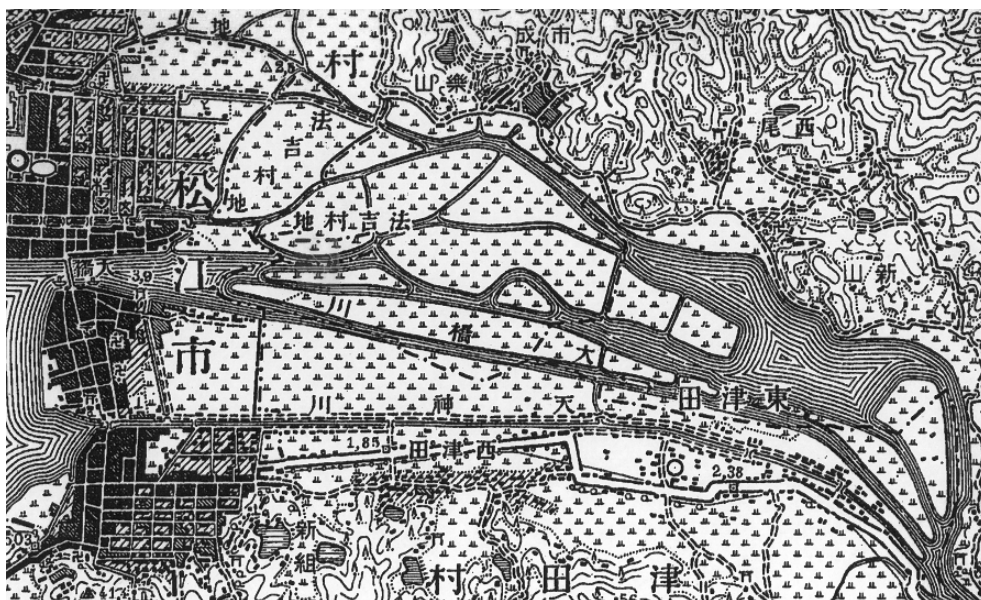
(2) 20万分の1地形測量図『大山図幅』(明治29年(1896);農商務省地質調査所)



第8図 20万分の1地形測量図『大山図幅』(明治29年(1896)、部分;農商務省地質調査所)

この図はあまり知られていないので、紹介する。明治政府が成立してから、まず力を入れたのは日本列島の地下資源の把握で、地質図の作成が急務とされ、そのために利用する測量図が作成されていった。これもその一つである。出版は上記の『関屋図』より後であるが、それ以前に調査がなされたものであろう。『関屋図』とよく似ているが、大橋川下の中洲の形がよく表現されている。

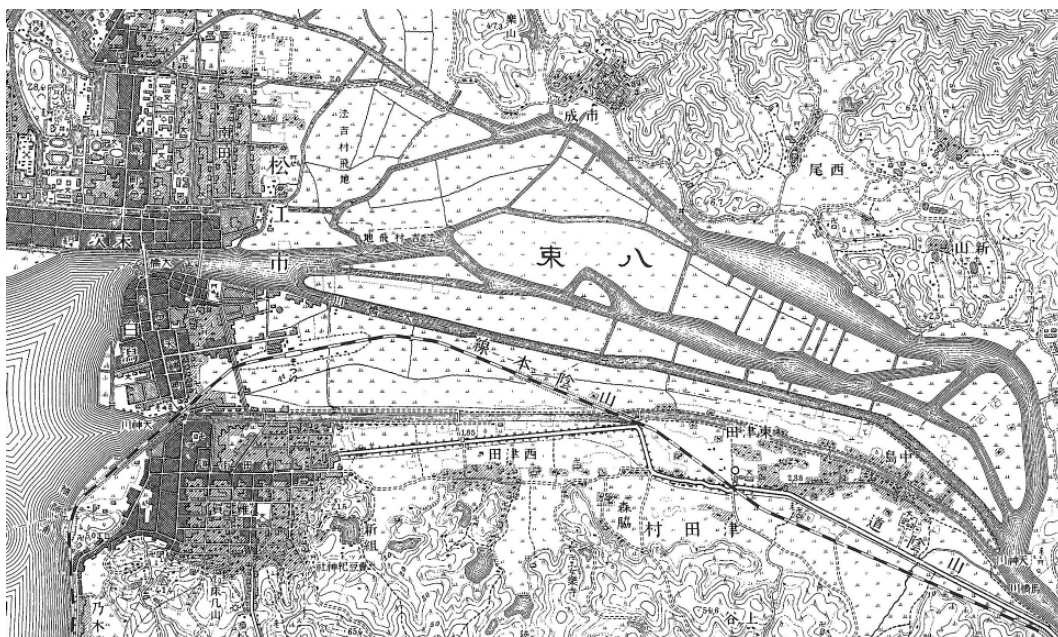
(3) 5万分の1地形図『松江』(明治32年(1899);国土地理院)



第9図 5万分の1地形図『松江』(明治32年(1899)、部分;国土地理院)

国による5万分の1地形測量は明治23年(1890)に開始され、大正5年(1916)に完了した。この地形図は明治32年測量で、『関屋図』からわずか5年後であり、おおきな違いはない。

(4) 2.5万分の1地形図『松江』(大正4年(1915); 国土地理院)



第10図 2.5万分の1地形図『松江』(大正4年(1915)、部分; 国土地理院)

国により2.5万分の1地形図の作成が5万分の1地形図にやや遅れて進められた。この地形図は5万分の1図幅から16年後の測量だが、この間に大きな変化があったことがわかる。大橋川下では新田開発が急速にすすみ、下流域の広い水面はほとんど埋め立てられた。松江では明治40年の東宮行啓の準備、明治41年の山陰線開通などを契機として開発が急速に進み、浚渫・埋め立てがさかんに行われた。明治41年の山陰線の開通と松江駅の誕生は船運から陸運への大きな転換であった。図中の新大橋は大橋川に架けられた二つ目の橋で、大正3年に現在の2代新大橋の位置よりも一筋上流側に架けられた。なお、大橋は明治44年に架け替えられ、第16代目となった。

(5) 3000分の1測量図(大正8年(1919); 国土交通省出雲河川事務所蔵)



第11図 3000分の1測量図(大正8年(1919)、部分; 国土交通省出雲河川事務所蔵)

この測量図は出雲河川事務所に保管されていることが平成22年に確認され、同所によってデジタル化、公開された。大橋川の馬潟から宍道湖の河口域までの測量図で、中海および宍道湖の河口域については等深線も描かれている。図中には「本図は明治35年島根県実測大橋川平面図を謄写し尚地形変更箇所は大正8年10月補測訂正せり」と書かれている。明治35年の島根県の図は未発見であるが、この図は前掲（1）の『関屋図』（第7図）が元になっていることは明らかである。大橋川の改修は舟運と治水を考慮して川幅の広い所では幅40間（72m）を浚渫、水深を15尺（4.5m）とし、工事は大正11～昭和11年に行われた（『斐伊川改修四十年史』による）。この図はそのための最初の設計図とみなされる。図中には航路浚渫の位置が示されていて、大橋（第16代）～新大橋（初代）の間では川の中央部、これより東ではそれまでの本流であった剣先川から中央砂洲の南側に変更している。この浚渫工事によって現在の大橋川の流路は定まり、北側の剣先川などでは流れが緩やかになるとともに、土砂の堆積が進んだ。

この大規模な工事によって治水上の効果が得られたが、宍道湖と中海の水位差は1/3～1/4となり、塩水の宍道湖への流入が頻繁となり、汽水漁業への転換が起こった。また宍道湖の周辺域では塩害が発生するようになった¹³。現在の第2代新大橋は昭和9年に完成、これに前後して南岸の埋立てが進み、松江港は新大橋の下流側に昭和7年に整備されたが、昭和38年以降は馬潟港が物流の中心となっていった。なお、大橋は昭和10年12月から架け替え、昭和12年10月に完成、現在の第17代となった。大橋川下流の埋立地では昭和21年12月の南海地震で広く地盤沈下が起こり（『斐伊川改修四十年史』による）、手貝水門の所には碑が建立されている。

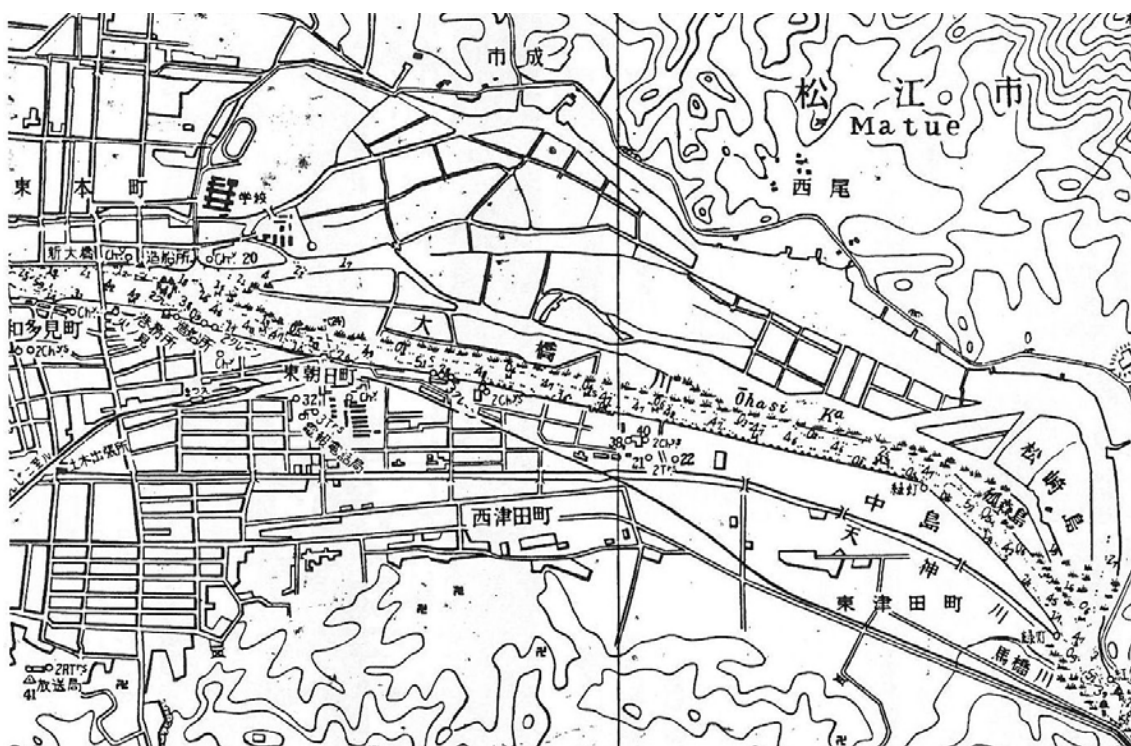
(6) 4万分の1空中写真（昭和22年（1947）；米軍撮影）



第12図 米軍撮影による4万分の1空中写真（昭和22年（1947）；国土地理院）

米軍が日本の敗戦の直前から直後にかけて日本全域を空撮したものの一つで、最近では高精度画像が国土地理院により発売され、戦後の急速な土地開発以前の状況を詳しく知ることができる。新大橋の下流両岸には造船所があり、これより下流左岸側には川津にかけて広大な湿地帯と田畑が広がっていたことがわかる。この空中写真からは、主流路は中洲の南にあり、剣先川は浅くなったことが読み取れる。

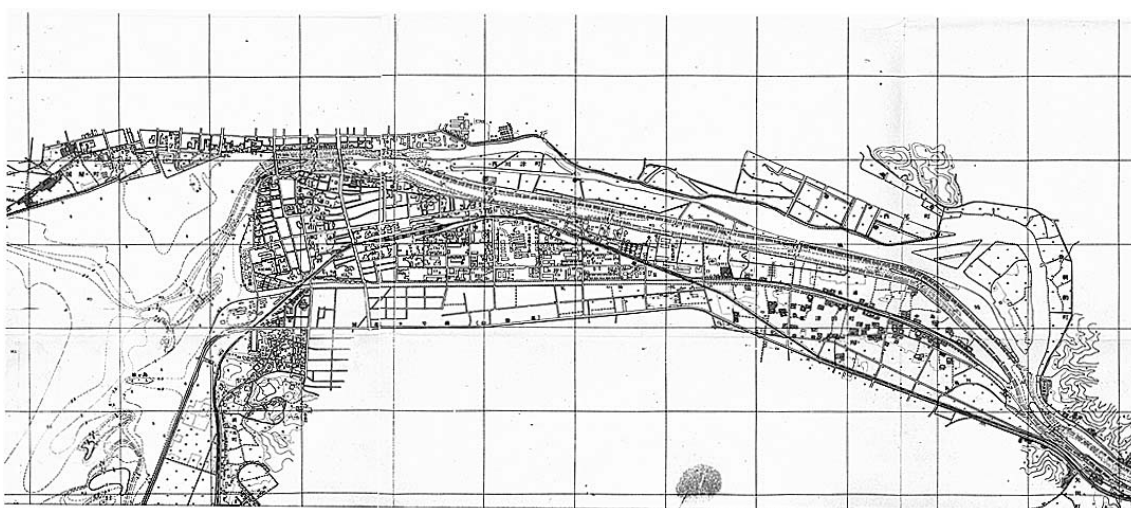
(7) 2.5万分の1海図『中海』(昭和25～37年測量、1174号；海上保安庁水路部)



第13図 2.5万分の1海図『中海』(昭和25～37年測量；海上保安庁水路部)

松江港が新大橋の南に位置していた関係で、大橋までの大橋川の範囲が測量されていて、昭和初期の浚渫後の状況や兩岸の植生を知ることができる。大橋川については、測点ごとの水深が示されている。剣先川には水深1.7mの記述があるが、大部分はこれより浅く、測深対象となっていない。新大橋下流の兩岸に造船所があったこと、下流の松崎島の南にあった狐森島、馬橋川は天神川に合流せずに東に流れ、大橋川に合流すること、塩楯島を含めて右岸側は浅瀬であったことがわかる。

(8) 1万分の1湖沼図(昭和37年(1962)；国土地理院)



第14図 1万分の1湖沼図(昭和37年(1962)；国土地理院)

国土地理院が1955～1989年に実施した各地の湖沼調査の一つで、宍道湖～大橋川は1962年に測量された。地形、水深とともに底質、植生が示されている。大橋川については等深線で描かれていて、水深4.5mより深く航路浚渫がなされていることがわかる。剣先川は浅く、調査対象とはなっていない。現在の国引きメッセのある位置にはかつては水面が広がっていたが、埋め立てられ、その下流側の水田には住宅街が形成され始めている。

4. おわりに

大橋川の変遷に注目して絵図から明治以後の測量図までを見てきた。とりわけ、松江大橋の川下辺の変遷は、広大な湿地と中洲群の開発・利用と藩都・県都に頻発する洪水対策との、いわば相克する難事業の歴史を示すものでもあった。

そもそも、大橋川下一帯の湿地や中洲をつくる堆積物はどこからもたらされたものだろうか。『中海臨海地帯地盤図』（都市地盤調査報告書、15巻、1967）によれば、大橋川下一帯の地下に埋もれている岩盤は、多賀神社から矢田の辺りを分水嶺として東と西の方向にしだいに深くなっている。西側では、大橋のあたりで－20m、出雲平野の下では－50m以上である。この岩盤の上に軟弱な砂や泥からなる沖積層が堆積しており、それらが湿地や中洲を構成しているのである。斐伊川東流以後、上流から大量に運ばれてくる土砂は河口扇状地や三角州を前進させながら宍道湖を西方から埋め立て、斐川平野を拡大していく。細粒の泥（シルトと粘土）は浮遊して運ばれ、やがては宍道湖底にトラップされる。大橋川まで運ばれてくる砂泥はほとんどない。つまり、地質学的・堆積学的には大橋川の中洲の成長に斐伊川由来の土砂が直接的に寄与しているとは考え難い。

一方、宍道湖の両岸に流れこむ小河川からの土砂は、湖棚に一次的に堆積するが、浅いので、風浪によって湖棚にそって東に移動して大橋川に達し、中洲の成長に一部寄与していると考えられる。また、島根半島から流下する朝酌川から運ばれる土砂は河口の三角州を前進させて行き、松江城下の東に広がっていた湿地を埋め立てていった。これらの土砂は新田開発にも寄与しているが、川の規模が小さいので、運ばれてくる土量も小さい。

松江開府以降に進んだ土地造成は、主に築城にかかわる土木工事や堀の掘削などの土砂を利用して行われたものである。大橋川の中洲で進められた新田開発に利用された土砂は、大橋川や天神川の改修・浚渫による土砂が中心となっている。新田開発は、度重なる洪水とともに、土砂の不足からも、かなりの困難があったものと推測される。

最近数十年の間に松江旧市街の東側は学園通りを中心に都市化が急速に進んだ。主要部分は水田化した低湿地に埋土をすることによって地盤を幾分高くして造成された。しかし、初期に宅地化された一部の地域では湿地や中洲本来の地盤の上に宅地が造成されたところもあると聞く。

かつて松江城下の東側から大橋川下にかけて広がっていた湿地や中洲は、土砂供給が少なかったが故に自然の埋積作用から取り残されていたところであり、また、洪水時には自然の遊水池としての機能も併せ持っていたと考えられる。18世紀に入って急速に進められた中洲の新田開発、城下を守るための治水事業、近年急速に進んだ湿地の宅地化、それに伴う遊水池機能の低下とより高度な治水事業の展開—大橋川の絵図や測量図はその歴史を如実に語るものであり、自然と人間の営みの調和した発展を将来に希求するために、今を生きる我々が学ぶところは大きい。

注

- (1) 「大坂より松江航路図」(中山家蔵)の景観年代は、1700年前後と思われる。その根拠は、斐伊川が1687年の川違いにより平田方面に流れていること、大坂湾では元禄17(1704)年の大和川付け替えが完了していないことである。また絵図名は、これまで「登米寄港図」と呼んできたが、市史編纂絵図地図部会では、絵図の特徴から「大坂より松江航路図」と呼ぶこととした。
- (2) 小林准士「解説：川下辺絵図」『絵図の世界』島根大学付属図書館編、2006、p91
- (3) 島根県『新修島根県史』通史編(近世)、1965、p713
- (4) 野津静一郎『松江市誌』、1941、p232
- (5) 「雲陽大数録」『松江市史』史料編5近世I、2011、p676
- (6) 前掲4)、p322
- (7) 前掲4)、p323
- (8) 第5図に引用した伊能大図は下記のURLからダウンロードすることができる。
[http://mEmory.loc.gov/Cgi-Bin/mAp_itEm.pl?DATA=/home/www/DAtA/gmD//gmD7m/g7960m/g7960m/gCt00032/inoh0155.jp2&itEmLink=r?AmmEm/gmD:@FiElD\(NUMBER+@BAnD\(g7960m+gCt00032\)\)&titlE=\[JApAn,+HokkAiDo+to+Kyushu\]+-+155+Houki+YonAgo+Izumo+MAtsuE&style=gmd&lEgEnD=](http://mEmory.loc.gov/Cgi-Bin/mAp_itEm.pl?DATA=/home/www/DAtA/gmD//gmD7m/g7960m/g7960m/gCt00032/inoh0155.jp2&itEmLink=r?AmmEm/gmD:@FiElD(NUMBER+@BAnD(g7960m+gCt00032))&titlE=[JApAn,+HokkAiDo+to+Kyushu]+-+155+Houki+YonAgo+Izumo+MAtsuE&style=gmd&lEgEnD=)
- (9) 伊能忠敬の測量日記は、忠敬が測量の現場で書いた51冊と、後で清書した28冊があり、いずれも国宝に指定され千葉県香取市の伊能忠敬記念館に保管されている。また、『国宝 伊能忠敬測量日記 原文』、伊能忠敬と伊能図の大事典をつくる会がDVD版として公開されており、活字版は『伊能忠敬測量日記』全6巻、佐久間達夫校訂(1998)、大空社、が出版されている。
- (10) 伊能図の現在地図への重ね合わせはGISソフト「地図太郎plus」(東京カートグラフィック株式会社)を用いた。方法の詳細については別の機会に譲る。
- (11) 明治時代の大橋川治水事業とその中心的な役割を果たした技師・関屋忠正については大矢幸雄「内務省技師・関屋忠正と斐伊川治水事業」『湖都松江』Vol.22、2011、p.4-7に詳しい。
 関屋忠正らによる明治27年作成で、署名入りの図面は次の通りである。

斐伊川平面図(本川下流)	3千分の1	153cm×430cm	国土交通省出雲河川事務所蔵
斐伊川・新川平面図	3千分の1	153cm×495cm	国土交通省出雲河川事務所蔵
宍道湖大橋川平面図(天神川平面図)	3千分の1	152.3cm×929.5cm	島根県公文書センター蔵
斐伊川治水調査全図	1万5千分の1	153cm×290cm	国土交通省出雲河川事務所蔵
斐伊川流域地皮岩層類別図	10万分の1	130cm×110cm	国土交通省出雲河川事務所蔵
- (12) 現在進められている大橋川改修を含む3点セットの治水計画の元となったのは明治26年水害の後の関屋らによる調査で、斐伊川史(長瀬定一編、昭和25年)、斐伊川改修四十年史(建設省出雲工事事務所、昭和39年)に詳述されている。斐伊川誌(建設省出雲工事事務所、平成7年)では、四十年史と同様に、関屋による「斐伊川治水調査顛末並に改修設計説明書」にもとづく紹介とともに、“計画図の所在は残念ながら不明である”と述べられている。しかし、この説明書のなかで、実測図(平面図)の縮尺は3千分の1で調製する、との記述があることから、計画図とはこれら3つの図のことと考えられる。なお、関屋図以前の測量図としては、斐伊川河口から大橋川への流入部を含む「宍道湖実測図」(6千分の1、明治22年以前と推定される)が島根県に保管されている。図7のデジタル化は、県の協力のもとで出雲河川事務所によってなされたものである。これらの図面および関連した図面が両機関にかなりあることがわかり、島根大学白潟サロンにおいて、両機関の協力を得ながら、デジタル化と資料の公開についての検討が進行中である。
- (13) 「宍道湖塩害問題に就て」(豊原義一、地学雑誌、50号、154-166、昭和13年)

2000年代に島根半島沿岸域の定置網で漁獲された魚介類の季節変動および年変動

勢村 均

緒 言

定置網漁業とは、海岸近くの魚の通り道に網を垣根のように一定期間設置し、回遊魚を待ち受けて漁獲する漁法であり、他の漁具と比較して選択性は低く漁獲量の変動は定置網を敷設した海域への来遊量をよく反映しているとみなすことができる。そこで本稿では、2001年から2010年の間に定置網に入網した魚介類の漁獲量を解析し、島根半島沿岸へ来遊する魚介類の季節変動および年変動を観察した。

材料と方法

解析には島根県漁獲管理情報処理システムに入力されたデータを用いた。

このデータから、島根半島に位置していない湖陵および多伎の大型定置網のデータを除く、出雲海区の大型および小型定置網の月別、魚種別漁獲量を2001年1月から2010年12月まで抽出し、定置網の漁獲物に出現した魚介類の種類と月別の出現頻度を調べた。

また、2001年から2010年の間、2004年2月の平田市分のデータが欠落しているのみの、美保関町、島根町、および旧平田市の大型定置網のデータを用いて漁獲された魚介類の優占種の年変動と主要魚種の漁獲量の年変動を調べた（付表1～10）。

結 果

1. 出雲地方沿岸海域における定置網

網を設置する水深によって大型と小型に区分されている。

出雲海区（美保関～多伎）には2008年現在、松江市に9統、出雲市に4統、計13統の大型定置網と松江市に26統、出雲市に4統、計30統の小型定置網がある。

また、2001年から2008年までの出雲海区の大型・小型定置網を合わせた年間漁獲量は、2943t～4138tとなっている（島根農林水産統計年報より）。

2. 漁獲された魚介類の出現状況

漁獲物に出現した魚介類の主な種類の月ごとの出現状況を表1に示した。2001年から2010年まで、いずれかの月に10年間出現が確認された魚介類は、「類」としてまとめてあるものを含めて44種類であった。

10年間、毎月出現した種類は、スズキ、ヒラマサ、ブリ、マアジ、マダイ、サバ類、サワラ類、ヒラメ、カワハギ類、ケンサキイカの10種類であった。

次に連続して出現した月が多い種類はエイ類、アオリイカ、イサキ、カマスの4種類であった。そのうち、エイ類およびアオリイカは2月以外の月は毎年出現しており、イサキ、カマスは2～3月または4月までの出現頻度がやや低下するが、それ以外の月はすべて毎年出現していた。

表1 種類別月ごとの出現状況 (頻度 ●: 毎年入網 ◎: 半数以上の年に入網 ○: 半数以下の年に入網)

魚 種 名	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月
スズキ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ヒラマサ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ブリ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
マアジ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
マダイ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
サバ類	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
サワラ類	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ヒラメ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
カワハギ類	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
ケンサキイカ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
エイ類	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	◎
アオリイカ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	◎
イサキ	◎	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	◎
カマス	◎	◎	●	●	●	●	●	●	●	●	●	◎
マトウダイ	●	●	●	●	◎	○	◎	◎	●	●	●	●
ホウボウ	●	●	●	●	●	◎	◎	●	●	●	●	●
スルメイカ	●	●	●	●	●	◎	◎	●	●	●	●	●
チダイ	●	●	●	●	●	◎	◎	◎	◎	●	◎	●
オニオコゼ	●	●	●	●	●	●	◎	◎	◎	◎	◎	●
カサゴ・メバル類	●	●	●	●	●	◎	◎	○	○	◎	●	●
コウイカ類	●	●	●	●	●	○	◎	◎	○	◎	◎	●
マフグ*	●	●	●	●	○	◎	○	○	○	◎	●	●
トラフグ	●	●	●	◎	◎	◎	○	○	◎	◎	●	◎
アンコウ	●	●	◎	○						◎	●	●
ミズダコ*	●	●	◎		○						●	●
サヨリ	●	◎	○	○	○	○	○			○	◎	◎
キジハタ		◎	●	●	●	●	●	●	●	◎	○	○
カンパチ	○	○	●	●	●	●	●	●	●	◎	◎	○
シイラ			○	●	●	●	●	●	●	●	◎	○
マダコ*	◎	●	●	●	●	●	◎	◎	◎	◎	◎	●
クロマグロ	◎	●	●	●	●	●	◎	◎	◎	●		
ツクシトビウオ		◎	●	●	●	●	●	●	○		○	
カタクチイワシ	●	●	◎	●	●	●	◎	◎	○	◎	◎	◎
ホソトビウオ	○		●	●	●	●	◎	◎				○
その他のマグロ類	○	○	○	●	●	●	●	◎	◎	○	○	
カジキ類			○	◎	●	●	●	●	◎	○	○	○
ウルメイワシ	○	○	○	◎	●	●	◎	◎	◎	○	○	◎
キダイ	○	○	◎	◎	●	◎	◎	◎	◎	◎	○	○
マイワシ	◎	◎	◎	◎	●	◎		○		○	○	◎
ソウダガツオ	◎	○	◎	◎	●	●	●	●	●	●	●	◎
ソデイカ	○	○	○	◎	◎	◎	●	●	●	●	●	◎
サンマ	●	◎	◎	○			○	◎	●	●	●	●
ヤリイカ	●	●	◎	○	○		○	◎	○	●	●	●
メダイ	●	◎	○	○	○		○	○	◎	●	●	●

*: 2006年4月からのデータ使用

春に必ず出現する種類はマトウダイ、ホウボウ、スルメイカ、チダイ、オニオコゼ、カサゴ・メバル類、コウイカ類、マフグ、トラフグ、アンコウ、ミズダコ、サヨリの13種類であった。そのうち、マトウダイ、ホウボウ、スルメイカは春と冬には必ず出現していたが、夏と秋には出現頻度がやや低下した。チダイは1月と8月～11月までの出現頻度がやや低下した。一方、オニオコゼは2月から8月にかけて、カサゴ・メバル類は1月～7月にかけて、コウイカ類は2月～7月にかけて、マフグは1月～6月にかけて、トラフグは1月～5月にかけて必ず出現した。また、アンコウ、ミズダコは1月～4月にかけて必ず出現した。サヨリは3月には必ず出現し、1月、2月、4月にも出現頻度が高かった。

夏に必ず出現する種類は、キジハタ、カンパチ、シイラ、マダコ、クロマグロ、ツクシトビウオ、カタクチイワシ、ホソトビウオ、その他のマグロ類、カジキ類、ウルメイワシ、キダイ、マイワシの13

種類であった。このうちキジハタ、カンパチ、シイラは6月～11月の夏、秋にわたって必ず出現した。マダコ、クロマグロは4月～8月にかけて必ず出現した。ツクシトビウオは5月～10月にかけて必ず出現したが、ホソトビウオは5月～8月と、ツクシトビウオよりも必ず出現する期間が短かった。イワシ類では、カタクチイワシは夏の他、3、4月にも必ず出現した。ウルメイワシは7、8月、マイワシは7月に必ず出現した。また、カジキ類は7月～10月に、キダイは7月に必ず出現した。

秋に必ず出現する種類は、ソウダガツオとソデイカの2種類であった。ソウダガツオは7月から翌年1月に、ソデイカは9月から翌年1月に必ず出現した。

冬に必ず出現する種類は、サンマ、ヤリイカ、メダイの3種類であり、サンマは11月から翌年1月、ヤリイカは12月から翌年4月に、メダイは12月から翌年3月に必ず出現した。

3. 漁獲量上位10種の順位の年変動

表2 暦年別漁獲量上位10種類

順位	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	10年平均
1	マアジ	マアジ	ブリ	マアジ	マアジ	マアジ	マアジ	マアジ	マアジ	ブリ	マアジ
2	ブリ	ブリ	マアジ	ブリ	ブリ	ブリ	ブリ	ブリ	ブリ	マアジ	ブリ
3	ホソトビウオ	ヒラマサ	ヒラマサ	カワハギ類	ホソトビウオ	サバ類	サワラ類	サバ類	サバ類	サワラ類	サワラ類
4	ソウダガツオ	ホソトビウオ	ホソトビウオ	サワラ類	サワラ類	ホソトビウオ	スルメイカ	サワラ類	サワラ類	サバ類	サバ類
5	サバ類	カタクチイワシ	カタクチイワシ	ホソトビウオ	ケンサキイカ	サワラ類	カタクチイワシ	スルメイカ	カワハギ類	カワハギ類	ホソトビウオ
6	シイラ	カワハギ類	ケンサキイカ	ケンサキイカ	ソウダガツオ	スルメイカ	ホソトビウオ	ホソトビウオ	ホソトビウオ	スズキ	スルメイカ
7	ヒラマサ	サバ類	サワラ類	スルメイカ	カワハギ類	カタクチイワシ	ケンサキイカ	シイラ	ケンサキイカ	ケンサキイカ	カワハギ類
8	サワラ類	ソウダガツオ	サバ類	ソウダガツオ	サバ類	マダイ	マダイ	スズキ	スルメイカ	カマス	カタクチイワシ
9	カワハギ類	アオリイカ	カワハギ類	カタクチイワシ	クロマグロ	スズキ	カワハギ類	ヤリイカ	スズキ	マダイ	ケンサキイカ
10	カタクチイワシ	スズキ	マダイ	アオリイカ	スズキ	ツクシトビウオ	アオリイカ	カマス	ツクシトビウオ	アオリイカ	スズキ

表2に2001年から2010年までの各年に漁獲量が多かった魚介類の上位10種を示した。

10年間の平均では、1位:マアジ、2位:ブリ、3位:サワラ類、4位:サバ類、5位:ホソトビウオ、6位:スルメイカ、7位:カワハギ類、8位:カタクチイワシ、9位:ケンサキイカ、10位:スズキであった。

魚種別に年変動をみると、マアジとブリは常に1位、2位に出現しており、おおむねマアジが1位となっているが、時として逆転した。3位のサワラ類は、2003年まで7位以下であったが、2004年以降3～5位となった。4位のサバ類は2007年以外には10位以内に出現しており、2008年以降は3、4位に順位が上がった。5位のホソトビウオは2001年から2006年までは3位から5位に出現していたが、2007年以降6位となり、2010年には10位以下となった。8位のカタクチイワシは、2007年まで5～10位に出現していたが、2008年以降は10位以下となった。10位のスズキは2008年以降連続して6～9位に出現した。6位のスルメイカ、7位のカワハギ類、9位のケンサキイカは特定の傾向を示さなかった。

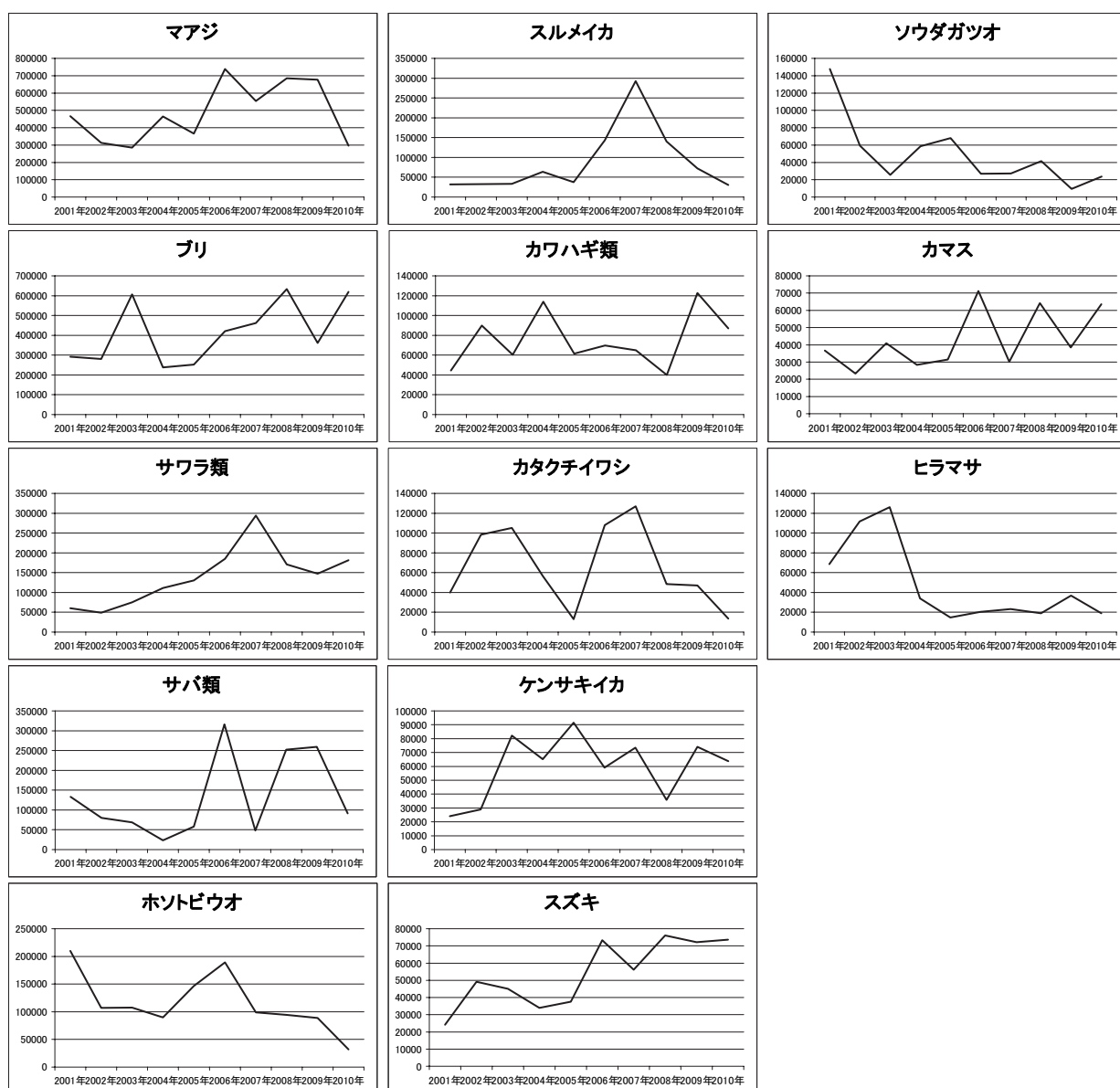
その他の特徴的な種類として、ソウダガツオは2004年まで4～8位に出現したが、以降は10位以下となった。また、ヒラマサも2001年から2003年まで3～7位であったが、以降は10位以下となった。一方、カマスは2008年に10位、2010年に8位と最近10位以内に出現するようになった。

4. 漁獲量上位の10種の漁獲量の年変動

図1に上位10種の漁獲量の年変動を示した。マアジは、2006－2009年には漁獲量が多かったが、2010年には以前の水準に戻った。ブリは2003、2008、2010年に漁獲量が600 tを超え、年による変動が大きい。ケンサキイカ、カワハギ類、カタクチイワシは年による変動が大きく、スルメイカは2006－2008年に漁獲が多かったが、近年以前の水準に戻った。ホソトビウオは横ばい傾向であったが、2010年には漁獲量が大きく低下した。

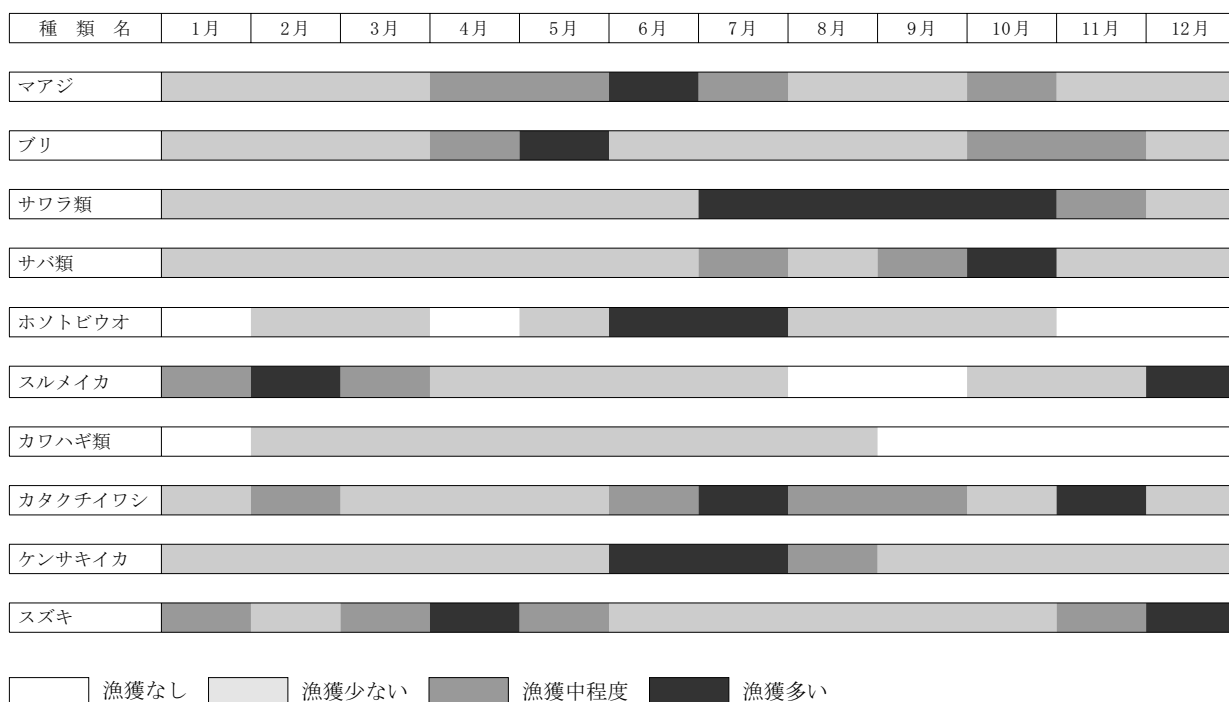
サワラ類、カマス、スズキは、年変動は大きいものの徐々に漁獲量が増加している。

図1 漁獲上位10種の漁獲量の年変動（横軸は年、縦軸は年間の漁獲量で単位はkg）



その他の特徴的な種類では、ソウダガツオは経年的に漁獲量が減少しており、ヒラマサは2002、2003年に漁獲量が多かったが、以降は低水準で横ばいとなっている。

図2 漁獲上位 10 種の漁獲量の季節変動



5. 上位10種の漁獲量の季節変動

図2に上位10種の10年間を平均した月別の漁獲状況を示した。

マアジ、ブリ、サバ類、カタクチイワシ、スズキは、年2回の漁獲のピークがあった。一方、サワラ類、ホソトビウオ、スルメイカ、カワハギ類、ケンサキイカは年1回の漁獲のピークを示した。

マアジは6月に最も漁獲が多く、10月にもやや多かった。ブリはマアジより1ヶ月早い5月に最も漁獲が多く、10月から11月にかけてもやや多かった。サバ類は7月にやや漁獲が多く、8月に一旦減少した後、10月にかけてピークを迎えた。カタクチイワシは7月と11月に漁獲が最も多かった。スズキは4月と12月に漁獲が最も多かった。

一方、サワラ類は7月～10月、ホソトビウオは6～7月、スルメイカは12月～翌年2月、カワハギ類は9月～12月、ケンサキイカは6～7月に漁獲が多かった。

引用文献

島根県農林統計協会（2010）第56次島根農林水産統計年報 平成20－21年、192 p. 松江.

付表1 2001年月別魚種別漁獲量(単位: kg)

年月	2001/01	2001/02	2001/03	2001/04	2001/05	2001/06	2001/07	2001/08	2001/09	2001/10	2001/11	2001/12	合 計
マアジ	16593.8	4941.1	4078.8	78335.5	99299.4	79724.8	69903.9	15190.6	33928.6	34620.1	13987.6	15444.2	466048.4
ブリ	22097.5	2279.7	3604.1	34769.0	45327.8	18825.8	22160.6	29822.2	57907.8	26604.3	18836.8	10002.4	292238.0
ホソトビウオ	0.0	0.0	0.0	0.0	5714.4	85283.1	116326.3	1739.6	994.9	2.9	0.0	0.0	210061.2
ソウダガツオ	2416.6	3.2			42.0	120.2	5303.8	6089.8	15482.4	93706.5	19006.5	5579.9	147750.9
サバ類	2393.0	80.8	76.0	1554.9	4832.3	946.4	6324.0	689.7	25146.1	81259.8	7182.8	2777.9	133263.8
シイラ	15.5					181.5	144.4	4292.2	46004.4	41634.2	1570.5	1795.3	95638.0
ヒラマサ	670.4	214.4	402.7	1684.9	6545.8	23725.5	18654.0	8985.0	2061.4	1628.9	1091.0	2813.9	68477.9
サワラ類	5056.7	191.9	170.3	2119.0	401.6	1080.6	9605.0	13227.7	12728.7	7305.8	3288.3	5011.5	60187.1
カワハギ類	5717.5	214.7	121.9	2252.8	8677.2	2812.4	1716.8	1089.7	2896.4	5212.9	4555.3	9308.4	44576.0
カタクチイワシ	33.0	53.7	410.0	2670.8	12240.8	15989.7	7983.1	524.0		5.0		3.5	39913.6
カマス	804.3	15.5		0.9	653.8	4251.2	2131.8	14190.5	4630.0	4961.4	3693.8	1280.3	36613.5
マダイ	882.2	524.8	859.3	5782.7	7219.6	5100.8	5762.7	2662.6	1869.5	713.0	1895.8	2173.3	35446.3
スルメイカ	1760.5	5381.9	6141.4	3612.3	1753.1	815.5	357.0	16.5	214.4	285.0	2779.2	8558.9	31675.6
アオリイカ	3825.7	1043.9	49.4	396.4	3306.7	851.3	258.4	20.8	765.6	3880.7	6820.5	6703.2	27922.6
ソデイカ	2607.1	90.0			0.5		10.0	115.2	1109.5	968.1	8124.9	14346.8	27372.1
スズキ	1831.6	687.8	3087.9	4120.3	1722.0	1675.1	2121.1	902.9	243.2	225.4	1356.0	6205.1	24178.4
ケンサキイカ	1222.9	1275.1	1678.9	2628.4	4358.4	4155.8	4647.8	2070.7	1419.6	241.9	120.9	178.2	23998.6
ツクシトビウオ					1821.0	7069.8	10162.6	255.1	30.8	83.7			19423.0
その他のマグロ類	5.0					13.9	4570.8	8799.6	3288.2	263.4			16940.9
その他のイカ類	435.6	472.7	628.3	772.2	9115.3	1516.7	201.5	34.8	248.5	279.3	240.7	314.4	14260.0
イサキ	61.2	5.3	1.5	647.4	873.8	2666.2	3355.0	1302.9	2591.5	912.3	638.1	674.7	13729.9
ウルメイワシ						231.0	8167.0	2074.2	17.5				10489.7
サンマ	3690.9	472.3	96.1	55.0						13.0	1648.2	4249.6	10225.1
ヤリイカ	1313.5	2250.6	4339.7	1181.4	1.7					0.6	2.0	16.9	9106.4
カンパチ		1.2	1.2		7.7	33.4	9.8	1875.9	5094.8	976.3	10.5	27.3	8038.1
カジキ類		10.0					1257.5	2510.0	2152.5	800.5			6730.5
ハガツオ	1.5				245.3	65.1	40.7	46.7	1220.0	4356.6	275.4	44.2	6295.5
コウイカ類	32.0	488.6	575.2	1283.3	2765.9	489.0	11.6		8.5		4.0	7.1	5665.2
ヒラメ	247.8	172.9	451.7	1080.6	1037.9	303.4	355.6	367.9	104.8	245.7	603.6	590.4	5562.3
クロマダロ	1013.7	44.8	12.5	114.0	959.6	778.8	380.4	78.4	103.1	66.6	420.2	472.3	4444.4
チダイ	45.0	111.3	41.0	706.8	731.5	223.0	260.3	28.5	295.4	230.0	43.0	23.0	2738.8
キダイ		30.0	45.0	60.0	165.0	745.0	1084.5	82.0	10.3			6.0	2227.8
エイ類	14.0	10.6	4.0	87.0	117.0	47.6	82.0	310.5	703.5	301.2	45.2	43.3	1765.9
サバフグ類		5.0			15.0	11.0	69.3	415.2	359.5	403.9	433.4	27.6	1739.9
メダイ	1157.0	157.8	7.0								6.0	72.8	1400.6
イボダイ	114.0								610.0	160.0			884.0
トラフグ	5.3	86.6	316.2	251.6	115.7	66.6	15.2	10.0			3.0	6.6	876.8
マトウダイ	81.8	19.8	8.6	16.4	39.0	23.0			3.0	16.4	91.6	429.5	729.1
その他のタコ類	42.6	161.4	142.9	148.2	73.4	73.1	11.6	25.6	36.0			13.0	727.8
サメ類	15.0	5.0	15.0		51.0	155.0	93.0	36.0	59.0	103.0	70.0	123.0	725.0
ホウボウ	6.3	45.0	42.2	100.2	147.6	25.5	3.6	9.9	51.9	12.2	7.9	24.7	477.0
ビンナガ							26.7		223.7	110.9			361.3
その他のカレイ類	20.5	73.5	154.3	20.6	32.4	19.4	6.5	4.6	7.7	3.1	4.6	5.1	352.4
サヨリ	240.3	39.3	52.9	15.6									348.1
タチウオ	47.8	1.7		0.5	7.8	10.0	24.9	58.8	30.8	12.3	15.6	119.2	329.4
オニオコゼ	10.3	6.4	22.9	27.7	15.8	27.8	4.7	8.0	5.6	1.5	1.3	6.1	138.1
エソ類					8.0	25.0	83.7		15.0				131.7
キス類	5.0	1.2			0.3	3.0			18.3			84.3	112.1
アナゴ・ハモ類	33.4	23.0	19.8	0.5	1.1	1.0	5.0	2.8	2.4		3.6	7.2	99.8
カイワリ								0.9	57.6	24.6	1.2	14.0	98.3
その他のハタ類		0.5	1.5	3.0	1.8	10.4	1.5	2.8	43.6	7.8	3.1	19.9	95.9
キジハタ				0.4	2.3	2.1	0.8	1.3	60.0	15.9	9.6	0.5	92.9
カサゴ・メバル類	9.1	17.5	10.2	8.6	8.1	5.0		0.3				2.5	61.3
マイワシ		3.2			10.0		24.0		5.0			15.0	57.2
アンコウ	4.5	14.5	10.0	21.8								2.3	53.1
マコガレイ	2.5	15.5	11.4	0.3		2.0		0.2				0.8	32.7
マダラ		3.0	17.4										20.4
メイトガレイ					1.2	5.7	1.8	0.3	7.0			1.8	17.8
ムシガレイ										1.5		12.0	13.5
ソウハチ		1.3	11.1										12.4
アカムツ	1.3										5.0	5.0	11.3
イトヨリダイ											10.0		10.0
ヤナギムシガレイ					3.0								3.0
カナガシラ				2.1									2.1
その他のカニ類							0.9		0.3				1.2
クルマエビ						0.6						0.4	1.0
アマダイ			0.8										0.8
アカガレイ		0.5											0.5
その他のエビ類												0.2	0.2
その他のフグ類													0.0
ミズダコ													0.0
キハダ													0.0
マフグ													0.0
マダコ													0.0
シラス													0.0
ニギス													0.0
クラカケトラギス													0.0

付表2 2002年月別魚種別漁獲量（単位：kg）

年月	2002/01	2002/02	2002/03	2002/04	2002/05	2002/06	2002/07	2002/08	2002/09	2002/10	2002/11	2002/12	合 計
マアジ	11906.7	28290.6	11427.3	52902.7	57292.2	48590.3	38077.7	12904.3	14905.5	9873.6	6571.4	20427.0	313169.3
ブリ	24587.4	3556.6	4126.4	75391.1	61808.4	19568.1	13909.7	13511.0	17619.0	30052.5	9211.7	7011.9	280353.8
ヒラマサ	1914.8	1089.6	343.5	3727.3	22475.4	24498.3	20560.2	7371.1	12062.5	6637.3	4655.9	6411.3	111747.2
ホソトビウオ	0.0	0.0	0.0	0.0	10386.0	69095.7	21460.6	1102.6	4939.4	21.4	0.0	0.0	107005.7
カタクチイワシ	2566.3	11316.3	3636.1	7859.2	7232.2	29123.4	18008.3	1526.0	195.5	16794.3	0.0	30.0	98287.6
カワハギ類	4618.9	2429.3	1639.1	2839.5	6734.8	4171.4	3993.6	4904.0	15732.7	7347.4	12761.8	22702.0	89874.5
サバ類	6769.8	7944.5	2686.2	7540.2	8983.8	2156.4	3728.8	900.6	31714.0	1843.7	91.1	5838.9	80198.0
ソウダガツオ	1576.0	64.2			10.5	108.4	4784.5	1292.4	13249.7	22313.9	5384.1	10458.3	59242.0
アオリイカ	3105.2	2458.6	30.4	584.7	19113.9	546.2	84.0	9.4	1275.0	3326.0	20466.9	4625.4	55625.7
スズキ	7140.3	4585.1	12521.4	9664.6	1784.1	1382.4	1758.5	496.3	227.0	767.0	6172.7	2705.2	49204.6
サワラ類	3976.8	843.6	2692.3	2331.8	566.9	2668.2	5735.4	3213.8	13598.1	7691.3	3313.6	1992.6	48624.4
マダイ	424.5	657.4	1986.9	13802.0	3676.1	1471.6	3727.8	683.6	1506.2	2377.4	1228.1	2377.6	33919.2
スルメイカ	3130.9	13028.3	6023.6	2552.3	2558.8	436.9	324.1	7.7	90.2	92.2	287.9	4233.7	32766.7
ウルメイワシ	15.0	333.0	30.0	10.0		1088.0	20298.4	7124.8	177.1	1364.1			30440.4
ケンサキイカ	840.8	476.3	464.9	1265.8	4432.2	5991.7	10580.9	1685.7	1054.7	76.2	130.0	1906.9	28966.1
ツクシトビウオ					3296.6	15018.1	6918.7	462.4	243.7				25939.5
カマス	56.2	109.5			206.0	658.5	147.8	1851.8	9444.8	5959.0	3041.0	1854.7	23329.3
ソデイカ	1671.7	253.4	6.9	0.2			36.5	57.8	345.7	1156.4	8187.9	8480.8	20197.3
カジキ類	87.0					843.0	2077.0	3548.8	11034.9	1604.0	128.0		19322.7
シイラ						74.2	165.6	135.7	3149.4	8249.5	5185.5	322.9	17282.8
イサキ	102.3	16.8	36.2	188.3	999.4	5169.8	6221.0	614.3	1243.8	2135.0	205.7	265.9	17198.5
その他のマグロ類						15.0	2145.6	8278.5	1080.3	5676.0			17195.4
サンマ	3034.2	1518.3	34.9								2673.3	4562.6	11823.3
ヤリイカ	722.8	1133.2	4031.7	801.5		4.5	0.4		1.8	2.1	0.3	958.8	7657.1
ヒラメ	468.8	392.7	791.7	1104.5	772.6	287.2	313.5	204.5	37.7	232.6	743.9	951.8	6301.5
その他のイカ類	447.3	659.5	540.7	625.0	904.4	344.0	158.4	55.0	382.2	211.7	145.3	362.3	4835.8
チダイ	27.0	370.4	189.0	1010.4	791.7	883.6	155.2	4.6	30.0			9.5	3471.4
コウイカ類	30.0	649.2	847.6	528.5	1245.4	53.6	5.3			6.0		19.5	3385.1
カンパチ	18.3				1.4	9.7	18.1	369.8	1897.9	527.6	19.8	4.4	2867.0
サバフグ類					20.0	3.0	6.0	202.0	996.9	834.2	122.0		2184.1
マトウダイ	441.8	213.0	123.4	174.0	192.7	272.6	51.6		3.0	10.5	175.6	418.0	2076.2
メダイ	345.7	210.4	40.8								171.2	959.1	1727.2
クロマグロ	270.7	77.3	156.0	7.5	204.1	264.0	11.0	26.0	106.7	209.6	182.5	137.2	1652.6
トラフグ	55.6	217.6	267.3	194.6	345.7	171.6		13.0	70.0	14.0	1.0	20.0	1370.4
ハガツオ					56.3	420.5	260.2	180.2	35.7	37.4	7.1	1.2	998.6
エイ類	39.0	27.5	10.6	177.2	96.0	81.1	25.0	49.2	313.6	134.9	22.0	3.0	979.1
その他のカレイ類	177.0	168.7	384.8	47.1	9.4	1.3	6.6	9.3	6.5	3.0		15.0	828.7
その他のタコ類	64.2	160.5	191.6	126.7	75.9	26.5	10.7	3.0	3.0	15.0		4.0	681.1
タチウオ	20.2	3.0		15.5	8.6	1.5	20.7	120.5	53.6	50.6	198.1	142.0	634.3
ホウボウ	41.0	41.2	157.4	87.2	51.1	6.0	2.4		5.1	11.0	3.0	2.7	408.1
ビンナガ						51.8	140.7	42.8	21.2	43.0	13.5		313.0
エソ類					10.8	167.0	91.2	18.9	2.5				290.4
サメ類	42.0	23.5	20.0			100.0		2.0	33.5	1.0	20.0	1.0	243.0
キス類	32.2	26.0							4.6	3.0	3.5	111.5	180.8
オニオコゼ	8.3	8.3	61.7	41.3	18.6	8.0	7.7	4.3	0.6	1.2	0.5	10.5	171.0
アナゴ・ハモ類	46.0	62.6	12.8	5.8	0.5	1.5	4.3	6.5		5.1	5.2	19.4	169.7
アカムツ	5.0							5.0	1.8	140.1		16.7	168.6
アンコウ	11.5	12.6	24.2	77.7	13.0							7.0	146.0
マイワシ	75.0	21.5	10.0	0.3			5.0			5.0	10.0	10.0	136.8
キジハタ	0.2			1.5	2.4	1.3	6.3	1.4		87.6	25.7		126.4
カサゴ・メバル類	9.7	28.5	59.1	11.2	3.4	0.2	3.3	0.9				4.0	120.3
サヨリ	0.6	4.9	0.2	35.0								55.5	96.2
マコガレイ	4.8	12.8	70.0		1.3	1.7		1.7					92.3
カイワリ								1.3	3.7		80.2	1.5	86.7
イボダイ										30.9	19.7	31.2	81.8
その他のハタ類		0.3	7.3		1.4	0.9	12.4	2.4	3.4	6.7	8.0	1.5	44.3
シラス									32.1	7.5			39.6
マダラ		21.3	9.0										30.3
その他のエビ類						8.3			3.0				11.3
キダイ		5.0	4.4										9.4
ソウハチ			9.0										9.0
ムシガレイ									9.0				9.0
メイトガレイ							1.0				0.6	1.5	3.1
クルマエビ						0.2							0.2
その他のフグ類													0.0
カナガシラ													0.0
ミズダコ													0.0
キハダ													0.0
マフグ													0.0
マダコ													0.0
イトヨリダイ													0.0
ニギス													0.0
アマダイ													0.0
その他のカニ類													0.0
ヤナギムシガレイ													0.0
クラカケトラギス													0.0
アカガレイ													0.0

付表3 2003年月別魚種別漁獲量(単位: kg)

年月	2003/01	2003/02	2003/03	2003/04	2003/05	2003/06	2003/07	2003/08	2003/09	2003/10	2003/11	2003/12	合 計
ブリ	6345.3	3090.7	13358.6	57414.0	88097.6	26552.8	53172.7	95112.1	22339.4	133441.3	98959.1	8544.9	606428.6
マアジ	8261.1	8583.7	12830.4	42583.8	41605.3	56590.5	47863.5	12333.6	16887.9	23254.0	9661.1	4599.6	285054.5
ヒラマサ	3170.0	674.1	201.9	10414.3	32068.3	25586.4	23316.8	9434.1	6343.9	7145.0	2223.3	5423.9	126002.0
ホソトビウオ	0.0	0.0	0.0	0.0	4909.6	72055.5	25694.8	2987.0	1580.8	339.2	0.3	0.0	107567.2
カタクチイワシ	2196.1	27434.6	5342.4	298.1	1660.0	2903.2	6966.0	8231.9	12410.0	10801.8	25979.0	815.6	105038.7
ケンサキイカ	2902.5	720.7	958.4	4052.0	7525.7	11037.3	28696.4	16561.7	4554.3	1526.9	974.7	2629.8	82140.4
サワラ類	2690.8	441.1	2050.9	1519.9	343.9	1873.9	3800.0	10974.7	18451.9	22217.0	7448.2	3584.7	75397.0
サバ類	2494.8	257.7	2407.6	1606.6	3084.1	7985.1	25805.4	783.4	12273.4	6580.7	5062.2	307.9	68648.9
カワハギ類	9983.3	580.3	701.8	4023.5	3008.4	5058.4	6081.4	2433.5	5216.3	13220.1	6835.6	3217.5	60360.0
マダイ	591.0	156.2	9114.3	11032.3	4815.6	3125.8	2729.5	1422.6	3114.6	8228.0	2379.6	1777.1	48486.6
スズキ	3614.9	2280.8	15788.7	11243.6	2774.7	665.5	839.5	515.0	427.1	973.4	1473.2	4506.0	45102.4
カマス	607.0	12.9	9.0	0.6	277.6	416.3	404.6	1925.9	6337.6	25221.8	5001.1	693.4	40907.8
スルメイカ	5983.2	4938.0	4181.3	2001.7	3308.6	2871.6	5989.8	235.0	34.3	315.4	302.7	3259.0	33420.7
シイラ	6.0					443.4	387.8	1694.0	6641.3	19200.3	335.1	161.9	28869.8
ソウダガツオ	1064.3	24.8			64.4	408.0	2616.5	14046.2	799.0	166.0	408.7	5907.2	25505.1
アオリイカ	597.1	659.2	4.0	279.8	6830.5	473.0	306.6	0.8	423.6	4382.3	5584.5	4153.7	23695.1
ウルメイワシ		1896.1					6129.3	15396.8	69.8	3.0		95.6	23590.6
ツクシトビウオ					2410.5	12796.1	5160.2	649.5	234.1	129.3			21379.6
その他のマグロ類						39.8	332.1	1310.6	12120.5	6475.1	615.6	45.5	20939.2
イサキ	2.0	39.4	7.0	568.6	731.4	3878.0	5497.2	3904.2	2262.3	2319.0	434.3	370.5	20013.9
ヤリイカ	2471.5	2772.6	7318.4	7173.4	33.8				9.0	4.8	10.0	30.4	19823.9
カジキ類					8.0	1301.0	1736.0	3058.0	6719.5	1063.0	52.0		13937.5
ソデイカ	979.7	26.0					52.6	519.2	561.2	1918.4	3169.5	2605.8	9832.4
ヒラメ	374.6	322.0	1019.9	1496.3	1184.9	427.7	282.1	495.1	114.7	370.1	636.9	865.7	7590.0
コウイカ類	42.8	1078.0	1760.5	2563.6	1648.3	151.0	9.7		3.0		6.0	3.0	7265.9
メダイ	4561.9	1603.2	386.6	53.2		7.0				12.3	6.0	84.5	6714.7
サンマ	4863.6	95.9	18.3		22.4					162.0	1092.4	187.5	6442.1
チダイ	51.7	628.5	369.7	619.2	2114.1	416.9	54.7	39.5	6.4	43.0		3.4	4347.1
その他のイカ類	447.5	379.2	516.3	601.7	629.9	543.4	200.0	94.1	154.1	424.4	171.0	162.4	4324.0
トラフグ	106.6	156.9	493.7	534.3	1921.3	498.7	67.0			7.0	8.0		3793.5
マイワシ		2260.2	58.3	5.0	10.0	5.0	67.5	5.0	1.0	5.0			2417.0
カンパチ	3.6		5.0	2.8	4.3	10.8	22.6	81.2	713.9	1448.7	24.7	3.1	2320.7
エイ類	6.0		46.5	117.0	159.4	72.6	30.0	132.0	451.2	268.3	95.0	45.4	1423.4
クロマグロ	305.4	60.4	17.8	9.1	107.4	270.0	121.8	7.5	10.9	2.5		64.0	976.8
ホウボウ	23.8	57.6	212.3	352.5	132.0	56.8	36.9	3.0	13.8	20.1	15.6	4.0	928.4
サバフグ類					4.0		12.5	19.5	29.1	703.0	106.0	23.3	897.4
マトウダイ	290.8	73.8	36.3	42.0	147.0	44.7	10.0	15.0		11.7	39.1	105.4	815.8
カサゴ・メバル類	32.0	53.3	421.2	218.8	2.9	15.2	3.1	1.4	1.2	0.9	0.6	4.8	755.4
その他のタコ類	51.6	117.3	146.7	147.0	44.8	34.8	24.0	8.3				30.5	605.0
サメ類	8.0	56.2	8.0	10.0	3.0	193.0	33.0	87.0	115.0	26.0	43.0	12.0	594.2
その他のカレイ類	57.9	91.0	191.7	98.1	13.0	12.5	9.4	7.1	3.0	3.0	0.6	15.5	502.8
サヨリ		64.4	135.8	294.4									494.7
タチウオ	111.8	86.7	0.6	6.5	50.3	17.9	19.4	11.2	26.3	8.4	6.5	13.0	358.6
アナゴ・ハモ類	94.1	100.4	32.1	6.4	12.4	6.0	6.6	4.4	2.1	30.1	6.7	29.3	330.6
オニオコゼ	0.5	3.7	38.4	102.8	40.9	18.2	8.9	21.3	14.5	1.9	0.5	24.0	275.6
キジハタ	1.3				3.0	6.1	14.7	4.5	36.5	110.8	10.3	1.7	188.9
エソ類					2.5	29.8	80.0	45.5	13.0	8.5			179.3
イボダイ	1.2	80.1							18.0	1.5	33.9	38.7	173.4
カナガシラ		6.0	72.0	80.0									158.0
シラス					26.0	84.0							110.0
アンコウ	21.5	9.5	18.0	8.3	15.0	5.0							77.3
その他のハタ類	1.0		7.0	9.0	3.5	1.4	10.0	7.4	4.0	33.9			77.2
マダラ	12.5	15.0	39.7	1.0									68.2
キス類	16.5	5.1	12.3							3.0	3.3	17.1	57.3
マコガレイ		5.2	21.0	21.3	1.8			5.0	0.2	1.0			55.5
ビンナガ								10.0		33.5			43.5
ハガツオ					2.0	10.8	16.2	1.8	4.3	5.0			40.1
キダイ	5.0		5.0				1.5	5.0	5.0	11.0			32.5
メイトガレイ		1.1			0.2	24.3	0.8			0.2		0.6	27.2
カイワリ									16.9	4.0	4.0	1.9	26.8
ソウハチ			15.0										15.0
アカムツ										13.2			13.2
ムシガレイ									12.8				12.8
その他のカニ類						1.0							1.0
その他のフグ類													0.0
ミズダコ													0.0
キハダ													0.0
マフグ													0.0
マダコ													0.0
その他のエビ類													0.0
イトヨリダイ													0.0
ニギス													0.0
アマダイ													0.0
ヤナギムシガレイ													0.0
クルマエビ													0.0
クラカケトラギス													0.0
アカガレイ													0.0

付表４ 2004年月別魚種別漁獲量（単位：kg）

年月	2004/01	2004/02	2004/03	2004/04	2004/05	2004/06	2004/07	2004/08	2004/09	2004/10	2004/11	2004/12	合 計
マアジ	4446.7	16622.9	11297.4	29044.3	37760.6	139624.9	30062.2	6508.2	18691.6	79912.3	51945.5	39025.3	464941.9
ブリ	3862.2	1078.4	13453.4	44727.4	23383.3	9033.1	32505.8	17664.2	19441.7	48043.9	8675.9	16638.9	238508.2
カワハギ類	4055.9	318.1	337.5	1651.6	2012.2	5094.2	4070.4	8951.5	40997.5	28219.2	13035.2	5218.2	113961.5
サワラ類	6450.2	211.9	216.0	2766.1	227.7	2385.3	4244.9	699.3	17131.9	54045.9	15429.2	7196.2	111004.6
ホソトビウオ	0.0	0.0	0.0	0.0	6676.0	53837.9	21064.5	6383.9	1987.2	0.0	0.0	0.0	89949.5
ケンサキイカ	4102.5	1491.9	1846.4	1826.7	4156.6	25204.7	20013.2	1338.9	1795.7	1354.0	551.4	1521.0	65203.0
スルメイカ	21910.8	17605.5	4758.9	2135.3	1980.5	9560.0	1239.2	0.0	2.3	604.0	1184.0	2764.4	63745.0
ソウダガツオ	236.7	355.5	27.0	0.5		5.5	6998.0	1819.1	11183.5	11199.4	3984.2	22856.5	58665.9
カタクチイワシ	5071.2	9052.3	19996.2	110.0	742.1	1329.0	15849.4	258.2	69.0	3550.0	0.0	752.2	56779.6
アオリイカ	1828.1	1279.3	217.1	10.3	3263.6	2995.7	1208.5	189.2	2072.2	11090.3	11242.3	4297.5	39694.1
ヒラマサ	2921.7	258.9	379.7	11552.4	8437.5	4790.5	3160.5	416.0	189.0	832.9	842.8	295.8	34077.7
スズキ	3885.4	1053.6	6560.8	8744.8	1387.2	1729.7	818.9	548.0	216.5	1173.0	1334.3	6506.8	33959.0
カマス	29.4		78.6	3.0	127.6	899.2	3458.6	855.8	2721.2	9277.3	4713.5	6212.9	28377.1
ツクシトビウオ				1.1	3817.6	13734.3	6054.6	321.8	13.7		20.3		23963.4
サバ類	753.4	361.5	146.0	1119.9	141.2	5641.4	13153.6	21.4	160.5	1008.1	569.6	249.1	23325.7
ウルメイワシ	3.8	40.0	11.0			656.5	14238.0	4406.9	725.0	956.5	213.2	20.7	21271.6
ヤリイカ	2580.6	6048.6	10405.6	1747.2	-2.2	2.1	3.0					27.8	20812.7
マダイ	575.1	189.9	1361.1	5143.2	2651.1	2171.9	1619.1	407.6	416.1	2557.0	2152.6	1510.9	20755.6
イサキ	83.7		19.4	941.3	2742.8	5421.8	3651.4	342.4	1641.9	3728.2	917.3	595.9	20086.1
シイラ	18.6					12.5	3099.2	1890.5	3907.8	3862.4	956.0	384.0	14131.0
カンパチ	7.4			37.1	6.5	165.3	158.5	1893.7	4396.8	6359.7	278.4	6.3	13309.7
ソデイカ	1299.9	60.0				95.0	9.5		111.6	798.8	2358.3	4082.7	8815.8
サンマ	327.5	234.7	74.7		15.0				5.0	1228.3	3715.5	1939.4	7540.1
その他のマグロ類						445.2	774.6	1752.5	2728.6	1470.8	10.0	37.9	7219.6
サバフグ類				57.0	28.0	30.0		3022.9	557.5	2712.7	295.8	70.0	6773.9
カジキ類						29.0	911.0	1564.0	3681.5	472.0		1.0	6658.5
ヒラメ	574.6	473.9	775.5	1656.7	875.2	626.8	337.7	53.0	26.6	316.9	353.2	508.8	6578.9
その他のイカ類	322.1	352.0	411.8	529.0	568.6	609.9	252.4	79.4	222.7	315.6	239.3	244.3	4147.2
チダイ	35.7	24.6	109.3	2149.3	817.4	133.7	25.4	3.0	11.0	49.0		5.3	3363.7
クロマグロ	645.3	170.2	199.8	99.7	302.9	3.5	601.5	170.5	115.7	126.3	204.1	445.9	3085.4
トラフグ	8.3	121.4	259.6	281.2	717.3	516.9		111.9	80.0	493.9	10.0	3.0	2603.5
コウイカ類		406.2	528.2	641.9	349.3	168.9	7.3		9.0	9.0		3.9	2123.7
マイワシ		0.2				15.0	1875.0	6.0	85.0	25.0			2006.2
エイ類	14.0	16.0	6.0	121.4	137.4	11.6	9.3	107.2	389.0	976.0	84.0	16.0	1887.9
タチウオ	24.9	18.8	1.0	33.4	23.0	51.9	224.1	212.5	344.6	25.9	9.4	25.3	994.8
メダイ	428.4	154.5	68.0	2.5		3.0					33.7	265.1	955.2
サメ類	3.7	25.0	5.0	101.0	218.0	99.0	16.0	14.0	67.0	260.0	14.0	62.0	884.7
ハガツオ							1.5		193.4	624.4			819.3
その他のカレイ類	127.6	197.9	271.6	28.1	17.0	9.0	14.2	10.9	7.5	10.9	6.5	12.1	713.3
その他のタコ類	27.0	98.2	232.0	179.5	37.0	42.3	22.5	13.1	10.5	8.1		3.2	673.4
ホウボウ	40.4	103.0	123.0	63.2	86.7	55.7	4.8		3.0	36.6	19.7	28.2	564.3
マトウダイ	243.2	16.9	18.7	12.7	17.3	12.5					43.8	71.1	436.2
アナゴ・ハモ類	186.0	150.8	37.1	4.6	6.3	14.8	0.8	2.4	0.9	3.4	4.0	13.6	424.7
カサゴ・メバル類	19.7	30.9	54.2	69.7	19.7	74.8	3.8		5.1	0.3		10.3	288.5
ビンナガ							7.7	32.5	20.2	4.9		200.0	265.3
オニオコゼ	6.0	4.7	42.6	122.5	27.2	11.3	20.4	4.4	2.5	1.5	5.2	4.1	252.5
キジハタ	0.7	0.3		5.5	2.3	2.5	7.6	5.6	28.4	152.9	6.3	7.6	219.7
キダイ						9.0	24.0	5.0	37.5	34.0	23.0	3.0	135.5
シラス					90.0	29.0					13.0		132.0
キス類	12.0	2.1				5.0	2.0		19.5	0.3		90.4	131.3
マコガレイ		16.2	84.6	10.4	0.3	3.5	1.0			0.2			116.2
その他のハタ類	2.3			18.8	3.9	8.9			2.8	40.7	11.1	3.9	92.4
アンコウ	16.1	18.9	14.7	23.0	6.0								78.7
ソウハチ	2.4	21.0	48.0										71.4
カイワリ		0.2							0.7	43.5	8.2	0.6	53.2
サヨリ			9.2	11.0					5.0				25.2
マダラ		10.0	10.5										20.5
イボダイ	12.0									6.0		1.5	19.5
カナガシラ		7.5	9.0		2.1								18.6
アカムツ										3.0			3.0
アマダイ										0.7			0.7
メイタガレイ		0.6											0.6
その他のフグ類													0.0
ミズダコ													0.0
キハダ													0.0
マフグ													0.0
マダコ													0.0
エソ類													0.0
その他のエビ類													0.0
イトヨリダイ													0.0
ムシガレイ													0.0
ニギス													0.0
その他のカニ類													0.0
ヤナギムシガレイ													0.0
クルマエビ													0.0
クラカケトラギス													0.0
アカガレイ													0.0

付表5 2005年月別魚種別漁獲量（単位：kg）

年月	2005/01	2005/02	2005/03	2005/04	2005/05	2005/06	2005/07	2005/08	2005/09	2005/10	2005/11	2005/12	合 計
マアジ	19832.2	11067.9	11072.8	36073.7	55684.7	90927.5	58078.2	13142.9	12117.7	36650.0	15185.6	5886.5	365719.7
ブリ	2594.1	2037.0	1508.0	49680.2	53471.1	15356.3	64894.6	17268.7	10945.1	21421.1	11272.5	2479.2	252927.9
ホソトビウオ	0.0	0.0	0.0	0.0	8377.5	67419.6	58614.2	9648.2	1895.1	649.0	0.0	0.0	146603.6
サワラ類	4858.9	985.5	1204.3	2853.4	6301.7	1851.6	62821.8	13477.9	11445.6	17979.9	4505.1	2108.3	130394.0
ケンサキイカ	4117.0	2149.5	779.5	1614.4	10693.4	17357.1	28969.1	8220.8	5590.4	3072.9	4713.3	4310.2	91587.6
ソウダガツオ	6933.3	10.9	38.4	0.3	10.0	15.0	43688.4	1517.0	9924.7	3590.2	1937.6	346.9	68012.7
カワハギ類	2173.8	565.9	378.4	479.4	987.5	1989.6	2066.2	2652.0	8102.9	21665.2	13441.4	7095.7	61598.0
サバ類	959.4	816.9	1231.6	5601.8	2980.8	10835.3	23144.3	893.2	2729.3	7070.7	1486.7	40.6	57790.6
クロマグロ	7127.9	1487.7	394.3	459.0	3532.0	2039.1	30619.9	2543.0	155.5	78.7	55.8	1250.8	49743.7
スズキ	4170.5	2673.8	3805.2	9481.8	2048.7	2385.2	1046.7	529.3	435.2	1284.3	4530.0	5229.3	37620.0
スルメイカ	1802.6	9300.4	5080.5	3028.7	10701.4	5965.8	313.8	223.7	154.8	542.7	116.0	257.7	37488.1
カマス	1476.4	5.1	1.0		5661.9	6939.1	7475.1	3284.9	1929.7	2711.9	1515.4	442.5	31443.0
アオリイカ	1069.3	1059.3	302.1	104.2	10305.1	573.9	669.1	17.2	837.0	3358.6	7121.1	2027.6	27444.5
ツクシトビウオ					4752.6	10408.2	6889.2	632.6	79.4	20.1	0.1		22782.2
イサキ	108.2	36.4	10.0	126.4	1435.3	2369.1	8124.4	2344.6	2676.4	2633.5	337.9	242.5	20444.7
シイラ						9.4	216.5	736.4	11602.5	6398.0	993.0	52.4	20008.2
マダイ	586.6	758.6	1236.1	2808.2	2569.3	1762.4	1783.6	1022.5	1769.3	2820.7	583.2	600.0	18300.5
ヒラマサ	267.4	23.3	68.6	1872.5	5042.1	2191.4	1322.2	1970.5	204.1	228.9	362.8	1313.3	14867.1
カタクチイワシ	168.5	91.5	316.5	289.5	5382.7	2172.0	4224.5	450.0	43.0	1.2	0.0	0.0	13139.4
ヤリイカ	1070.4	3372.3	5563.2	1293.1	8.0							78.0	11385.0
カンパチ	7.8	15.5	9.3	5.5	46.4	37.0	345.9	1640.8	3531.0	3606.9	127.4	16.9	9390.4
ヒラメ	398.9	345.4	859.0	1296.8	1657.5	649.4	271.7	274.5	43.8	198.7	296.4	416.2	6708.3
カジキ類	34.0					20.0	1493.0	2619.0	1617.0	242.0			6025.0
その他のマグロ類				2.7		131.1	2239.0	1153.8	1990.7	444.9	28.7		5990.9
ソデイカ	1760.3	439.2	4.1	1.0			10.0	8.5	85.6	223.8	2574.9	518.3	5625.7
サンマ	374.2	2371.7	33.6	63.4	1204.1	91.0					871.4	79.9	5089.3
ウルメイワシ		10.4	16.5				2696.1	1439.3	195.3	118.0	170.0		4645.6
サバフグ類		10.0	25.7	35.0	10.0	100.5	1844.5	1551.9	747.3	162.0	60.3	39.0	4586.2
タチウオ	3350.6	673.0	53.3	2.6	29.1	17.5	0.6	11.8	22.0	30.9	3.3	1.9	4196.6
ハガツオ		22.0				66.0	43.2	853.8	2470.6	107.7			3563.3
コウイカ類	24.4	183.0	751.0	473.5	1054.4	299.9	19.4			3.0		3.5	2812.1
その他のイカ類	201.7	176.2	261.8	333.5	603.9	395.3	275.7	77.8	99.4	211.3	80.8	62.0	2779.4
イボダイ									154.8	2374.4	52.9	39.6	2621.7
トラフグ	94.6	100.6	333.2	178.7	965.8	239.6	204.1	109.0			0.5	3.4	2229.5
エイ類	3.0		10.8	121.0	206.5	20.0		423.0	337.1	264.9	33.0	8.0	1427.3
チダイ		20.0	67.8	82.6	775.0	225.5	3.6					4.6	1179.1
メダイ	115.8	400.1	338.8	7.0							31.7	206.1	1099.5
サメ類	37.0	85.0		15.0	285.0	88.0	45.0	80.0	123.0	88.0		30.0	876.0
その他のカレイ類	51.7	169.2	382.1	61.1	17.3	18.4	16.1	6.6	0.6	1.1	3.0	10.2	737.4
マトウダイ	85.9	115.9	30.5	24.0	71.0	84.0					65.0	117.8	594.1
その他のタコ類	58.0	35.8	102.0	71.8	62.0	28.6	28.3	12.0	16.0	3.0		4.5	422.0
ホウボウ	14.4	50.5	96.6	68.7	79.1	20.1	3.0	0.9	6.0	11.3	3.4	3.0	357.0
アナゴ・ハモ類	65.5	107.6	26.3	2.4	3.0			5.0			1.8	5.9	217.5
オニオコゼ	10.0	1.4	17.8	58.8	56.5	20.2	16.3	14.5	6.0		0.2	1.0	202.7
アンコウ	23.4	62.6	19.1	62.1	25.0								192.2
マダラ	39.6	115.5	27.4	5.5									188.0
カイワリ							1.1	1.8	30.2	41.0	63.8	0.8	138.7
カサゴ・メバル類	24.7	5.4	44.1	22.2	7.8	9.2	1.8	0.8				4.8	120.8
アカムツ								5.5	14.8	23.4	68.0	3.1	114.8
マイワシ							87.5	26.0					113.5
キジハタ				1.3	7.7	20.8	6.4	4.3	6.6	43.1	10.5	3.6	104.3
マコガレイ	0.5	6.9	58.6	13.7	2.1								81.8
キダイ					3.5	13.0	50.0	5.0					71.5
その他のハタ類			2.3	1.5		1.5	7.0	4.3	0.4	25.2		0.4	42.6
キス類	31.8	0.6						0.5	3.0	3.0			38.9
ビンナガ											34.8		34.8
ソウハチ		3.0	27.9										30.9
シラス					30.0								30.0
カナガシラ		7.2	14.6	0.9									22.7
エソ類					21.5								21.5
その他のエビ類									10.0				10.0
その他のカニ類	3.0							2.2					5.2
クルマエビ						1.4							1.4
メイトガレイ											0.5		0.5
その他のフグ類													0.0
サヨリ													0.0
ミズダコ													0.0
キハダ													0.0
マフグ													0.0
マダコ													0.0
イトヨリダイ													0.0
ムシガレイ													0.0
ニギス													0.0
アマダイ													0.0
ヤナギムシガレイ													0.0
クラカケトラギス													0.0
アカガレイ													0.0

付表6 2006年月別魚種別漁獲量(単位: kg)

年月	2006/01	2006/02	2006/03	2006/04	2006/05	2006/06	2006/07	2006/08	2006/09	2006/10	2006/11	2006/12	合 計
マアジ	14674.5	15157.0	26579.8	90494.2	83285.6	156606.6	91266.8	77432.8	78945.2	50539.7	25547.5	28724.3	739253.9
ブリ	1193.1	1005.3	360.1	48457.7	189304.6	30802.6	11595.0	41034.9	50893.1	13127.1	29760.9	3863.3	421397.6
サバ類	3648.1	50717.8	2053.8	19250.4	64766.8	6284.1	30042.9	18601.7	74077.5	26757.3	15694.8	3745.8	315641.1
ホソトビウオ	0.0	5.5	0.0	0.0	16460.9	88192.2	79454.0	2115.2	2920.8	95.4	0.0	0.0	189243.9
サワラ類	3366.9	258.9	402.5	5111.2	1598.1	4526.7	26145.3	27547.1	69750.3	19177.6	8501.2	18643.0	185028.8
スルメイカ	4561.4	6370.5	2922.9	2207.1	5859.3	11920.2	1082.3	7.4	455.3	783.3	289.2	106898.0	143356.9
カタクチイワシ	4177.2	485.3	4548.2	2432.5	14366.6	1280.0	7043.4	20575.3	43024.0	290.0	380.0	9436.9	108039.4
マダイ	835.3	25.5	9230.7	28744.1	6598.2	15153.1	7063.8	6427.8	5832.7	6805.1	1191.7	1135.7	89043.7
スズキ	2093.2	2876.3	12300.6	10782.6	4967.5	2693.6	1167.1	718.1	635.6	1529.7	23892.8	9641.9	73299.0
ツクシトビウオ	0.3				4358.8	48322.1	18951.8	1463.5	38.5	3.6			73138.6
カマス	40.1	6.0	7.1	12.0	685.0	2172.0	2855.2	1621.0	16216.0	20124.0	16292.3	11239.4	71270.1
カワハギ類	1593.1	145.2	287.0	691.4	1686.6	8447.5	5776.9	5191.2	12541.6	15808.7	9354.8	8300.3	69824.3
ケンサキイカ	1648.1	151.7	289.0	363.8	2728.4	14554.6	12526.4	5859.2	10802.2	5282.5	2813.0	2069.8	59088.7
イボダイ	0.3	15.0							522.8	42334.7	3039.2	207.8	46119.8
イサキ	0.3			152.2	1049.9	5063.5	10561.7	12827.0	6590.1	1994.1	307.9	194.3	38741.0
アオリイカ	513.6	0.4	1.0	1280.7	7470.0	776.8	391.1	58.6	1814.6	5416.4	7139.0	4328.7	29190.9
ソウダガツオ	1273.5					7.0	1585.7	5371.2	529.1	41.8	1470.9	16697.2	26976.4
ウルメイワシ							6372.2	16217.9	7.0	305.0	124.1	81.3	23107.5
ヒラマサ	329.7	130.0	110.8	1330.9	4020.2	1429.1	1289.4	5021.3	2464.8	1004.0	1587.6	1605.7	20323.5
クロマグロ	4751.3	1247.0		4036.9	2204.8	217.9	35.5	155.0			24.2	161.2	12833.8
ヤリイカ	2530.2	2640.0	3407.9	2693.7	24.5							233.4	11529.7
その他のフグ類				2492.8	2867.0	2021.4	946.0	1167.7	909.0	533.5	106.5	58.2	11102.1
ヒラメ	449.7	337.3	766.2	2416.4	1735.8	1169.1	554.5	490.7	426.8	473.7	854.7	997.9	10672.8
チダイ	48.2	78.0	418.3	2569.5	3821.5	2108.3	53.0	9.0	8.0	19.0		14.3	9147.1
サバフグ類	5.0				155.5	1096.8	1030.5	1361.1	1817.5	2180.8	375.8	90.9	8113.9
カンパチ	6.5					27.5	11.0	1902.4	4332.4	1356.7	64.3	14.2	7715.0
ソデイカ	63.2								134.4	235.5	1919.6	4155.8	6508.5
シイラ						86.9	1143.5	392.8	3244.1	512.5	850.9	82.2	6312.9
コウイカ類	31.0	202.7	612.5	1596.5	2631.1	849.5	44.3		125.0				6092.6
その他のマグロ類				5.5		7.0	3694.2	737.0	225.8				4669.5
その他のイカ類	45.0	44.0	72.0	303.3	824.2	1002.6	876.5	88.9	130.9	144.0	114.0	123.0	3768.4
サンマ	1717.7	13.6	81.6								1031.4	185.0	3029.3
カジキ類						121.0	491.8	848.0	1192.0	78.0	14.5		2745.3
エイ類		11.0	20.0	323.2	318.1	80.0	69.4	329.0	295.0	338.8	17.0	123.0	1924.5
マトウダイ	55.8	12.0	20.1	119.6	144.9	180.8	18.0	28.0	155.7	36.5	146.3	888.5	1806.2
トラフグ	129.5	357.1	689.0	91.8	18.0				9.5	6.5			1301.4
サヨリ		10.1	27.9	1153.5									1191.5
ホウボウ	59.3	69.2	214.0	226.8	270.3	49.6	12.0	14.4	45.4	147.6	14.0	44.4	1167.0
サメ類	3.0	3.0	96.0	25.0	33.0	63.0	48.0	47.0	406.0	103.0	15.0	37.0	879.0
その他のカレイ類	119.0	255.5	286.1	111.9	6.5	23.2	30.0	9.3	0.7	12.0	0.8	7.9	862.9
その他のタコ類	106.7	201.7	316.7	38.9	46.2	47.6	34.7	9.2	3.5				805.2
キダイ				50.1	10.8	145.9	76.5	164.5	49.8	123.5	10.0	57.4	688.5
メダイ	78.0	14.5	29.4	3.2	5.5				14.0			408.7	553.3
マイワシ							248.2	248.5	7.0				503.7
カサゴ・メバル類	3.6	62.6	114.8	150.4	20.5	20.3		25.4	8.2		13.0	7.7	426.5
カナガシラ	0.7		117.9	222.5	46.0							14.0	401.1
マダコ				26.0	35.0	111.9	57.4	48.5	17.0	1.5			297.3
オニオコゼ	0.4	3.0	40.7	91.6	55.9	23.4	15.7	6.1	10.6	0.3	3.3	22.0	273.0
マフグ				79.0	72.0	64.0	19.0	21.0		15.0			270.0
その他のハタ類			2.4	7.0	15.5	12.7	33.1	45.0	11.3	95.3	19.0	3.1	244.4
ハガツオ							13.5	49.0	130.0	50.1			242.6
ミズダコ				174.0	55.8								229.8
マコガレイ	6.8	51.7	99.2										157.7
アナゴ・ハモ類	39.5	26.4	19.5	10.5		6.0	5.5	10.0	11.2	0.4	1.2	20.5	150.7
アンコウ	29.8	43.7	6.0	41.0	30.0								150.5
キス類	29.1		6.9	14.2			22.0	10.0	12.6		12.0	38.0	144.8
マダラ	17.2	78.3	31.8	13.5									140.8
エソ類					52.0	14.0	59.0	8.0					133.0
シラス					132.5								132.5
ソウハチ		48.0	71.0	5.3									124.3
キジハタ			0.1	0.7	5.7	3.7	6.7	8.6	33.9	45.5	9.9		114.8
タチウオ	5.3		0.5	5.2		9.0	6.5	6.6	5.3	6.1	5.0	28.0	77.5
キハダ							21.9	14.4		9.0		17.0	62.3
ビンナガ										22.3			22.3
アカムツ	3.9	0.3	10.0										14.2
ムシガレイ				4.0									4.0
カイワリ								0.7		1.0			1.7
メイトガレイ			0.5	0.2	0.2	0.4		0.3					1.6
その他のエビ類			0.3										0.3
イトヨリダイ													0.0
ニギス													0.0
アマダイ													0.0
その他のカニ類													0.0
ヤナギムシガレイ													0.0
クルマエビ													0.0
クラカケトラギス													0.0
アカガレイ													0.0

付表7 2007年月別魚種別漁獲量(単位: kg)

年月	2007/01	2007/02	2007/03	2007/04	2007/05	2007/06	2007/07	2007/08	2007/09	2007/10	2007/11	2007/12	合 計
マアジ	33395.8	3468.9	6941.6	94371.7	82597.7	92349.7	94589.6	30381.4	30470.7	40899.3	30950.6	13013.2	553430.4
ブリ	2647.4	31926.2	9347.4	99038.1	132267.8	18164.4	43866.6	8920.5	13668.5	72928.9	24086.3	5417.2	462279.4
サワラ類	9565.5	1415.2	2776.7	6964.0	3016.2	2760.1	85118.5	93722.7	24074.9	28215.3	29789.2	6400.2	293818.5
スルメイカ	40676.0	78280.8	61889.3	6853.8	17048.4	5897.0	373.8	0.0	0.0	211.4	734.1	80757.0	292721.6
カタクチイワシ	4359.7	17987.5	3849.5	49.0	1747.0	20070.9	50494.0	15961.0	875.0	11510.5	0.0	0.0	126904.1
ホソトビウオ	0.0	0.0	0.0	0.0	11091.8	41733.2	42608.5	2389.1	903.9	0.0	0.0	0.0	98726.5
ケンサキイカ	845.5	318.7	569.5	3911.5	8112.4	17992.0	9493.1	3111.4	4183.6	12070.5	5416.5	7432.3	73457.1
マダイ	929.5	477.6	1557.6	6235.2	5845.0	12331.8	8521.1	1668.6	499.8	7562.3	17102.2	2483.8	65214.5
カワハギ類	1869.6	190.7	245.7	1340.6	2379.8	3498.1	3553.6	1407.5	2330.4	10532.6	14184.5	23388.0	64921.1
アオリイカ	1187.1	288.7	110.3	774.3	22199.8	3650.4	691.8	118.3	4366.4	6054.0	14723.4	8367.2	62531.7
スズキ	4476.9	2218.9	3934.3	8365.3	6563.9	5267.9	5725.9	2691.1	1750.1	3356.8	6364.9	5427.5	56143.5
シイラ	26.0	0.7				10.0	266.1	1701.9	9158.0	36556.4	1119.3	2736.0	51574.4
サバ類	2021.8	211.7	418.8	4143.7	1367.2	10457.2	6835.8	9363.5	2697.7	1593.1	1649.2	7578.9	48338.6
ヤリイカ	6933.1	28106.6	10983.4	496.1	29.0					28.0		134.7	46711.0
ツクシトビウオ	0.5				6377.8	19272.3	10724.0	948.5	30.5	12.0			37365.6
イサキ	77.7		30.9	658.0	2771.5	9477.5	11918.3	2945.8	1265.6	2649.9	1503.9	310.5	33609.6
ウルメイワシ	8.0	150.0	117.0	288.2	1180.0	6231.4	8927.4	14490.0	421.4	637.1	100.0		32550.5
カマス	1405.6	19.2		60.0	2552.1	1869.0	7726.2	1996.2	2314.0	6517.1	4432.7	1173.5	30065.6
ソウダガツオ	304.7		5.8				6937.0	2360.8	277.0	4289.1	77.9	13113.9	27366.2
ヒラマサ	1302.7	99.8	732.0	3523.2	2728.3	2300.9	2121.1	3010.9	232.2	2792.6	3493.7	919.4	23256.8
カジキ類						115.0	780.0	4406.5	14378.5	2780.0	88.0		22548.0
ヒラメ	720.8	555.3	1136.7	1924.0	1645.2	1250.2	1158.5	628.6	71.5	244.5	766.6	657.1	10759.0
その他のフグ類	586.9	451.5	2186.3	2138.7	1869.5	982.1	339.4	148.0	133.2	62.0	61.2	29.0	8987.8
クロマゴロ	720.0	821.9	227.8	27.3	3185.9	1230.9	537.0	10.0		165.8	10.0	571.6	7508.2
サンマ	93.5	68.2	185.6	12.0	446.2	26.2					3959.5	2180.8	6972.0
ソデイカ	485.7	45.4				5.5	34.4	27.8	36.3	328.0	1436.3	3584.1	5983.5
マトウダイ	798.9	126.1	288.7	370.2	412.7	331.8	234.9		101.0	94.0	438.8	955.4	4152.5
マイワシ	368.6	1124.2	109.8	289.6		253.0	1494.4	137.5		242.0			4019.1
コウイカ類	7.0	472.0	1056.3	1415.4	726.0	270.0	24.0				9.0		3979.7
カンパチ	5.0				20.6	47.6	21.7	263.8	716.7	2526.4	141.1		3742.9
エイ類	20.0	18.0	15.0	320.0	411.0	155.7	200.0	331.7	994.7	495.0	277.0	12.0	3250.1
サバフグ類					166.2	82.7	190.2	116.8	1039.7	1023.9	409.1	12.0	3040.6
その他のイカ類	93.0	56.0	111.0	726.9	857.3	327.0	202.1	59.1	52.8	97.0	86.0	87.0	2755.2
チダイ		1.8	89.0	1442.8	469.4	295.8	100.5		41.0	22.0	25.0		2487.3
ホウボウ	161.9	236.2	556.9	689.9	139.1	80.0	12.0		7.0	29.2	88.0	21.4	2021.6
その他のマゴロ類						49.4	166.8	717.6	440.3	178.4			1552.5
その他のカレイ類	123.3	475.3	638.1	63.8	19.0	43.7	7.5	7.0	1.4				1379.1
カナガシラ	33.5	289.7	431.5	177.3	75.0	5.0							1012.0
メダイ	156.2	76.3	202.7	7.0							33.9	477.2	953.3
サメ類	55.0	24.0	10.0	97.0	121.0	107.0	22.0	5.0	85.0	180.0	83.1	17.0	806.1
イボダイ	58.8	15.0	18.0		5.0	5.0			10.5	274.7	304.3		691.3
サヨリ		59.0		463.7	10.0	5.0		2.8					540.5
タチウオ	45.5	26.4	0.4	10.4	34.0	30.3	6.0	14.0	36.0	170.0	132.8		505.8
マフグ	107.0	23.0	39.0	33.0	80.0	137.5		25.0		12.0	7.0	3.0	466.5
ミズダコ	10.0	168.4	71.2	68.0									317.6
キス類	59.0	7.0			0.6	106.2	108.5	12.0	7.0		7.0		307.3
アナゴ・ハモ類	112.1	117.6	6.2	11.2	12.1	16.1	17.0				10.0	1.2	303.5
マダラ	10.3	152.7	117.4	7.0									287.4
カサゴ・メバル類	20.7	16.3	64.8	66.1	28.7	59.0	0.6	17.5	0.4	0.2		1.0	275.3
オニオコゼ	6.0	9.8	18.8	53.1	58.0	16.4	19.2	7.9		1.6	9.9	6.1	206.8
その他のハタ類	3.0		5.0	3.0	8.0	21.0	7.0	10.1	7.8	70.7	64.2		199.8
キダイ	21.0			23.8	1.5	77.0	21.0	19.0	7.0	14.7	5.0		190.0
ビンナガ								42.3	95.5	35.1			172.9
キジハタ				0.3	5.9	4.9	23.2	8.5	10.3	42.9	54.8	1.8	152.6
ハガツオ						21.2	97.7		24.4	5.0			148.3
アンコウ	27.0	61.9	14.0	22.0	7.0							10.0	141.9
キハダ									35.1	51.0		33.3	119.4
その他のタコ類	12.5	30.0	3.5	35.2	16.4	8.9	4.9						111.4
トラフグ	7.0		8.3	55.3	20.3				7.0		7.0		104.9
マダコ	12.0	4.0	14.0	25.0	19.9	18.5		1.2			5.0		99.6
エソ類				42.0		7.0	42.0				8.0		99.0
カイワリ							7.0			10.0	25.0	10.3	52.3
イトヨリダイ										45.0			45.0
ソウハチ		23.5	11.0										34.5
シラス											19.0		19.0
メイトガレイ				3.0	0.2	2.3	2.9			0.2			8.6
アカムツ							5.0						5.0
ムシガレイ		3.0											3.0
クラカケトラギス					1.8								1.8
アマダイ	0.7			0.3									1.0
その他のカニ類							0.2						0.2
マコガレイ													0.0
その他のエビ類													0.0
ニギス													0.0
ヤナギムシガレイ													0.0
クルマエビ													0.0
アカガレイ													0.0

付表8 2008年月別魚種別漁獲量(単位: kg)

年月	2008/01	2008/02	2008/03	2008/04	2008/05	2008/06	2008/07	2008/08	2008/09	2008/10	2008/11	2008/12	合 計
マアジ	31161.0	5448.0	5188.9	31095.3	36440.0	214455.9	76828.9	9861.2	42934.2	135170.3	46635.7	50235.8	685455.2
ブリ	5991.8	2107.9	10901.9	37043.8	228064.2	39780.0	47079.8	38968.1	61370.0	72436.3	65710.8	24100.9	633555.5
サバ類	5091.0	3165.2	2803.3	7138.8	9102.2	4864.8	56897.8	2115.0	37198.5	118252.9	2187.4	3545.6	252362.5
サワラ類	12123.9	1494.7	3649.4	22655.2	10706.0	3322.6	24391.9	12584.5	14923.0	27607.2	20294.0	16829.9	170582.3
スルメイカ	25682.1	79025.3	16074.9	843.1	687.4	3700.3	463.6	0.0	18.0	52.6	148.1	13907.7	140603.1
ホソトビウオ	0.0	0.0	1.9	0.0	7131.1	46308.9	38309.4	2611.5	0.0	3.9	0.0	0.0	94366.7
シイラ	55.8					5.0	382.4	8642.1	39297.7	28556.2	4086.7	1726.8	82752.7
スズキ	8383.8	2181.8	4659.2	8974.5	5302.0	4724.8	4309.4	850.7	867.9	1272.6	5507.7	29041.9	76076.3
ヤリイカ	11177.4	36739.6	13910.6	4107.3	245.0							74.6	66254.5
カマス	1269.7	26.0	14.0		1494.6	2997.2	5663.3	4084.7	16667.0	10103.9	15367.5	6540.8	64228.7
カタクチイワシ	0.0	0.0	0.0	225.0	3.0	9245.3	25684.5	13239.5	85.5	0.0	0.0	0.0	48482.8
ツクシトビウオ				0.2	3826.0	23964.8	18715.5	547.0	79.0	56.8			47189.3
マダイ	2433.1	1769.0	4512.8	14521.5	6475.5	4447.0	5215.1	715.1	390.1	755.7	957.6	916.5	43109.0
ソウダガツオ	737.1	267.8	16.8		0.5		83.2	6163.8	4532.7	8675.1	610.4	20509.7	41597.1
カワハギ類	8099.3	1146.2	431.6	2701.3	2401.6	3791.3	3096.0	1235.5	2606.5	3816.5	4372.2	6329.1	40027.1
アオリイカ	2063.6	830.6	23.0	1334.1	13667.2	779.9	392.0	120.8	827.7	2780.5	7707.2	5965.9	36492.5
ケンサキイカ	3675.8	1763.7	1472.0	1883.6	1533.0	1404.5	1967.8	750.9	4946.4	4882.3	3440.2	8009.0	35729.2
イサキ	43.0	16.0	13.1	501.6	2415.5	4650.1	9216.0	1296.2	5247.1	8528.5	1305.5	714.3	33946.9
クロマグロ	5751.7	5335.9	843.7	621.9	3709.3	2295.6	2230.8	131.6	23.5	1220.4	3428.6	229.9	25822.9
サンマ	4280.4	4494.3	104.0	15.0	195.2	51.3				1627.4	4870.2	6070.3	21708.1
ヒラマサ	1228.4	271.4	476.0	2878.6	2959.9	1163.2	1787.2	4175.2	934.0	1443.9	700.4	1102.3	19120.5
カンパチ					5.0	6.0	45.4	3473.8	4601.4	5422.1	326.3	25.1	13905.1
ウルメイワシ							1426.0	2659.0	6815.7	2383.4	300.5		13584.6
その他のフグ類	349.8	1025.8	2890.8	3131.7	1445.6	1452.6	82.0	122.0	460.0	159.7	171.4	91.7	11383.1
ヒラメ	924.4	595.9	1072.4	1926.2	1219.4	865.1	615.2	207.4	63.2	213.1	426.4	812.9	8941.6
コウイカ類	156.0	603.0	882.8	1780.3	3590.5	698.9	5.0	7.0	12.0			36.0	7771.5
カジキ類							673.0	2367.0	1645.4	1010.0	79.0		5774.4
サバフグ類	4.0	7.0			105.0	83.0		746.0	2681.0	1679.1	400.1	37.0	5742.2
チダイ	336.3	184.5	34.1	1599.6	1439.1	699.1	54.7		10.5	5.0			4362.9
エイ類	33.0	30.5	68.8	351.0	207.0	93.0	170.4	839.3	810.0	618.0	207.3	54.5	3482.8
ソデイカ	600.3	113.6					15.0	29.3	83.1	225.1	1124.9	1290.2	3481.5
その他のマグロ類						41.7	1354.5	1454.6	204.4	212.6			3267.8
メダイ	686.0	223.9	98.1	7.0	14.0						504.4	1326.3	2859.7
その他のイカ類	62.0	62.0	128.0	511.5	177.0	858.7	93.7	54.0	103.8	169.0	102.0	102.0	2423.7
マトウダイ	706.4	284.4	36.0	99.2	94.1	160.8	7.0		5.0	14.0	56.7	253.5	1717.1
ミズダコ	28.0	340.4	599.4	419.0	74.6								1461.4
ハガツオ	1.1					4.4		478.5	461.5	195.8	3.2		1144.5
カナガシラ	377.0	323.0	62.0	312.1	38.0							21.0	1133.1
その他のカレイ類	172.7	157.7	526.7	124.1	6.9	14.9	19.0	18.5	7.0	7.0		0.3	1054.8
ホウボウ	145.2	73.6	123.2	269.4	100.5	28.7	1.0		7.0		25.1	43.9	817.6
サメ類	45.0	30.0	30.0	23.0	84.0	124.0	64.0	32.0	137.0	95.0	37.0	95.0	796.0
キハダ				10.7			6.4	43.1		549.5	17.0		626.7
マフグ	56.5	106.8	100.0	80.5	66.5	162.3		6.0	21.0		7.0	12.0	618.6
マイワシ				75.0			56.0	141.5	272.5	50.0			595.0
カイワリ										5.0	131.0	405.0	541.0
カサゴ・メバル類	22.3	27.5	236.6	121.0	11.2	73.5	31.4	8.0	0.2			2.0	533.7
アナゴ・ハモ類	55.5	174.4	37.2	27.3	27.3	16.0	29.8	0.6	10.0	19.6	17.0	12.8	427.5
オニオコゼ	5.8	15.6	36.1	87.9	61.8	15.7	14.0	12.8	0.6	1.2	2.1	19.5	273.1
アンコウ	104.8	51.4	27.0	26.7	27.0							9.5	246.4
キジハタ		0.5	0.3	0.6	3.7	11.8	19.2	112.0	32.4	28.2	13.2	6.4	228.3
キス類	62.0	17.7	0.4			21.0	35.0				5.0	85.0	226.1
サヨリ	168.5	0.9	40.5	7.0									216.9
その他のハタ類	4.7	3.9			18.7	7.5	5.2	5.6		32.1	25.6	87.7	191.0
その他のタコ類			64.0	67.5	10.9	11.3	7.2					4.5	165.4
マダコ		16.0		8.0	19.0	18.0	14.2	16.8	20.5	10.0	21.9	11.0	155.4
マダラ	3.4	85.9	60.1	3.8									153.2
タチウオ	33.2	7.5	0.9	0.9	7.8	35.8	10.0	14.0	17.0			0.5	127.6
トラフグ	7.0	2.5	10.0	34.6	18.8						16.3	2.5	91.7
エソ類				7.0	21.0	15.0	15.0		15.0	9.0			82.0
キダイ	14.0	17.0					8.0		5.0		10.0	14.0	68.0
ビンナガ		7.8								29.4	7.5		44.7
イボダイ	14.0							5.0	0.6	5.0	5.0		29.6
シラス										21.9			21.9
ソウハチ			5.0	3.5									8.5
その他のエビ類						0.1			6.6				6.7
イトヨリダイ							0.7			5.0			5.7
アカムツ					5.0								5.0
クルマエビ					0.2	0.2							0.4
マコガレイ													0.0
メイタガレイ													0.0
ムシガレイ													0.0
ニギス													0.0
アマダイ													0.0
その他のカニ類													0.0
ヤナギムシガレイ													0.0
クラカケトラギス													0.0

付表9 2009年月別魚種別漁獲量（単位：kg）

年月	2009/01	2009/02	2009/03	2009/04	2009/05	2009/06	2009/07	2009/08	2009/09	2009/10	2009/11	2009/12	合 計
マアジ	20198.4	10966.9	5954.3	37099.6	121713.1	226208.0	81085.1	75753.6	20801.6	25788.9	29088.1	21681.7	676339.3
ブリ	36375.6	2035.4	1442.6	28153.3	44323.7	12476.6	13527.2	56658.3	45150.1	62842.6	50669.8	7773.0	361428.2
サバ類	1181.2	22381.9	18994.2	5660.5	9524.0	23629.6	21198.2	32805.5	4682.2	64539.9	41476.2	13257.9	259331.3
サワラ類	4640.0	3102.9	9452.8	12402.8	2241.6	3434.6	25405.9	25040.3	14947.1	21312.7	13594.9	11704.0	147279.6
カワハギ類	3767.9	2178.7	1590.9	1401.1	568.4	3183.5	5258.4	4695.0	11900.1	15054.5	20664.0	52546.2	122808.7
ホソトビウオ	0.0	0.0	0.0	0.0	3060.4	43950.1	39211.6	2303.0	384.0	25.0	0.0	0.0	88934.1
ケンサキイカ	1134.6	141.6	159.7	1075.6	3258.7	17740.9	15125.4	9992.3	7896.3	8257.2	4286.5	4977.5	74046.3
スルメイカ	3535.7	20802.6	29756.9	2895.3	6779.2	6998.7	1003.5	31.0	5.0	268.3	54.5	275.8	72406.5
スズキ	8109.1	6120.8	3606.4	10254.1	6760.3	6374.7	3493.3	2602.2	1205.9	3822.6	6832.1	12994.7	72176.1
ツクシトビウオ				12.7	4819.7	26654.8	15656.1	429.9	40.6	82.9			47696.6
カタクチイワシ	0.0	993.0	2111.5	3187.3	4532.5	15686.8	16831.0	3503.9	0.0	125.0	0.0	0.0	46971.0
マダイ	1134.2	756.9	2228.9	5657.4	3808.0	8412.8	2792.5	1194.5	3632.9	5470.5	2500.9	1079.8	38669.3
カマス	2167.2	856.1	251.0	182.0	5866.8	5551.9	2385.8	3898.6	4577.4	7874.7	4532.5	314.2	38458.2
ヒラマサ	729.1	221.4	512.2	5211.2	3892.4	9110.4	4214.0	4767.3	2771.8	2568.2	1827.0	1121.8	36946.8
イサキ	155.2	10.0	107.5	463.4	435.6	4293.1	9461.0	4306.6	4159.7	6429.7	1402.4	1303.1	32527.3
クロマグロ	15791.1	5328.1	493.3	627.1	2168.7	5116.9	673.8	11.3	22.0	53.8	7.5	53.8	30347.4
サンマ	2083.4	2110.7	346.3	10.0	5.8	26.0				5.0	18523.3	6435.2	29545.7
アオリイカ	1227.7	281.5	29.2	1724.8	5990.2	4631.3	240.4		54.1	1749.4	2843.0	3703.4	22475.0
ヤリイカ	2436.7	6856.9	9165.5	1879.7	5.0	25.0						216.5	20585.3
マイワシ	28.0	7.0	117.5	97.0		2545.0	16678.8	336.4		5.0			19814.7
シイラ	80.5					12.3	245.9	2462.7	3946.6	3052.3	160.4	529.9	10490.6
ソウダガツオ	615.4	39.1	10.0			10.0	61.7	311.9	165.4	15.0	608.2	7409.8	9246.5
ヒラメ	703.5	630.1	1664.8	1709.9	953.5	708.6	500.7	236.8	62.9	338.0	351.4	729.0	8589.2
ウルメイワシ					14.0	2242.0	5107.9	1057.3	5.0	22.0			8448.2
その他のマグロ類					16.7	276.3	3256.4	4117.8	125.1	47.9			7840.2
その他のフグ類	186.2	730.0	1496.2	1320.0	1883.1	1358.5	45.0	60.0	40.0	55.0	5.0	42.0	7221.0
イボダイ									316.9	1775.2	2613.4	768.0	5473.5
コウイカ類	68.9	785.2	1165.0	1906.1	1022.4	200.7				25.0			5173.3
カジキ類						331.0	1470.2	1064.0	1811.5	368.0	10.0		5054.7
エイ類	210.0	224.8	136.0	868.0	451.0	180.4	84.0	278.0	237.5	820.3	221.0	7.0	3718.0
その他のイカ類	65.0	194.6	188.0	707.0	1241.7	692.3	161.0	88.0	75.0	98.0	37.0	78.5	3626.1
ソデイカ	260.5	9.4					52.7	292.6	177.6	468.1	886.3	1278.7	3425.9
カンパチ				5.0	4.2	103.6	482.5	363.0	715.5	1382.9	56.9	4.7	3118.3
マトウダイ	386.8	123.9	116.6	78.5	253.6	303.0	22.0	19.0	10.0	15.0	102.0	1113.6	2544.0
チダイ	55.0	35.5	12.0	1078.5	753.5	195.8		5.0	24.0	65.6	25.9		2250.8
メダイ	955.2	93.9	104.3				5.0				190.9	488.0	1837.3
その他のカレイ類	140.0	504.3	334.9	44.2	19.0								1042.4
ミズダコ	61.5	440.2	448.7	54.0									1004.4
サメ類	20.0	54.0	15.0	102.0	56.0	123.0	17.0	50.0	39.0	188.0	86.0	32.0	782.0
その他のハタ類	18.2			6.8		6.5	54.6	40.2	95.9	319.2	101.4	15.9	658.7
カナガシラ	60.0	338.5	90.0	104.0	10.2	10.0		10.0			10.0	14.0	646.7
ホウボウ	17.7	106.3	46.9	123.5	14.4	14.0	21.0	0.6	26.0	56.6	56.6	28.0	511.6
マダコ	33.6	40.1	90.2	55.0	66.8	62.2	28.0	9.1	10.9	21.0	17.0	7.2	441.1
カサゴ・メバル類	15.2	74.9	152.1	106.1	30.1	12.8	5.3						396.5
サバフグ類				5.0	45.0	66.0	7.0	127.0	19.0	29.5	14.0		312.5
マフグ	24.7	27.0	99.2	100.3	18.0	41.0							310.2
その他のタコ類	25.8	32.7	102.9	45.5	26.1	10.3	4.5	4.0	4.7				256.5
サヨリ			36.5	179.4	13.0								228.9
アナゴ・ハモ類	75.8	88.5	34.2	1.9	7.5	3.2				7.9	0.9	6.3	226.2
マダラ	24.2	110.3	51.7										186.2
キス類	78.5	87.0			7.0	7.0			5.0				184.5
アンコウ	47.1	22.0	20.2	38.0									127.3
キジハタ				3.8	4.1	17.9	13.0	18.2	5.0	32.3	32.4		126.7
オニオコゼ	5.8	18.3	26.3	36.9	18.4	5.0	8.9	2.7	0.6	0.3	0.3	0.3	123.8
トラフグ	3.2	0.4	1.7	59.9	33.7	2.7	1.7	2.4		7.0			112.7
キハダ									111.9				111.9
キダイ		21.0		3.5		50.0	15.0	12.9	7.0				109.4
ソウハチ		6.0	75.7	8.0									89.7
ビンナガ									63.3	25.0			88.3
タチウオ	0.5	13.0	5.9		13.0	5.0							37.4
エソ類						14.0							14.0
ハガツオ	7.8												7.8
カイワリ										5.0			5.0
アマダイ					3.0								3.0
その他のカニ類				0.6									0.6
シラス													0.0
マコガレイ													0.0
アカムツ													0.0
その他のエビ類													0.0
イトヨリダイ													0.0
メイトガレイ													0.0
ムシガレイ													0.0
ニギス													0.0
ヤナギムシガレイ													0.0
クルマエビ													0.0
クラカケトラギス													0.0
アカガレイ													0.0

付表10 2010年月別魚種別漁獲量（単位：kg）

年月	2010/01	2010/02	2010/03	2010/04	2010/05	2010/06	2010/07	2010/08	2010/09	2010/10	2010/11	2010/12	合 計
ブリ	19918.7	19949.8	10726.2	44690.1	185390.3	70728.2	14604.1	7652.5	10793.8	89318.8	114347.1	30870.3	618989.9
マアジ	20193.7	4202.2	4440.2	26433.3	49331.2	69253.9	45561.6	5049.7	7186.9	20588.4	31535.4	12053.1	295829.7
サワラ類	5329.8	5204.9	3966.7	16243.5	15981.1	8271.5	15095.3	6846.7	32210.2	35454.7	25876.3	10841.1	181321.8
サバ類	6027.3	25800.7	5206.0	14165.7	3381.3	2540.4	12360.3	73.0	123.0	12488.2	7336.6	2079.6	91582.1
カワハギ類	24630.5	1156.3	1258.7	4307.7	2442.0	4132.6	5308.3	2524.5	6495.9	16064.2	15586.5	3070.3	86977.5
スズキ	5271.8	1808.3	2366.7	13251.6	6696.1	3465.8	4989.7	1171.2	2708.6	1307.0	6943.8	23691.4	73672.0
ケンサキイカ	583.7	158.0	443.6	1080.4	588.5	4902.1	12945.0	3860.8	6220.1	11240.9	10169.3	11561.9	63754.3
カマス	54.0	33.2	12.2	5.0	356.7	1812.0	198.0	454.8	21001.2	13824.3	14773.9	11078.1	63603.4
マダイ	2266.1	426.2	4402.2	23539.2	6422.4	3624.6	4725.5	1210.7	257.1	2306.8	1888.0	3249.4	54318.2
アオリイカ	1649.6	396.5	1.7	62.4	8812.2	609.0	36.9	36.4	2019.1	6379.1	15653.5	3218.1	38874.5
シイラ	15.0					7.7	22.9	121.5	3448.3	30170.1	2231.5	116.2	36133.2
クロマグロ	5552.9	644.1	6726.1	17892.6	444.6	1911.5	652.3	16.0	303.0	806.0	21.4	477.4	35447.9
ホソトビウオ	0.0	0.0	0.0	0.0	389.6	13523.1	11410.8	3247.8	3484.3	55.3	0.0	0.0	32110.9
スルメイカ	1616.8	11274.5	5137.8	497.6	237.6	695.0	99.1	0.0	0.0	1.8	349.8	10370.3	30280.3
ソウダガツオ	3845.0		0.8	5.0	20.0	10.0	41.8	55.5	121.7	1294.0	1122.6	17268.5	23784.9
ヒラマサ	561.9	19.4	44.3	3409.8	8096.7	2178.3	1821.6	999.1	684.6	185.4	498.9	428.1	18928.1
イサキ	148.5		5.0	294.4	520.9	1738.4	7955.4	1108.1	943.7	1555.1	1332.7	2002.2	17604.4
ツクシトビウオ					1705.1	6560.6	6661.8	490.3	61.0	48.9			15527.6
カジキ類						196.0	391.0	2626.0	6976.0	4134.0			14323.0
カタクチイワシ	0.0	2959.0	323.9	150.0	0.0	1318.0	6544.0	950.0	1500.0	0.0	0.0	0.0	13744.9
その他のマグロ類					4.0	371.1	455.7	6717.0	4061.9	140.0	7.0		11756.7
ヤリイカ	6026.6	3146.1	1765.9	495.1	10.2							82.1	11526.0
カンパチ					3.5	2.5	5.6	130.2	3511.9	6529.4	1329.0		11512.1
ヒラメ	1130.0	575.6	1217.5	2195.4	1646.7	1226.2	611.9	236.8	82.6	252.7	577.9	895.8	10649.1
その他のフグ類	272.3	403.7	1721.5	2080.0	1114.6	909.1	74.0	42.0	472.0	567.0	294.0	67.7	8017.9
サンマ	1504.8	2657.8	11.3								914.6	2741.5	7830.0
チダイ	113.0	158.0	14.7	2379.3	2703.4	845.1	595.8	5.0		5.0			6819.3
ソデイカ	141.9								24.5	208.2	3353.1	2789.9	6517.6
コウイカ類	92.0	594.0	1192.3	2837.8	1167.6	350.0	12.0		5.0	17.0		7.0	6274.7
メダイ	3320.5	1038.2	43.8	4.1	4.5						58.6	333.4	4803.1
エイ類	88.9	45.0	56.0	444.0	691.0	235.0	81.0	295.0	1152.2	1246.5	345.0	45.0	4724.6
マトウダイ	771.5	173.3	158.6	157.6	418.8	621.0	44.0			14.0	462.7	456.4	3277.9
ウルメイワシ		37.8	8.7				1213.0	569.0		349.0	103.5	625.0	2906.0
サバフグ類					160.0	357.0		89.0	414.5	636.0	303.8	26.0	1986.3
キハダ							34.6		243.7	1078.8	444.8		1801.9
その他のカレイ類	160.4	250.0	785.5	290.7	18.6		10.0	1.0	14.0		7.7	17.0	1554.9
サメ類	135.0	5.0	170.0	74.0	314.0	154.0	95.0	26.0	195.0	115.0	107.0	45.0	1435.0
ホウボウ	97.0	78.0	216.3	340.8	154.8	206.5	24.5			24.5	70.8	40.0	1253.2
その他のイカ類	17.0	29.0	51.0	262.0	234.0	200.5	67.0	4.0	59.0	99.0	119.0	65.0	1206.5
カナガシラ	97.0	130.3	546.2	240.0	17.0							5.0	1035.5
マイワシ			11.3			475.0	492.0						978.3
サヨリ		0.3	255.4	296.6		17.0							569.3
イボダイ	444.0	35.0		14.0							21.0	14.0	528.0
その他のハタ類	3.6		2.0	5.0	5.0	24.9	131.3	68.3	13.5	92.2	138.3	2.2	486.3
マフグ	65.0	61.0	149.2	58.0	39.3	28.0						7.0	407.5
マダコ	40.0	39.1	33.0	39.2	73.6	33.8	76.8	5.0		12.0		21.2	373.7
アナゴ・ハモ類	58.0	85.4	53.9	60.2	5.2	20.1	21.4		0.3	8.0	9.4	9.0	330.9
カサゴ・メバル類	51.9	16.1	70.5	108.9	24.5	11.5	0.6	0.8		7.0		6.1	297.9
タチウオ	43.9	10.0	12.0		3.1		3.0	33.0	58.0	38.0	50.0	34.4	285.4
シラス					8.0	250.0				11.0	15.0		284.0
マダラ	9.5	100.0	132.3	24.0									265.8
オニオコゼ	1.0	15.8	18.0	101.9	48.5	18.8	2.4	9.2	8.0	14.3	0.3	12.6	250.8
ミズダコ	21.0	100.5	73.0	46.9	5.0		3.0						249.4
アンコウ	45.1	37.9	20.5	68.0	10.0							14.0	195.5
キダイ	26.0						10.8		20.0	16.0	84.3	25.2	182.3
ソウハチ		33.0	91.0	31.3									155.3
トラフグ		4.3	4.9	91.2	24.8	8.3							133.5
キジハタ					0.5	0.6	8.2	14.9	5.8	33.5	59.3	6.7	129.5
キス類	22.1	34.0	9.4		7.0		5.0			3.0		26.0	106.5
その他のタコ類		7.3	41.0	8.8	11.9	22.2	8.9					5.4	105.5
エソ類					28.0	52.0		7.0					87.0
その他のエビ類										14.0	42.0		56.0
ビンナガ								22.6	13.5				36.1
ニギス									7.0				21.0
カイワリ										14.0	5.0		19.0
アカムツ							7.0						7.0
アマダイ				7.0									7.0
イトヨリダイ									5.0				5.0
ハガツオ													0.0
マコガレイ													0.0
メイトガレイ													0.0
ムシガレイ													0.0
その他のカニ類													0.0
ヤナギムシガレイ													0.0
クルマエビ													0.0
クラカケトラギス													0.0
アカガレイ													0.0

松江市沿岸海域の魚類

越川 敏樹

はじめに

島根県東部に位置する松江市の海域は、美保関町から魚瀬町までの島根半島側の日本海と美保湾及び中海を含む。そこに生息する魚類の記録は、島根県水産技術センターによる水産上有用魚種の記載と美保湾から中海における京都大学によるまとめた調査報告がある。

今回は、上の報告を基盤に、筆者及び島根県立宍道湖自然館の職員が確認した種を加えて当該区域の生息魚類のリストを作成した。結果、今回のリストでは120科316種を記載した。

リストの作成にあたって

文献は京都大学による中海干拓・淡水化事業に伴う魚族生態調査報告を美保湾と中海における生息魚として、島根県水産試験場（現島根県水産技術センター）による「島根の魚」と島根県漁獲情報を当該全域の生息魚の基盤としてリストを作成した。後者の場合、当書の末尾に掲載されている魚種別の地方名一覧から島根県東部の方言のあるものを生息確認種として取り上げた。

筆者等の確認は、美保湾底曳網（2002・2010）、七類大敷網（2002、2011）※十六島大敷網（2007・2008）、中海ます網（1988～2010）によって確認できた種を加えた。さらに、釣り・磯採集・ゴビウスへの持ち込みなどによる魚を追加した。なお、汽水の中海における生息確認魚種については、今回の趣旨から海産魚を取り出し、さらに美保湾及び境水道にも分布する汽水性魚類と一部の高塩性の回遊性淡水魚を加えた。

当該リストは、基本的に阿部（1989）の分類に従って作成し、部分的に他の研究者の分類方法も取り入れた。

補 足

本報の生息魚リストは、全体的な傾向として、漁業者の漁獲内容物由来のものが大半を占めることから、多くの場合、魚網の網目サイズの関係上、幼魚や小型魚は極めて少ない。また、水際付近の浅所の磯に生息する種や流れ藻に潜む稚幼魚は漁獲されにくい。同時に今回の漁獲方法では、区域内の深海を主な生息域とするタイプも偶発的な漁獲によるものに限られている。

したがって、上の理由から種に偏りがあることは否めない。

今後、各方面からの漁獲情報等広範な協力によって、生息種の充足を行って、より充実した生息魚リストの作成が望まれる。

※隣接海域としてとり上げる。

参考文献

- 阿倍宗明 1989 原色魚類検索図鑑 I～III 北隆館
島根県水産試験場編著 2003 島根の魚 山陰中央新報社
宮地伝三郎他 1962 中海干拓・淡水化事業に伴う魚族生態調査報告
中坊徹次編 1993 日本産 魚類検索—全種の同定— 東海大学出版会
岡村 収・尼岡邦夫編 2005 山溪カラー名鑑 日本の海水魚 山と溪谷社
島根県漁獲管理情報処理システムより抽出 2001～2010 恵曇町、島根町、平田町の小型底曳網の漁獲量
宍道湖自然館資料受贈票 2007～2010 島根県立宍道湖自然館

松江市沿岸海域の魚類（隣接海域を含む）

科	種	学 名	生 息 状 況				
			* 1	* 2	* 3	* 4	* 5
			半島東部	美保湾・中海	半島隣接	宮地報告	県水技
メクラウナギ	スタウナギ	<i>Eptatretus burgeri</i>	○				○
ネコザメ	ネコザメ	<i>Heterodontus japonicus</i>					○
	シマネコザメ	<i>Heterodontus zebura</i>					○
トラザメ	トラザメ	<i>Scyliorhinus torazoma</i>					○
オオセ	オオセ	<i>Orectolobus japonicus</i>					○
シュモクザメ	シュモクザメ（シロ）	<i>Sphyrna zygaena</i>			○	○	○
ネズニザメ	アオザメ	<i>Isurus glaucus</i>					○
ウバザメ	ウバザメ	<i>Cetorhinus maximus</i>					○
オナガザメ	オナガザメ	<i>Alopias vulpinus</i>					○
ドチザメ	ホシザメ	<i>Mustelus manazo</i>		○		○	○
	シロザメ	<i>Mustelus griseus</i>					○
	アンコウザメ	<i>Rhizoprionodon oligolinx</i>					○
	ドチザメ	<i>Triakis scyllia</i>				○	○
	ヨシキリザメ	<i>Prionace glaucus</i>					○
	アブラツノザメ	<i>Squalus acanthias</i>					○
カスザメ	カスザメ	<i>Squantina japonica</i>			○		○
シビレエイ	シビレエイ	<i>Narke japonica</i>	○			○	○
サカタザメ	サカタザメ	<i>Rhinobatos schlegeli</i>					○
ガンギエイ	テングカスベ	<i>Raja tengu</i>					○
	ガンギエイ	<i>Raja kenoei</i>				○	
アカエイ	アカエイ	<i>Dasyatis akajei</i>	○	○	○	○	○
	ズグエイ	<i>Dasyatis zugei</i>				○	
	ヒラタエイ	<i>Urolophus aurantiacus</i>		○			
	ツバクロエイ	<i>Gymnura japonica</i>		○			○
イトマキエイ	イトマキエイ	<i>Mobula japonica</i>	○	○	○		
イセゴイ	カライワシ	<i>Elops hawaiiensis</i>		○			
コノシロ	コノシロ	<i>Konosirus punctatus</i>	○	○		○	○
ウルメイワシ	ウルメイワシ	<i>Etrumeus micropus</i>	○	○		○	○
	キビナゴ	<i>Spratelloides gracilis</i>	○	○			
ニシン	マイワシ	<i>Sardinops melanostictus</i>	○	○	○	○	○
	サッパ	<i>Sardinella zunasi</i>		○		○	
カタクチイワシ	カタクチイワシ	<i>Engraulis japonicus</i>	○	○	○	○	○
サケ	サケ	<i>Oncorhynchus keta</i>		○	○		
	サクラマス	<i>Oncorhynchus masou</i>		○			
	ギンザケ	<i>Oncorhynchus kisutch</i>		○			
アユ	アユ	<i>Plecoglossus altivelis</i>		○		○	

松江市沿岸海域の魚類（隣接海域を含む）

科	種	学 名	生 息 状 況				
			* 1	* 2	* 3	* 4	* 5
			半島東部	美保湾・中海	半島隣接	宮地報告	県水技
キュウリウオ	ワカサギ	<i>Hypomesus nipponensis</i>	○	○		○	
シラウオ	シラウオ	<i>Salangichthys microdon</i>		○		○	
ニギス	ニギス	<i>Glossanodon semifasciatus</i>			○		○
ヒメ	ヒメ	<i>Aulopus japonicus</i>					○
エソ	オキエソ	<i>Trachinocephalus myops</i>		○			
	マエソ	<i>Saurida undosquamis</i>	○	○		○	○
	トカゲエソ	<i>Saurida elonga</i>		○			
コイ	ウグイ	<i>Tribolodon hakonensis</i>		○		○	
ゴンズイ	ゴンズイ	<i>Plotosus lineatus</i>		○		○	
ウナギ	ウナギ	<i>Anguilla japonica</i>	○	○	○	○	
アナゴ	クロアナゴ	<i>Conger japonicus</i>				○	○
	マアナゴ	<i>Conger myriaster</i>			○	○	○
	ギンアナゴ	<i>Gnathophis nystromi nystromi</i>				○	○
ハモ	ハモ	<i>Muraenesox cinereus</i>				○	○
ウミヘビ	ミミズアナゴ	<i>Muraenichthys gymnotus</i>				○	
	ホタテウミヘビ	<i>Pisodonophis zophistius</i>		○			
	ダイナンウミヘビ	<i>Ophisurus macrorhynchus</i>				○	
	ヒレアナゴ	<i>Echelus uropterus</i>					○
ウツボ	ウツボ	<i>Gymnothorax kidako</i>					○
ダツ	ダツ	<i>Ablennes anastomella</i>	○	○	○	○	○
	テンジクダツ	<i>Tylosurus melonotus</i>			○		○
サヨリ	クルマサヨリ	<i>Hyporhamphus intermedius</i>		○		○	
	サヨリ	<i>Hyporhamphus sajori</i>	○	○	○	○	○
トビウオ	ツクシトビウオ（大目）	<i>Cypselurus heterurus</i>	○	○		○	○
	ホソトビウオ（小目）	<i>Cypselurus opisthopus</i>	○	○		○	○
ヤガラ	アカヤガラ	<i>Fistularia commersonii</i>	○	○		○	
	アオヤガラ	<i>Fistularia petimba</i>	○		○		
ヨウジウオ	ヨウジウオ	<i>Syngnathus schlegeli</i>		○		○	
	ガンテンイシヨウジ	<i>Hippichthys penicillus</i>		○			
	タツノオトシゴ	<i>Hippocampus coronatus</i>		○		○	
	サンゴタツ	<i>Hippocampus japonicus</i>		○			
ヒウチダイ	ハシキンメ	<i>Gephyroberyx japonicus</i>					○
マツカサウオ	マツカサウオ	<i>Monocentris japonica</i>	○				○
フリソデウオ	テンガイハタ	<i>Trachipterus torachipterus</i>			○		
	サケガシラ	<i>Trachipterus ishikawai</i>	○				
リュウグウノツカイ	リュウグウノツカイ	<i>Regalecus russellii</i>	○		○		

松江市沿岸海域の魚類（隣接海域を含む）

科	種	学 名	生 息 状 況				
			* 1	* 2	* 3	* 4	* 5
			半島東部	美保湾・中海	半島隣接	宮地報告	県水技
マトウダイ	マトウダイ	<i>Zeus faber</i>	○	○		○	○
	カガミダイ	<i>Zenopsis nebulosa</i>					○
トウゴロウイワシ	トウゴロウイワシ	<i>Atherina bleekeri</i>		○		○	
	ギンイソイワシ	<i>Atherina tsurugae</i>				○	
ボラ	ボラ	<i>Mugil cephalus</i>	○	○	○	○	○
	メナダ	<i>Liza haematocheila</i>		○			
	セスジボラ	<i>Chelon affinis</i>		○			
カマス	アカカマス	<i>Sphyraena pinguis</i>	○	○		○	
	ヤマトカマス	<i>Sphyraena japonica</i>	○		○		
シイラ	シイラ	<i>Coryphaena hippurus</i>	○		○		
シマガツオ	シマガツオ	<i>Lepidotus brama</i>	○				
サバ	クロマグロ	<i>Thunnus thynnus</i>	○		○		○
	ビンナガマグロ	<i>Thunnus alalunga</i>	○		○		○
	キハダ	<i>Thunnus albacares</i>					○
	カツオ	<i>Katsuwonus pelamis</i>	○		○		○
	スマ	<i>Euthynnus affinis yaito</i>					○
	マルソウダガツオ	<i>Auxis rochei</i>			○		○
	ヒラソウダガツオ	<i>Auxis thazard</i>			○		○
	ハガツオ	<i>Sarda orientalis</i>			○		○
	マサバ	<i>Scomber japonicus</i>	○	○	○	○	
	ゴマサバ	<i>Scomber jaustralasicus</i>	○				○
	サワラ	<i>Scomberomorus niphonius</i>	○	○	○		○
	カマスサワラ	<i>Acanthocybium solandri</i>					○
タチウオ	タチウオ	<i>Trichiurus japonicus</i>	○	○	○	○	○
マカジキ	マカジキ	<i>Makaira mitsukurii</i>					○
	バシヨウカジキ	<i>Istiophorus platypterus</i>	○		○		
メカジキ	メカジキ	<i>Xiphias gladius</i>					○
アジ	マルアジ	<i>Deceperus maruadsi</i>	○		○		
	ムロアジ	<i>Deceperus muroadsi</i>	○		○		
	オアカムロ	<i>Deceperus russelli</i>					○
	アカアジ	<i>Decapterus kurroides</i>					○
	マアジ	<i>Trachurus japonicus</i>	○	○	○	○	○
	クボアジ	<i>Atropus atropus</i>					○
	カイワリ	<i>Caranx equata</i>		○	○		○
	ギンガメアジ	<i>Caranx sexfasciatus</i>		○			
	イトヒキアジ	<i>Atectes ciliatis</i>				○	○

松江市沿岸海域の魚類（隣接海域を含む）

科	種	学 名	生 息 状 況				
			* 1	* 2	* 3	* 4	* 5
			半島東部	美保湾・中海	半島隣接	宮地報告	県水技
	ウマズラアジ	<i>Alectis indicus</i>		○			
	ブリ	<i>Seriola quinqueradiata</i>	○	○	○	○	○
	カンパチ	<i>Seriola dumerili</i>	○	○	○		○
	ヒラマサ	<i>Seriola aureovittata</i>	○	○	○		○
	ツムブリ	<i>Elagatis bipinnulatus</i>					○
	イケガツオ	<i>Scomberoides lysan</i>		○			
ヒイラギ	ヒイラギ	<i>Leiognathus nuchalis</i>		○		○	
	オキヒイラギ	<i>Leiognathus rivulatus</i>		○		○	
スギ	スギ	<i>rachycentron canadum</i>			○		
エボシダイ	ハナビラウオ	<i>Psenes pellucidus</i>				○	
イボダイ	イボダイ	<i>Psenopsis anomala</i>		○	○	○	○
	メダイ	<i>Hyperoglyphe japonica</i>	○		○		○
テンジクダイ	テンジクダイ	<i>Apogon lineatus</i>	○	○		○	
	ネンブツダイ	<i>Apogon semilineatus</i>	○	○	○	○	
キントキダイ	キントキダイ	<i>Priacanthus macracanthus</i>		○	○		○
	チカメキントキ	<i>Priacanthus boops</i>					○
	クルマダイ	<i>Pristigenys nipponia</i>					○
ムツ	ムツ	<i>Scombrops boops</i>	○		○		
ヌノサラシ	キハツソク	<i>Diploprion bifasciatus</i>	○		○	○	
スズキ	スズキ	<i>Lateolabrax japonicus</i>	○	○		○	○
	ヒラスズキ	<i>Lateolabrax latius</i>		○			○
	アラ	<i>Nippon spinosus</i>			○	○	
ハタ	イシナギ	<i>Stereolepis ischinagi</i>					○
	アオハタ	<i>Epinephelus awoara</i>					○
	ノミノクチ	<i>Epinephelus fario</i>				○	
	クエ	<i>Epinephelus moara</i>					○
	マハタ	<i>Epinephelus septemfasciatus</i>		○		○	○
	キジハタ	<i>Epinephelus akara</i>		○	○	○	○
	アカイサキ	<i>Caprodon schlegelli</i>			○		
	サクラダイ	<i>Sacura margaritacea</i>			○		
	アカムツ	<i>Doderleinia berycoides</i>			○		○
マツダイ	マツダイ	<i>Lobotes surinamensis</i>		○	○		
フエダイ	フエダイ	<i>Lutjanus stellatus</i>			○		
	ヨコスジフエダイ	<i>Lutjanus kasmira</i>	○				
	ハマダイ	<i>Etelis evrus</i>					○
ハチビキ	ハチビキ	<i>Erythrocles schlegeli</i>					○

松江市沿岸海域の魚類（隣接海域を含む）

科	種	学 名	生 息 状 況				
			* 1	* 2	* 3	* 4	* 5
			半島東部	美保湾・中海	半島隣接	宮地報告	県水技
シマイサキ	コトヒキ（ヤガタイサキ）	<i>Therapon jarbua</i>			○		
	シマイサキ	<i>Therapon oxyrhynchus</i>	○	○	○	○	○
イサキ	シマセトダイ	<i>Hapalogenys kisinouyei</i>				○	
	ヒゲダイ	<i>Hapalogenys nigripinnis</i>				○	○
	セトダイ	<i>Hapalogenys mucronatus</i>				○	
	ヒゲソリダイ	<i>Hapalogenys nitens</i>					○
	イサキ	<i>Parapristipoma trilineatum</i>	○	○	○	○	
	コロダイ	<i>Parapristipoma pictus</i>			○		
	コショウダイ	<i>Parapristipoma cinctus</i>	○	○	○	○	○
イトヨリダイ	イトヨリダイ	<i>Nemipterus virgatus</i>		○	○	○	○
タイ	チダイ	<i>Eynnys japonica</i>	○	○	○	○	○
	クロダイ	<i>Acanthopagrus schlegeli</i>	○	○	○	○	○
	マダイ	<i>pagrus major</i>	○	○	○	○	○
	ヘダイ	<i>Sparus sarba</i>		○	○		○
	キダイ	<i>Dontex tumifrons</i>			○		○
メイチダイ	キダイ	<i>Taius fumifrons</i>				○	
メジナ	メジナ	<i>Girella punctata</i>	○	○	○	○	○
	クロメジナ	<i>Girella malanichthys</i>				○	
クロサギ	クロサギ	<i>Gerres oyena</i>		○		○	
イシモチ	ニベ	<i>Nibea mitsukurii</i>			○		
	シログチ	<i>Argyrosoms argentatus</i>			○		
イシダイ	イシダイ	<i>Oplegnathus fasciatus</i>	○	○	○	○	○
	イシガキダイ	<i>Oplegnathus punctatus</i>			○		
ヒメジ	ヒメジ	<i>Upeneus bensasi</i>	○		○	○	○
タカノハダイ	タカノハダイ	<i>goniistius zonatus</i>				○	○
	ユウダチタカノハ	<i>Goniistius quadricornis</i>			○		○
	ミギマキ	<i>Goniistius zebra</i>				○	
キス	キス	<i>Sillago japonica</i>	○	○	○	○	○
アマダイ	アカアマダイ	<i>Branchioistegus japonicus</i>			○		○
アカタチ	スミツキアカタチ	<i>Cepola schlegeli</i>			○		
	イッテンアカタチ	<i>Acanthocephala limbata</i>					○
ネズッポ	ヤリスメリ	<i>Calliurichthys doryssus</i>				○	
	ヨメゴチ	<i>Calliurichthys japonicus</i>		○		○	
	トンガリヌメリ	<i>Callionymus kaianus</i>		○			
	ネズッポ	<i>Callionymus lunatus</i>		○			
	ハタタテヌメリ	<i>Callionymus fiagris</i>				○	

松江市沿岸海域の魚類（隣接海域を含む）

科	種	学 名	生 息 状 況				
			* 1	* 2	* 3	* 4	* 5
			半島東部	美保湾・中海	半島隣接	宮地報告	県水技
	ネズミゴチ	<i>Repomucenus richardonii</i>		○		○	
	トビヌメリ	<i>Repomucenus beniteguri</i>				○	
イカナゴ	イカナゴ	<i>Ammodytes personatus</i>	○	○		○	
ハタハタ	ハタハタ	<i>Arctoscopus japonicus</i>			○		
ミシマオコゼ	ミシマオコゼ	<i>Uranoscopus japonicus</i>				○	
ウミタナゴ	ウミタナゴ	<i>Ditrema temmincki</i>	○	○		○	○
スズメダイ	ソラスズメダイ	<i>Pomacentrus coelestis</i>				○	○
	スズメダイ	<i>Chromis notatus</i>	○		○		○
	オヤビッチャ	<i>Abudefduf vaigiensis</i>				○	
ベラ	イラ	<i>Choerodon azurio</i>				○	○
	コブダイ	<i>Semicossyphus reticulatus</i>			○		○
	オハグロベラ	<i>Pteragogus flagellifera</i>				○	○
	ササノハベラ	<i>Pseudolabrus japonicus</i>	○	○	○	○	○
	イトベラ	<i>Pseudolabrus gracilis</i>					○
	ホンベラ	<i>Halichoeres bleekeri</i>				○	
	キュウセン	<i>Halichoeres tenuispinis</i>	○	○	○	○	○
ブダイ	ブダイ	<i>Calotomus japonicus</i>					○
	アオブダイ	<i>Callyodon ovifrons</i>				○	
ツバメウオ	ツバメウオ	<i>Platax obicularis</i>			○		
チョウチョウウオ	ゲンロクダイ	<i>Chaetodon modestus</i>		○			
	キンチャクダイ	<i>Chaetodontoplus septentorionalis</i>				○	
カゴカキダイ	カゴカキダイ	<i>Microcanthus strigatus</i>				○	
クロホシマンジュウダイ	クロホシマンジュウダイ	<i>Scatphagus argus</i>			○		
アイゴ	アイゴ	<i>Siganus fuscescens</i>	○	○	○	○	○
トラギス	クラカケトラギス	<i>Parapercis sexfaciatus</i>			○		○
ニジギンポ	ギンポ	<i>Enedrias nebulosa</i>		○		○	
	ダイナンギンポ	<i>Dictysoma burgeri</i>		○		○	○
イソギンポ	ナベカ	<i>Omobranchus loxozonus</i>		○		○	
	トサカギンポ	<i>Omobranchus fasciolatoceps</i>		○			
	イダテギンポ	<i>Omobranchus ljaponicus</i>		○			
	ニジギンポ	<i>Pholis picta</i>	○	○		○	
ゲンゲ	カズナギ	<i>Zoarchias veneficus</i>				○	
	コウライガジ	<i>Zoarces gilli</i>			○		
タウエガジ	ムスジガジ	<i>Emogammus hexagrammus</i>		○		○	
ハゼ	ミミズハゼ	<i>Luciogobius guttatus</i>		○			
	サツキハゼ	<i>Parioglossus dotui</i>			○		

松江市沿岸海域の魚類（隣接海域を含む）

科	種	学 名	生 息 状 況				
			* 1	* 2	* 3	* 4	* 5
			半島東部	美保湾・中海	半島隣接	宮地報告	県水技
	ヒメハゼ	<i>Favonigobius gymnauchen</i>		○			
	アベハゼ	<i>Mugilogobius abei</i>		○			
	シモフリシマハゼ	<i>Tridentiger bifasciatus</i>		○		○※	
	アカオビシマハゼ	<i>Tridentiger trigonocephalus</i>		○		○※	
	チチブ	<i>Tridentiger obscurus</i>		○			
	イトヒキハゼ	<i>Cryptocentrus filifer</i>		○		○	
	マハゼ	<i>Acanthogobius flavimanus</i>		○		○	○
	スジハゼ	<i>Acanthogobius pflaumii</i>		○			
	チャガラ	<i>Pterogobius zonoleucus</i>		○		○	
	キヌバリ	<i>Pterogobius elapoides</i>	○	○	○	○	○
	ウロハゼ	<i>Glossogobius olivaceus</i>		○		○	
	シロウオ	<i>Leucopsarion petersi</i>		○			
	スミウキゴリ	<i>Chaenogobius sp1</i>		○			
	ビリンゴ	<i>Chaenogobius castaneus</i>		○		○	
	ニクハゼ	<i>Chaenogobius heptacanthus</i>		○		○	
	ドロメ	<i>Chasmichthys glosus</i>		○			
	アゴハゼ	<i>Chasmichthys dolichognathus</i>	○		○		
	アカハゼ	<i>Amblychaeturichthys hexanema</i>		○		○	
	ホシノハゼ	<i>Istigobius hoshinonis</i>			○		
フサカサゴ	メバル	<i>Sebastes inermis</i>	○	○	○	○	
	ウスメバル	<i>Sebastes thompsoni</i>				○	○
	トゴットメバル	<i>Sebastes joyneri</i>					○
	アコウ	<i>Sebastes matsubarae</i>					○
	クロソイ	<i>Sebastes schiegeri</i>		○		○	○
	タケノコメバル	<i>Sebastes oblongus</i>		○		○	
	キツネメバル	<i>Sebastes vulpes</i>					○
	ヨロイメバル	<i>Sebastes hubbsi</i>					○
	カサゴ	<i>Sebasteiscus marmoratus</i>	○	○	○	○	
	イズカサゴ	<i>Scorpaena izensis</i>					○
	フサカサゴ	<i>Scorpaena neglecta</i>				○	
	ミノカサゴ	<i>Pterois lumulata</i>		○		○	○
	ヒメヤマノカミ	<i>Dendrochirus bellus</i>					○
	ハチ	<i>Apistus carinatus</i>		○		○	○
オニオコゼ	ヒメオコゼ	<i>Minous monodactylus</i>				○	
	オニオコゼ	<i>Inimicus japonicus</i>	○	○		○	○
ハオコゼ	ハオコゼ	<i>Hypodytes rubripinnis</i>	○	○		○	

※当時は2種を区別せずにシマハゼとして扱っていた。

松江市沿岸海域の魚類（隣接海域を含む）

科	種	学 名	生 息 状 況				
			* 1	* 2	* 3	* 4	* 5
			半島東部	美保湾・中海	半島隣接	宮地報告	県水技
アイナメ	クジメ	<i>Agrammus agrammus</i>		○		○	○
	アイナメ	<i>Hexagrammos otakii</i>	○	○	○	○	
コチ	メゴチ	<i>Inegocia meerdervoorti</i>		○		○	
	トカゲゴチ	<i>Inegocia japonica</i>				○	
	イネゴチ	<i>Inegocia crocodila</i>		○		○	
	コチ	<i>Platycephalus indicus</i>		○		○	
ホウボウ	ホウボウ	<i>Chelidonichthys spinosus</i>	○	○	○	○	○
	イゴダカホデリ	<i>Lipidotrigla alata</i>		○		○	
	カナガシラ	<i>Lepidotrigla microptera</i>	○	○		○	○
カジカ	アナハゼ	<i>Pseudoblennius percoides</i>				○	
	アサヒアナハゼ	<i>Pseudoblennius cottides</i>		○		○	○
クサウオ	クサウオ	<i>liparis tanakai</i>		○		○	
コバンザメ	クロコバン	<i>Remora brachytera</i>					○
	コバンザメ	<i>Echeneis naucrates</i>			○		
タラ	マダラ	<i>Gadus macrocephalus</i>		○	○		
	スケトウダラ	<i>Theragra chalcogramma</i>		○			
ヒラメ	ヒラメ	<i>Paralichthys olivaceus</i>	○	○	○	○	○
	タマガンゾウビラメ	<i>Pseudorhombus pentophelmus</i>		○		○	
	テンジクガレイ	<i>Pseudorhombus arsius</i>					○
	ガンゾウビラメ	<i>Pseudorhombus cinnamomeus</i>				○	○
	アラメガレイ	<i>Tarphops oligolepis</i>				○	
	ダルマガレイ	<i>Engprosopon grandisquama</i>		○		○	
カレイ	ムシガレイ	<i>Eopseita grigorjewi</i>				○	○
	ホシガレイ	<i>Verasper variegatus</i>					○
	マツカワ	<i>Verasper moseri</i>				○	
	アカガレイ	<i>Hippoglossoides dubius</i>			○		○
	メイタガレイ	<i>Pleuronichthys cornutus</i>	○	○	○	○	○
	ナガレメイタガレイ	<i>Pleuronichthys sp</i>					○
	ババガレイ	<i>Microstomus achne</i>					○
	ミギガレイ	<i>Dexistes rikuzenius</i>			○		
	ムシュシュガレイ	<i>Pleuronectes bilineatus</i>				○	
	ソウハチ	<i>Cleisthenes pinetorum</i>			○		○
	マガレイ	<i>Limanda herzensteini</i>					○
	マコガレイ	<i>Limanda yokohamae</i>	○	○	○	○	○
	イシガレイ	<i>Koreius bicoloratus</i>	○	○	○	○	○
	ヤナギムシガレイ	<i>Tanakius kitaharai</i>		○		○	○

松江市沿岸海域の魚類（隣接海域を含む）

科	種	学 名	生 息 状 況				
			* 1	* 2	* 3	* 4	* 5
			半島東部	美保湾・中海	半島隣接	宮地報告	県水技
	ヒレグロ	<i>Glyptocephalus stelleri</i>			○		○
ササウシノシタ	ササウシノシタ	<i>Heteromycteris japonica</i>				○	
	セトウシノシタ	<i>Zebrias japonicus</i>				○	
	シマウシノシタ	<i>Zebrias zebra</i>				○	○
ウシノシタ	クロウシノシタ	<i>Paraplagusia japonica</i>		○		○	
	アカシタビラメ	<i>Areliscus joyneri</i>					○
	イヌノシタ	<i>Cynoglossus rubustus</i>				○	
	ゲンコ	<i>Cynoglossus interruptus</i>				○	
モンガラカワハギ	アミモンガラ	<i>Canthidermis maculatus</i>			○		
カワハギ	カワハギ	<i>Stephanolepis cirrifer</i>	○	○	○	○	○
	アミメハギ	<i>Rudarius ercodes</i>		○		○	
	ウマズラハギ	<i>Thamnaconus medwstus</i>	○	○	○	○	○
	ウスバハギ	<i>Aluterus monoceros</i>	○		○		○
ハコフグ	ハコフグ	<i>Ostracion immaculatus</i>	○	○		○	
フグ	ホシフグ	<i>Arothron firmamentum</i>	○				
	サバフグ	<i>Lagocephalus lunarisi</i>		○		○	
	シロサバフグ	<i>Lagocephalus wheeleri</i>		○	○		
	シマフグ	<i>Takifugu xanthopterus</i>	○	○			○
	クサフグ	<i>Takifugu niphobles</i>	○	○	○	○	○
	トラフグ	<i>Takifugu rubripes</i>	○	○	○	○	○
	ショウサイフグ	<i>Takifugu vermicularis</i>		○		○	
	ナシフグ	<i>Takihugu vermiclaris</i>				○	
	マフグ	<i>Takifugu porphyreus</i>	○	○		○	○
	コモンフグ	<i>Takihugu poecilonotus</i>		○		○	
	ヒガンフグ	<i>Takifugu pardalis</i>		○		○	
	アカメフグ	<i>Takifugu chrysops</i>					○
ハリセンボン	ハリセンボン	<i>Doidon holocanthus</i>	○	○		○	
マンボウ	マンボウ	<i>Mola mola</i>			○		

*－1 島根半島東部 美保関町、鹿島町 *－2 美保湾・境水道・中海 *－3 出雲市平田町
 *－4 中海干拓・淡水化事業に伴う魚族生態調査報告書 *－5 島根のさかな

島根県の弥生時代鉄器集成

池淵 俊一

はじめに

ここで紹介する資料は2009年度段階までで島根県内における弥生時代に属すると考えられる鉄器であるが、集落出土資料については古墳時代前期初頭（草田6期＝布留0併行期；赤澤1992）までを対象としている。また、一部所属時期が不明確で古墳時代前期に属する可能性のある資料も掲載した。

今回の集成では、全体で59遺跡から520点余りの鉄器が確認できた（別表・第1図）。誌面の都合上、掲載資料は基本的に不明鉄器は除き製品に限定しているが、鍛冶炉を伴う鍛冶関連遺物については不明鉄器・鉄片も含めて製品とともに遺構ごとに一括して掲載した。掲載方法は器種別とし、時代の判明する資料はできる限り時代順に掲載するよう努めた。

1. 島根県内における弥生時代鉄器普及の諸段階

(1) 弥生時代中期の様相

鑄造鉄器の流入

県内における鉄器文化は、他地域と同様に鑄造鉄斧片の流入から開始される（池淵2005 A）。県内における鑄造鉄斧は、従来から知られている西川津遺跡例のほか、雲南市垣ノ内遺跡、出雲市中野清水遺跡例がある。特に中野清水遺跡例は、弥生時代中期の例としては全国でも数少ない完形の鑄造鉄斧として注目される。ただ、これらの鑄造鉄斧には、他地域のように破片を利器として再利用した形跡はまだ確認できていない。

県内における鑄造鉄斧片の出土例は時期的には中期後半に属する資料で、中期前半を中心に出土する北部九州の盛行期とはズレがある。その理由としては、中期後半の北部九州では既に鍛造鉄器の生産が活発化していることからみて、そこで不要となった鑄造鉄斧片が東方へ流出するようになった可能性が想定される。このように、当地における当該期の鑄造鉄斧片は寺澤薫が畿内の青銅製品において指摘したように、「明らかに北部九州のフィルターを通過した余り物」と評価するのが妥当だろう（寺沢2000）。

出土する二条突帯鑄造鉄斧は平面長方形のⅠ式と平面梯形のⅢ式の二者があり（村上1988）、破片資料の場合も突帯の形状で分類が可能である（池淵2005 A）。当該期における当地の鑄造鉄斧はほぼⅠ式に限定されるが、中野清水遺跡出土の無帯鑄造鉄斧（2-4）はやや特異な資料であり、Ⅰ式からⅢ式への過渡的な資料として位置づけられる。

鍛造鉄器

一方、鍛造鉄器は中期後葉から本格的に認められるようになり、現状では山間部に集中し、かつ板状鉄斧の大型品が目立つ点に特徴がある。これら山間部の遺跡では塩町式系土器が共伴する事例が多く、先の鑄造鉄斧片に代表される日本海沿岸を介した交易ルートとともに、山陽側からの鉄器流入ルートが併存していた可能性を想起させる。山間部に位置する奥出雲町国竹遺跡の大型板状鉄斧（2-6・7）は、分析の結果合わせ鍛えの朝鮮半島産と判定されている（大澤2000）。また、田和山遺跡の大型の袋状鉄斧（2-19）は明確な所属年代は不明であるが中期後半に属する可能性が高く、鳥取県長山馬籠遺跡例とともに当該期の大型袋状鉄斧として注目される。このように後述する弥生時代後期の資料と比較すると、

当該期の鉄斧は大型品が目立ち、その一部には搬入品が多く含まれていた可能性も考慮すべきであろう。

他の器種では鉋、鉄鋸が確認されている。鉋は森Ⅵ遺跡などで幅広の断面矩形の身部に刃部のみに裏すきを有する、当地域に特徴的なタイプが既に出現しており、小型鍛造鉄器に関しては既にこの段階で在地生産が開始されていた可能性が高い。

(2) 弥生時代後期～終末期の様相

弥生時代後期前半になると、伐採斧や打製石鋸、磨石など一部の器種を除くと石器は激減する。当地域の資料は必ずしも多くはないが、鉄鋸に無茎三角形式が目立つようになるなど、当地の鉄器生産が顕在化し、一定の地域色が認められるようになる。

当地域の資料はそう多くはないが、斧では袋状鉄斧が卓越するなど、いわゆる立体的な鉄器製作を志向する地域として把握することが可能であり、同時期の瀬戸内地域とは異なる。これは、前代までのサヌカイトの交易など瀬戸内に比重を置いた南北軸の地域間交流から日本海を介した東西交流へ移行した結果であると推測され、当該期に顕在化する山陰系土器分布圏域の成立と整合的なあり方を示す。

また安来市越峠遺跡や上野Ⅱ遺跡では弥生時代後期段階の鑄造鉄斧片が出土しており、後期になってもし引き続き鑄造鉄斧片の流入が確認できる（2-3・5）。これらは再加工の痕跡は認められず、鍛冶素材として用いられた可能性も考慮される。

次の後期後半～終末期段階になると、当地の鉄器出土量は急増し、他地域とは確実に一線を画する特色ある鉄器文化圏を形成する。当該期に属する鉄器は中期段階の鉄器と比較して小型品でかつ技術的にも退行したかのような資料が多く、その大半は在地産製品と考えられる。また、当該期には塩津丘陵遺跡群や上野Ⅱ遺跡のような、複数の鍛冶工房を備えるとともに多数の鉄器を保有する拠点集落が出現する（池淵2005 B・第7図）。

2. 出雲・石見における弥生時代鉄器の地域性

(1) 組成上の特徴

当地の鉄器組成上の特徴としては、鉄鋸が多数を占める点、鉋とともに鉄斧の比率が高い点、鋤・鋤先や鎌・摘鎌等の農具が一定量を占める点があげられる（池淵2000）。他地域との比較で言えば、鉋の比率が一定量を占める点で瀬戸内西部との共通性が窺える一方、袋状鉄斧の出土点数が多い点や、東部瀬戸内や畿内では出土例に乏しい鋤・鋤先、摘鎌等の、所謂「立体的な鉄器」が安定した組成を占めている点が当地域の鉄器組成上及び製作技術上の特徴といえる。

ただし、器種構成に関しては遺跡ごとの偏差が大きく、例えば浜田市道休畑遺跡では刺突具、棒状鉄器類が主体的であり、松江市平所遺跡資料では鉄針、鑿類がその大半を占めている。これらの点からみて、基本的には、鉄器の器種構成は個々の遺跡ごとにその立地条件や生業形態に大きく左右されていたものと推察される。

(2) 器種ごとの特徴

A) 鉄斧

県内からは鑄造鉄斧片や可能性のあるものも含め、現時点で33点の鉄斧が出土している。弥生時代中期段階の資料は鑄造鉄斧を除けば板状鉄斧が目立ち、袋状鉄斧は田和山遺跡例（2-19）の1例が確認できるにすぎない。

弥生時代後期段階では、中期と型式別の比率が逆転し、袋状鉄斧が卓越する。中期段階の斧と後期段階の斧とでは法量が明らかに異なっており、鉄斧のあり方に大きな断絶が認められる。このように後期段階では全長10cmを越える伐採斧は稀少であるが、これを補完するほどの大型伐採石斧の当該期出土

例は未だ乏しく、後期段階の伐採斧欠落の問題は依然課題として残されている。

袋状鉄斧の製作技術は中型品と小型品でやや異なる。小型品の多くは長方形鉄板の二隅を折り曲げただけの簡易なもので袋部の閉じ方が甘く、断面形も袋部と身部との厚さがあまり変わらないタイプ（2-20・21）で、これらは鍛冶炉から想定される当地域の鍛冶技術から見て在地生産品と考えて差し支えない。北原本郷遺跡例（2-24）は袋状鉄斧の袋部を鍛打して潰し、板状鉄斧として再生させた資料と考えられ、当該期の鍛冶技術の限界が窺える資料である。一方、中・大型品には、やや厚手の長方形鉄板の上半をたたき延ばして凸字形の鉄板をつくり、折り曲げて袋部を形成し、縦断面で段を形成する、前者よりは技術的には高いレベルにあるタイプの資料がある。

また、山陰では袋部端部を折り曲げて補強するタイプが一定量出土しており（3-3）、袋鑿でも同様なタイプが存在する（4-28）。これらは北部九州で盛行するタイプであることから搬入品と考えられていたが、近年類例が増加し、特に弥生時代終末期～古墳時代前期では中野清水遺跡例のように鍛冶関連遺物との関係を示唆する資料も存在することから、一部在地生産品が含まれている可能性も考慮される。

B) 鉈

当地域の鉈は中期後葉段階には既に出現している。中期末～後期中葉段階の資料は類例が少ないが、飯南町森Ⅴ・Ⅵ遺跡から数点出土している。これらは身部が板状を呈するⅡA式ないしはⅣB式（村上1998）に相当すると思われ、瀬戸内との親縁性を示唆する。

後期では刃部・身部ともに裏すきを備えるⅠ式は、山口県との県境に近い前立山遺跡（後期中葉；3-8）で1例確認されているほかは、身部が矩形を呈するⅡa式またはⅣ式が主流を占める。当地の鉈の形態的特徴としては、瀬戸内で盛行する刃部が鋤状を呈するⅣa式（3-14）は比較的少なく、身部と刃部の幅の差がないⅡa式・Ⅳb式が主流を占め、また身部の幅が広い資料が目立つ点が指摘されている（村上1998）。松江市勝負奥遺跡例（3-16）は数少ないⅣa式だが、装具が良好に残る稀少な事例である。

このように当地域の鉈は、中期末～後期前半に西部瀬戸内・北部九州の影響下に成立したのち、後期後葉～終末にはⅣb類を主体とし幅広タイプのものが認められるなど、一定の地域色を保持するに至ったと評価される。

C) 鉄鏃

県内から出土する鉄鏃は、無茎三角形式、柳葉式、有茎腸袂三角形式などがあるが、無茎三角形式が主流を占める点が当地の鉄鏃の最大の特徴である。柳葉式及び有茎腸袂三角形式も後期初頭には一旦出現しているが、その後断絶し、後期後葉～終末期に再び出現する。ただしこの段階でも無茎三角形（五角形）式が主流を占める点は動かない。なお、鳥取県では無茎三角形式とともに柳葉式が鉄鏃内で一定組成を占めており、同じ山陰内でも伯耆・因幡とはかなり様相を異にする。

無茎三角形式は中期後葉に属する飯南町森Ⅵ遺跡SI05例や前述の波来浜B区2号墓例では打製石鏃の平面形態に類似する長三角形で刃部が直線状をなす形態を呈している（6-1・2）。こうしたタイプの他に、門生黒谷Ⅲ遺跡SI08（6-5）のような平面形が縦長のタイプも存在する。このタイプは、石鏃模倣のものとは考えにくく、北部九州の当該期鉄鏃の影響下で成立した可能性がある。また当地の無茎三角形式鉄鏃は鏃身中央部に一個円孔を穿つものが相当量認められ、こうした特徴は後期後半にも引き継がれる。

後期後半になると平面縦長タイプは姿を消すとともに、通常は無茎三角形式も打製石鏃の形態から離れ、ふくらが張るタイプが増加する。出雲市中野清水遺跡では無茎銅鏃または磨製石鏃を模倣したと思われる鉄鏃が出土している（6-8）。ふくらが張る形式変化の背景にはこうした無茎銅鏃や磨製石鏃からの影響も考慮すべきかもしれない。後期後葉～終末にはこうした型式学的変化の流れから、鑿切り技法を駆使し、より簡略化された無茎三角形式や平面五角形の無茎式鉄鏃（6-16）が盛行するようになる。

D) その他の特徴的な器種

その他、当地に特徴的な器種として、九州以外では稀な鍬・鋤先や摘鎌、さらに玉作用工具類、ヤス・銚等の漁撈具がある。鉄針やケンガネ、鑿等の玉作関連工具類は松江市平所遺跡（4-42～85）で多量に出土しているほか、松江市勝負遺跡や塩津丘陵遺跡群で若干ながら玉作関連遺物と共伴している。

また、漁撈具のうちヤス・銚は他地域では極めて稀な器種である。これらはやや大型で逆刺のある先端部を備えるタイプ（5-23～25）と、小型で逆刺のない数本の刺突状利器を束ねて用いるタイプ（8-25～28）が存在する。後者は銚ではなく単独で用いる刺突具の可能性もあるが、雲南市平田遺跡では一ヶ所から数本がまとまって出土しており、ヤスの可能性も考慮しておきたい。逆刺のある銚・ヤスは、県内では松江市草田遺跡や沖丈遺跡、道休畑遺跡、鳥取では青谷上寺地遺跡で出土している。

弥生時代に関わらず鉄器を多量に出土する遺跡には鳥取県長瀬高浜遺跡のように釣針等の漁撈具が目立つ遺跡例が多く、鉄器交易における海人集団の密接な関与を示唆するものと言える。

(3) 搬入系鉄器

弥生時代後期の搬入鉄器としては、鑄造鉄斧では前述の越峠遺跡、上野Ⅱ遺跡の可鍛鑄鉄製の鑄造鉄斧片がある（2-3・5）。このほか邑南町野田西遺跡の甕内（草田4～5期）から出土した鉄斧も、平面形横長で刃部が碇状に張り出す平面形態から鑄造鉄斧の可能性が高い。前述のように当地では後期段階においても完形品だけでなく鑄造鉄斧の破片が少量ながら認められる点も地域的特徴の一つであるといえる。一方、鍛造鉄器では、前述の袋部端部の折り返しのある袋状鉄斧・袋鑿の中に北部九州からの搬入品が含まれている可能性が高い。

また、墳墓副葬品では日本海沿岸地域においては長刀・長剣の副葬例が目立ち、特に環頭裁断大刀の副葬例がその特異な地域的特徴として指摘されてきた（池淵1998・2000、村上2001A、野島2004）。しかし出雲・石見での墳墓からの刀剣類副葬例は、安来市宮山Ⅳ号墓の裁断大刀と西谷3号墓の鉄剣だけにすぎない。西谷3号墓例についてはむしろ楯築墳丘墓など瀬戸内との関連を想定すべき資料であり、この点で長剣・長刀の副葬例の目立つ伯耆の様相とはかなり異なっている。

こうした山陰内における副葬鉄器上の地域差が何に起因するかは今後の課題ではあるが、山陰の弥生集落からは刀剣や鉄矛と想定される大型舶載武器片が出土する事例が認められる点から、鍛冶素材として供与されたことにより、こうした地域差が生じた可能性が一案としては考えられる。また、当時の拠点的交易港と目される遺跡から出土する外来系土器の様相から、出雲平野では大陸との交易に北部九州集団の強い関与が示唆されるのに対し、青谷上寺地遺跡など因幡では北部九州を介しない朝鮮半島との直接的な交渉も示唆されることから、こうした交渉形態の相違が副葬鉄器の差に反映された可能性も考慮する必要がある（池淵2010）。

(4) 鉄素材の問題

当地では弥生時代中期段階の鍛冶関連遺物の分析例はないが、製品としては奥出雲町国竹遺跡の板状鉄斧の分析が行われ、先述のとおり炒鋼製素材の合わせ鍛え製品と判定されている（大澤2000）。このほか、鳥取県の事例であるが後期中葉の宮内1号墓の舶載長剣や青谷上寺地遺跡出土の鉄鑿も分析の結果、炒鋼であることが判明している。

一方、後期後葉以降、上野Ⅱ遺跡SI08例（7-20）や妻木晩田遺跡例など、当地の集落遺跡から大型の板状鉄器が出土するようになる。これらは分析の結果、朝鮮半島産の塊錬鉄と判定されており、藤尾慎一郎はこれらをいわゆる「弁辰の鉄」に比定する（藤尾2004）。後期終末に属する平田遺跡出土鉄器や板屋Ⅲ遺跡出土の板状鉄斧も分析の結果、塊錬鉄製であることが判明しており、当地の弥生時代後期後葉以降には、こうした朝鮮半島産の低炭素系塊錬鉄が主たる素材として広く流通していた可能性が高

い。このように、それまでの高炭素系の鑄鉄脱炭鋼や炒鋼系の素材から後期後葉以降の軟質の塊錬鉄への鉄素材の転換が、当該期における簡便な鍛冶炉の普及や鑿切り技法の盛行と深く関与していたものと推察される。

ただし、こうした板状鉄素材は現状では出土点数が限られており、それで当地の鉄器製作が総てまかなわれていたとは考えにくい。その他の有力な鉄素材としては、多くの遺跡から出土している棒状鉄器や先述の舶載大型武器片がその候補としてあげられるが、未だ明言できる状況ではない。少なくとも弥生時代終末段階までは、板状鉄素材のような画一的な鉄素材が流通していた状況は現段階においては想定しにくい。

小 結

以上、県内の弥生時代鉄器の様相を概観してきたが、その進展は必ずしも進歩・発展とは言い難い側面が多々みられる。例えば袋状鉄斧は小型化・簡略化が著しい点や、後期後半以降は鉄器組成上鉋など小型の工具類や鉄鎌が大半を占め、農地開発に不可欠な大型の伐採斧や鍬・鋤先などは他地域に比べて多いとはいえ、極めて限定的な存在である点などが指摘できる。

このように、当地域における弥生時代後期の鉄器消費形態は、量的または素材の規模・形状といった諸条件に制約された中で、限られた素材をいかに最大限有効に集落成員に行き渡せるかという点に最も力点が置かれていたものと評価できる。それが当時の首長層と共同体成員との関係を強く規定していたことは想像に難くない。

当地の鉄器文化が鉄素材・技術の面からなお限定された範囲内での発展にとどまったのは、当地域側からの素材・鉄生産技術獲得の要求に対して、前の時代より緩和されたにせよ、供給側からの一定の規制・制約があったためと考えられる。こうした閉塞的状況を打破するための汎列島的な運動が、古墳時代開始への大きな要因となったものの推測される。

文 献

論 文

赤澤秀則 1992 「IV. 小結」『南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会

池淵俊一 1998 「山陰における弥生時代鉄器の様相」『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡—一般国道9号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書14—』島根県教育委員会

池淵俊一 2000 「島根県下における弥生時代鉄器の様相」『考古学ジャーナル』467

池淵俊一 2005 A 「安来市越峠遺跡出土鑄造鉄斧をめぐる諸問題」『季刊文化財』110

池淵俊一 2005 B 「山陰における古墳時代前半期鉄器の様相」『考古論集—川越哲志先生退官記念論文集—』

池淵俊一 2009 「出雲・石見・隠岐の鉄器」『山陰における弥生時代の鉄器と玉』第36回山陰考古学研究会事務局

池淵俊一 2010 「山陰における朝鮮半島系土器の様相—弥生時代後期を中心に—」『第59回埋蔵文化財研究集会—日本出土の朝鮮半島系土器の再検討—弥生時代を中心に—』埋蔵文化財研究会

大澤正己 2000 「島根県国竹遺跡出土板状鉄斧の金属学的調査」『島根考古学会誌』17

田中義昭・石田為成 2000 「島根県横田町国竹遺跡出土の鉄斧について」『島根考古学会誌』17 島根考古学会

寺沢 薫 2000 『王権誕生』講談社

野島 永 1992 「破碎された鑄造鉄斧」『たたら研究』32・33

野島 永 2004 「弥生時代後期から古墳時代初頭における鉄製武器をめぐる」『考古論集—河瀬正利先生退官記念論文集—』

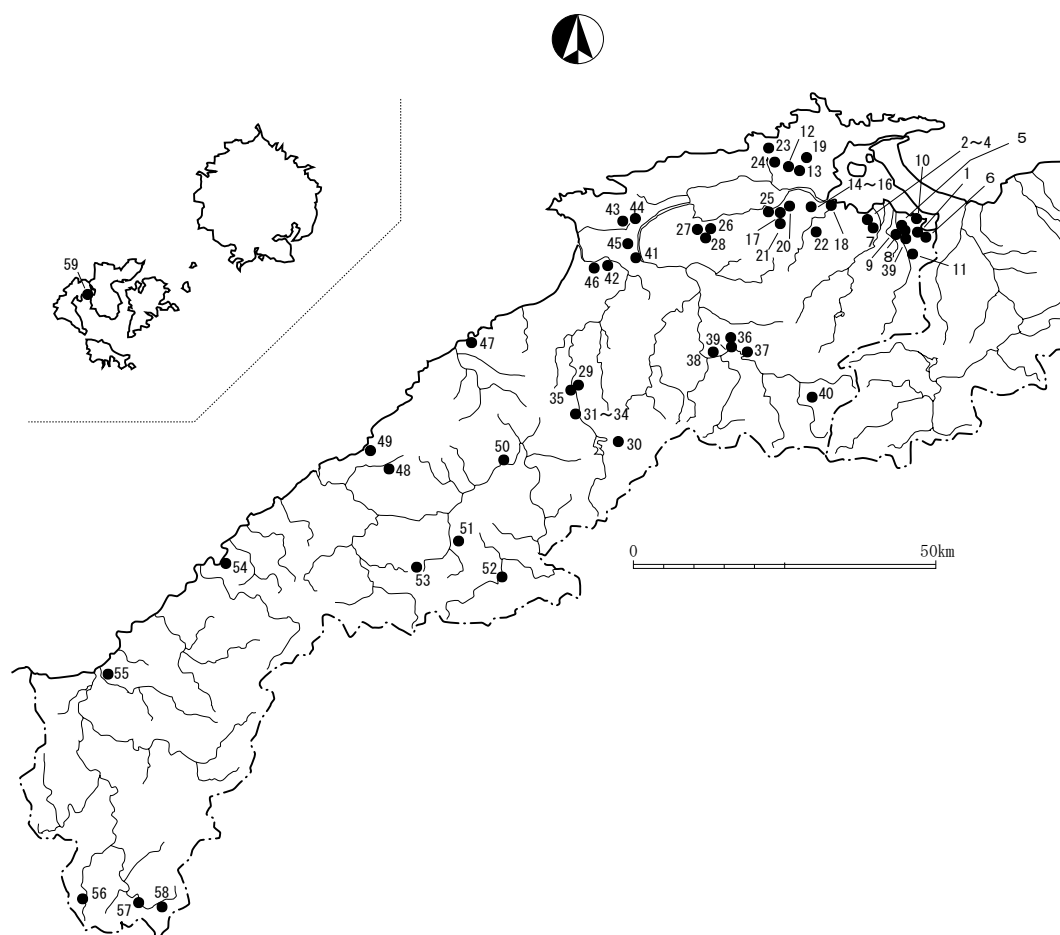
藤尾慎一郎 2004 「弥生時代の鉄」『国立歴史民俗博物館研究報告』110

村上恭通 1988 「東アジアの二種の鋳造鉄斧をめぐって」『たたら研究』29
村上恭通 1998 「鉄器普及の諸段階」下條信行編『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』
村上恭通 2001 A 「日本海沿岸地域における鉄の消費形態－弥生時代後期を中心として－」『古代文化』53-4
村上恭通 2001 B 「古墳出現前夜の「地域性」－生産・流通とその地理的・歴史的環境－」『考古学研究』48-3

報告書

池淵俊一・丹羽野裕編 1998 『門生黒谷Ⅰ遺跡・門生黒谷Ⅱ遺跡・門生黒谷Ⅲ遺跡』島根県教育委員会
丹羽野裕他編 1998 『塩津丘陵遺跡群』島根県教育委員会
増田浩太編 2001 『塩津丘陵遺跡群・小久白墳墓群』島根県教育委員会
丹羽野裕編 1997 『岩屋口北遺跡・臼コクリ遺跡（F区）』島根県教育委員会
深田浩他編 1995 『陽徳遺跡・平ラⅠ遺跡』島根県教育委員会
松本岩雄編 2003 『宮山古墳群の研究』島根県古代文化センター
妹尾秀樹編 2003 『青垣神社横遺跡』伯太町教育委員会
内田律雄編 2003 『西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ（海崎地区2）』島根県教育委員会
前島己基・松本岩雄編 1977 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』島根県教育委員会
広江耕史編 1989 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ（石台遺跡）』島根県教育委員会
柳浦俊一他編 1983 『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会
川原和人編 2007 『南外2号墳・勝負遺跡』島根県教育委員会
青木 博編 1988 『廻田遺跡・廻田古墳』松江市教育委員会
瀬古諒子編 1994 『角森遺跡発掘調査報告書』（財）松江市教育文化振興事業団
川上昭一編 1994 『折原上堤東遺跡』八雲村教育委員会
赤澤秀則編 1992 『南講武草田遺跡』鹿島町教育委員会
江川幸子編 2009 『大勝間山城跡発掘調査報告書』（財）松江市教育文化振興事業団
錦田剛志編 2001 『布志名大谷Ⅲ遺跡』島根県教育委員会
原田敏照他編 2000 『勝負廻遺跡・白石大谷Ⅱ遺跡・シトギ免遺跡・野津原Ⅱ遺跡・山守免遺跡・石地藏遺跡』島根県教育委員会
宮本正保編 2002 『屋敷古墳群・鋤崎古墳群・足頭古墳群・長廻古墳群・海部城跡・杓子観音Ⅰ古墳群・杓子観音Ⅱ遺跡』島根県教育委員会
瀬古諒子他編 2005 『田和山遺跡』松江市教育委員会
瀬古諒子編 2005 『勝負奥遺跡』松江市教育委員会
久保田一郎編 2001 『上野Ⅱ遺跡』島根県教育委員会
角田徳幸編 1998 『板屋Ⅲ遺跡』島根県教育委員会
原田敏照編 2003 『板屋Ⅲ遺跡（2）』
山崎 修編 1998 『県道吉田頓原線緊急地方道路整備A（改良）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（的場尻遺跡・社日山城跡）』頓原町教育委員会
山崎順子編 2001 『森Ⅴ遺跡』頓原町教育委員会
内田律雄編 1996 『門遺跡』島根県教育委員会
増田浩太編 2003 『家の後遺跡・垣ノ内遺跡』島根県教育委員会
勝部智明編 2006 『原田遺跡（2）』島根県教育委員会
坂本諭司編 2000 『平田遺跡 第Ⅲ調査区』木次町教育委員会
東山信治他編 2005 『北原本郷遺跡1』島根県教育委員会
渡辺貞幸 1993 「弥生墳丘墓における墓上の祭儀－西谷3号墓の調査から－」『島根考古学会誌』10
平石 充編 1999 『古志本郷遺跡Ⅰ』島根県教育委員会
守岡利栄編 2003 『古志本郷遺跡Ⅵ』島根県教育委員会

池淵俊一編2007『山持遺跡Ⅱ・Ⅲ区 (Vol.2)』島根県教育委員会
 松尾充晶他編2006『青木遺跡Ⅱ』島根県教育委員会
 内田律雄編2004『大津町北遺跡・中野清水遺跡』島根県教育委員会
 角田徳幸編2006『中野清水遺跡(3)・白枝本郷遺跡』島根県教育委員会
 久保田一郎編2005『中野清水遺跡(2)』島根県教育委員会
 大塚初重1963「島根県出雲市知井宮遺跡の調査」『考古学集刊』第2巻第1号 東京考古学会
 西尾克己他編1985『島根県埋蔵文化財調査報告』11 島根県教育委員会
 昌子寛光編1997『柴Ⅲ遺跡発掘調査概要報告書』松江市教育文化振興事業団
 山崎順子編2009『森Ⅱ遺跡・森Ⅲ遺跡・森Ⅳ遺跡・森Ⅵ遺跡』飯南町教育委員会
 梅木茂雄編2005『高津遺跡』江津市教育委員会
 門脇俊彦1973『波来浜遺跡発掘調査報告書―第1・2次緊急調査概報―』
 牧田公平編2001『沖丈遺跡』邑智町教育委員会
 原 拓矢他編2001『清源那遺跡』石見町教育委員会
 水津 浩編2000『沖場遺跡』六日市町教育委員会
 内田律雄編1981『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会
 柳浦俊一編2010『道休畑遺跡』島根県教育委員会
 宮本正保編2010『堂ノ上遺跡』島根県教育委員会
 宮田健一編2010『大陰遺跡』津和野町教育委員会
 柚原恒平編2000『タヤ遺跡』西ノ島町教育委員会

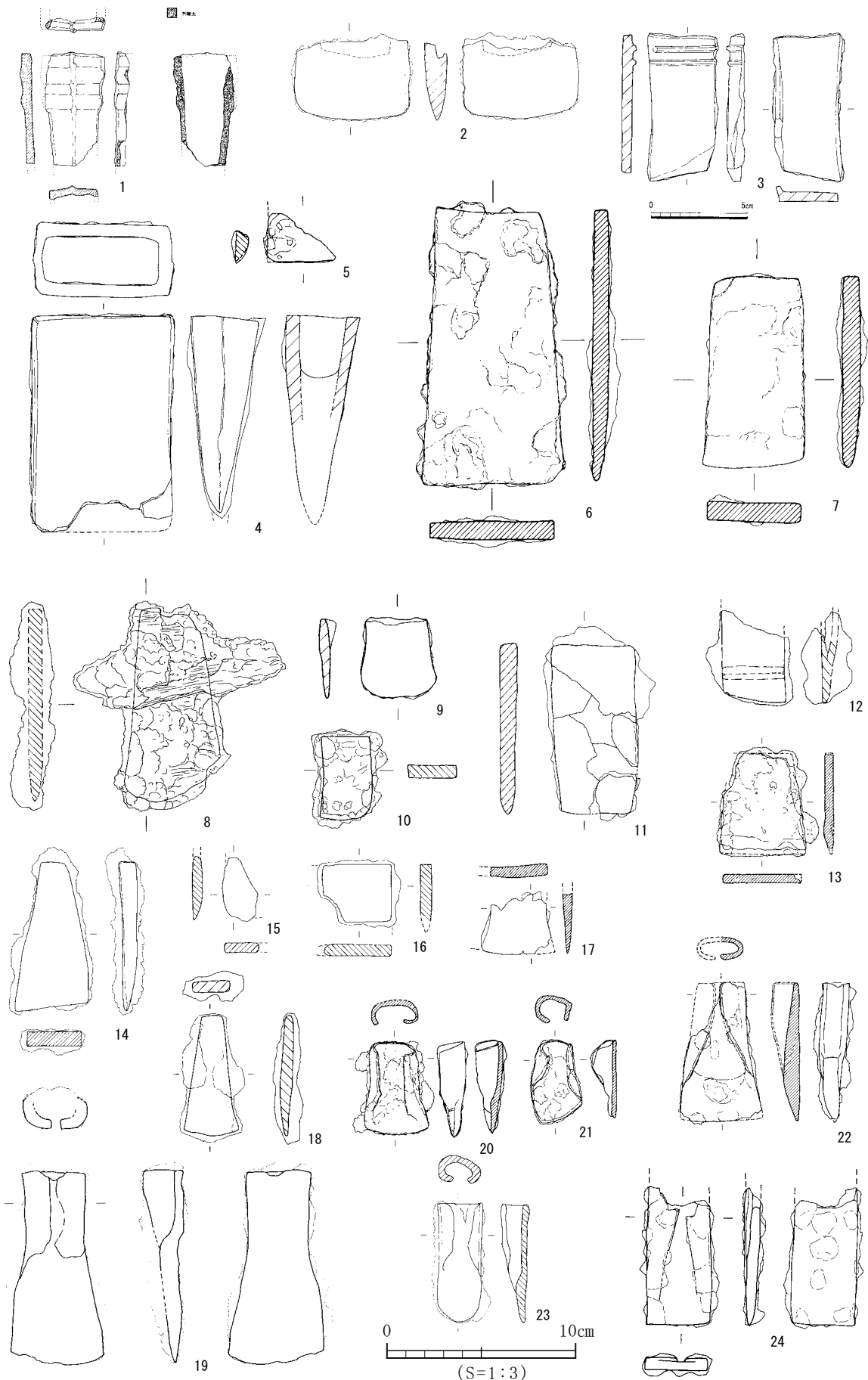


第1図 島根県弥生時代鉄器出土遺跡（番号は別表に対応）

別表 島根県における弥生時代鉄器出土一覧

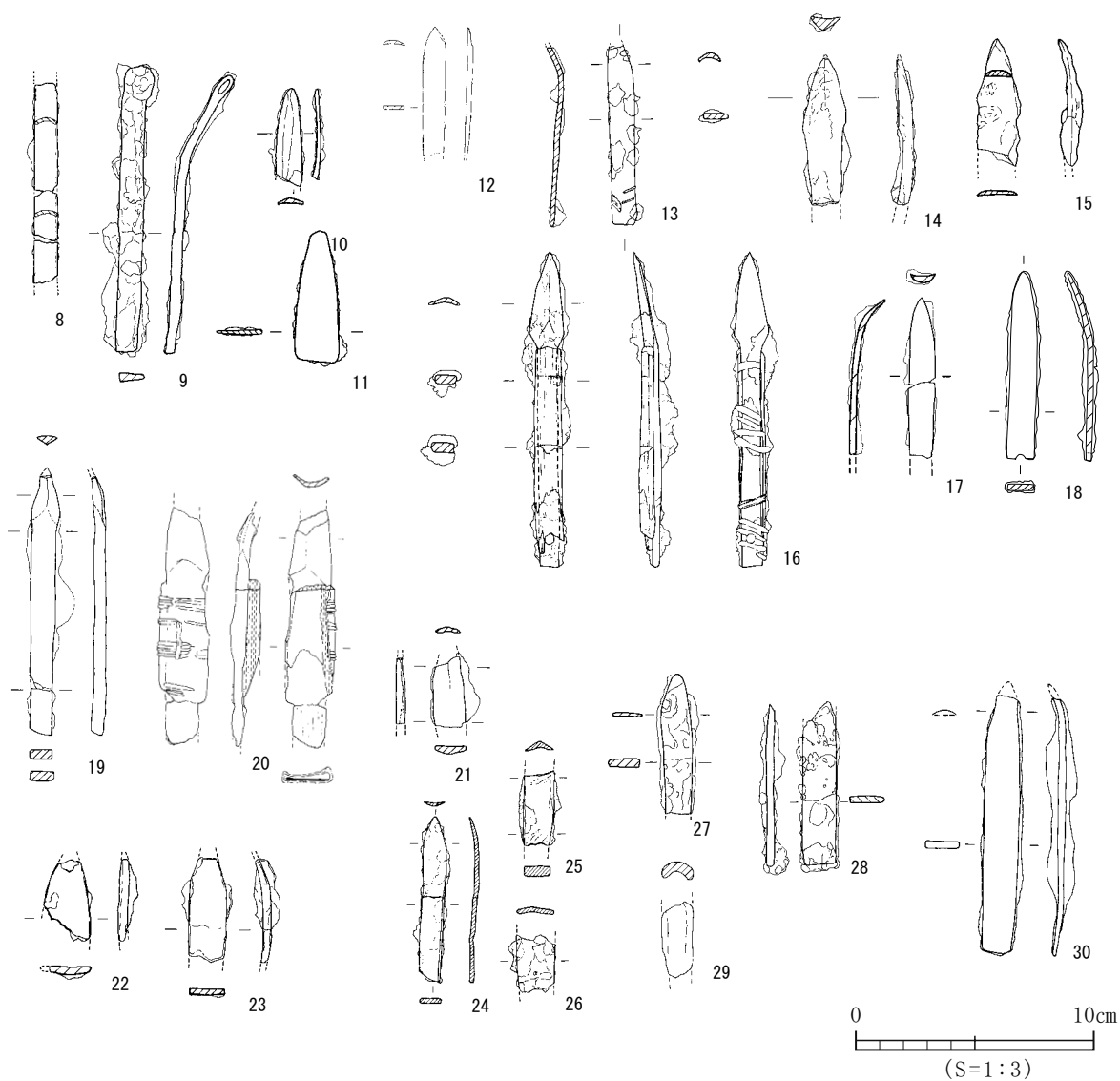
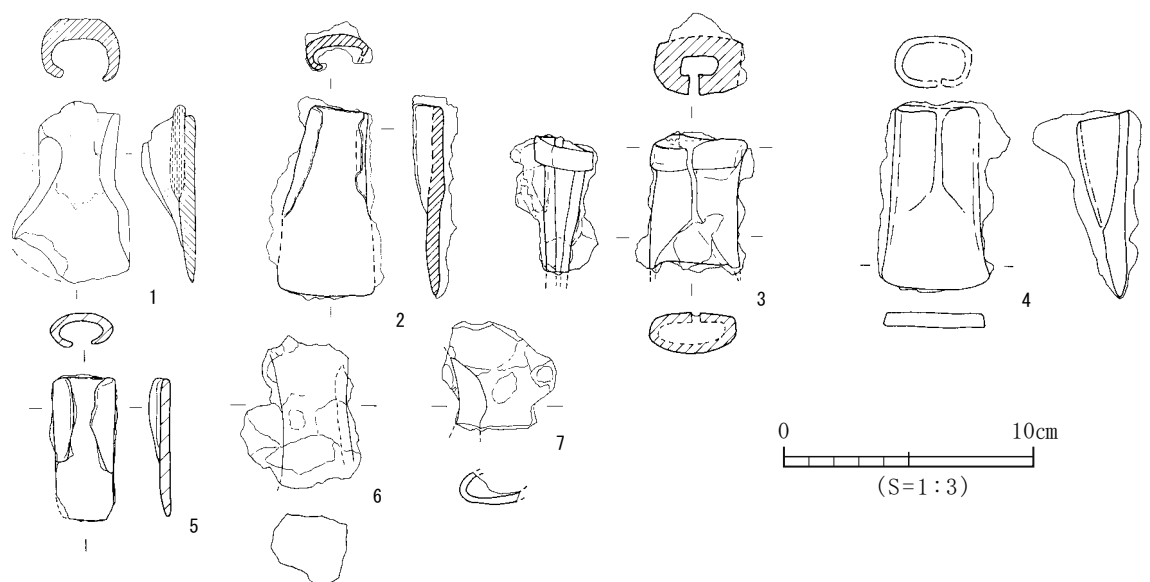
番号	遺跡名	所在地	遺構名	時期	鉄器器種								その他 (製品)	その他 (鉄片)	鉄器小計	備考	文献
					斧	鉋	刀子	鑿	鎌	鍬先	鉄鏝	玉作工具					
1	門生黒谷Ⅲ遺跡	安来市	I区S102	草田1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	鉄斧か?	池瀬・丹羽野1998
1	門生黒谷Ⅲ遺跡	安来市	I区S103	草田2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		池瀬・丹羽野1998
1	門生黒谷Ⅲ遺跡	安来市	I区S108	草田1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		池瀬・丹羽野1998
1	門生黒谷Ⅲ遺跡	安来市	I区S109	草田2	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	3		池瀬・丹羽野1998
1	門生黒谷Ⅲ遺跡	安来市	I区S112	草田2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		池瀬・丹羽野1998
2	柳遺跡	安来市	S101	草田5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		丹羽野他1998
2	柳遺跡	安来市	加工段2	草田3	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		丹羽野他1998
2	柳遺跡	安来市	加工段6	草田4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		丹羽野他1998
2	柳遺跡	安来市	S105	草田4	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		丹羽野他1998
2	柳遺跡	安来市	加工段22	草田4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1		丹羽野他1998
2	柳遺跡	安来市	加工段23	草田4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		丹羽野他1998
2	柳遺跡	安来市	加工段25	草田4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		丹羽野他1998
2	柳遺跡	安来市	加工段34	草田5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		丹羽野他1998
2	柳遺跡	安来市	加工段38	草田5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		丹羽野他1998
2	柳遺跡	安来市	階段状遺構	草田5	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	針1	丹羽野他1998
3	塩津山遺跡	安来市	加工段1	草田5	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2		丹羽野他1998
3	塩津山遺跡	安来市	加工段5	草田5	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1		増田2001
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	S101	草田5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	加工段04'06	草田5	0	0	0	0	1	1	1	0	0	0	3		丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	S102	草田3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1		丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	SK01	草田5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	S103	草田5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2		丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	加工段07	草田5	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	錐1、鉄片1	丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	S104	草田5	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2		丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	S105	草田5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	S109	草田5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	板状素材か	丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	S112	草田5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	S114	草田5	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2		丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	S115	草田5	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	S117	草田5	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	板状鉄器	丹羽野他1998
4	竹ヶ崎遺跡	安来市	加工段19	草田5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		丹羽野他1998
5	岩屋口北遺跡	安来市	S102	草田4	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		丹羽野1997
6	陽徳遺跡	安来市	S104	草田4	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		深田他1995
7	宮山Ⅳ号墓	安来市	第1主体部	草田5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	直刀	松本他2003
8	越峠遺跡	安来市	B区包含層	草田1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		池瀬2005
9	叶谷遺跡	安来市	1号住居跡	草田3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		西尾他1985
10	小汐手遺跡	安来市	Ⅱ区加工段3	草田3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		未報告
11	青垣神社横遺跡	安来市伯太町	不明	草田5?	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0	2		妹尾2003
12	西川津遺跡	松江市西川津町	包含層	中期?	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	内田1988	鍛造鉄斧
13	柴Ⅲ遺跡	松江市西川津町	S103	草田3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	玉作工房、鉄器片あり	昌子1997
14	平所遺跡	松江市矢田町	玉作工房跡	草田3	0	0	0	0	0	0	0	90	0	19	109		前島・松本1977
14	平所遺跡	松江市矢田町	溝状遺構	草田3	0	0	0	0	0	0	0	5	0	13	18		前島・松本1977
14	平所遺跡	松江市矢田町	1号住居跡	草田4	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	鑿1	前島・松本1977
15	石台遺跡	松江市東津田町	Ⅳ区S102	中期末	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		広江他1989
16	勝負遺跡	松江市東津田町	S103	草田3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	1	石斧あり	柳浦他1983
16	勝負遺跡	松江市東津田町	S104・SD07	草田3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	外周溝から出土	柳浦他1983
16	勝負遺跡	松江市東津田町	S103	草田2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	鉄鏝1が管玉と共に出土	川原2007
17	廻田遺跡	松江市乃木富町	S101	草田2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2		青木1988
18	角森遺跡	松江市八幡町	包含層	草田1～3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		瀬古1994
19	西持山山巻遺跡	松江市西持田町	SD01	草田1	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2	未報告	
20	田和山遺跡	松江市田和山町	環濠間	前期末～中期後半	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		瀬古他2005
21	勝負奥遺跡	松江市乃白町	S101	草田2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		瀬古2006
22	折原上堤東遺跡	松江市八雲町	S107	草田4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		川上1994
23	南講武草田遺跡	松江市鹿島町	CD-4区土器溜まり	草田6	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	組合せ式ヤス	赤澤1992
24	大膳岡山城跡	松江市鹿島町	S102	草田5期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	棒状鉄器1	江川2009
25	布志名大谷Ⅲ遺跡	松江市玉湯町	北区1号墓盛土下	草田3	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	2		錦田2001
26	山守免遺跡	松江市宍道町	I区S102	草田1	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1		原田他2000
27	屋敷古墳群	松江市宍道町	I区S101	草田2	0	2	1	0	0	0	1	0	0	0	4		宮本他2002
27	屋敷古墳群	松江市宍道町	I区遺構外	草田2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		宮本他2002
28	上野Ⅱ遺跡	松江市宍道町	S102	草田4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	鉄片2	久保田2001
28	上野Ⅱ遺跡	松江市宍道町	S106	草田4	0	4	0	0	0	0	1	0	0	5	10	鍛冶工房、端切れ多	久保田2001
28	上野Ⅱ遺跡	松江市宍道町	S107	草田4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	鍛冶工房、端切れ、素材	久保田2001
28	上野Ⅱ遺跡	松江市宍道町	S108	草田4	0	0	1	0	0	0	1	0	1	2	5	鍛冶工房、板状素材1	久保田2001
28	上野Ⅱ遺跡	松江市宍道町	S109	草田5	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	2	鍛冶工房、鉄片	久保田2001
28	上野Ⅱ遺跡	松江市宍道町	S112	草田5	0	1	0	0	0	0	1	0	0	1	3		久保田2001
28	上野Ⅱ遺跡	松江市宍道町	S115	草田4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	鉄片1	久保田2001
28	上野Ⅱ遺跡	松江市宍道町	加工段1	草田4	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	3	直刀?、鉄滓	久保田2001
28	上野Ⅱ遺跡	松江市宍道町	S105	草田5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	剣1	久保田2001
28	上野Ⅱ遺跡	松江市宍道町	遺構外	弥生後期・古墳中期	2	2	2	0	0	2	0	0	0	11	19	斧・鋤先未製品有り	久保田2001
29	板屋Ⅲ遺跡	飯南町	12号竪穴住居跡	草田5	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2		角田1998
29	板屋Ⅲ遺跡	飯南町	西区S101	草田5	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1		原田2003
29	板屋Ⅲ遺跡	飯南町	西区S103	草田5	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	3		原田2003
29	板屋Ⅲ遺跡	飯南町	西区S106	草田5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	鍛冶具か?	原田2003
29	板屋Ⅲ遺跡	飯南町	西区S108	草田5	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	鍛冶具か?	原田2003
29	板屋Ⅲ遺跡	飯南町	第1黒色土	弥生後期	0	0	1	0	0	0	2	0	0	5	8	無基式2、素材?5	原田2003
30	的場尻遺跡	飯南町	S101	草田6	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	3	摘鎌	山崎1998
31	森Ⅱ遺跡	飯南町	S101	草田5	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3		山崎2009
32	森Ⅲ遺跡	飯南町	S103	草田3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1		山崎2009
33	森Ⅴ遺跡	飯南町	S101	草田1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		山崎2001
33	森Ⅴ遺跡	飯南町	S105	草田1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	3		山崎2001
34	森Ⅵ遺跡	飯南町	S102	中期末	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2		山崎2009
34	森Ⅵ遺跡	飯南町	S103	中期末	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2		山崎2009
34	森Ⅵ遺跡	飯南町	S105	中期末	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		山崎2009
34	森Ⅵ遺跡	飯南町	S106	草田5	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	3		山崎2009

番号	遺跡名	所在地	遺構名	時期	鉄器器種								その他 (製品)	その他 (鉄片)	鉄器小計	備考	文献
					斧	鋤	刀子	鑿	鎌	鋸先	鉄鏝	玉作工具					
34	森VI遺跡	飯南町	SI07	中期末	0	0	0	0	2	0	0	0	2	1	5	摘鎌2	山崎 2009
34	森VI遺跡	飯南町	SI08	中期末	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	2		山崎 2009
34	森VI遺跡	飯南町	SI09	草田4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		山崎 2009
34	森VI遺跡	飯南町	SI11	草田4	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	2	刺突具? 釣針?	山崎 2009
35	門遺跡	飯南町	SI24	草田4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		内田 1996
35	門遺跡	飯南町	SI33	草田1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2		内田 1996
35	門遺跡	飯南町	SI34	草田1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	棒状素材1	内田 1996
36	垣ノ内遺跡	雲南市木次町	SI13	中期末	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	鋳造鉄斧片	増田 2003
36	垣ノ内遺跡	雲南市木次町	包含層	不明	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	板状鉄斧	増田 2003
37	原田遺跡	雲南市木次町	2区包含層(3層)	草田1～5	1	0	1	0	0	0	0	0	0	1	3		勝部 2006
38	平田遺跡	雲南市木次町	3区堅穴住居跡	草田6	1	1	0	1	0	0	5	0	8	26	42	鍛冶工具、不明鉄器8、小鉄片26	坂本 2000
39	北原本郷遺跡	雲南市木次町	SI05	草田5	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		東山他 2005
39	北原本郷遺跡	雲南市木次町	SI06	草田1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		東山他 2005
39	北原本郷遺跡	雲南市木次町	8区SI05	草田2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1		東山他 2005
40	国竹遺跡	奥出雲町	土器溜まり	中期末	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		田中・石田 2000
41	西谷3号墓	出雲市	第4主体部	草田3期	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1		渡辺 1993
42	古志本郷遺跡	出雲市	SI07	中期末	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	棒状鉄器1	平石 1999
42	古志本郷遺跡	出雲市	K区SI03	草田1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		守岡 2003
43	山持遺跡	出雲市	Ⅲ-1区SK01	草田1	0	1	1	0	0	0	0	0	0	0	2		池淵 2007
44	青木遺跡	出雲市	12号墓	草田6	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1		松尾他 2006
45	中野清水遺跡	出雲市	Ⅷ区4層	中期中葉～後葉	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		内田 2004
45	中野清水遺跡	出雲市	Ⅳ区3層	後期前葉	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	磨製石鏃模倣か	内田 2004
45	中野清水遺跡	出雲市	7区14層上面5号溝	草田6～7	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1		角田 2006
45	中野清水遺跡	出雲市	4区14層	弥生中期～古墳前期	0	2	0	0	0	0	1	0	0	2	5		角田 2006
45	中野清水遺跡	出雲市	5・6区14層	弥生後期～古墳前期	1	1	0	0	0	0	1	0	0	2	5		久保田 2005
46	知井宮多聞院貝塚	出雲市	貝塚	不明	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1		大塚 1963
47	鳥井南遺跡	大田市	大神地区SB06	草田3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	未報告	
47	鳥井南遺跡	大田市	大神地区SB06	草田3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	未報告	
47	鳥井南遺跡	大田市	狼段原地区SB02	草田3	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	未報告	
47	鳥井南遺跡	大田市	狼段原地区SB06	草田3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	未報告	
47	鳥井南遺跡	大田市	大溝	草田3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	2	未報告	
47	鳥井南遺跡	大田市	包含層	草田3	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	未報告	
48	高津遺跡	江津市	堅穴住居11	草田6	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		梅本 2005
49	波来浜遺跡	江津市	B区2号墓	草田1	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	3		門脇 1973
50	沖丈遺跡	美郷町	SI01	草田3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1		牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI16	草田3	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	ヤス? 1、鉄片1	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI02	草田4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	鉄片	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI14	草田4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	板状鉄斧	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI20	草田4	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	刀身片?	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI06	草田5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	鉄片1	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI15	草田5	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	ヤス1、三角形鉄片1	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI17	草田5	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	3		牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI18	草田5	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	鉄鏝未成品1	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI21	草田5	0	0	2	0	0	0	0	0	1	2	5	鑿1、不明鉄器2	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI04	草田6	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3	ヤス? 1、鉄片2	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI05	草田6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI08	草田6	0	1	0	0	0	0	0	0	1	4	6	ヤス1、鉄片4	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI09	草田6	0	0	1	0	0	0	1	0	1	0	3	ヤス? 1	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI10	草田6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	鉄片1	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI12	草田6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	鉄片1	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI13	草田6	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	SI19	草田6	0	0	0	0	0	0	1	0	1	2	4	ヤス? 1、鉄片2	牧田 2001
50	沖丈遺跡	美郷町	包含層	草田3～6	1	2	1	1	0	0	4	0	0	23	32	鍛冶関連遺物多数	牧田 2001
51	清源那遺跡	邑南町	A区SI01	草田5?	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1		原他 2001
52	野田西遺跡	邑南町	堅穴住居跡群	草田4～5	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0	3	鋳造鉄斧、未報告	
53	湯谷悪谷遺跡	邑南町	堅穴住居跡	草田2	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	未報告	
54	道休畑遺跡	浜田市	堅穴住居3	草田4	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	3	刺突具2	柳浦 2010
54	道休畑遺跡	浜田市	堅穴住居4	草田5	0	0	1	0	0	0	0	0	2	3	6	刺突具1、針状鉄器1	柳浦 2010
54	道休畑遺跡	浜田市	堅穴住居11	草田3期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	棒状鉄器1	柳浦 2010
54	道休畑遺跡	浜田市	堅穴住居13	草田3期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	棒状鉄器1	柳浦 2010
54	道休畑遺跡	浜田市	堅穴住居14	草田1～2期	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	摘鎌	柳浦 2010
54	道休畑遺跡	浜田市	堅穴住居15	草田3期	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	刺突具1	柳浦 2010
54	道休畑遺跡	浜田市	堅穴住居15	草田3期	0	0	0	0	0	0	0	0	2	11	13	刺突具2	柳浦 2010
54	道休畑遺跡	浜田市	貯蔵穴2	草田5期	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	2	針1	柳浦 2010
54	道休畑遺跡	浜田市	貯蔵穴3	草田5期	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	針1	柳浦 2010
54	道休畑遺跡	浜田市	包含層	弥生後期	1	0	0	0	0	0	0	0	2	4	7	摘鎌1、ヤス1	柳浦 2010
55	堂ノ上遺跡	益田市	I区SX01	弥生後期?	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		宮本 2010
55	堂ノ上遺跡	益田市	Ⅲ区	弥生後期	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1		宮本 2010
55	堂ノ上遺跡	益田市	Ⅳ区SI03	後期前葉～中葉	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	複数製品が付着	宮本 2010
56	大陰遺跡	津和野町	6区SI4	後期後葉	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		宮田 2010
56	大陰遺跡	津和野町	8区SI11	後期後葉	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1		宮田 2010
56	大陰遺跡	津和野町	8区SI2	後期後葉	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1		宮田 2010
56	大陰遺跡	津和野町	8区SI3	後期後葉	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1		宮田 2010
56	大陰遺跡	津和野町	8区SI4	後期前葉～中葉	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		宮田 2010
56	大陰遺跡	津和野町	8区SI5	後期前葉～末	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	2		宮田 2010
56	大陰遺跡	津和野町	8区SI8	後期末～古墳初頭	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		宮田 2010
57	沖場遺跡	吉賀町	SI02	草田5	1	0	0	0	0	0	1	0	0	1	3		水津 2000
57	沖場遺跡	吉賀町	SI08	草田5	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1		水津 2000
57	沖場遺跡	吉賀町	SI09	草田5	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1		水津 2000
57	沖場遺跡	吉賀町	SI11	草田5	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2		水津 2000
58	前立山遺跡	吉賀町	SI11	草田4～5	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1		内田 1981
58	前立山遺跡	吉賀町	SI17	草田2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1		内田 1981
59	タヤ遺跡	西ノ島町	B区堅穴建物跡	草田5～6	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	2		柚原 2000
小 計					37	38	31	5	13	6	52	99	39	204	524		



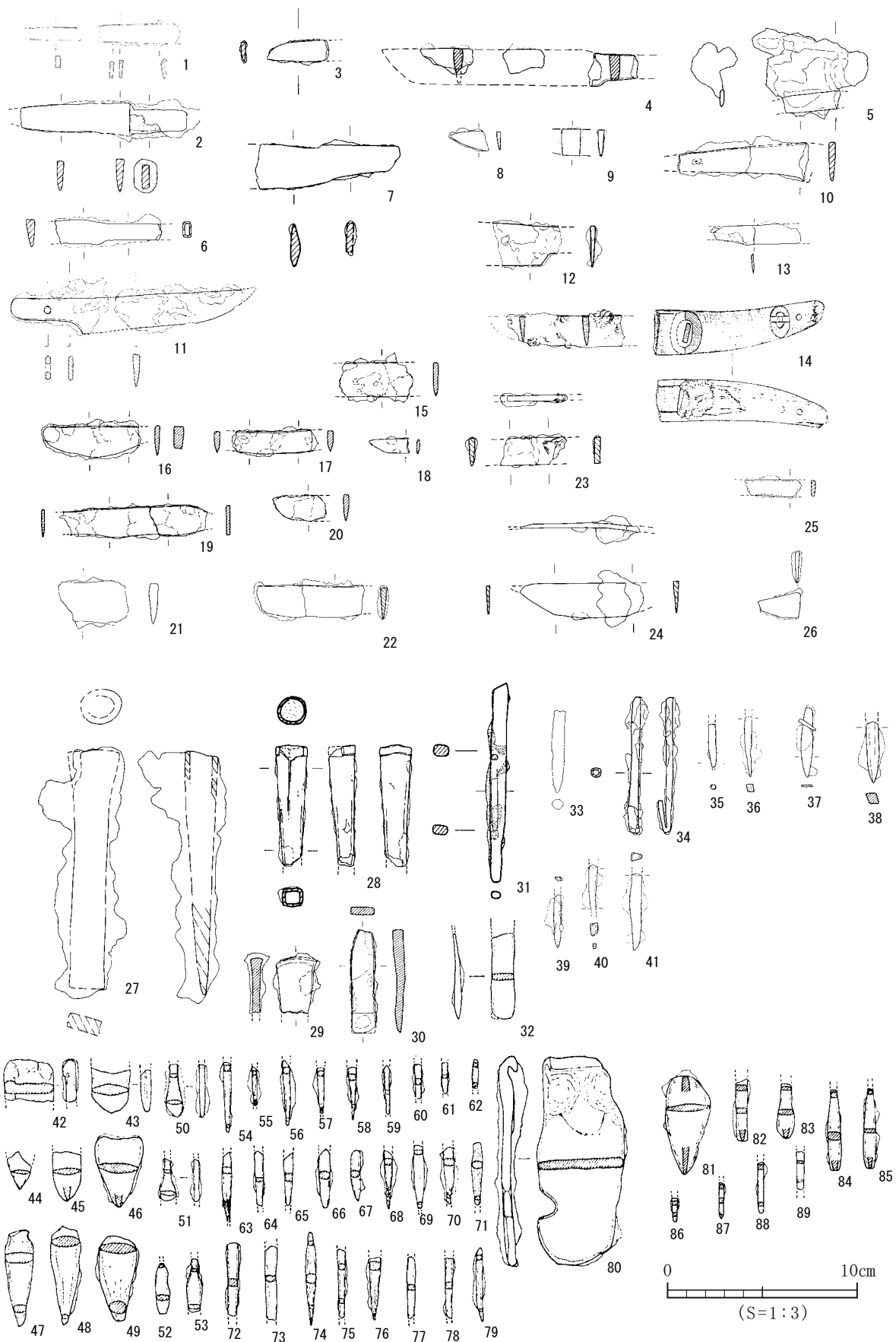
第2図 島根県弥生時代鉄器 (1) S=1/3

1: 西川津、2・9: 垣ノ内、3: 越峠、4: 中野清水、5: 上野Ⅱ、6・7: 国竹、8・10: 森Ⅵ、11: 柳、12: 沖場、13: 沖丈、14: 原田、15・16・23: 竹ヶ崎、17: 道休畑、18: 陽徳、19: 田和山、20~22: 沖丈、24: 北原本郷



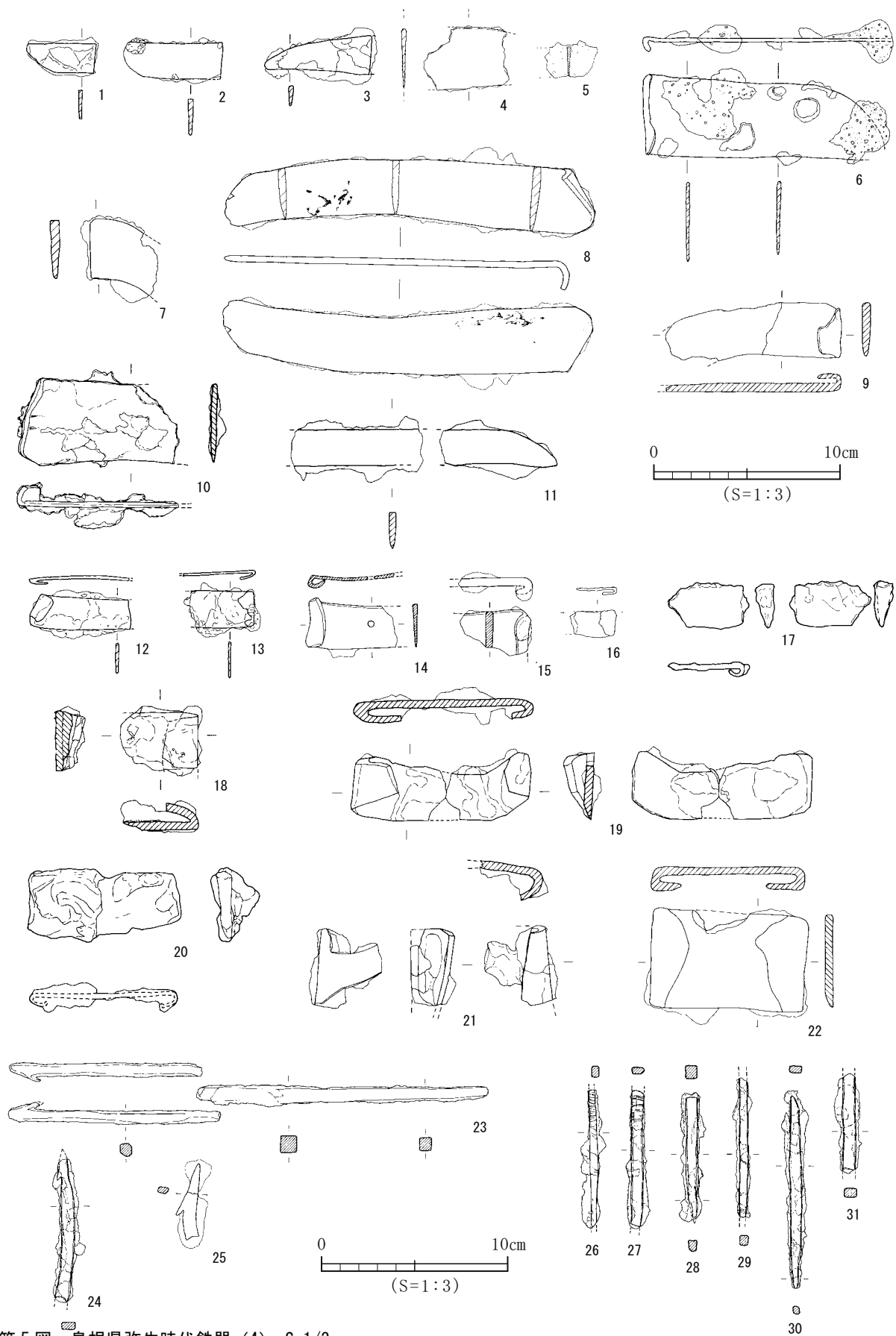
第3図 島根県弥生時代鉄器(2) S=1/3

1: 竹ヶ崎、2: 板屋Ⅲ、3・22・23: 中野清水、4・30: 沖場、5: 陽徳、6・7: 堂ノ上、8: 前立山、9・10・27・28: 森Ⅵ、11: 森Ⅴ、12: 山持、13: 古志本郷、14: 屋敷、15: 角森、16: 勝負奥、17・18: 大陰、19・21: 柳、20・29: 竹ヶ崎、24~26: 沖丈



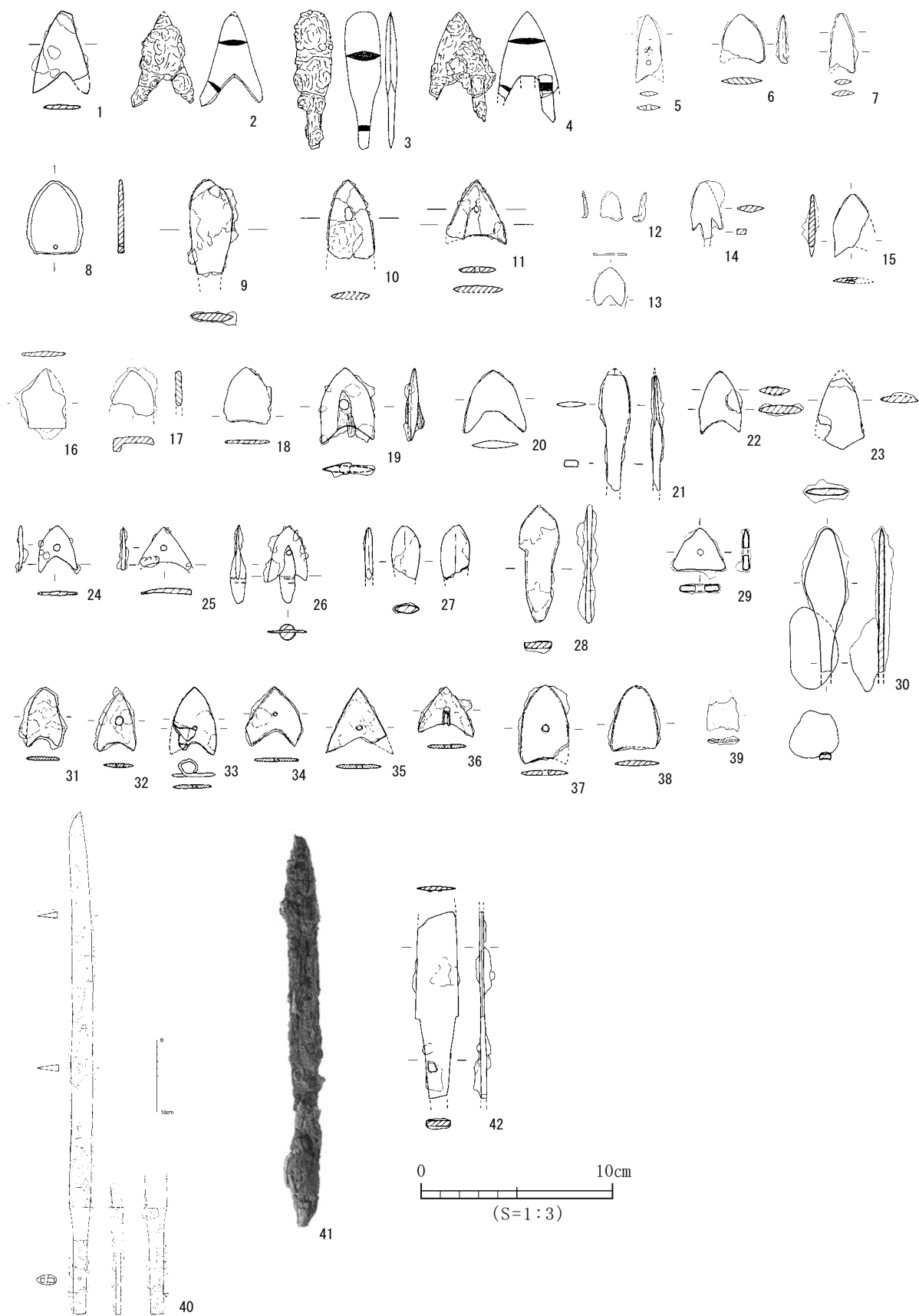
第4図 島根県弥生時代鉄器 (3) S=1/3

1: 山持、2: 門生黒谷Ⅲ、3: 屋敷、4・33: 勝負、5・21: 堂ノ上、6・35: 竹ヶ崎、7: 塩津山、8・9・12: 大陰、10・25: 板屋Ⅲ、11: 青木、13・36~41: 道休畑、14: 知井宮多聞院、15~20・29・30: 沖文、31: 清源那、32・42~89: 平所、34: 森Ⅵ、27: 沖場、28: 中野清水



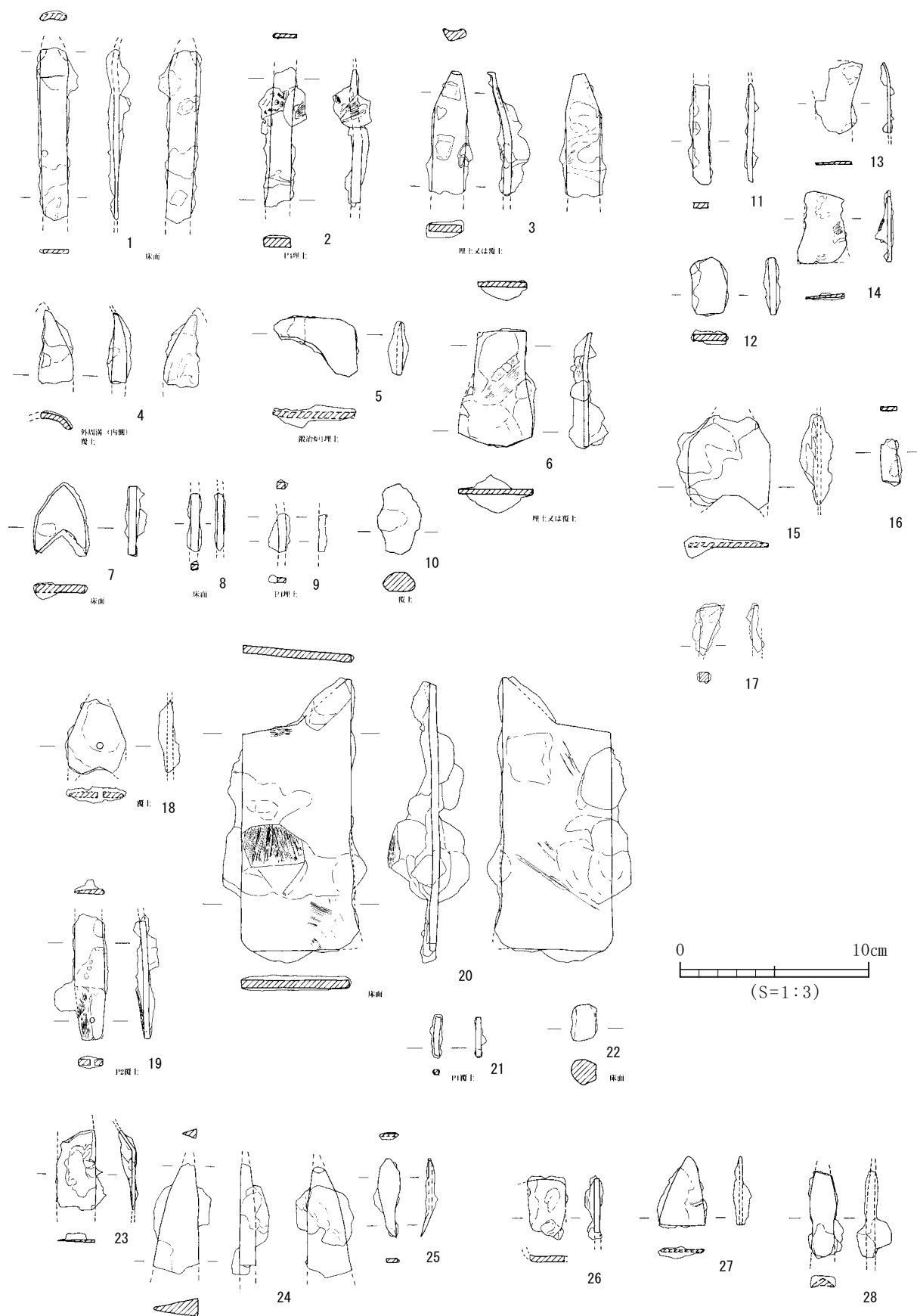
第5図 島根県弥生時代鉄器 (4) S=1/3

1～3・12・13：森Ⅵ、4：山守免、5：門、6：森Ⅲ、7：柳、8：前立山、9・22：竹ヶ崎、10：板屋Ⅲ、11：タヤ、
14・15・25：道休畑、16：の場尻、17・20：青垣神社横、18・19・21：上野Ⅱ、23：南講武草田、24・26～31：
沖丈



第6図 島根県弥生時代鉄器 (5) S=1/3、1/8 他

1: 森Ⅵ、2~4: 波来浜、5~7: 門生黒谷Ⅲ、8・27・28: 中野清水、9: 屋敷、10・11: 布志名大谷Ⅲ、12・14: 柳、13: 的場尻、15: 岩屋口北、16~18: 竹ヶ崎、19: 北原本郷、20・21: 沖場、22・23: 塩津山、24~26: 森Ⅱ、29・30: 大陰、31~36: 沖丈、37・38: 板屋Ⅲ、39: 門、40: 宮山Ⅳ号、41: 西谷3号、42: 上野Ⅱ



第7図 島根県弥生時代鉄器(6) S=1/3

1～10: 上野Ⅱ SI06、11～14: 上野Ⅱ SI07、15・16: 上野Ⅱ SI09、17: 上野Ⅱ SI15、18～22: 上野Ⅱ SI08、23～25: 上野Ⅱ 加工段1、26～28: 上野Ⅱ SI12



第8図 島根県弥生時代鉄器 (7) S=1/3
1～42：平田3区竪穴建物跡、43～68：沖丈

出雲の子持壺集成

池淵 俊一

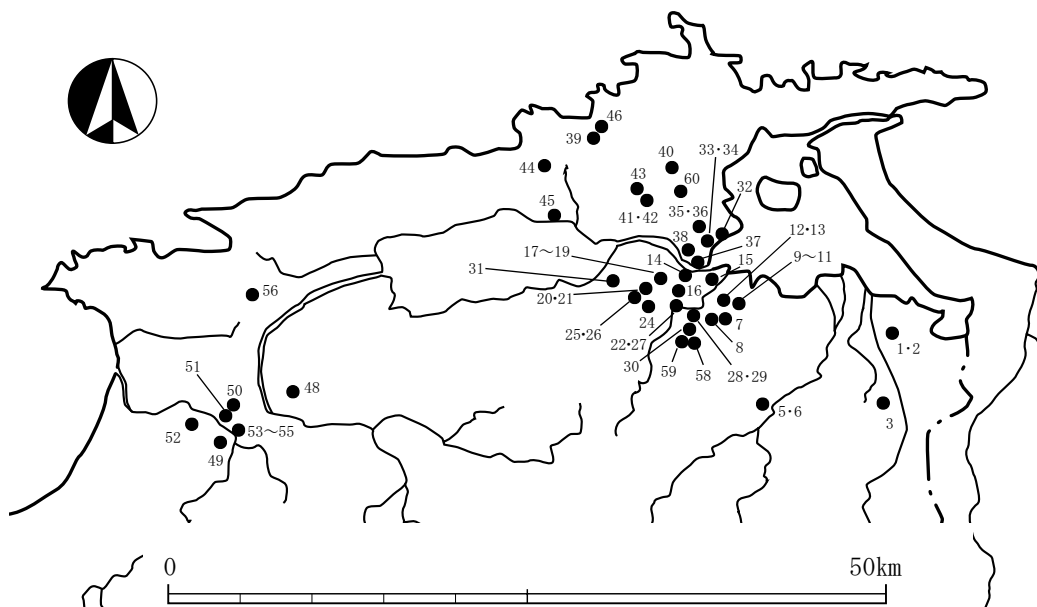
はじめに

須恵器子持壺とは装飾付須恵器の一種で、親壺と呼ばれる壺又は甕にミニチュアの壺・甕等の容器を数個体取り付けた装飾性の高い須恵器のことを指す。今回の集成対象としたのは出雲部出土の須恵器子持壺で、その大半は所謂出雲型子持壺と称されるものである。また、親壺が壺ではないが出雲型子持壺と密接な関係を持つ子持甕等についても関連資料として集成対象とした。なお、誌面の都合上、多量に出土した遺構については、全資料を掲載せず代表的事例を載せるにとどめたものもある。掲載順については、便宜的に旧郡単位で掲載した。

1. 研究略史

最初に出雲型子持壺に注目したのは山本清（山本1960）である。山本は山陰の須恵器の地域色を論ずる中で子持壺を取り上げ、円筒埴輪との関連性などその後の研究の核となる重要な論点をこの段階において既に提起している。その後岡崎雄二郎による集成を経て（岡崎1983）、昌子寛光によって出雲型子持壺という名称が初めて提唱され、脚部が裾広がり装飾性の高いタイプから円筒形を呈するタイプへの変遷が示された（昌子1987）。その後、山田邦和が全国の装飾付須恵器をまとめる中で出雲型子持壺について触れているが、基本的には昌子と同様な変遷観に基づいている（山田1989）。

1993年には柳浦俊一が山陰の子持壺を集成し、底抜けの有脚Ⅳ類と長胴丸底の無脚Ⅱ類を出雲型子持壺として再定義した。編年については、昌子らによる従来の脚部等の変遷観を批判し、子壺と親壺の接合法や親壺の相対的大きさをメルクマールとし、新古に区分した。柳浦の編年観は、その後の須恵器編年の整備（大谷1994）による共伴須恵器の見直し等の課題はあるものの、概ね妥当である。特に子



第1図 子持壺出土遺構位置図（出雲部）

壺の接合法に着目した点は、単に編年の問題だけではなく、出雲型子持壺の本質を考える上で重要な視座を提示した意味で特筆される。その後、佐古和枝は共伴須恵器の年代観に基づき、出雲型子持壺の変遷をⅠ～Ⅳ期に分けてその変遷を示したが、祖形や系譜の認定及びその変遷観に課題を残した（佐古1994）。

筆者は2004年に柳浦らの業績に基づいたうえ、出雲型子持壺のうち有脚Ⅳ類について検討を行い、3型式に大別したうえ4期に編年した。また地域性や製作地の検討を行うとともに、型式変遷の各画期における背景について、認知的側面から言及した（池淵2004）。同年には山内英樹が出雲型子持壺と円筒埴輪について主として製作技法の観点から検討を行い、両工人の情報交換があった可能性を指摘している（山内2004）。

2. 子持壺の大別と型式分類

出雲出土の子持壺の大別 子持壺の大別分類は、基本的には柳浦分類に従う。すなわち、子持壺を有脚と無脚とに大別し、有脚をⅠ～Ⅳ類、無脚をⅠ、Ⅱ類に細別する。このうち出雲型子持壺は親壺の底が無い有脚Ⅳ類と無脚で単独で使用された無脚Ⅱ類に該当し、出雲出土の子持壺はほぼこの2型式に限定される。それ以外では山代二子塚古墳で親壺の底を有する有脚Ⅲ類と古曾志大谷1号墳で器台とセットで使用される無脚Ⅰ類が知られているのみである。

表1 子持壺出土遺跡一覧（出雲部：子持壺を含む）

番号	遺跡名	所在地	形式 (柳浦1993)	子壺接合法 (柳浦1993)	型式分類 (池淵2004)	共伴土器 (大谷1994)	備 考	文 献
1	臼コクリ S-2号横穴墓	安来市佐久保町	有脚Ⅳ類	b・c	C型	大谷4	子壺のみ	今岡編1994
2	臼コクリ N-5号横穴墓	安来市佐久保町	有脚Ⅳ類	b	C型	大谷4		今岡編1994
3	大塚横穴	安来市大塚町	有脚Ⅳ類	a	C型	—	口縁部欠落	山本1960
4	伯太町出土	安来市伯太町	有脚Ⅳ類	a	B型	—	脚部欠損	大谷1989
5	かわらけ谷4号横穴墓	安来市植田町	有脚Ⅳ類	b	C型			松尾編2001
6	かわらけ谷5号横穴墓	安来市植田町	有脚Ⅳ類	b	C型	大谷4～5	突帶有	松尾編2001
7	オノ峠古墳	八東郡東出雲町	有脚Ⅳ類	b	C型		突帶有	浅沼編1988
8	内馬池2号横穴墓	八東郡東出雲町	有脚Ⅳ類	b	C型	大谷4～6		石井1978
9	長廻遺跡	八東郡東出雲町	有脚Ⅳ類	b	C型			原田他編1993
10	島田池1区3号横穴墓	八東郡東出雲町	有脚Ⅳ類	b	C型	大谷5～6a		原田編1997
11	島田池6区15号横穴墓	八東郡東出雲町	有脚Ⅳ類	b	C型	大谷3～4		原田編1997
12	古城山4号横穴墓	八東郡東出雲町	有脚Ⅳ類	b	C型	大谷5～6a	子壺のみ	石井編2008
13	古城山横穴墓群大溝	八東郡東出雲町	無脚Ⅱ類	b			円筒埴輪、須恵器大甕と共伴	石井編2008
14	手間古墳	松江市竹矢町	有脚Ⅳ類	a	B型	大谷3	大井出土品の伝承あり	島根大学考古学研究会1995、島根大学考古学研究室2002
15	の場横穴墓	松江市竹矢町	有脚Ⅳ類	b	C型			山本1960
16	団原古墳	松江市山代町	有脚Ⅳ類	b	C型	大谷4		西尾編1989
17	狐谷2号横穴墓	松江市山代町			C型		脚部のみ	横山編1977
18	狐谷7号横穴墓	松江市山代町			C型	大谷6	脚部のみ	横山編1977
19	狐谷10号横穴墓	松江市山代町		b		大谷3～4	子壺のみ	横山編1977
20	山代方墳	松江市山代町	有脚Ⅳ類	b・c	C型			岡崎1983、池淵他編1993
21	山代二子塚古墳	松江市山代町	有脚Ⅲ類、有脚Ⅳ類	b・c	C型	大谷3		渡辺1983、丹羽野他編1992、広江編2001、池淵編2001
22	岩屋後古墳	松江市大庭町		b	C型	大谷4	子壺のみ	横山他編1978
23	大庭町有出土	松江市大庭町		b	C型		子壺のみ	柳浦1993
24	東瀬寺古墳	松江市大庭町	有脚Ⅳ類	b	C型	大谷3		曳野他1989、池淵2004
25	向山1号墳	松江市大庭町	有脚Ⅳ類	b・c	C型	大谷4		瀬古編1998
26	向山2号墳	松江市大庭町	有脚Ⅳ類	b・c	C型	大谷4～		瀬古編1998
27	岡田山1号墳	松江市大草町	無脚Ⅱ類	b		大谷3	子持蓋を伴う	松本編1987
28	安部谷古墳群	松江市大草町		a			表面採集、子壺のみ	柳浦1993
29	安部谷第1横穴墓群	松江市大草町	有脚Ⅳ類			大谷4～5	脚部のみ	山本1975
30	大谷古墳	松江市八雲町		c			子壺のみ	柳浦1993
31	二子塚古墳	松江市乃木町		c		大谷2～3	子壺のみ 子持壺でない？	岡崎他編1983
32	大井山津竈跡	松江市大井町	有脚Ⅳ類		C型		表面採集、脚部のみ	池淵2004、藤原編2006
33	大井岩沙竈跡1号竈	松江市大井町	無脚Ⅱ類？			大谷3～5	山代二子塚古墳例に類似	秦編2009
34	大井岩沙竈跡SX01	松江市大井町	有脚Ⅳ類	b・c	C型	大谷3～5	子壺二子塚古墳例に類似品あり	秦編2009
35	薦沢B遺跡	松江市大井町		b			親壺のみ	岡崎他編1988
36	池の奥1号墳	松江市大井町	有脚Ⅳ類	b	C型	大谷4～5期		中尾他編1990
37	魚見塚古墳	松江市朝酌町	有脚Ⅳ類					渡辺1986
38	朝酌岩屋古墳	松江市朝酌町					子壺？	
39	堀部5号墳	松江市鹿島町	有脚Ⅳ類		A型			柳浦1993・赤澤2008
40	日吉垣の内古墳	松江市西持田町		b？			子壺のみ	島根大学考古学研究会1979
41	菅田9号横穴墓	松江市菅田町		b		大谷4～5	子壺のみ	広濱編2005
42	菅田19・20・22号横穴墓	松江市菅田町	有脚Ⅳ類	b・c	C型	大谷5～	下層から出雲7・8期の長頸壺	広濱編2005
43	岡田薬師古墳	松江市法吉町	有脚Ⅳ類	a	A型	大谷3	親壺口縁部欠損、子持蓋有	丹羽野編1986
44	牛切古墳	松江市西谷町	有脚Ⅳ類	a	A型	大谷3		柳浦1993
45	古曾志大谷1号墳	松江市古曾志町	無脚Ⅰ類			大谷1		足立他編1989
46	講武向山古墳	松江市鹿島町	有脚Ⅳ類	a	A型		子持蓋有	赤澤編1988、赤澤2008
47	三刀屋町出土	雲南市三刀屋町					子壺	山本1960
48	出西子丸1号墳	鏡川郡斐川町	有脚Ⅳ類	b	C型			山本1960
49	小坂古墳	出雲市馬木町		b		大谷4		柳浦1993
50	上塩冶築山古墳	出雲市上塩冶町	有脚Ⅳ類	d		大谷3～4	複数タイプ、C型模倣	川上編1986、三原編2004
51	築山遺跡	出雲市上塩冶町	有脚Ⅳ類	d			親壺片	原編2009
52	天神原古墳	出雲市下古志町		d			親壺片、脚部片	西尾編1980
53	三田谷Ⅰ遺跡	出雲市上塩冶町	有脚Ⅳ類	a・d			親壺片、子壺	島谷編2000
54	三田谷Ⅱ遺跡	出雲市上塩冶町		a			親壺片、子壺のみ	島谷編1994
55	三田谷Ⅲ遺跡	出雲市上塩冶町	有脚Ⅳ類	b・d	C型	大谷4～5	2区包含層出土	伊藤編2000
56	中村1号墳	出雲市国富町	有脚Ⅳ類	b	C型	大谷4		未報告
57	島根大学蔵			a			子壺	柳浦1993
58	増福寺20号墳	松江市八雲町	子持壺	b		大谷1		宮本編1982
59	前田遺跡	松江市八雲町	子持壺	b			子壺、増福寺20号と接合	川上編2001
60	八色谷4号墳	松江市上東川津町	子持壺	b		大谷1～2		柳浦他編993

出雲型子持壺の型式分類 出雲型子持壺の型式分類については各論者の案があるが、ここでは便宜的に筆者が提示した分類を使用する。筆者は有脚Ⅳ類について属性分析を行い、各属性の相関関係から、主として口縁形態を指標に概ね以下の3型式に大別した。

A型（島根型；第2図） 坏身状の口縁で通常蓋を伴う。親壺スカシ・突帯はない。脚部区分帯、スカシは脚部下半部に集中し、上半部にはスカシを穿たない。子壺は口縁部、頸部、胴部の境界が明瞭な壺形で、5、6個を配す。子壺と親壺との接合法は親壺を削り抜き底のない子壺を接合する柳浦A手法に限定される。

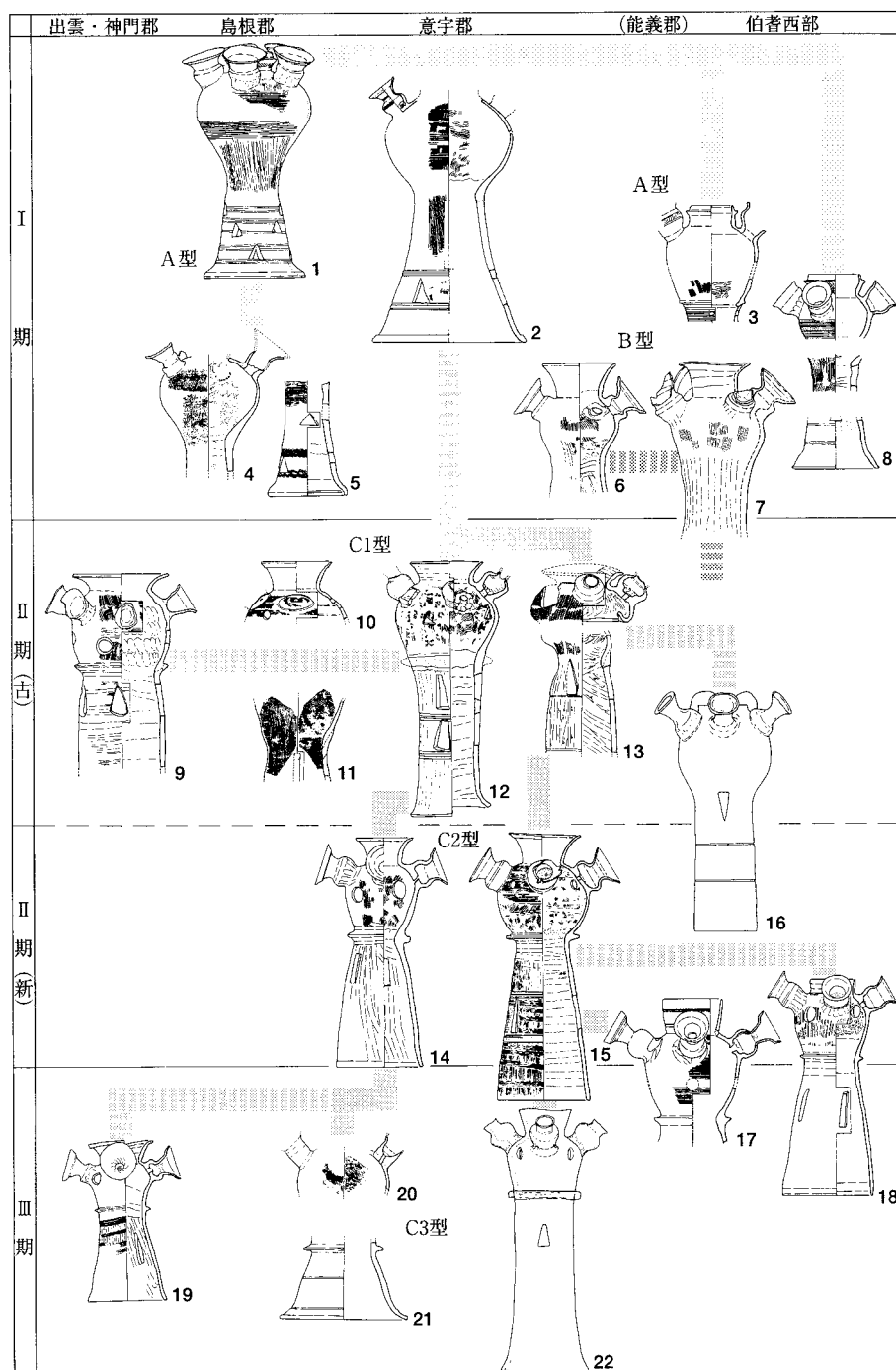
B型（能義型；第2図）

口縁部が長く外反するタイプで、親壺スカシ・突帯はない。脚部は無文でスカシをもたない。子壺の数、形態、接合法はA型と同じ。

C型（意宇型；第2図）

口縁が段状又は直立するタイプで、親壺スカシ・突帯を備えるものが多い。脚部区画は均等3区分ないし2区分で、上・中段にスカシを穿ち下段はスカシがない。脚部には区画の沈線を除き文様がない。子壺は明瞭な壺形のものが大半だが、単純口縁タイプや筒状のものも存在する。子壺の数は4個配置が多い。子壺接合法は底のある子壺を接合後、上から穿孔する柳浦氏のB手法が大半でA手法はない。

なお、C型については各属性とも多くのバリエーションがあり、細分が可能である。ここでは親壺スカシが無いタイプを含み子壺が5個以上配置するものをC1型、



第2図 出雲型子持壺編年図 (S = 1/16)

1: 講武向山、2: 山代二子塚、3: 御所原所在、4・5: 岡田薬師、6: 手間、7: 宗像1号、8: 長者ヶ平、9: 上塩冶築山、10・11: 東淵寺、12 団原、13: 島田池6区15号、14: 向山1号、15: 島田池1区3号、16: 大塚、17: 観音寺、18: 上野、19: 出西子丸、20・21: 山代方墳、22: 的場

親壺スカシが円形に統一され、子壺を4個配置するタイプをC2型、子壺の退化が進行し、親壺の張りが弱く脚部に円形スカシを採用し、子壺接合部の穿孔が貫通しないなど、粗雑化・形骸化が進行したタイプをC3型と呼称しておく。石棺式石室編年研究の成果から、これらはC1→C2→C3という前後関係で把握することが可能である。

3型式の関係 3型式の関係について簡略に述べておく。まずA型とB型の関係であるが、A・B型は子壺接合に柳浦A手法を用い、親壺スカシ・突帯がないなど多くの共通点をもつ一方、B型は脚部にスカシ・区画文様帯を持たない点でA型とは明らかに異なる。現状では若干A型が先行することから、B型は時期的に重複しつつもA類から派生した型式と考えられる。

C型の成立を考える上で重要な資料は山代二子塚古墳資料である（第5図1～19）。脚部のスカシ配置に注目すると、山代二子塚資料の脚部は上段及び下段の両方にスカシを備えている。通常A型の脚部スカシは下半に限定される一方、C型は上段のみに認められる。このように、山代二子塚資料はA型とC型の橋渡しの位置にあるといえ、このことからC型は山代二子塚資料を介して、A型から派生し成立したタイプと理解することができる。

3. 編年

編年 以上の型式分類に基づき、共伴須恵器や石棺式石室の編年研究の成果から、以下のⅢ期に編年する。

I期 A型及びB型が主流を占めている段階。最古の出雲型子持壺としては現状の資料では、口縁形態から講武向山古墳例が最も古いと考えられる。なお、山代二子塚古墳は当該期に位置づけられるが、前述のとおり古い要素を備えつつもB手法の採用など新しい様相をそなえ、C型の祖形と位置づけられる。また当該期には直立する短い口縁で蓋を伴い子壺接合にB技法を用いる無脚Ⅱ類（第4図6～11）が既に出現している。

Ⅱ期 A・B型が消滅し、C型が盛行するようになる段階。前述のC型の細分に基づき、新古に分けることができる。

古相…子壺5、6個配置のC1型が盛行する段階で、団原古墳、東淵寺古墳例などがある。無脚Ⅱ類は蓋を伴わず、有脚Ⅳ類と共通する段状口縁タイプ（第3図30）が主流となる。

新相…子壺が4個配置に統一され、定型化が進むC2型の段階。向山1号墳が代表例としてあげられる。

Ⅲ期 子壺の形骸化・粗雑化が進行するC3型の段階。粗雑化・形骸化の方向は様々で型式学的にはかなりのバリエーションが存在する。山代方墳、的場横穴墓例など。

須恵器編年との関係 I期は講武向山古墳例が親壺口縁形態から出雲2C期前後（大谷1994）に位置づけられ、最も古い。須恵器との共伴関係がわかる資料では、岡田薬師古墳、牛切古墳、宗像1号墳があり、ほぼ出雲3期に限定される。

Ⅱ期（古）については、C1型を模倣したと思われる上塩冶築山古墳例が伝石室内出土須恵器から出雲3期に位置づけられ、当該期の上限が3期まで遡る可能性がある。その他では、近年判明した中村1号墳例は出雲4期古段階に位置づけられ、団原古墳は出雲4期の蓋坏と共伴し、やや共伴関係に問題があるが島田池6区15号（14号）横穴墓例も出雲4期に位置づけられる。以上の点からⅡ期（古）は一部出雲3期に遡りつつもその中心は出雲4期古段階にあると言える。

Ⅱ期（新）については、向山1号墳例が出雲4期新段階の須恵器と共伴し、島田池1区3号横穴墓出土須恵器の大半は出雲5期に属する。また近年調査された菅田19・20・22横穴墓前庭部例では各横穴墓の初葬は出雲5期までしか遡らない。この点から、C2型を中心とするⅡ期（新）は出雲4期でも後半期

であり一部出雲5期まで降る可能性が高い。

Ⅲ期は共伴資料に恵まれず須恵器編年との対比は困難であるが、型式学的にはC3型はC2型より後出することは確実であり、概ね出雲5期を中心とする時期に位置づけられる。

4. 分布と製作地

分布 I期段階では、A型は松江市北部の律令期の島根郡に集中する。B型は類例は少ないが、松江東部から伯太、米子にかけて点在し、A・C型に対し分布が東に偏る。この段階のC型は類例が少ないが、意宇郡でもその中枢地に分布が限定される。

Ⅱ期以降はC型が一気に増加し、分布も意宇郡だけでなく出雲郡や神門郡など、飯石・仁多郡を除く出雲全域までその分布範囲が広がる。旧稿（池淵2004）ではこの段階でもC型は島根郡には分布しないとしていたが、菅田横穴墓群の発見で当該期には島根郡域まで波及することが明らかとなった。こうした分布動向は概ね石棺式石室の動向と連動していると言える。

製作地 以上のように、A～C型という型式差については、年代だけでなく分布に明瞭な違いが認められることから、単純な時期差ではなく製作集団の違いを反映している可能性が高い。このうちC型については、旧稿では大井窯跡群表採資料（第8図30～34）を紹介し、C型が大井窯跡群産である点を指摘したが、その後同窯跡群内の岩汐窯跡・山津窯跡群の一部が調査され、その様相がさらに明確となった。

特に岩汐窯跡では、胴部に文様帯を備える子壺や胴部がよく張りカキメをめぐらす親壺、蓋を伴う親壺の直立口縁部が出土している（第8図17～29）。子壺に文様を備える事例は出雲では山代二子塚古墳資料例しかなく、他の二つの特徴も山代二子塚古墳例と酷似する。この点から、C型については最古のC型でありかつ最初に大量生産された山代二子塚古墳資料の生産を契機に大井窯跡群における生産が開始され、その終末まで当窯跡群で一貫してC型が生産されたと想定される。

A・B型については今のところ生産地を知る手掛かりはない⁽¹⁾。分布の違いやC型との型式学的・技術的差異から大井窯跡群とは異なる生産地であった可能性が高いと考えられる。

5. 出雲型子持壺の使用法・儀礼行為

出雲型子持壺の使用法や儀礼については断片的な検討しか行われておらず、未だ不明な点が多い。A型については、現在までのところ墳丘に多量に樹立して使用された事例は知られず、出土状況の判明する資料では講武向山古墳、牛切古墳などのように石室内での出土例が目立つ。このようにA型については他地域の装飾付須恵器とほぼ同様な使用方法が想定されるが、一方で岡田薬師古墳例のように墳丘外で使用される事例もあり、後述するC型の使用法に繋がる使用法が既にこの段階で存在する。B型については、出土状況がわかる資料は現在の手間古墳例しかないが、手間古墳例を見る限りでは後述するC型の使用法と顕著な差異は認め難い。

C型は石室や横穴墓の玄室内から出土する事例は極めて少なく、墳丘や横穴墓の前庭部からの出土例が大半であり、また使用量もA型とは異なる大量樹立型である。このように、C型はその成立段階からA型とは使用法等についても一線を画し、墳丘への大量樹立を目的とした、新たな墳丘祭祀アイテムの一つとして創設されたものであり、その契機は山代二子塚古墳の築造であった蓋然性が高い。

なおC型（意宇型）内においても、その使用法・セット関係には時期的な変化が認められる。有脚Ⅳ類ではないが、C型と密接な関係にある子持大甕である無脚Ⅱ類は、出雲では今のところ岡田山1号墳例と古城山横穴墓群大溝例が知られており、いずれも有脚Ⅳ類は共伴せず⁽²⁾、その一方で両者とも円筒埴輪を伴う。つまり、無脚Ⅱ類は当初は埴輪とセットで使用されるのを目的として創出された型式であ

る可能性が高い。一方、Ⅱ期新段階以降においては子持壺が埴輪を伴う例はなく、出雲では無脚Ⅱ類は認められず有脚Ⅳ類のみが盛行する。これらの有脚Ⅳ類の大半には須恵器大甕が共伴しており、これとセットで使用されたと推察される。つまり、出雲の埴丘儀礼行為においては大甕状の土器と円筒状の土器が一貫してセットで使用されており、有脚Ⅳ類C型はいわば円筒埴輪の代替品として盛行したものと考えられる。Ⅱ期新段階のC2型には鐙状突帯や脚部円形スカシなどのように円筒埴輪工人集団からの影響が認められる点も、この点を傍証する。

いずれにせよ、子持壺の使用法については未だ十分な検討は行われておらず、これまでの出土位置の分析に加え、器種のセット関係や前代の供献土器群との関連などを視野に入れた総合的なアプローチが今後求められていると言えよう。

6. 系譜と変遷―画期の背景―

出雲型子持壺の基本的属性としては、①底抜け（底部穿孔）、②子壺が壺形という二つの顕著な特徴があり、出雲においては原則としてこの規範は遵守されている。このうち後者について、筆者は5世紀末の子持壺の検討から、壺という器種に特有の胴部円孔という属性が須恵器工人の保持する仮器の認知構造に結び付き、子壺形式として採用されたと想定した（池淵2004）。論の是非は今後の評価を俟つほかないが、いずれにせよ出雲型子持壺の本質は仮器という性質にあり、その始原が5世紀末まで遡る点はおおむね妥当と考えられる。

A型の出現系譜については未だ不明な点が多い。赤澤秀則は古墳時代前期以来の島根半島と丹後地方との密接な地域間交流を背景とし、その祖形が丹後地方の子持壺に求められる可能性を指摘する（赤澤2008）。傾聴すべき見解である。

C型の成立については、現状の資料では前述のとおり山代二子塚古墳の築造が大きな契機となったと考えられる。この段階で埴丘へ大量樹立するという出雲独自の使用法とともに、様々な試行錯誤のうえ、C型（意字型）という新たな子持壺型式が創出され、同時に大井窯跡群における恒常的生産が開始された。その意味で、出雲型子持壺の変遷中最も大きな画期であったと評価することができる。

注

- (1) 従来手間古墳出土とされていた資料が大井窯跡群採集品の可能性が指摘されているが、実態は不明である（池淵2004、追記）。
- (2) 従来山代二子塚古墳例が無脚Ⅱ類とされていたが、口縁部のみでの判断で底部は確認できておらず、ここでは判断を保留する。

文 献

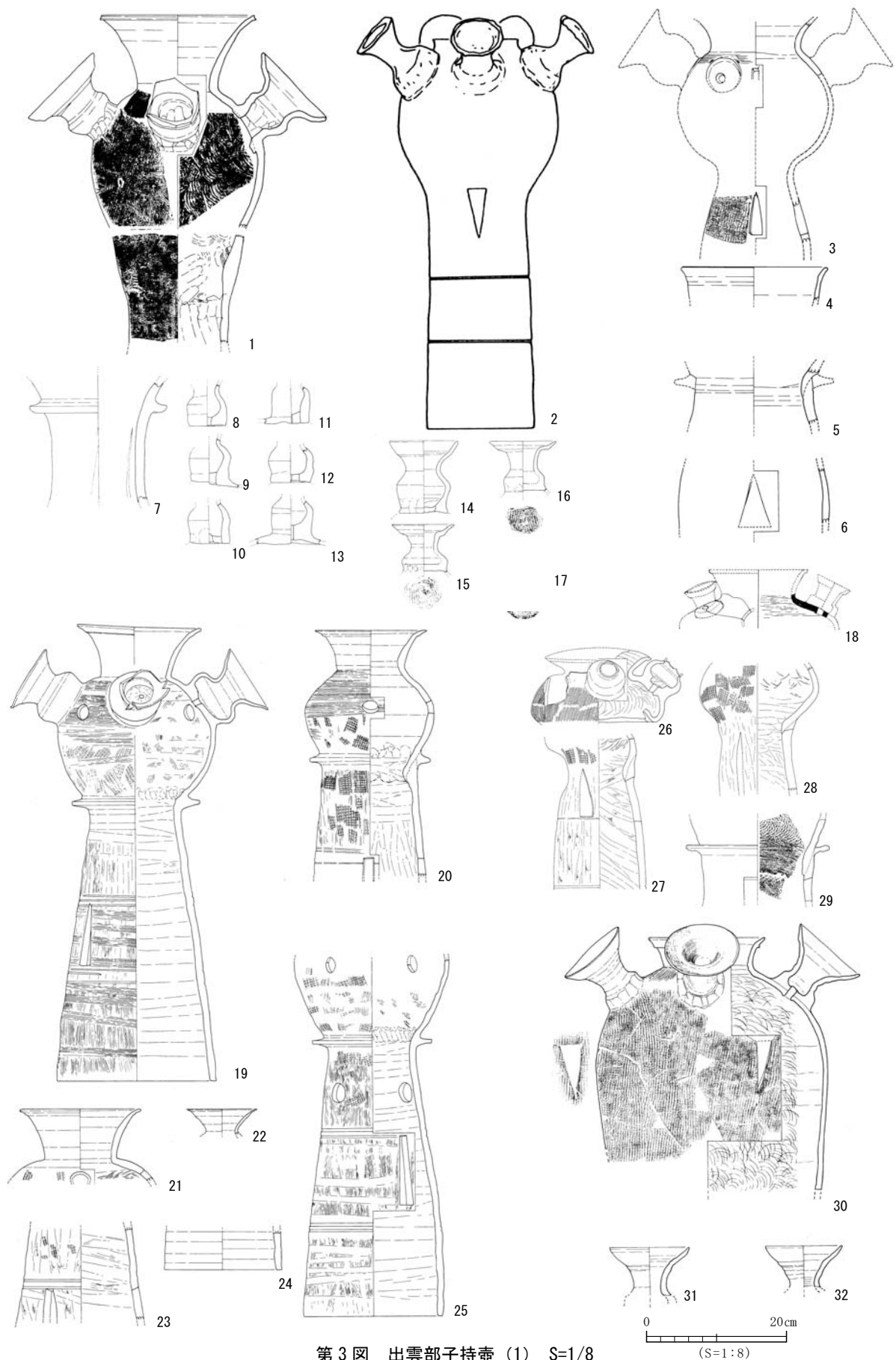
論 文

- 山本 清1960「山陰の須恵器」『島根大学開学十周年記念論集』
田辺昭三1981『須恵器大成』角川書店
岡崎雄二郎1983「松江・山代方墳採集の須恵器について」『松江考古』第5号
昌子寛光1987「出雲の子持壺」『古文化談叢』第18集
大谷祐司1989「伯太町歴史民俗資料館保管の遺物について」『松江考古』第5号
山田邦和1989「装飾付須恵器の分類と編年（上）（下）」『古代文化』第41巻8・9号
柳浦俊一1993「島根・鳥取県子持壺集成」『島根考古学会誌』第10集
佐古和枝1994「出雲型子持壺について」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズVI
大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集

池淵俊一 2004 「出雲型子持壺の変遷とその背景」『考古論集 河瀬正利先生退官記念論文集』
山内英樹 2004 「円筒埴輪と出雲型子持壺の関係性」『島根考古学会誌』第20・21 集合併号
赤澤秀則 2008 『発掘された国引き神話—古代狭田王国の遺宝—』松江市鹿島歴史民俗博物館
渡辺貞幸 1983 「松江市山代二子塚古墳をめぐる諸問題」『山陰文化研究紀要』第23号
渡辺貞幸 1985 「松江市山代方墳をめぐる諸問題」『山陰地域研究（伝統文化）』第1号
渡辺貞幸 1986 「山代・大庭古墳群と5・6世紀の出雲」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集刊行会

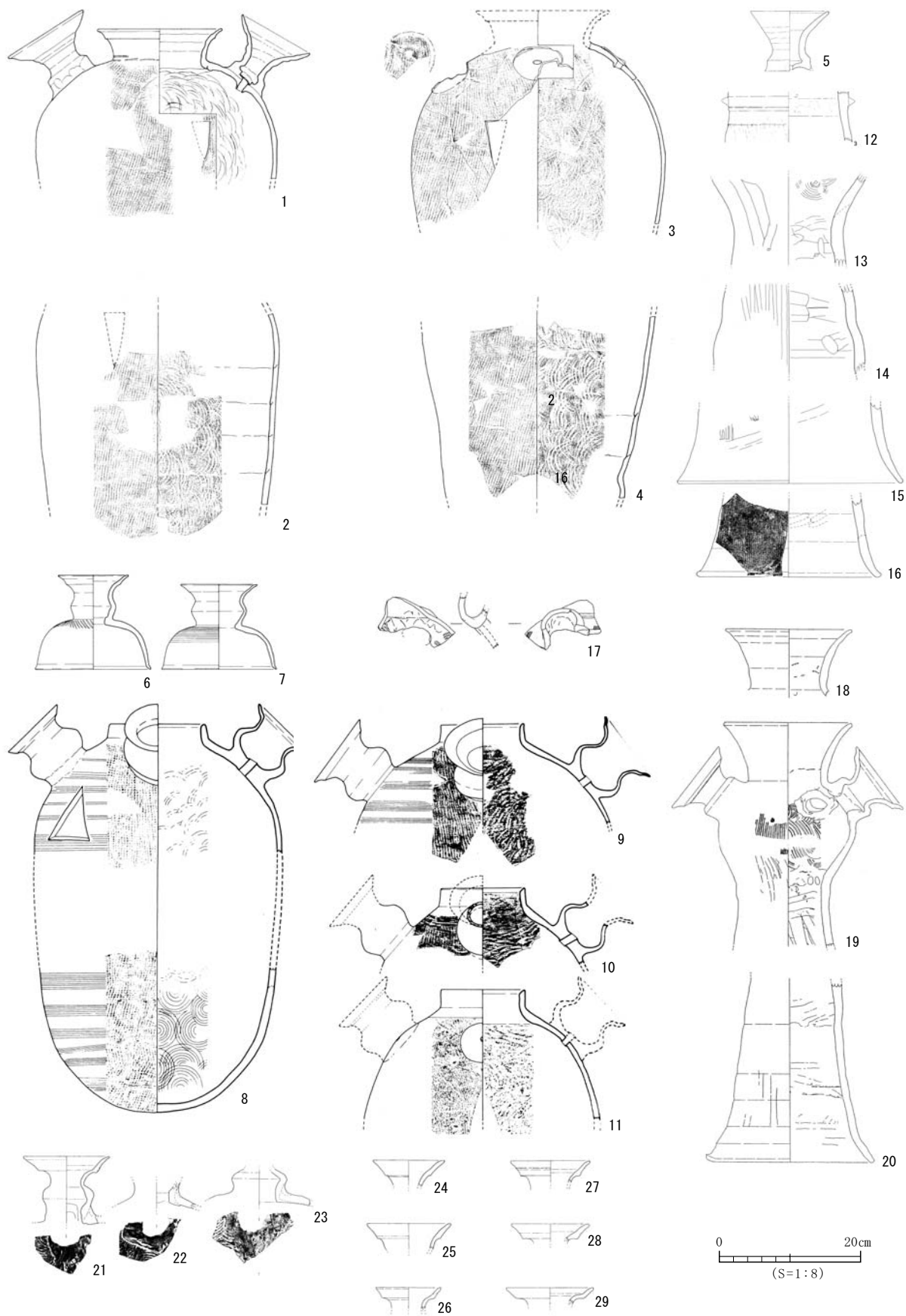
報告書

赤澤秀則編 1988 『講武地区遺跡分布調査報告書』2 鹿島町教育委員会
浅沼政誌編 1988 『東出雲町の遺跡』東出雲町教育委員会
足立克己・丹羽野裕編 1989 『古曾志遺跡群発掘調査報告書』島根県教育委員会
池淵俊一・松本岩雄編 1993 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅸ—山代郷正倉跡・山代方墳—』島根県教育委員会
池淵俊一編 2001 『国指定史跡山代二子塚環境整備事業に伴う発掘調査報告書』島根県教育委員会
石井 悠 1978 「内馬池横穴群」『東出雲町誌』東出雲町
石井 悠編 2008 『古城山遺跡』東出雲町教育委員会
伊藤 智編 2000 『三田谷Ⅲ遺跡』島根県教育委員会
今岡一三編 1994 『白コクリ遺跡・大原遺跡』島根県教育委員会
岡崎雄二郎他編 1983 『松江圏都市計画事業乃木土地地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』松江市教育委員会
岡崎雄二郎他編 1988 『薦沢A遺跡・薦沢B遺跡・別所遺跡』松江市教育委員会
川上昭一編 2001 『前田遺跡（第Ⅱ調査区）』八雲村教育委員会
川上 稔編 1986 『塩冶地区遺跡分布調査』Ⅰ 出雲市教育委員会
島根大学考古学研究会 1979 「日吉垣の内古墳」『菅田考古』第15号
島根大学考古学研究会 1995 『菅田考古』第17号
瀬古諒子編 1998 『向山古墳群発掘調査報告書』松江市教育委員会
鳥谷芳雄編 1994 『三田谷Ⅱ遺跡・上沢Ⅰ遺跡』島根県教育委員会
鳥谷芳雄編 2000 『三田谷Ⅰ遺跡Vol. 3』島根県教育委員会
中尾秀信・藤原裕子編 1990 『鉦田遺跡・朝酌荒神谷遺跡・イガラビ遺跡・イガラビ古墳群・池ノ奥古墳群・池ノ奥C・D遺跡—島根県松江東工業団地内発掘調査報告書—』松江市教育委員会
西尾克己編 1980 『出雲・上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財調査報告書』島根県教育委員会
西尾克己編 1989 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告Ⅵ—団原古墳・下黒田遺跡—』島根県教育委員会
丹羽野裕編 1986 『岡田薬師古墳』島根県教育委員会
丹羽野裕・鳥谷芳雄編 1992 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告—山代二子塚古墳—』島根県教育委員会
秦 愛子編 2009 『岩汐窯跡発掘調査報告書』（財）松江市教育文化振興事業団
原 俊二編 2009 『築山遺跡』Ⅲ 出雲市教育委員会
原田敏照・勝瀬利栄編 1993 『御崎谷・土元・清水遺跡ほか』島根県教育委員会
原田敏照編 1997 『島田池遺跡・鷗貫遺跡』島根県教育委員会
曳野律夫・松本岩雄・内田律雄・三宅博士 1989 「松江市東淵寺古墳墳丘測量報告（上）」『島根考古学会誌』第6集
広江耕史他編 2001 『山代二子塚古墳整備事業報告書』島根県教育委員会
広濱貴子編 2005 『菅田横穴墓群・薦沢砦跡』（財）松江市教育文化振興事業団
藤原 哲編 2006 『大井窯跡群 山津窯跡・山津遺跡発掘調査報告書』（財）松江市教育文化振興事業団
松尾充晶編 2001 『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県埋蔵文化財調査センター・島根県古代文化センター
松本岩雄編 1987 『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
三原一将編 2004 『上塩冶築山古墳』出雲市教育委員会
宮本徳昭編 1982 『増福寺古墳群発掘調査報告書』
柳浦俊一他編 1993 『八色谷古墳群』島根県教育委員会
山本 清 1975 「九、安部谷古墳」『八雲立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会
横山純夫編 1977 『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅶ集 島根県教育委員会
横山純夫・ト部吉博・平野芳英編 1978 『岩屋後古墳発掘調査概報』島根県教育委員会
渡辺貞幸編 2002 『松江市手間古墳発掘調査報告・薬師山古墳出土遺物について』島根大学考古学研究室

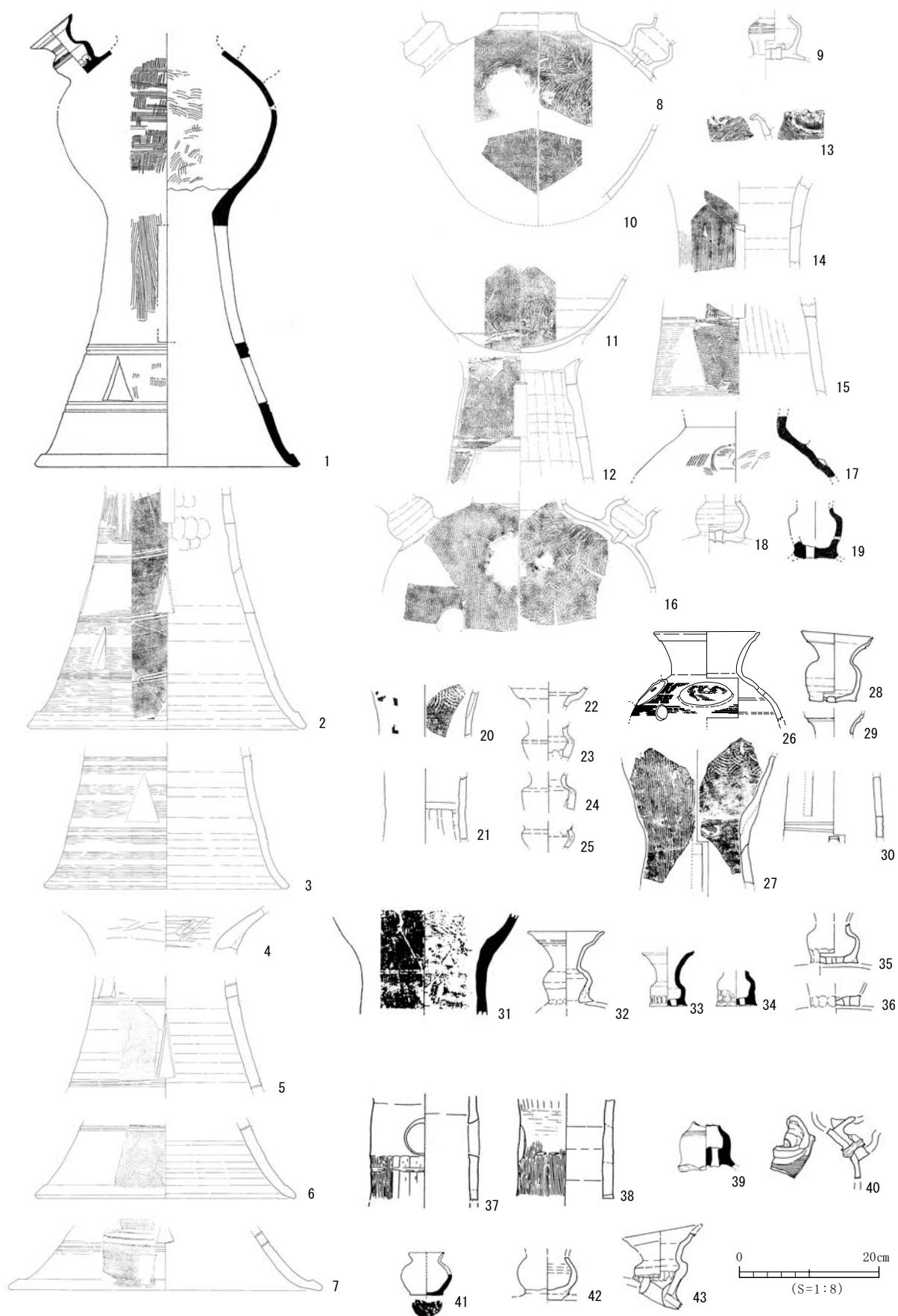


第3図 出雲部子持壺 (1) S=1/8

1: 伝伯太町出土、2: 大塚横穴墓、3: かわらけ谷 4号横穴墓、4~6: かわらけ谷 5号横穴墓、7~13: 臼コクリ N-5号横穴墓、14~17: 臼コクリ S-2号横穴墓、18: 内馬池 2号横穴墓、19~25: 島田池 1区 3号横穴墓、26~28: 島田池 6区 15号横穴墓、29: 才ノ峠古墳、30~32: 古城山横穴墓群大溝

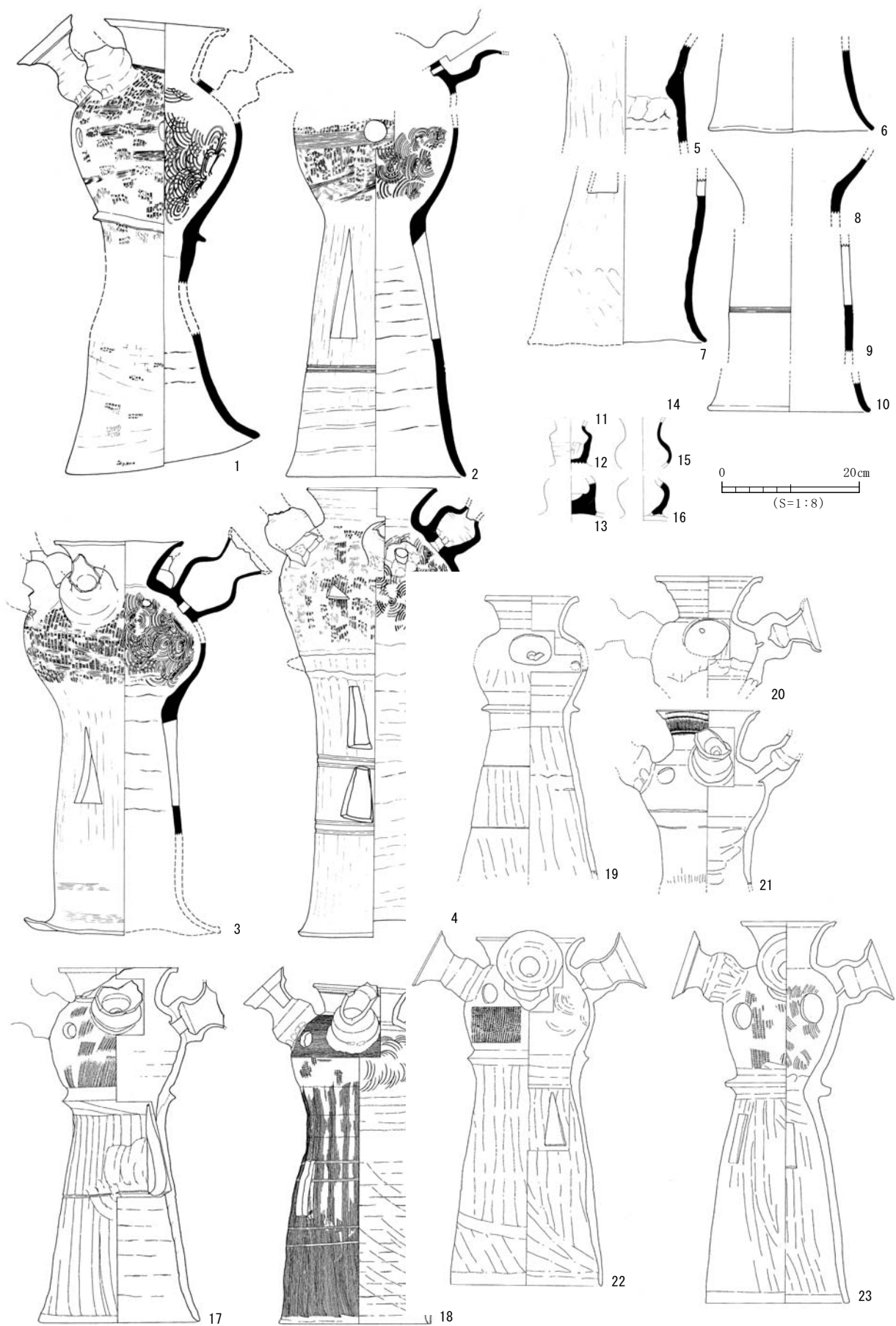


第4図 出雲部子持壺(2) S=1/8
 1～5: 古城山横穴墓群大溝、6～11: 岡田山1号墳、12: 長廻遺跡、13～29: 手間古墳

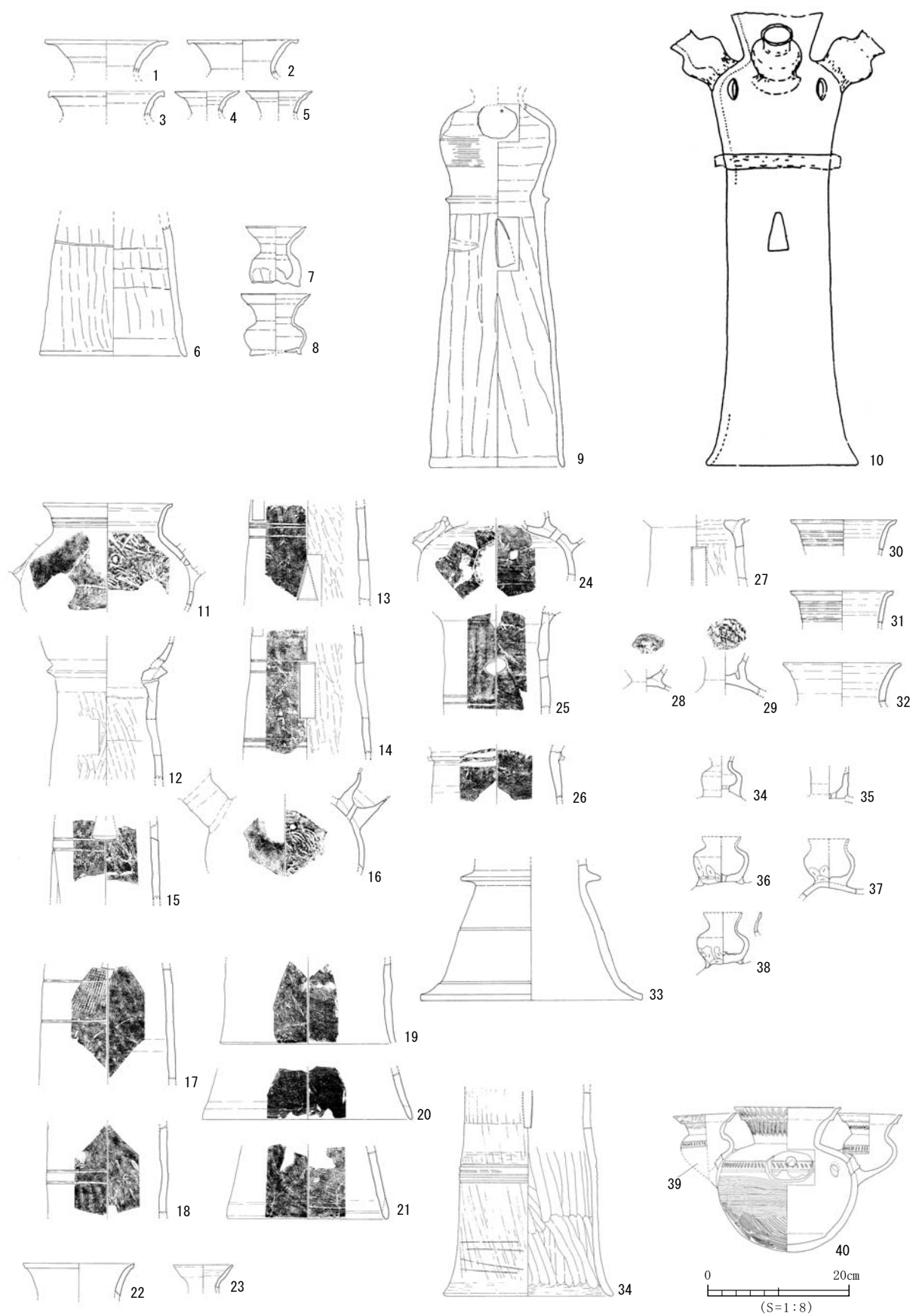


第5図 出雲部子持壺(3) S=1/8

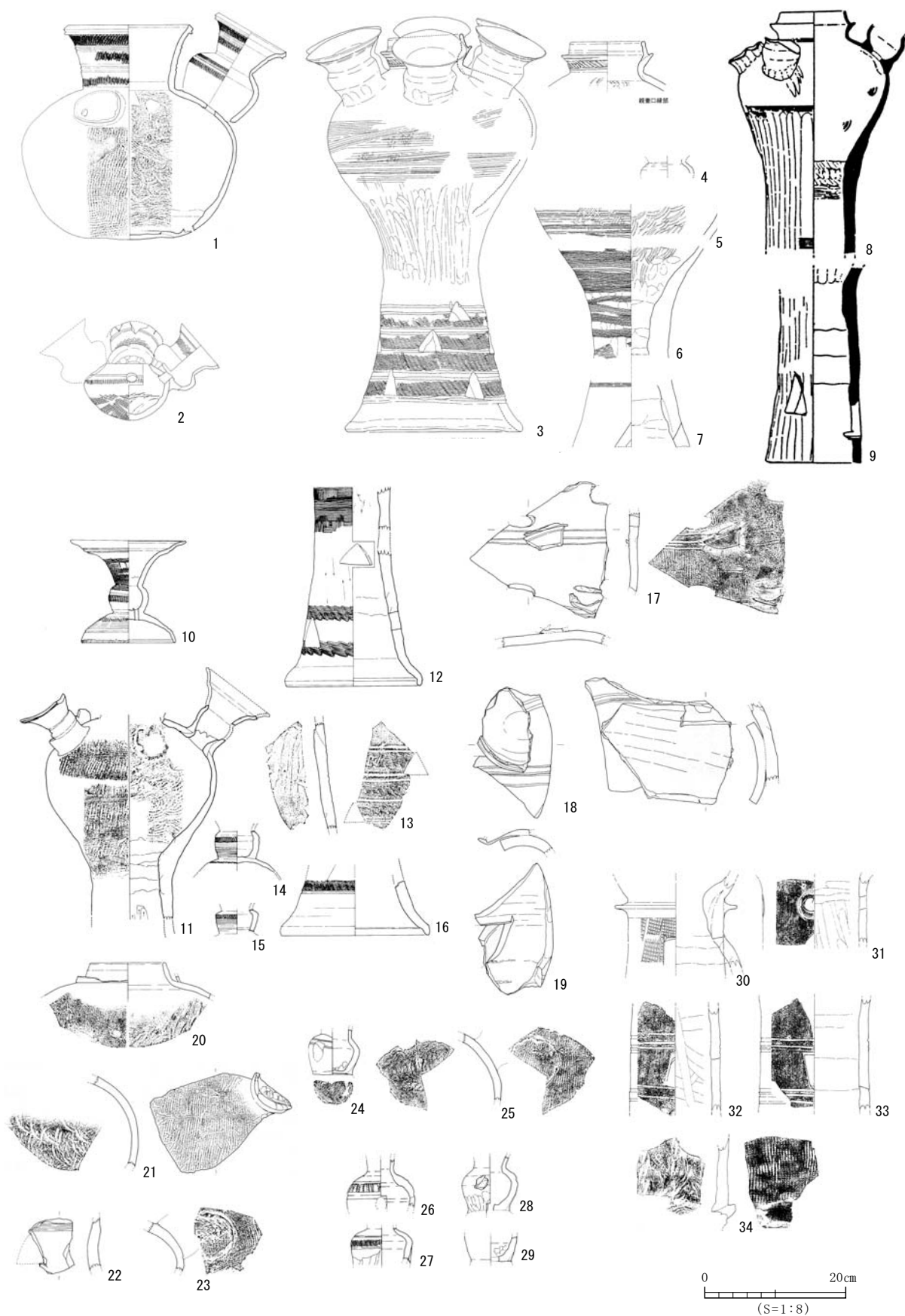
1～19：山代二子塚古墳、20～25：魚見塚古墳、26～30：東淵寺古墳、31・32：安部谷古墳群、33・34：岩屋後古墳、35・36：大庭有、37：狐谷7号横穴墓、38：狐谷2号横穴墓、39・40：狐谷10号横穴墓、41：二子塚古墳、42：大谷古墳、43：不明（島根大学所蔵）



第6図 出雲部子持壺(4) S=1/8
1~16: 団原古墳、17~23: 向山1号墳

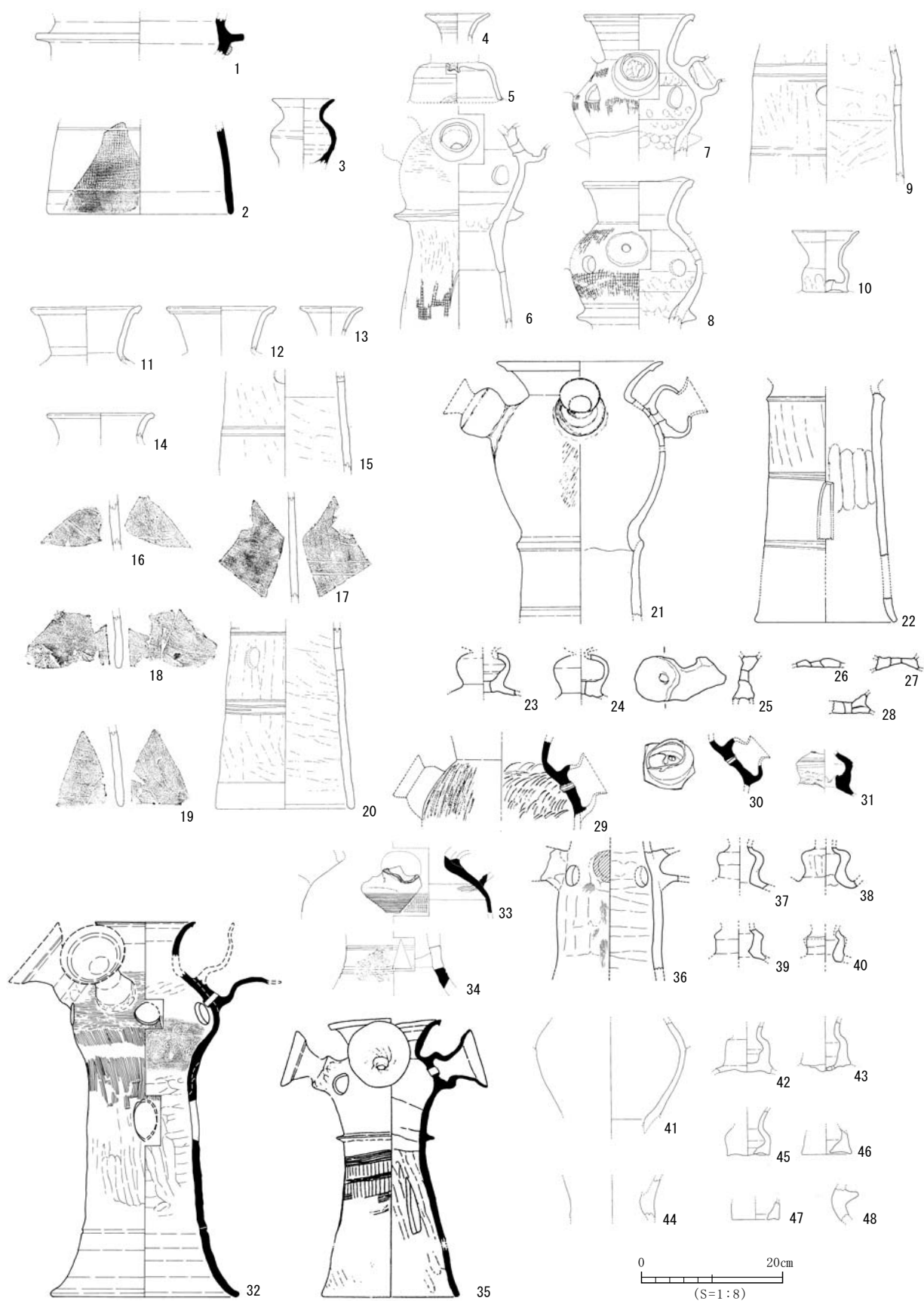


第7図 出雲部子持壺 (5) S=1/8
 1～5: 向山1号墳、6～9: 向山2号墳、10: の場横穴墓、11～38: 山代方墳、39: 前田、40 増福寺20号墳



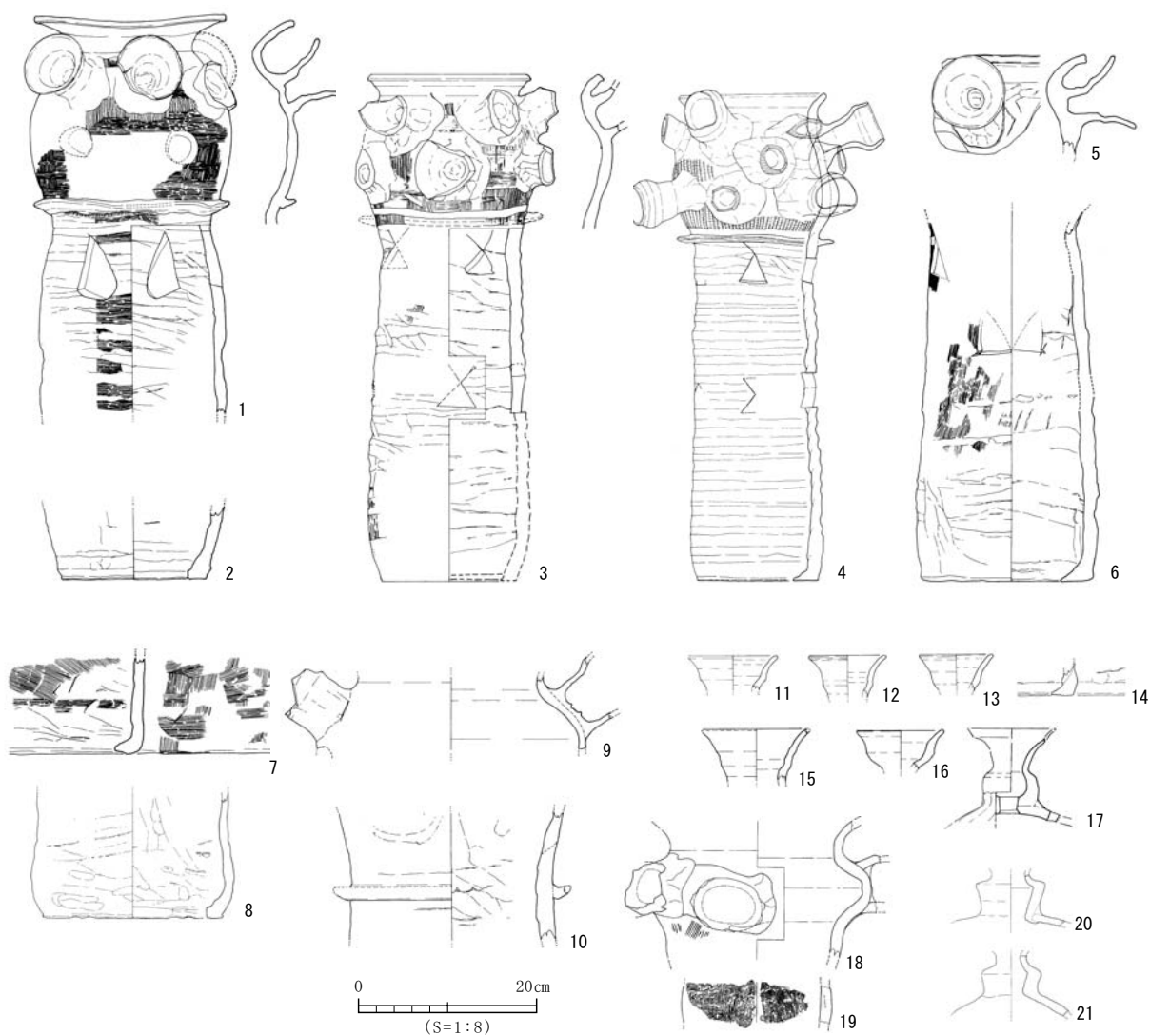
第 8 図 出雲部子持壺 (6) S=1/8

1 : 古曾志大谷 1 号墳、2 : 八色谷 4 号墳、3 : 講武向山古墳、4 ~ 7 : 堀部 5 号墳、8・9 : 牛切古墳、10 ~ 16 : 岡田薬師古墳、17 ~ 19、21 ~ 29 : 岩汐窯跡 SX01、20 : 岩汐 1 号窯跡、30 ~ 34 : 山津窯跡



第9図 出雲部子持壺(7) S=1/8

1～3: 山津窯跡、4～9、11～20: 菅田 19・20・22 号横穴墓前庭、10: 菅田 9 号横穴墓、21～28: 池の奥 1 号墳、29・30: 薦沢 B 遺跡、31: 日吉垣の内古墳、32: 中村 1 号墳、33・34: 天神原古墳、35: 出西子丸 1 号墳、36～40: 三田谷 I 遺跡、41～48: 三田谷 II 遺跡



第10図 出雲部子持壺(8) S=1/8

1～16：上塩冶築山古墳、17：小坂古墳、18・19：築山遺跡、20・21：三田谷Ⅱ遺跡

出雲国司補任表(稿) 大宝元年～保元元年

大日方 克己

凡 例

- (1) 本稿には、1. 出雲守補任表A、2. 出雲守補任表B、3. 出雲権守補任表、4. 出雲介補任表、5. 出雲掾補任表、6. 出雲目補任表、の6つの表を収めた。
- (2) 大宝令が施行された大宝元年(701)から平安時代後期の保元元年(1156)までで、補任、在任の時期が史料上確認されるもの、または推測できるものを採録した。
- (3) 年月日の表記は便宜上、以下のようにした。
 - ・四文字年号は下記のように略記した。
天平勝宝→勝宝、天平宝字→宝字、天平神護→神護、神護景雲→景雲
 - ・②など月の丸数字は閏月を表し、正月を1月、元年を1年と表記した部分もある。
- (4) 出雲守補任表Aでは、補任・見任・遷任等の史料により在任が明確な期間を実線で、推測による期間を点線で表した。見任史料が複数ある場合は、最初と最後の年月日のみを示した。補任、見任、遷任等の典拠および在任時期の推測の根拠等は出雲守補任表Bに記した。
- (5) 各表の種別欄の略記は下記のとおり。
任-補任、見-見任、重-重任、延-延任、遷-遷任、得-得替、停-停止、流-配流、卒-卒去、故-故人、前-前任
- (6) 守と権守は別表にしたが、介、掾、目の補任年表には権官も含めた。
- (7) 典拠史料に略称を用いる場合は、一般的に使用されているものを用いたが、特に説明を要するものは、以下の通り。
大日本古文書一『大日本古文書(正倉院編年)』
石清水文書一『大日本古文書(石清水文書)』
計会帳-天平6(734)年度「出雲国計会帳」(『大日本古文書(正倉院編年)』第1巻、平川南『漆紙文書の研究』(吉川弘文館、1989)所収の復原・翻刻によった)
正税返却帳-承暦2(1078)年12月30日付「主税寮解」(「出雲国正税返却帳」、平安遺文1161号、東京国立博物館所蔵原本写真によった)
造営遷宮旧記-「杵築大社造営遷宮旧記」(北島家文書、鎌倉遺文7017号、『大社町史』史料編(古代・中世)上巻235号)

参考文献

- 宮崎康充編『国司補任』第一～第五・索引(続群書類従完成会、1989～1999)
- 大日方克己「出雲国正税返却帳と家司受領藤原行房」(『社会文化論集』4、2007)
- 大日方克己『「出雲国正税返却帳」を中心とした平安時代中期財政と公文勘会の研究』(平成17年度～19年度科学研究費補助金研究成果報告書、2008)
- 大日方克己「平安後期の出雲国司-白河・鳥羽院政期を中心に-」(『山陰研究』1、2008)

1. 出雲守補任表 A

701	大宝元		764	8	
702	2		765	神護元	
703	3		766	2	大伴御依 10. 8任
704	慶雲元		767	景雲元	
705	2		768	2	
706	3		769	3	布勢人主 6. 9任
707	4		770	宝龜元	大伴駿河麻呂 5. 9任
708	和銅元	忌部子首 : 3. 13任	771	2	
709	2		772	3	豊野奄智 11. 1任
710	3		773	4	
711	4		774	5	
712	5		775	6	
713	6		776	7	多治比長野 3. 6任
714	7		777	8	藤原小黑麻呂 : 3. 29任
715	靈龜元		778	9	田中多太麻呂 : 10. 13任
716	2	船秦勝 : 4. 27任	779	10	当麻永繼 2. 4任
717	養老元		780	11	
718	2		781	天応元	
719	3	息長臣足 : 7. 13見	782	延暦元	石川豊人 9. 25任
720	4		783	2	
721	5		784	3	
722	6		785	4	多治比年主 11. 17見
723	7		786	5	1. 15任
724	神龜元		787	6	
725	2		788	7	
726	3		789	8	紀兄原 6. 26任
727	4		790	9	
728	5		791	10	
729	天平元		792	11	藤原仲成 8. 3見
730	2		793	12	12. 任
731	3		794	13	
732	4		795	14	
733	5		796	15	
734	6		797	16	藤原緒嗣 8. 任
735	7	石川年足 4. 23任	798	17	
736	8		799	18	
737	9		800	19	
738	10		801	20	
739	11	7. 10見	802	21	
740	12		803	22	任
741	13		804	23	路年繼
742	14		805	24	1. 28遷
743	15	多治比国人 : 1. 8見	806	大同元	1. 28任
744	16		807	2	大中臣全成
745	17	門部王 ?	808	3	
746	18		809	4	
747	19		810	弘仁元	
748	20		811	2	
749	勝宝元		812	3	藤原清繩 1. 12任
750	2	百濟孝忠 : 3. 12任	813	4	
751	3		814	5	
752	4		815	6	
753	5		816	7	
754	6	阿倍綱麻呂 : 7. 13任	817	8	
755	7	大伴古慈斐 : 12. 30見	818	9	
756	8	山背王 : 6. 16任	819	10	
757	宝字元	百濟敬福 : 6. 16任	820	11	
758	2	文屋智努 6. 16任	821	12	
759	3		822	13	
760	4	1. 4遷	823	14	
761	5	文屋大市 : 10. 1任	824	天長元	
762	6		825	2	高階石河 ?
763	7				

826	3		886	2	
827	4		887	3	
828	5		888	4	
829	6	平野王	889	寛平元	藤原直房
830	7		890	2	
831	8		891	3	
832	9		892	4	
833	10	紀昨麻呂	893	5	
834	承和元		894	6	
835	2		895	7	
836	3		896	8	
837	4		897	9	
838	5		898	昌泰元	
839	6	藤原貞根	899	2	
840	7		900	3	
841	8		901	延喜元	
842	9	紀野長	902	2	
843	10		903	3	
844	11		904	4	
845	12		905	5	
846	13		906	6	
847	14		907	7	
848	嘉祥元		908	8	
849	2	有雄王	909	9	
850	3		910	10	
851	仁寿元		911	11	
852	2		912	12	
853	3		913	13	
854	齐衡元	大春日高庭	914	14	凡河内弘恒
855	2		915	15	
856	3		916	16	
857	天安元		917	17	
858	2	賀茂弟岑	918	18	
859	貞観元	伴春宗	919	19	
860	2	藤原数守	920	20	
861	3	三原永道	921	21	
862	4		922	22	藤原性房
863	5		923	延長元	
864	6	都御西	924	2	
865	7		925	3	
866	8		926	4	
867	9		927	5	
868	10		928	6	
869	11	島田善長	929	7	
870	12		930	8	
871	13		931	承平元	
872	14		932	2	
873	15		933	3	
874	16		934	4	
875	17		935	5	内蔵時景
876	18		936	6	
877	元慶元		937	7	
878	2		938	天慶元	
879	3		939	2	
880	4		940	3	
881	5		941	4	
882	6		942	5	
883	7		943	6	
884	8		944	7	
885	仁和元		945	8	
			946	9	
			947	天曆元	
			948	2	十市有象
			949	3	
			950	4	
			951	5	
			952	6	

953	7			1025	2		3. 23見
954	8			1026	3		橘孝親
955	9			1027	4		
956	10	平(名欠) :	4. 21見	1028	長元元		
957	天徳元	浅井守行 :	見	1029	2	②. 25見	
958	2	多治文正 :	見	1030	3	橘俊孝	
959	3			1031	4		
960	4			1032	5	9. 20配流	任か
961	応和元			1033	6		
962	2	橘泰胤 :	4. 19見	1034	7		藤原登任
963	3			1035	8		
964	康保元			1036	9		8. 30見
965	2			1037	長暦元		
966	3			1038	2		
967	4			1039	3		
968	安和元			1040	長久元		
969	2			1041	2	2. 7見	
970	天禄元			1042	3	(姓欠) 憲清	
971	2			1043	4		
972	3			1044	寛徳元		
973	天延元			1045	2		
974	2			1046	永承元		
975	3			1047	2		
976	貞元元			1048	3		
977	2			1049	4		
978	天元元			1050	5		藤原明衡
979	2			1051	6		
980	3			1052	7		
981	4			1053	天喜元	1. -任	
982	5			1054	2	大中臣頼宣	
983	永観元			1055	3		
984	2			1056	4		
985	寛和元			1057	5		
986	2			1058	康平元		大中臣永清
987	永延元	(姓欠) 則俊 :	?	1059	2		
988	2			1060	3		
989	永祚元	藤原相如 :	?	1061	4		
990	正暦元			1062	5	藤原章俊	
991	2			1063	6		
992	3			1064	7		
993	4			1065	治暦元	1. -延任	
994	5			1066	2		
995	長徳元	源文雅		1067	3	2. 6得替	2. ?任
996	2			1068	4		
997	3			1069	延久元		藤原宗実
998	4			1070	2		
999	長保元			1071	3		
1000	2			1072	4	藤原行房	
1001	3		9. 6見	1073	5		
1002	4		源忠規	1074	承保元		
1003	5			1075	2		
1004	寛弘元			1076	3		藤原清綱
1005	2			1077	承暦元	10. 3任	8. 29卒
1006	3			1078	2	源経仲	
1007	4			1079	3		
1008	5			1080	4		
1009	6	9. 2見		1081	永保元	8. 26見	
1010	7	紀忠道 :		1082	2		1. 21任
1011	8			1083	3		
1012	長和元			1084	応徳元		藤原兼平
1013	2			1095	2		
1014	3		藤原頼経	1086	3		重任
1015	4			1087	寛治元		
1016	5			1088	2		
1017	寛仁元			1089	3		
1018	2	11. 1見		1090	4		
1019	3			1091	5		
1020	4	藤原成親		1092	6	4. 28見	
1021	治安元			1093	7		
1022	2			1094	嘉保元	高階重仲	
1023	3	1. 26見		1095	2		
1024	万寿元			1096	永長元	11. 20見	

1097 承德元		1. 29任
1098 2		
1099 康和元		藤原忠清
1100 2		
1101 3		
1102 4		
1103 5		
1104 長治元	1. 28任	1. 28遷
1105 2	藤原家保	
1106 嘉承元		
1107 2	12. 25見	
1108 天仁元		1. 24任
1109 2		藤原顯頼
1110 天永元		
1111 2		
1112 3		
1113 永久元		
1114 2	12. 14任	12. 14遷
1115 3	藤原隆頼	
1116 4		
1117 5		
1118 元永元		
1119 2		
1120 保安元		
1121 2		12. 5任
1122 3		藤原憲方
1123 4		
1124 天治元		5. 28重任
1125 2		
1126 大治元		
1127 2		
1128 3	12. 29任	12. 29遷
1129 4	藤原経隆	
1130 5	10. 27遷	10. 27任
1131 天承元		藤原光隆
1132 長承元		
1133 2		
1134 3		
1135 保延元		11. 20見
1136 2		
1137 3		
1138 4	12. 29任	
1139 5	藤原光隆	
1140 6		
1141 永治元		
1142 康治元		
1143 2		
1144 天養元		
1145 久安元		
1146 2	12. 29遷	12. 29任
1147 3		藤原経隆
1148 4		
1149 5		
1150 6		12. 30重任
1151 仁平 1		
1152 2		6. 4見
1153 3		
1154 久寿 1	1. 23任	
1155 2	源光保	
1156 保元 1	7. 5見	

2. 出雲守補任表B

No	姓 名	位 階	所見年月日	種別	史 料 名	備 考
1	忌部子首	正五位下	和銅 1(708) 3. 13	任	続日本紀	
2	船 秦勝	正五位下	霊亀 2(716) 4. 27	任	続日本紀	
3	息長臣足	従五位下	養老 3(719) 7. 13	見	続日本紀	
4	石川年足	従五位下 〃 〃 〃	天平 7(735) 4. 23 10(738) 6. 29 11(739) 6. 23 7. 10	任 見 見 見	続日本紀 大日本古文書2-99 続日本紀 大日本古文書24-96	続日本紀天平宝字6. 9. 30条
5	多治比国人	従五位下	天平15(743) 1. 8	見	大日本古文書2-233	
6	門部王		天平17(745)	見	万葉集3-371	このころ出雲守か
7	百済孝忠	従四位下	勝宝 2(750) 3. 12	任	続日本紀	
8	阿倍綱麻呂	従五位下	勝宝 6(754) 7. 13	任	続日本紀	
9	大伴古慈斐	従四位上	勝宝 8(756) 5. 10	見	続日本紀	解任（万葉集、20-4467）
10	山背王	従四位下 〃 〃	勝宝 8(756) 11. 8 12. 30 宝字 1(757) 6. 16	見 見 遷	万葉集20-4473 続日本紀 続日本紀	任但馬守
11	百済敬福	従三位	宝字 1(757) 6. 16	任	続日本紀	
12	文室智努	従三位 〃	宝字 2(758) 6. 16 4(760) 1. 4	任 遷	続日本紀 続日本紀	任中納言
13	文室大市	正四位上	宝字 5(761) 10. 1	任	続日本紀	
14	大伴御依	正五位上	神護 2(766) 10. 8	任	続日本紀	
15	布勢人主	従五位上	景雲 3(769) 6. 9	任	続日本紀	
16	大伴駿河麻呂	従五位上 〃	宝亀 1(770) 5. 9 10. 26	任 遷	続日本紀 続日本紀	この日以前に遷任
17	豊野奄智	正五位上 〃	宝亀 3(772) 11. 1 7(776) 3. 6	任 遷	続日本紀 続日本紀	任兵部大輔
18	多治比長野	正五位上	宝亀 7(776) 3. 6	任	続日本紀	
19	藤原小黑麻呂	従四位下 〃	宝亀 8(777) 3. 29 10. 13	任 遷	続日本紀 続日本紀	任常陸守
20	田中多太麻呂	正四位下 〃	宝亀 8(777) 10. 13 宝亀 9(778) 1. 11	任 卒	続日本紀 続日本紀	
21	当麻永継	従五位上 〃	宝亀 9(778) 2. 4 天応 1(781) 5. 25	任 遷	続日本紀 続日本紀	任刑部大輔
22	石川豊人	従四位下 〃	天応 1(781) 9. 25 延暦 3(784) 11. 17	任 見	続日本紀 続日本紀	
23	多治比年主	従五位上	延暦 4(785) 1. 15	任	続日本紀	
24	紀 兄原	従五位下 〃 〃	延暦 7(788) 6. 26 8(789) 12. 29 10(791) 8. 3	任 見 見	続日本紀 続日本紀 続日本紀	
25	藤原仲成	従五位下	延暦11(792) 12. -	任	公卿補任	公卿補任大同4年条
26	藤原緒嗣	従四位下	延暦16(797) 8. -	任	公卿補任	公卿補任延暦21年条
27	路 年継	従五位下 〃	延暦22(803) 大同 1(806) 1. 28	任 遷	類聚国史 日本後紀	類聚国史天長4年6月24日条卒伝、この年任か 任参河守
28	大中臣全成	従五位下	大同 1(806) 1. 28	任	日本後紀	
29	藤原清繩	従五位下	弘仁 3(812) 1. 12	任	日本後紀	
30	高階石河		天長年間	見	日本後紀	続日本後紀承和9年5月29日条、天長年中任
31	平野王	正四位上	天長 6(829) 6. 19	卒	日本紀略	出雲守在任中に死去
32	紀昨麻呂	正四位下	天長10(833) 1. 19	卒	類聚国史	出雲守在任中に死去
33	藤原貞公	従五位下	承和 1(834) 11. 19	任	続日本後紀	
34	藤原貞根	従五位下	承和 6(839) 1. 11	任	続日本後紀	
35	紀 野長	従五位下	承和 9(842) 12. 10 承和10(843) 1. 12	任 遷	続日本後紀 続日本紀	任少納言
36	安倍安正	従五位下	承和10(843) 1. 12	任	続日本後紀	
37	有雄王	従四位下 〃	嘉祥 2(849) 1. 13 2. 27	任 遷	続日本後紀 続日本後紀	任肥後守
38	清瀧藤根	従五位下	嘉祥 2(849) 2. 27	任	続日本後紀	
39	大春日高庭	従五位下	斉衡 1(854) 1. 16	任	文徳実録	
40	賀茂弟岑	従五位下	天安 2(858) 1. 16	任	文徳実録	

No	姓 名	位 階	所見年月日	種別	史 料 名	備 考
41	伴 春宗	従五位下	天安 2(858) 3. 6 貞観 1(859) 1. 13	任 遷	文徳実録 三代実録	任常陸介
42	藤原数守	従五位下	貞観 1(859) 1. 13 2. 13	任 遷	三代実録 三代実録	任右兵庫頭
43	三原永道	従五位下	貞観 1(859) 2. 13	任	三代実録	元伯耆守
44	都 御西	外従五位下	貞観 6(864) 3. 8	任	三代実録	
45	家原縄雄	従五位上	貞観10(868) 1. 16	遷	三代実録	任周防守
46	島田善長	従五位下	貞観11(869) 1. 13	任	三代実録	
47	藤原直房	従五位下	寛平 1(889) 12. 25	見	平安遺文-補256	
48	凡河内弘恒		延喜14(914) 5. 7	免	類聚符宣抄	免本任放還
49	藤原惟房		延長 3(925)	前	政事要略	守の任期は延長3年以前
50	内蔵時景	従五位下	承平 6(936) 1. 19	任	外記補任	元大外記
51	十市有象	従五位下	天曆 2(948) 1.	任	地下家伝	外記補佐天慶9年条
52	平(名欠)	従五位下	天曆10(956) 4. 21	見	朝野群載	
53	浅井守行	外従五位下	天徳 1(957)	見	正税返却帳	
54	多治文正	従五位下	天徳 2(958)	見	正税返却帳	
55	橘 泰胤		応和 2(962) 4. 19	見	日本紀略	
56	藤原相如		長徳 1(995) 4.	前	栄花物語	任期は永祚元(989)～正暦5(994)ころの間か
57	源 文雅		長保 2(1000)	前	正税返却帳	長保2には前前司
58	源 忠規	正五位下	長保 3(1001) 9. 6	見	権記	
59	(姓欠)則俊		寛弘 6(1009) 以前	見	円教寺旧記(延照記)	任期不明。寛和2(986)ころ～寛弘6年の間か
60	紀 忠道		寛弘 6(1009) 9. 2	見	御堂関白記	この年、任命か
61	藤原頼経		治安 3(1023) 1. 26	前	小右記	任期は長和2(1013)～長和5(1016)ころか
62	藤原成親		寛仁 2(1018) 11. 1 治安 3(1023) 1. 26	見 見	御堂関白記 小右記	任期は寛仁1(1017)～万寿1(1024)ころか
63	橘 孝親		万寿 2(1025) 3. 23	見	小右記	任期は万寿2(1025)～長元1(1028)ころか
64	橘 俊孝	従五位上	長元 2(1029)②. 25 7. 11 4(1031) 10. 17 5(1032) 6. 3 8. 2 8. 20 9. 20 9. 27 9. 27	見 見 見 見 見 流 流 流	小右記 小右記 小右記 左経記 小右記 日本紀略 百鍊鈔 日本紀略 扶桑略記	杵築大社の託宣と顛倒のことで配流 杵築大社の託宣と顛倒のことで配流 杵築大社の託宣と顛倒のことで配流
65	藤原登任		長元 9(1036) 8. 20	見	類聚符宣抄	長元5年橘俊孝の後任、この年延任か
66	(姓欠)憲清		長久 2(1041) 2. 7 2. 8	見 見	春記 春記	
67	藤原明衡	正五位下	天喜 1(1053) 6. 20	前	御産部類記	任期は永承4(1049)～7(1052)ころか
68	大中臣頼宣	従五位下	天喜 1(1053) 1.	任	祭主補任	任期は天喜1(1053)～4(1056)ころか
69	大中臣永清		承暦 1(1077) 11. 12	前	水左記	任期は天喜5(1057)～康平3(1060)ころか
70	藤原章俊		治暦 1(1065) 1. 3(1067) 2. 6	見 替	造営遷宮旧記 造営遷宮旧記	杵築大社造営の功により、この年延任。 得替、任期は康平4(1061)～治暦3(1067)か
71	藤原宗実		治暦 3(1067) 2.	任	造営遷宮旧記	任期は治暦3(1067)～延久2(1070)か
72	藤原行房		承暦 1(1077) 12. 11	前	水左記	任期は延久3(1071)～承保1(1074)ころか
73	藤原清綱		承暦 1(1077) 8. 29	見	水左記	この日、死去
74	源 経仲		承暦 1(1077) 10. 3 11. 5 ⑩. 8 4(1080) 2. 20 永保 1(1081) 8. 26	任 見 見 見 見	水左記 水左記 水左記 水左記 水左記	任期は承暦1(1077)～永保1(1081)
75	藤原兼平	従四位下	永保 2(1082) 1. 21 5. 9 応徳 1(1084) 1. 17 3(1086)	任 見 見 重	公卿補任 為房卿記 水左記 造営遷宮旧記	この年、重任
?	藤原季仲		寛治 5(1091) 5. 9	見	後二条師通記	高階重仲の誤りか
76	高階重仲		寛治 6(1092) 4. 28 嘉保 1(1094) 2. 17 11. 25	見 見 見	中右記 中右記 中右記	公卿補任藤原経季条

No	姓 名	位 階	所見年月日	種別	史 料 名	備 考
			永長 1(1096) 4. 11 11. 8 11. 20	見 見 見	中右記 後二条師通記 中右記	
77	藤原忠清	従五位下	承德 1(1097) 1. 29 康和 4(1102) 11. 20 11. 22 5(1103) 8. 6 長治 1(1104) 1. 28	任 見 見 見 遷	中右記 中右記 殿曆 為房卿記 為房卿記	任淡路守
78	藤原家保	正五位下	長治 1(1104) 1. 28 2(1105) 3. 30 12. 7 嘉承 1(1106) 10. 19 2(1107) 7. 24 8. 23 9. 1 12. 25	任 見 見 見 見 見 見 見	為房卿記 中右記 中右記 永昌記 為房卿記 殿曆 中右記 中右記	元備後守
79	藤原顕頼	従五位下 〃 〃 〃	天仁 1(1108) 1. 24 天永 1(1110) ⑦. 1 2(1111) 1. 24 永久 2(1114) 12. 14	任 見 見 遷	中右記 殿曆 中右記 中右記	任参河守
80	藤原隆頼		永久 2(1114) 12. 14	任	中右記	元参河守
81	藤原憲方		保安 2(1121) 12. 5 3(1122) 12. 17 12. 19 天治 1(1124) 5. 21 5. 28 大治 3(1128) 12. 29	任 見 見 見 重 遷	弁官補任 永昌記 永昌記 永昌記 永昌記 中右記目録	弁官補任藤原為隆条 この日、重任 任周防守
82	藤原経隆		大治 3(1128) 12. 29 4(1129) 7. 15 7. 16 ⑦. 11 ⑦. 21 8. 5 5(1130) 10. 27	任 見 見 見 見 見 遷	中右記目録 永昌記 中右記 永昌記 中右記 長秋記 中右記	元周防守 任讃岐守
83	藤原光隆		大治 5(1130) 10. 27 天承 1(1131) 1. 19 長承 1(1132) 11. 23 3(1134) 4. 25 保延 1(1135) 11. 20	任 見 見 見 見	中右記 朱器大饗雑事 中右記 百鍊鈔 中右記	
84	藤原光隆	従五位下 〃 正五位下 従四位下 〃 従四位下	保延 4(1138) 12. 29 5(1139) 6. 27 康治 1(1142) 12. 13 2(1143) 4. 3 天養 1(1144) 9. 29 久安 2(1146) 12. 29	任 見 見 見 見 遷	公卿補任 台記 平安遺文2491 諸院宮御移徙部類記 平安遺文2536 本朝世紀	公卿補任永暦元年条 任但馬守
85	藤原経隆	正四位下	久安 2(1146) 12. 29 4(1148) 10. 4 6(1150) 12. 30 仁平 2(1152) 6. 4	任 見 重 見	本朝世紀 諸院宮御移徙部類記 本朝世紀 兵範記	元但馬守 この日、重任
86	源 光保	従四位下 正四位下	久寿 1(1154) 1. 23 8. 8 2(1155) 4. 8 4. 9 6. 24 9. 23 保元 1(1156) 7. 2 7. 5	任 見 見 見 見 見 見 見	兵範記 兵範記 兵範記 台記 兵範記 兵範記 兵範記 兵範記	

3. 出雲権守補任表

No	姓 名	位 階	所見年月日	種別	史 料 名	備 考
1	文室秋津	正四位下	承和 9(842) 7. 23	任	続日本後紀	員外守、元参議、承和の変による左降 権守 ？ 正官の誤りか。 左遷、政事要略は正月27日任 配流、但馬にとどまる。 召返 公卿補任長寛元年条 前年12月29日出家
2		〃	10(843) 3. 2	卒	続日本後紀	
3	家原縄雄	従五位上	貞観 9(867) 2. 29	任	三代実録	
4	源善		延喜 1(901) 1. 25	任	扶桑略記	
5	伴師相	従五位下	康保 1(964) 3. 26	見	正税返却帳	
		〃	2(965) 5. 28	見	正税返却帳	
6	藤原隆家	従三位	長徳 2(996) 4. 24	任	小右記ほか	
		〃	3(997) 4. 5	召	小右記ほか	
7	藤原章行		承暦 1(1077) 9. 13	見	水左記	
8	藤原知足		承暦 2(1078) 3. 20	見	石清水文書5-419	
			3(1079) 3. 13	見	石清水文書5-420	
			永保 3(1083) 3. 19	見	石清水文書5-423	
9	源俊兼	従五位下	寛治 7(1093) 1. 25	見	江記	
10	藤原業仲	従五位下	康和 1(1099) 1. 22	任	本朝世紀	
11	源忠時	従五位下	康和 5(1103) 2. 30	任	本朝世紀	
12	(姓欠) 資文		保安 1(1120) 10. 13	見	中右記	
13	藤原範兼	正五位下	久安 1(1145) 1. 26	任	公卿補任	
14	藤原成佐		仁平 1(1151) 1. 2	卒	本朝世紀	
15	源 (名欠)		仁平 2(1152) 8. 28	見	平安遺文2715	

4. 出雲介補任表

No	姓 名	位 階	所見年月日	種別	史 料 名	備 考
1	巨勢首名	正六位上	天平 5(733) 8. 20	見	計会帳	この年以前見任 この年以前見任 員外介 任越後介 任大学頭 兼任右兵衛佐 文徳実録仁寿3年5月29日条 仮任 権介、三代実録貞観4月8日は月条 権介、元左近衛将監 権介 外記補任延喜9年条、任土佐守 元大外記
2	吉智首	従五位下	勝宝 6(751) 以前	見	懷風藻	
3	藤原藏下麻呂		宝字 7(763) 以前	前	続日本紀	
4	李元環	外従五位下	宝字 7(763) 1. 9	任	続紀	
5	阿部意宇麻呂	従五位下	宝字 7(763) 1. 9	任	続日本紀	
6	李元環	従五位下	宝字 8(764) 11. 5	任	続日本紀	
7	六人部広道	外従五位下	宝亀 5(774) 3. 5	任	続日本紀	
			6. 23	遷	続日本紀	
8	村国子老	外従五位下	宝亀 5(774) 6. 23	任	続日本紀	
9	豊野五十戸	従五位上	宝亀 7(776) 3. 6	任	続日本紀	
10	安倍真黒麻呂	従五位下	延暦 5(786)	任	続日本紀	
11	藤原仲成	従五位下	延暦 9(790) 3. 10	任	続日本紀	
12	石川清主	従五位下	延暦19(800) 3. 1	見	類聚国史	
		〃	20(801) 6. 27	見	類聚国史	
13	安倍宅麻呂	従五位下	大同 1(806) 1. 28	任	日本後紀	
14	御室今嗣	従五位下	大同 3(803) 11. 27	任	日本後紀	
			弘仁 1(810) 9. 10	遷	日本後紀	
15	藤原清縄	従五位下	弘仁 1(810) 9. 16	任	日本後紀	
		〃	2(811) 6. 1	見	日本後紀	
16	藤原助		天長 1(824) 2.	任	文徳実録	
17	布瑠高庭	正六位上	天長 2(825) 12. 7	任	類聚国史	
18	讃岐永直	外従五位下	承和 3(836)	任	三代実録	
19	善世豊永	外従五位下	承和 9(842) 12. 10	任	続日本後紀	
20	春良薬麻呂	外従五位下	仁寿 1(851) 1. 11	任	文徳実録	
21	安原岳	外従五位下	斉衡 2(855) 1. 15	任	文徳実録	
22	大秦此雄	外従五位下	貞観 2(860) 1. 27	任	三代実録	
23	大蔵広勝	外従五位下	元慶 8(884) 3. 9	任	三代実録	
24	大蔵広勝	外従五位下	仁和 1(885) 1. 16	任	三代実録	
25	惟良有之	外従五位下	延喜 9(909) 1. 11	任	外記補任	
			10(910) 1.	遷	外記補任	
26	朝原三行	外従五位下	承平 2(932) 1. 27	任	外記補任	
27	小智延年	外従五位下	天徳 1(957)	見	正税返却帳	
28	家原保実	従五位下	天徳 1(957)	見	正税返却帳	
29	島田公望	従五位下	康保 1(964) 7. 8	見	正税返却帳	
30	出雲明方		天元 1(978)	停	魚魯愚抄	
31	膳部数平	正六位上	天元 1(978)	任	魚魯愚抄	

No	姓 名	位 階	所見年月日	種別	史 料 名	備 考
32	菅野忠輔	従五位下	天元 1(978) 3. 3	任	外記補任	権介、2月3日任か
		"	3(980) 7. 1	遷	外記補任	権介、任大外記
33	小槻長貫	正六位上	永観 1(983)	任	除目大成抄	権介
34	安倍秀明		長徳 2(996) 1. 25	停	除目大間書	
35	日置公岡		長徳 2(996) 1. 25	停	除目大間書	権介
36	勾茂邦	正六位上	長徳 3(996) 1. 25	任	除目大間書	
			長徳 3(997) 春	停	除目大成抄	茂部、勾茂邦と同一か
37	神田用富	正六位上	長徳 2(996) 1. 25	任	除目大間書	権介
38	能登守忠	正六位上	長徳 4(998)	任	除目大成抄	
			長保 1(999)	停	除目大成抄	
39	当麻佐保	正六位上	長徳 4(998)	任	除目大成抄	権介
40	各務棟雄	正六位上	長保 1(999)	任	除目大成抄	
41	品治頼正		寛弘 3(1006) 3.	任	除目申文之抄	
			4(1007)	停	除目大成抄	
42	佐伯真忠	正六位上	寛弘 4(1007)	任	除目大成抄	
43	平 (名欠)	従五位下	長元 2(1029) 7. 11	見	小右記	小右記長元2年8月2日条
44	紀 (名欠)		天喜 3(1055) 7. 28	見	平安遺文756	
45	賀茂道言		治暦 4(1068) 9. 14	見	石清水文書1-230	陰陽頭・権暦博士
			延久 2(1070) 4. 14	見	石清水文書1-231	権介、陰陽頭・権暦博士
46	安倍盛親	従五位下	嘉保 1(1094) 2. 22	任	除目大間書	権介
47	賀茂守憲	従五位下	長治 2(1105) 1.	任	除目大成抄	権介
48	丹波重成		久安 1(1145) 1.	任	除目大成抄	権介、医博士

5. 出雲掾補任表

No	姓 名	位 階	所見年月日	種別	史 料 名	備 考
1	石川足麻呂	従七位上	天平 5(733) 12. 16	見	計会帳	
2	県犬甘黒麻呂	従六位下	天平 9(737)	見	大日本古文書2-29	
3	安宿奈杼麻呂		勝宝 8(756) 11. 8	見	万葉集20-4472	
4	吉田斐太麻呂	外従五位下	宝亀 7(776) 3. 6	任	続日本紀	兼内薬正
		"	8(777) 1. 28	遷	続日本紀	任伯耆守
5	高丘五常		元慶 3(879) 2. 1	見	都氏文集4	権掾
6	(姓欠) 和安雄		延喜 5(905) 7. 11	故	平安遺文192	故出雲掾、佐伯和安雄力
7	滋野 (名欠)	正六位上	天曆10(956) 4. 21	見	朝野群載	
8	和氣 (名欠)	正六位上	天曆10(956) 4. 21	見	朝野群載	
9	国義長		長保 1(999)	停	除目大成抄	権掾
10	藤原有忠	正六位上	長保 1(999)	任	除目大成抄	権掾
11	日下部為勝	正六位上	治安 3(1023)	任	除目大成抄	権掾
12	物部信寧	正六位上	長元 2(1029) 7. 11	見	小右記	小右記8月2日条
13	高橋 (名欠)		寛徳 1(1044)	任	任国例	権掾
14	中原実定		寛徳 2(1045)	任	除目申文之抄	文章生
15	藤原助時		永承 1(1046)	停	魚魯愚鈔	
16	文室今武		永承 1(1046)	任	魚魯愚鈔	
			4(1049)	停	魚魯愚鈔	
17	紀清時		永承 4(1049) 春	任	魚魯愚鈔	
18	内蔵 (名欠)		天喜 2(1054)	任	任国例	
19	菅原 (名欠)		天喜 3(1055) 8. 28	見	平安遺文756	
20	橘 (名欠)		康平 3(1060)	任	任国例	
21	三善 (名欠)		治暦 1(1065)	任	任国例	大掾
22	佐伯倫真	正六位上	治暦 3(1067) 2. 6	任	朝野群載	大掾
23	出雲 (名欠)		延久 1(1069)	任	任国例	少掾
24	宗祢倍延方	正六位上	嘉保 1(1094) 2. 22	任	除目大間書	
25	惟宗季忠	正六位上	嘉保 1(1094) 2. 22	任	除目大間書	権掾
26	惟宗行利		承德 1(1097) 1. 29	任	中右記	中右記正月30日条
27	橘祐之	正六位上	康和 2(1100)	任	魚魯愚鈔	

6. 出雲目補任表

No	姓 名	位 階	所見年月日	種別	史 料 名	備 考
1	小野淑奈麻呂	正八位下	天平 5(733) 8. 19	見	計会帳	
		〃	9. 27	見	計会帳	
		〃	10. 11	見	計会帳	
		〃	天平 6(734) 8. 20	見	計会帳	
2	大蔵神主	大初位下	天平11(739)	見	大日本古文書2-201	
3	坂上子老	外從五位下	神護 1(765) 10. 22	見	続日本紀	大目、正六位上より昇叙
4	伴藤利	從六位下	延喜13(913)	任	除目大成抄	少目
5	高屋 (名欠)	正六位上	天曆10(956) 4. 21	見	朝野群載	権大目
6	小治田助忠		寛弘 2(1005) 2. 4	見	平安遺文438	
7	清原惟盛		長元 8(1035)	任	魚魯愚鈔	大目
8	刑坂部 (名欠)		長元 8(1035) 12. 27	見	平安遺文555	
9	紀重守	正六位上	永承 4(1049) 2.	任	除目大成抄	
10	藤井成武	從七位上	康平 4(1061) 2.	任	除目大成抄	少目
11	高橋武末	從七位上	嘉保 1(1094) 2. 22	任	除目大間書	大目
12	榎本春武	從七位上	永久 4(1116) 1.	任	除目大成抄	少目
13	坂上国貞	正六位上	久寿 2(1155) 1.	任	除目大成抄	少目

島根県立図書館所蔵「桃家資料」

— 解題と目録 —

宇野田 尚哉

「桃家資料」解題

ここに掲載するのは、島根県立図書館所蔵「桃家資料」の解題と目録である。

桃家とは、宝暦7年（1757）に初代の源蔵（号白鹿）が召し出されてから、明治4年（1871）に廃藩を迎えるまで、5代にわたって当主が藩儒をつとめた松江藩士の家である。代々儒者を家業とした桃家には、歴代の学者の日記や著作、旧蔵書などが合計300点以上も伝わり、子孫によって大切に管理されてきた。

その「桃家資料」が島根県立図書館に寄贈されたのは1998年のことである。初代の白鹿から数えると七代目にあたる高名な歴史学者桃裕行氏（1910-1986、元東京大学史料編纂所所長、東京大学名誉教授）がお亡くなりになったあと、ご夫人のチヨ氏から寄贈されたのであった。その後島根県立図書館では、資料を順次マイクロフィルム化して紙焼きの冊子を作成し閲覧に供するなど、「桃家資料」を利用しやすくするための努力が重ねられてきたのであるが、しかし受け入れ時に作成された仮目録が現在も踏襲されているため、依然として「桃家資料」の全体像はよくわからないままとなっている。今回「桃家資料」の目録を作成することにしたのは、そのような不都合を解消し研究を一步進めるためである。

とはいえ、ここで松江藩の儒学史や藩校史に立ち入ることはできないし、桃家の歴代をはじめとする松江藩儒についても詳しく論じる機会は別に設けざるをえない。そこで、以下では、「桃家資料」の特徴をなるべく簡潔に指摘して、今後の利用の指針を示しておくこととしたい。（なお、桃チヨ氏からは2005年にも桃家歴代の軸物や印章など貴重な資料をご寄贈いただいている。ただ、第2次の受贈資料は第1次の受贈資料とかなり性格が異なるため、機会を改めて紹介することとし、本稿には含めなかった）。

「桃家資料」の目録を作成するにあたって私が依拠した分類の枠組は、凡例に示した通りである。この分類枠組は「桃家資料」の特徴を踏まえたものであるから、ここではこの分類枠組に即して説明を加えていくこととする。なお、桃家の歴代については、目録末尾の【附表①】「桃家歴代一覧」を参照されたい。あらかじめ述べておくと、おそらくは当時における活躍度とも比例して、初代白鹿・五代節山の史料が最も多く、二代西河の史料がそれに次ぎ、三代黄園・四代翠庵の史料は比較的少ない。

(1) **桃家歴代の日記について** 「桃家資料」最大の特徴は、宝暦7年（1757）から明治8年（1875）に至る119年間の日記が残っているという点である。三代黄園・四代翠庵の時期を中心に、日記が残っていない年や、残っていても内容の薄い年もあるが、それでも藩儒の公私の記録を百年以上にわたって通覧できる史料群というのは稀有である。松江藩の「桃家資料」に匹敵しうるものとしては、龍野藩の「股野家資料」があるくらいであろう。

なかでもとくに重要なのは、初代白鹿の日記と五代節山の日記である。初代白鹿は、宝暦7年（1757）に召し出されてから、享和元年（1801）に没するまで、ほとんど松江を離れることなく、国許で松江藩の教学政策を担い続けた。その間の白鹿の日記はほぼ完全な状態で遺されており、18世紀後半の松江藩を考えるうえでの重要な史料となっている。また、幕末から明治初年にかけて松江藩→松江県→島根県の学政に深く関わった五代節山の日記も完全に近い状態で遺されており、こちらも幕末維新期の

松江を考えるうえでの重要な史料となっている。そのほか、二代西河の日記は、京都遊学中のもの、江戸滞在中のものが残っているという点で特徴があり、注目される。

(2) **学校の日記について** 宝暦7年(1757)に初代白鹿が儒者として召し出された際、「新知七十石」に加えて「学校料米廿表銀十枚」が給せられたことからわかるように(『列士録』)、白鹿の召し出しは国許で藩校を運営させることをその目的の一つとしていた。松江藩校文明館はこのようにして宝暦8年(1758)に成立するのであるが(のち天明4年に明教館と改称)、実のところ、この文明館(明教館)は、文久3年(1863)に文武の教場が移転・統合されて文武館が成立するまで、桃氏の居宅に隣接していた。すなわち、松江藩校文明館(明教館)は、文武館が成立するまでは、桃家の私塾としての性格もあわせもつ家塾型藩校だったのである。そのため、文明館・明教館の時代には、桃家の「公私日記」の「公」的部分が学校の日記も兼ねており、それとは別に学校の日記が書かれるということにはなかった。

しかし、文久3年(1863)に文武の教場が移転・統合されて文武館が成立し、さらに慶応元年(1865)に文武館が再編されて修道館が成立すると、桃家の私塾という性格は失われるから、独立したかたちの学校の日記が必要になってくる。松江藩校自体は宝暦8年(1758)に成立するにもかかわらず「桃家資料」に含まれる学校の日記が慶応2年(1866)から明治4年(1871)までに限られるのは、以上のような理由による。下限が明治4年であるのは、この年の廃藩置県により藩校が存立の基盤を失うからであることは言うまでもない(旧松江藩校修道館の閉校は明治5年4月)。なお、学校の日記は記録者を明記していない場合が多いが、この時期には桃節山が修道館儒学助教(慶応元年～)、儒学教授(明治元年～)、皇学儒学教授(明治2年～)をつとめており、いずれも節山自身か節山に近い人物の手に成ったと考えて間違いなからう。

「桃家資料」に含まれる学校の日記は、さきほど述べたような理由で慶応2年から明治4年までに限られてはいるが、これを同時期の節山の日記などとあわせて分析していくなら、松江藩校は幕末維新期にいかにも再編され、いかにも廃藩置県を迎えたのか、という興味深い問題へのアプローチが可能になるはずである。

(3) **松江藩歴代藩主の年譜などについて** 藩儒にとって、藩主の系図を作成したり年譜を編纂したりする仕事は、公務の重要な一環であった。「桃家資料」には、松江藩および支藩広瀬藩の歴代藩主の系図や年譜の草稿が含まれているだけでなく、年譜編纂の手順をうかがわせる史料(たとえば2-2-4「御年譜可載品書抜心得」)なども含まれていて興味深い。

(4) **桃家歴代の著作について** 当然のことながら、「桃家資料」には、桃家歴代の学者たちの著作も含まれている。なかでも注目されるのは、初代白鹿、二代西河、五代節山の著作である。

初代白鹿は、寛保3年(1743)年に22歳で江戸の林家塾に入門してから、宝暦7年(1757)に36歳で松江藩に召し抱えられて松江に移住するまで、林家塾を中心に江戸で活動した。白鹿は、徂徠学が大流行していた18世紀中頃の江戸で林家の塾に入門し、そこで思想を形成するとともに、人的な関係も築いたのである。したがって、白鹿は、思想史的に見ると、18世紀中頃の林家塾の学風を体現する人物の一人であるということになる。

ここで重要なのは、18世紀中頃の林家塾の学者たちのなかには、諸藩に召し抱えられるなどして社会的地位を得ていった者は少なくないものの、思想性の高い著作を遺すなどして思想史上に記憶されている者はほとんどいない、という点である。18世紀中頃の林家塾の学風を明らかにしておくことは、18世紀末の寛政異学の禁を歴史的に位置づけるうえでもぜひ必要なのであるが、しかし史料的な制約が思いのほか大きいのである。「桃家資料」に含まれる白鹿の著作が重要なのは、それがこの欠を補うるものだからである。白鹿の経学上の主著である『大学独断』や『中庸管窺』に検討を加えて18世

紀中頃の林家塾の学風を明らかにするという作業がまずは必要であろうし、さらにはそれ以外の著作についても広い視野に立って検討を進めていくことが必要であろう。

二代西河は、遺された著作から判断するかぎり、初代白鹿よりもはるかに強い関心を現実政治に対して抱いていたようである。二代西河と彼の著作については、当該期の藩政改革の動きなどとも関係づけながらその位置づけを考えていく必要がある。

(5) 桃節山と幕末維新期の学制改革関係史料について 桃節山は、天保3年(1832)に藩医杉貞庵の次男として生まれ、嘉永2年(1849)18歳のときに桃家第四代翠庵の養子となった。その後嘉永7年(1854)には藩主の儒学御相手を命ぜられ、同年から安政4年(1857)にかけては江戸に滞在することになるが、節山はその間に昌平黌に入門し、佐藤一斎らに学んでいる。桃家旧蔵書中の佐藤一斎の著作(5-2-21「孟子欄外書」など)はこのとき系統的に筆写されたものであり、また節山の著作のなかに安井息軒の添削を受けたもの(3-5-2「鄙稿」)などがあるのも彼が昌平黌とこのような関係を結んでいたからである。松江に戻ったあと、節山は、文久2年(1862)以後さかんに上書を提出している(3-5-12「贅言」)。そのようななか、慶応元年(1865)には修道館儒学助教、明治元年(1868)には儒学教授、明治2年(1869)には皇学儒学教授に任ぜられる一方、慶応元年には藩命により九州地方へ学事の視察に赴き(1-5-8「西遊日記」、3-5-20「肥後見聞録」、明治4・5年(1871・72)には郷校取調のため巡郷調査を行い(1-5-14「郷校取調巡郷日記十五」、3-5-23「巡郡稿」、明治7年(1874)には第十九中学区担当一等巡回教師として学区内を巡回するなど(1-5-15「第十九中学区巡回日記」、この時期の学政に深く関わっている。「4 維新後の松江藩・松江県・島根県の学制改革関係史料等」は、節山がこのような立場にあったことにより「桃家資料」に含まれることになった史料である。

(6) 桃家旧蔵書 「5 桃家旧蔵書」のうち、松江藩と関わって重要そうな史料を挙げておくと、5-1-3「明和三戌八月治郷公御初入之節宗衍公より諫書写」、5-1-4「晏子春秋」、5-1-5「秘書」、5-1-6「上書写」、5-1-7「内用留」、5-1-24「出雲金石文集」などであろうか。松江藩の文脈を離れていると、桃白鹿がまだ江戸にいた頃に入手したのではないかと思われる5-2-5「[兼日題併唐話]」(享保9年に開かれた漢詩・唐話の会の記録)が興味を引く。また、桃家の学者による筆写本について見てみると、西河が松平定信の著作を筆写している点、節山が佐藤一斎の著作を系統的に筆写している点が特徴的である。写本・版本を通じて言えることは、徂徠学系の著作の比率が高いということであるが、五代にわたって続いた藩儒の家の所蔵する版本がこれほど少なかったとは考えられず、いずれかの時点で蔵書の整理がなされたものと思われ、松江藩儒桃家の蔵書の本来の構成は不明なままであると言わざるをえない。

以上、「桃家資料」の特徴や意義について簡単に述べてきたが、最後に「桃家資料」に基づく研究の現状についても触れておきたい。かつての所蔵者桃裕行氏が研究者の利用に積極的に供してこられたこともあり、「桃家資料」に基づく研究には、すでに一定の蓄積がある。その代表的なものを挙げれば、石川謙『日本学校史の研究』(小学館、1960年。とくに「近世の学校 第四 御城講釈と家塾教育との発展的総合体としての藩学—松江藩の修道館(明教館)に即して見る—」の部分)と、佐野正巳『松江藩学芸史の研究』(明治書院、1981年、とくに第3章「桃白鹿」・第5章「桃西河」)の2点ということになる。また、本目録末尾の【附表②】「桃家資料」翻刻一覧」に見られるように、とくに磯辺武雄によって、「桃家資料」の翻刻紹介が精力的に進められている。この目録の発行を契機として、「桃家資料」に基づく研究がますます盛んになることを期待したい。

この目録を作成する過程では、島根県立図書館郷土資料室の方々、松江市教育委員会文化財課史料編纂室の内田文恵さん・北村久美子さん、史料調査の初期の段階で協力してくれた神戸大学大学院の学生諸君に、たいへんお世話になった。記して感謝したい。

「桃家資料」目録

凡例

- (1) 分類と配列:史料は次のような枠組で分類し、おおむね年代順に配列した。ただし、年代順に配列するとかえってわかりにくくなる場合には、内容などに即して配列した。たとえば、桃白鹿の著作は、四書関係→五経関係→諸子関係…といったかたちで配列してある。

1 桃家歴代の日記・学校の日記等

- 1 初代白鹿（源蔵、1722～1801）の日記
- 2 二代西河（義三郎、1748～1810）の日記
- 3 三代黄園（孝太郎、1779～1817）の日記
- 4 四代翠庵（文之助、1806～1875）の日記
- 5 五代節山（文之助、好裕、1832～1875）の日記
- 6 学校の日記
- 7 学校関係史料（日記以外）

2 松江藩歴代藩主年譜等

- 1 松江藩歴代藩主年譜
- 2 松江藩歴代藩主年譜編纂関係史料
- 3 支藩広瀬藩歴代藩主年譜草稿
- 4 松江藩松平家関係史料

3 桃家歴代の著作等

- 1 白鹿の著作等
- 2 西河の著作等
- 3 黄園の著作等
- 4 翠庵の著作等
- 5 節山の著作等
- 6 著者の判然としない史料
- 7 桃家の記録等
- 8 書簡等

4 維新後の松江藩・松江県・島根県の学制改革関係史料等

- 1 維新後の学制関係史料（松江藩以外）
- 2 明治4年の松江藩（→7月14日松江県→11月15日島根県）の学制改革に関する史料等
- 3 学制公布（明治5年8月5日）以後の島根県の学制改革に関する史料等
- 4 その他

5 桃家旧蔵書

- 1 松江藩と関係の深い史料
- 2 写本
- 3 版本
- 4 近代活字本

以下、本目録の分類・配列について、3点注記しておく。

- ① 「3 桃家歴代の著作等」には、私の推定に基づいてここに配列した史料も含まれる。ただし、私の推定に基づいてここに配列した場合は、そのことがわかるように備考欄に注記しておいた。
- ② 「3 桃家歴代の著作等」のうち、史料名に*がついているものは、桃家歴代の著作ではないがそこに配列し

ておいたほうがわかりやすいだろうと判断してあえてそこに配列した史料である。＊がついている史料の著者名は備考欄に補ってある。

- ③ 著者不明の写本史料の場合、桃家の学者の稿本と見るべきか、他者の著作の写本と見るべきか、迷う場合が少なくなった。そこで、迷った場合は次のような原則に従って処理した。(a)抜書・雑記の類は桃家の学者の手稿本と見て「3 桃家歴代の著作等」の「6 著者の判然としない史料」に配列した。一方、(b)まとまった内容の写本史料は一応他者の著作の写本と見て「5 桃家旧蔵書」の「1 松江藩と関係の深い史料」に配列したうえで、桃家の学者の著作である可能性もあることを備考欄に注記した。
- (2) 整理番号：たとえば、「1 桃家歴代の日記等」のうちの「1 初代白鹿（源蔵、1722～1801）の日記」の最初の史料「1 要記第壹」であれば1-1-1とするかたちで、整理番号をつけた。この目録中で他の史料に言及する場合は、この整理番号による。ただし、島根県立図書館での史料の管理は後述する史料番号に基づいて行われているので注意されたい。
- (3) 史料名：史料名は、原則として内題によることとし、内題によることができない場合は外題によった。内題にも外題にもよることができない場合は、[]で括って新たに史料名を付した。
- (4) 巻冊：「巻冊」の項には、巻数・冊数を記した。ただし、不分巻の史料についてはたんに冊数のみを記した。
- (5) 刊・写の別など：1・2・4に分類した史料は、備考欄に注記した例外を除き、すべて手書きの史料なので、1・2・4についてはこの欄は設けなかった。3についてはこの欄を設け、稿本（著者の自筆稿本）・写本（著者以外の人物による筆写本）・版本（近世の整版本）・近世活字本・近代活字本を区別した。5では、作表の都合上、「刊・写の別など」の情報は「巻冊」欄に統合してある。なお、稿本と写本の別は、判別しがたい場合も少なくなく、必ずしも厳密ではないことをお含みおきいただきたい。
- (6) 著者：桃家の学者については、代表的な通称と代表的な号（初代の場合であれば源蔵と白鹿）の両方を併用した。松江藩士としての名前と儒学者としての名前の両方に配慮する必要があると考えたからである。その他の著者については、最も広く知られていると考えられる名前を用いた（たとえば物茂卿ではなく荻生徂徠とするなど）。
- (7) 期間／年齢：1については、日記の期間と、そのときの著者の年齢（数え年）を記した。
- (8) 史料番号／フィルム番号／紙焼製本番号：史料番号は、島根県立図書館が「桃家資料」を受け入れる際に付した番号であり、島根県立図書館では「桃家資料」はこの番号に基づいて管理されている。また、すでにマイクロフィルム化されている史料、紙焼きの冊子が作成されている史料については、フィルム番号・紙焼製本番号も記した。
- (9) 備考：備考欄には、参考になると思われる情報をなるべく簡潔に書き込んだ。ただし、どういう情報をどの程度書き込むかについて厳密に方針を定めて作業をしたわけではないので、史料によって情報の精粗にかなりの差が生じている。なお、「備考」欄に「翻刻あり」とあるものについては、目録末尾の【附表②】「桃家資料」翻刻一覧」を参照していただきたい。

整理番号	史料名	巻冊	期	著者	年齢	史料番号	フィルム番号	紙複製本番号	備考
1 桃家歴代の日記・学校の日記等									
1 初代白鹿(源藏, 1722~1801)の日記									
1	要記第壹	1冊	宝暦7(1757). 10. 7~明和2(1765). 11. 21	桃源蔵	36~44	135	1	46	表紙朱書「第一」。翻刻あり。
2	雑記	1冊	宝暦7(1757). 10. 7~宝暦7(1757). 10. 9	桃源蔵	36	149	1	48	墨付3丁。
3	[雑記]	1冊	宝暦8(1758). 5. 14~宝暦8(1758). 6. 7	桃源蔵	37	248	24	42	墨付2丁。
4	宝暦十二年壬午日記	1冊	宝暦12(1762). 1. 2~宝暦12(1762). 12. 28	桃源蔵	41	178	1	48	8月25日以降は漢文体。
5	公記	1冊	明和3(1766). 1. 10~明和6(1769). 6. 2	桃源蔵	45~48	66	1	46	表紙朱書「第二」。翻刻あり。
6	要記	1冊	明和6(1769). 11. 13~明和8(1771). 12. 28	桃源蔵	48~50	31(1)	1	46	表紙朱書「第三」。翻刻あり。
7	要記	1冊	明和9(1772). 1. 2~安永2(1773). 12. 24	桃源蔵	51~52	31(2)	1	46	表紙朱書「第四」。
8	要記	1冊	安永3(1774). 1. 2~安永4(1775). 閏12. 14	桃源蔵	53~54	229	13	11	表紙朱書「第五」。翻刻あり。
9	公用簿	1冊	安永5(1776). 1. 2~天明1(1781). 12. 28	桃源蔵	55~60	71	1	46	表紙朱書「第六」。
10	公私要事	1冊	天明2(1782). 1. 2~天明4(1784). 12. 25	桃源蔵	61~63	62	1	47	表紙朱書「第七」。
11	公私要事	1冊	天明5(1785). 1. 1~天明8(1788). 12. 21	桃源蔵	64~67	65	1	47	表紙朱書「第八」。
12	公私要事	1冊	天明9(1789). 1. 1~寛政4(1792). 12. 28	桃源蔵	68~71	69	1	47	表紙朱書「第九」。
13	桃家公私要録	1冊	寛政5(1793). 1. 1~寛政7(1795). 12. 28	桃源蔵	72~74	78	1	47	表紙朱書「第十」。
14	源藏要記	1冊	寛政5(1793). 2. 3~文化12(1815). 4. 6	桃源蔵	72~	192	22	37	他の日記には簡略にしか記されていない事柄の関係資料が収められているなど、他の日記とは性格を異にする。三代黄園の時期まで書き継がれている点にも注意を要する。
15	公私要録	1冊	寛政8(1796). 1. 1~寛政9(1797). 12. 18	桃源蔵	75~76	58	1	47	表紙朱書「第十一」。
16	公私要録	1冊	寛政10(1798). 1. 1~寛政11(1799). 12. 23	桃源蔵	77~78	67	1	48	表紙朱書「第十二」。
17	公私要録	1冊	寛政12(1800). 1. 8~寛政12(1800). 12. 6	桃源蔵	79	57	1	48	表紙朱書「第十三」。
18	公私要録	1冊	寛政13(1801). 1. 1~享和3(1803). 12. 18	桃源蔵	80	76	1	48	表紙朱書「第十四」。享和元(1801). 8. 19源藏没。同年7月18日条より義三郎の筆跡。
2 二代西河(義三郎, 1748~1810)の日記									
1	負笈日歴	1冊	安永3(1774). 3. 20~安永4(1775). 7. 21	桃義三郎	27~28	89	1	49	游学時の漢文日記。翻刻あり。
2	東都客中公用簿	1冊	安永9(1780). 5. 26~天明3(1783). 1. 19	桃義三郎	33~36	73	1	49	
3	東都祇役要記	1冊	寛政2(1790). 2. 1~寛政4(1792). 5. 7	桃義三郎	43~45	32	2	49	3-2-15『東遊行装』参照。翻刻あり。
4	公私要録	1冊	享和4(1804). 1. 3~文化7(1810). 11. 20	桃義三郎	57~63	42	2	50	表紙朱書「第十五」。文化7(1810). 8. 19義三郎没。8月より孝太郎。
3 三代黄園(孝太郎, 1779~1817)の日記									
1	[公私要録]	1冊	文化7(1810). 8. 20~文化7(1810). 11. 20	桃孝太郎	32	247	24	42	墨付6丁。1-2-4の孝太郎執筆部分の写し。
2	公私要録	1冊	文化8(1811). 1. 7~文化8(1811). 12. 16	桃孝太郎	33	75	2	50	墨付2丁。
4 四代翠庵(文之助, 1806~1875)の日記									
1	庚辰行曆	1冊	文政3(1820). 4. 14~文政3(1820). 7. 28	[桃文之助]	15	204	1	49	松江-江戸間往還の日記。
2	公私要録	1冊	文政4(1821). 4. 17~天保5(1834). 3. 5	[桃文之助]	16~29	30	2	51	表紙に「列土録留之外」とあり。文書の引用を多く含む。
3	公私要録	1冊	文政12(1829). 6. 14~文政12(1829). 12. 24	桃文之助	24	68	2	51	文書の引用を多く含む。
4	公私要録	1冊	天保3(1832). 1. 3~天保9(1838). 4. 23	桃文之助	27~32	70	2	51	表紙に「在江戸中別録二記之」とあり。「別録」は1-4-5を指す。
5	武郡公私要録	1冊	天保3(1832). 4. 4~天保4(1833). 4. 21	桃文之助	27~28	61	2	51	
6	公私要録	1冊	天保10(1839). 1. 1~天保13(1842). 11. 27	桃文之助	34~37	74	2	52	
7	公私要録	1冊	天保15(1844). 5. 1~嘉永1(1848). 5. 6	桃文之助	39~43	72	2	52	
5 五代節山(文之助, 好裕, 1832~1875)の日記									

1 公私要記一	1冊	天保3 (1832). 11. 晦～安政4 (1857). 12. 26	桃文之助	1～26	55	2	52	出生以来の自身の履歴および桃家の事跡を記す。寂養の日記となるのは安政4年の途中から。翻刻あり。
2 公私要記二	1冊	安政5 (1858). 1. 5～文久1 (1861). 12. 24	桃文之助	27～30	63	2	53	翻刻あり。
3 公私要記三	1冊	文久2 (1862). 1. 5～文久3 (1863). 12. 28	桃文之助	31～32	77	2～3	54	翻刻あり。
4 公私要記四	1冊	文久4 (1864). 1. 2～元治2 (1865). 1. 16	桃文之助	33	64	3	55	
5 出張日記五	1冊	元治1 (1864). 8. 19～元治1 (1864). 9. 20	桃文之助	33	106 (1)	3	55	
6 後出張日記六	1冊	元治1 (1864). 11. 15～元治2 (1865). 1. 22	桃文之助	33～34	107	3	55	
7 公私要記七	1冊	元治2 (1865). 1. 22～慶応1 (1865). 7. 28	桃文之助	34	56	3	56	
8 西遊日記八	1冊	慶応1 (1865). 7. 17～慶応1 (1865). 12. 15	桃文之助	34	220	13	10	翻刻あり。
9 公私要記九	1冊	慶応2 (1866). 1. 2～慶応2 (1866). 12. 晦	桃文之助	35	59	3	—	
10 出張日記十	1冊	慶応2 (1866). 6. 19～慶応2 (1866). 8. 12	桃文之助	35	106 (2)	3	57	
11 公私要記十一	1冊	慶応3 (1867). 1. 2～慶応3 (1867). 12. 28	桃文之助	36	60	3	58	翻刻あり。
12 京役日記十三	1冊	明治1 (1868). 11. 21～明治2 (1869). 1. 27	桃文之助	37	18	3～4	58	「十二」は欠。
13 公私要記十四	1冊	明治2 (1869). 1. 28～明治8 (1875). 1. 29	桃文之助	38～43	79	4	59	表紙に「明治五年七月朔日ヨリ通称ヲ廃シテ好裕 (ヨシスケ) ト称ス」とあり。
14 郷校取調巡郷日記十五	1冊	明治5 (1872). 1. 17～明治5 (1872). 2. 8	桃文之助	41	26	4	59	3-5-23『巡郷稿』参照。翻刻あり。
15 第十九中学区巡回日記	1冊	明治7 (1874). 7. 15～明治7 (1874). 10. 8	桃好裕	43	16	4	60	翻刻あり。なお、本来は1-5-14と1-5-15のあいだに『地理取調巡回日記』があったようである。磯辺武雄『公私要記一』(北樹出版, 2001年)「解題」参照。
16 公私日記	1冊	明治8 (1875). 1. 1～明治8 (1875). 9. 5	桃好裕	44	54	4	60	明治8. 11. 13好裕没。
6 学校の日記								
1 慶応二年日記	1冊	慶応2 (1866). 2. 9～慶応2 (1866). 8. 3	高木文四郎		213 (1)	4	61	
2 教授先生御留守中日記	1冊	慶応2 (1866). 8. 3～慶応2 (1866). 12. 27	桃文之助		213 (2)	4	61	
3 [日記]	1冊	慶応3 (1867). 1. 2～慶応3 (1867). 4. 28			166 (2)	20	30	表題なし。1丁表に「当卯年」とあり。
4 日記	1冊	慶応3 (1867). 5. 4～慶応3 (1867). 12. 28			212	4	62	
5 日誌	1冊	慶応3 (1867). 11. 12～慶応3 (1867). 12. 27			166 (1)	20	30	1-6-4の抄写本。
6 助教用留	1冊	慶応3 (1868). 12月間, 慶応4 (1868). 1. 6答	桃文之助		209	4	62	上下二段。下段は、慶応3年12月に助教高木文四郎・桃文之助が教授に提出した伺い。上段は、翌年正月6日に教授からなされた回答。日記ではないが、便宜上ここに配置しておく。
7 日記	1冊	慶応4 (1868). 1. 1～慶応4 (1868). 1. 11			46	5	63	表紙に「慶応四年戊辰正月ノ教授発程迄」とあり。
8 日記	1冊	慶応4 (1868). 1. 11～明治1 (1868). 12. 26			215	4	63	表紙に「慶応四年戊辰正月十一日よりノ日記」とあり。
9 日記	1冊	明治2 (1869). 1. 8～明治2 (1869). 2. 26			214	—	—	表紙に「明治二年己巳正月ヨリ二月マテノ日記」とあり。
10 儒学校日記	1冊	明治2 (1869). 3. 3～明治2 (1869). 7. 28			144	5	64	表紙に「明治二年己巳三月よりノ儒学校日記ノ教授ノ助教」とあり。翻刻あり。
11 日誌 皇漢学校	1冊	明治4 (1871). 1. 7～明治4 (1871). 10. 29			24	5	64	表紙に「辛未ノ日誌ノ皇漢学校」とあり。7. 14陸藩置県。翻刻あり。
12 日誌 南学	1冊	明治4 (1871). 10. 28～明治4 (1871). 12. 28			154	5	65	表紙に「辛未十一月よりノ日誌ノ南学」とあり。翻刻あり。
7 学校関係史料 (日記以外)								
1 学校要規	1冊				198	5	65	安政3年 (1856) 以後成立。学校の規則・記録集。
2 明教館教導条目	1冊				151	20	29	未定稿。執筆者・執筆年代不明。
3 定語規則	1冊				254	24	43	端裏書「学館」。執筆者・執筆年代不明。

4	[修道館の儀につき上書]	1冊				250	24	42	上書5通からなる。(1)執筆者・宛先・年代不明, (2)「十月 桃文之助」, 宛先・年代不明, (3)「十月 桃文之助」, 宛先・年代不明, (4)「十一月四日 夜認 神実可助 上 葉長先生下執事」, 年代不明, (5)「十一月十一日 夜認 神実可助 上」, 宛先・年代不明
5	修道館祭神説	1冊			桃文之助 神実可助	8	15	17	明治2年。修道館の祭神を素戔嗚・大己貴とする理由を述べる。
6	開講式并諸調物留帳	1冊				22	16	19	明治5年正月の開講式をひかえて明治4年に作成されたもの。

整理番号	史料名	巻冊	著者	史料番号	フィルム番号	紙焼製本番号	備考
2 松江藩歴代藩主年譜等							
1 松江藩歴代藩主年譜							
1	出雲侍従源綱近年譜	1冊		181	12	8	外題「隆元公年譜」。第3代藩主綱近年譜。
2	出雲侍従源吉透年譜	1冊		163	12	7	外題「源林公年譜」。第4代藩主吉透年譜。
3	今公年譜	2巻2冊	桃源蔵	86	11	4	内題・外題とも「今公年譜」。明和7年閏6月まで。「今公」は第7代藩主治郷のこと。2-1-5の稿本。
4	大円公年譜	零本2冊	[桃義三郎]	41(1~2)	10	3	「大円公」は第7代藩主治郷のこと。2-1-5の稿本。巻1・巻4に相当。
5	大円公年譜	4巻4冊	桃義三郎	41(3~6)	10	2~3	内題・外題同じ。
6	月潭公年譜	3巻3冊	桃義三郎	202	12	9	内題・外題同じ。「月潭公」は第8代藩主斉恒のこと。
7	今公年譜稿	1束		147	12	7	史料名は包紙による。嘉永6年~安政6年の記事。第10代藩主定安の年譜草稿か？
2 松江藩歴代藩主年譜編纂関係史料							
1	天降院様御年譜凡例	1冊		161	12	7	「天降院様」は第6代藩主宗衍。
2	天降公年譜義訳	1冊	桃源蔵	94	11	4	「天降公」は第6代藩主宗衍。本文冒頭に「天降公年譜、御代代ノ御年譜、イツレモ御譜ヲ書ハナシニシテ、□□年譜ト題セルコト失礼ノ至極ニシテ、恐多事也」云々。
3	天降公年譜法祭礼	1冊		95	11	4	墨付2丁。
4	御年譜可載品書抜心得	1冊		210	13	9	「御養子之事」「格別之御吉事」「御目見之事」「御誓詞之事」以下、全52項目。
5	御年譜二可書載惣目録	1冊		117	11	5	「御誕生之事」「御宮参之事」「御喰初之事」以下、全78項目。表紙裏に朱で「朱圈ハ白鹿先生ノ凡例ヲ以補入ス」とあり。
6	寛政六甲寅年御日記書抜	1冊		114	11	4	寛政6年分の藩庁の日記の抜き書き。年譜編纂の材料か？
7	寛政八丙辰年御日記書抜	1冊		43	10	3	寛政8年分の藩庁の日記の抜き書き。年譜編纂の材料か？
8	御日記抄書	1冊		140	12	6	文化6~文政3年分の藩庁の日記の抜き書き。年譜編纂の材料か？
3 支藩広瀬藩歴代藩主年譜草稿							
1	近栄公御譜録草稿	1冊		138	11	6	「近栄公」は広瀬藩初代藩主松平近栄。
2	近時公御譜録草稿	1冊		164	12	7	「近時公」は広瀬藩第2代藩主松平近時。
3	近朝公御譜録草稿	1冊		115	11	5	「近朝公」は広瀬藩第3代藩主松平近朝。
4	近明公御譜録草稿	1冊		195	12	8	「近明公」は広瀬藩第4代藩主松平近明。
4 松江藩松平家関係史料							
1	御家御代々諸記	1冊		158	12	7	藩祖直政から「当君宗衍公」に至るまでの略伝。最後の記事は延享2年(1745)。
2	御系図之内 越前家直政系	1冊		97	18	25	藩祖直政およびその子の略系図。表紙に「林大学頭」とあり。桃源蔵は、江戸に滞在していた宝暦10年に、林大学頭から「御系図補入」の御用筋を仰せ聞かされ、「御系図補入御改一冊」を林大学頭に提出しているの(『要記第壹』)。この2-4-2はその関係の史料であろう。なお、この点については、佐野正巳『松江藩学芸史の研究』(明治書院、1981年)228~229頁参照。
3	[松平家系図]	1冊		110	11	4	藩祖直政から幕末に至るまでの系図。

整理番号	史料名	刊写の別 など	巻冊	成 立	史料番号	ファイル ム番号	紙焼製本 番号	備 考
3 桃家歴代の著作等								
1	白鹿の著作等							
1	大学独断	稿本	1冊	明和3年9月自序	174	6	66	『大学独断』の完成稿。序文2丁、本文28丁。
2	大学独断正文	近世 活字本	1冊		186 (2)	6	66	内題「大学」、外題「大学独断正文」。正文7丁（活字本、半丁あたり18字×9行）。序文なし。内題の次の行には「侍講臣桃源蔵章句」とあり。侍講用か。
3	大学独断正文	近世 活字本	1冊	明和3年9月自序	186 (1)	6	66	内題「大学」、外題「大学独断正文」。正文7丁（活字本、半丁あたり18字×9行）に手書きの序文2丁を冠する。内題の次の行には「桃源蔵章句」とあり。
4	[大学独断正文]	近世 活字本	1冊		272	—	—	内題「大学」、外題「大学桃白鹿章句」、正文8丁（活字本、半丁あたり16字×9行、ただし5丁目は補写）、序文なし。内題の次の行には「桃源蔵章句」とあり。
5	[大学独断正文]	写本	1冊		130	7	71	明和3年8月武忠徳写。内題「大学」、外題「大学桃源蔵章句」。著者序文成立以前の写本。内題の次の行には「雲濤教授桃源蔵章句」とあり。
6	[大学独断或問・中庸管 窺或問]	稿本	1冊		165 (2)	6	66	『大学独断或問』6丁・『中庸管窺或問』5丁合綴1冊。3-1-7に先行する稿本。付箋多。
7	[大学独断或問・中庸管 窺或問]	稿本	1冊		165 (1)	6	66	『大学独断或問』11丁・『中庸管窺或問』7丁合綴1冊。3-1-6の完成稿。
8	[中庸管窺]	稿本	零本1冊		104	19	27	『中庸管窺』の初期稿本。内題なし、外題「中庸」。『中庸』の後半（「子曰舜其大孝也与」以下）について、諸家の説を引き、自身の校文をさしはさむ。全20丁、前半欠。
9	中庸管窺	稿本	1冊	安永9年3月自序	132 (3)	7	72	序文2丁、本文69丁。
10	中庸管窺	稿本	2冊	安永9年3月自序	51	7	72	表紙には上下とあるが内容上は不分巻。序文2丁、本文69丁。
11	中庸管窺	稿本	2冊	安永9年3月自序	132 (1・2)	6	66	表紙には乾坤とあるが内容上は不分巻。序文2丁、本文69丁。稿本の順序は、3-1-8→9→10→11。
12	論語一斑	稿本	20巻12冊		20 (1)	6~7	70~71	
13	論語一斑	写本	20巻10冊		20 (2)	7	73~74	第1分冊・第3分冊の表紙には「武忠徳写」、第4分冊の表紙には「佐忠徳写」とあり。12の本文よりものに成立した写本。
14	孟子蠡測	稿本	1冊		87	6	69	
15	書臆	稿本	3冊		134	6	66~67	
16	読礼記	稿本	2冊	安永元年11月自序	142	6	67	第1分冊表紙には「曲礼上下」、第2分冊表紙には「内則／玉藻／明堂位／喪服小記」とあり。第1分冊冒頭の序文の末尾には「日本 安永改元冬十一月四日 雲濤桃源蔵／男忠徳 同校」とあり。第1分冊の末尾には「曲礼終／安永二年冬十一月四日」とあり。
17	[荀子遺策]	稿本	1冊	寛政9年6月識語	194	6	68	外題には「説国語」とあるが、『国語』に関する叙述は冒頭の2丁のみで、あとは『荀子遺策』の草稿。錯簡があるが、内容上全体の末尾にあたる部分には、次のような識語がある。「右荀子考（「考」に圈点を付し「遺策二巻」と傍書）。寛政九年丁巳夏六月二十又一日力疾卒業、時年七十六 桃源蔵子深」。
18	荀子遺策	版本	2巻2冊	寛政10年3月自序	266	—	—	寛政12年正月（京都）葛西市郎兵衛刊。
19	荀子遺策	版本	2巻2冊	寛政10年3月自序	275	—	—	3-1-18に同じ。ただし末尾に次のような識語あり。「右老拙所著荀子遺策壹部貳冊、与荀子全書同譜蔵於 天倫寺。寛政庚申夏六月 武明、5-3-5『荀子全書』のほか、3-1-23、5-3-1参照。
20	管子抄標註	近世 活字本	1冊		196	6	67	内題「管子」。史料名は外題による。『管子』から「牧民」等の諸篇を抄出して活字印刷し、手書きで標註を加えたもの。
21	揚子法言増註序并凡例	稿本	1冊	寛政6年8月自序	205	6	69	『揚子法言増註』の序および凡例の草稿。全11丁。
22	揚子法言増註	版本	10巻4冊	寛政6年8月自序	268	—	—	寛政8年9月（京都）風月荘左衛門・（京都）風月善六・（京都）林伊平衛・（京都）柏屋喜兵衛刊。
23	揚子法言増註	版本	10巻4冊	寛政6年8月自序	269	—	—	3-1-22に同じ。ただし末尾に次のような識語あり。「右揚子法言増註壹部諸蔵於天倫寺。桃源蔵」。なお、3-1-19、5-3-1、5-3-5参照。
24	説苑考	稿本	1冊		131 (3)	6	69	現存最古稿本。

25	説苑考	稿本	2冊		131 (1・2)	6	68～69	3-1-26の前の段階の稿本。表紙に次のような書き込みあり。「総紙数自序共二凡ソ三十六枚程可有之。全一冊物也。其内今度校正訓点相済候分先ツ十二枚為「登」。
26	説苑考	稿本	2巻2冊		175	6	69	最終稿本。冒頭の付箋に「自序二枚近日相達候上ニテ此所へ加江可申事」とあり。
27	説苑考	版本	2巻2冊	寛政10年11月自序	264	—	—	外題「劉向説苑考」。寛政12年9月江戸須原屋茂兵衛刊。
28	説苑考	版本	2巻2冊	寛政10年11月自序	265	—	—	外題「劉向説苑考」。3-1-27の後印本。発行印刷者大阪市青木恒三郎、製本発売所東京青山萬山堂ほか。
29	三論披沙潜夫論・新論・中論	稿本	1冊	寛延2年正月識語	216	23	40	末尾に「寛延己巳之歲端月日 石州桃生盛手書」とあり。
30	世説新語補	稿本	零本1冊	明和2年6月	35	16	20	表紙には「明和二年乙酉六月十九日／世説新語補 三／自文学下」とあり。「三」のみ現存。語句を掲げて漢字仮名混じり文の解説を加える。全13丁。
31	世説新語補考	稿本	零本3冊		91 (1～3)	6	68	上下2巻4冊 (上・下二・下三) のうち、下二欠。3-1-32の稿本。
32	世説新語補考	版本	2巻2冊	宝暦11年冬自序	277	25	44	宝暦12年3月(京都)林権兵衛・(京都)林権兵衛・(京都)風月庄左衛門刊。
33	世説新語補考補遺	稿本	1冊		91 (4)	6	68	3-1-34の稿本。
34	世説新語補考補遺	版本	1冊		278	25	44	寛政3年9月(京都)林権兵衛・(京都)柏屋喜兵衛・(京都)風月庄左衛門刊。最終丁ウラに「規箴下考補遺増」を手書きで増補。その識語には、「子深先生口授曰、為世説書、以識趣而為要、此考蓋保一部之意也。松村喬識」とあり。
35	遊神亀峽記	稿本	1冊	宝暦14年3月23日撰	82	18	23	末尾に「宝暦十四年三月廿三日白鹿山樵桃源藏撰」とあり。
36	遊神亀峽記	複製本	1冊		274	—	—	1-3-35の複製。島根県立図書館所蔵『遊神亀峽記』(貴099.5/37)と同一。
37	白鹿先生遺稿	写本	1冊		27	16	19	内題・外題とも「白鹿先生遺稿」。墨付34丁。詩のみ。
38	白鹿先生詩集	稿本	1冊		19	16	19	内題なし。外題「白鹿先生詩集」。墨付14丁。
39	白鹿先生詩抄	稿本	1冊		84	18	24	内題なし。外題「白鹿先生詩抄」。墨付11丁。
40	詩集	写本	1冊		34	16	20	内題なし。外題「詩集」。墨付27丁。分韻。作者は、白鹿・龍洲・樽斎・復軒・伯師・林臥・桐江・長山・言卿(玄卿)。
41	白鹿先生遺稿	写本	1冊		141	19	29	外題「白鹿先生文稿雜文部」。墨付23丁。内容は、「書秘書監林先生夢韓國朴典緒詩後」、「読風谷先生酒徳解」、「字暇篇跋」、「適意篇後序」、「報吳山長阪君」、「与正覚院主書」、「答牧容民書」、「又」、「古河水妖」、「射富」、「留与高貞蔵」、「獻双壁序」、「朝日夫子硯屏記」、「温泉紀行」、「報那波孝卿」、「復律師通公」、「赤城君矮几硯匣銘並序」。寛延元年(1748)～宝暦13年(1763)の文を収める。
42	白鹿先生文稿	写本	1冊		49	17	22	園山雄享。全8丁。内容は、「孝子埋兵衛伝」、「読風谷先生酒徳解」、「朝日夫子硯屏記」、「晩下亀峽」(詩)、「雪中送別」(詩)、「代人題孤鶴台仙桃図」、「赤城君矮几硯匣銘並序」。
43	白鹿先生韓人応対	稿本	1冊		143	12	7	延享5年(1748)6月4日に浅草本願寺で朝鮮通信使一行と行った唱酬の記録。全8丁。
44	桃源藏先生高山彦助問答并名実論	稿本	1冊		160	20	30	内題なし。史料名は外題による。全15丁。桃源藏が高山彦助の訪問をうけた際のやりとりを記す。
45	故国相朝日夫子紀功碑	稿本	1冊		105	19	27	朝日丹波の紀功碑の碑文。全16丁。翻刻あり。
46	先府君行状	稿本	1冊		119 (2)	11	5	養父東園の行状。全5丁。稿本の順番は1-3-46→47。
47	先府君行状	稿本	1冊		119 (1)	11	5	養父東園の行状。全5丁。稿本の順番は1-3-46→47。翻刻あり。
48	海野氏墓碣 [ほか]	稿本	1冊		145	19	29	内容は、「海野氏墓碣」、「孝子埋兵衛伝」、「祝氏墓碣」、「器之文」・「覚夢居士祭文」・「富永氏硯」・「国府氏之碣」・「近藤氏墓碣」・「今村氏之墓碣」。
49	* 覚夢居士墓碣	写本	1冊		152	20	29	実父坂根幸悦の墓碣。海叔明撰。
50	亡妻杉氏墓碣銘并序 白鹿先生寿蔵碣銘并序	稿本	1冊		29	16	20	外題「嶺松圃人墓碣銘并序稿／白鹿翁寿蔵碣銘并序稿」。後半は、3-1-5に先立つ稿本。
51	白鹿先生寿蔵碣銘并序	稿本	1冊		172	21	33	白鹿洞主桃源藏自撰。全11丁。寿蔵石などについてのメモ5点をさみこむ。翻刻あり。

52	* 記白鹿先生寿歳後	写本	1冊		88	18	24	全2丁、付箋あり。園山雄撰。翻刻あり。
53	* 雑集	写本	1冊		157	20	30	内題なし。史料名は外題による。白鹿が六十歳になったのを祝って江戸から寄せられた賀詩・賀文。詩文を寄せているのは、渋井孝徳・関前倫・林内記・沢元愷・藤時憲・豊稔・藤娶・木徳輔・河世寧・関文裕・野元興・藤忠寛・平井君敬・野淳泰・品鴻漸・藤娶・米弘之・大場徳・杜久圭・源良翰・藍川順の21人。
54	* 白鹿先生寿詩巻	写本	1冊		111	19	27	白鹿が七十歳になったのを祝って江戸から寄せられた賀詩。詩を寄せているのは、井潜・結城兎隣・柳義篤・山尚尹・沢木愚・吉村遠彰・松崎珪・箕作義・佐坂恭・本木言純・林信敬・片瀬徳輔・浦世徳・郎山緯・山上定保・安原希曾・岡田恕・小山為滋・順雅・源忠良・岡故完の21人。末尾に孔平信敬「白鹿先生七十寿序」を付す。また、白鹿七十を賀す歌稿のメモなど3点を含む。
2 西河の著作等								
1	周礼覧	稿本	6冊	寛政11年春季卒業	48	8	77～78	『周礼』中の語を掲げ、それについての諸説を引き、ときに按語を加えた研究ノート。3-2-2『賈誼新書考証』・3-2-3『潜夫論考証』と同形式。
2	賈誼新書考証	稿本	2巻1冊		263	8	78	3-2-1『周礼覧』・3-2-3『潜夫論考証』と同形式。広瀬の学者山部良行の明治20年の後序を付す。箱入で、松江の古書肆ダルマ堂からの葉書2通（桃裕行宛、1958年）を含む。桃裕行がダルマ堂から購入したもの。箱の表書きは「西河先生手筆賈誼新書考証」。箱の横には「桃西河先生手筆書冊一巻」とあるもので、もとは西河の手稿本31巻がまとまって存在していたと考えられる。
3	潜夫論考証	稿本	2巻2冊	寛政11年首夏	52	8	76	3-2-1『周礼覧』・3-2-3『賈誼新書考証』と同形式。
4	坐臥記	稿本	零本3冊	備考参照	17	16	18～19	『坐臥記』は、天明4年2月以降書き綴られた隨筆。この3-2-4は、第1分冊天明4年2月～、第2分冊天明5年3月～、第3分冊寛政10年正月～で、天明7年5月～の部
5	坐臥記	写本	4巻2冊	備考参照	200	7～8	75～76	分と寛政2年正月～の部分欠いている。
6	坐臥記	近代活字本	1冊		290	—	—	この3-2-5は、第1分冊に天明5年3月～と天明7年5月～を、第2分冊に寛政2年正月～と寛政10年正月～と天明4年2月～を収める。翻刻あり。
7	出雲舟人無人島漂流記	稿本	1冊		286	25	44	出雲文庫第1編。明治45年発行。発行者谷口為次。
8	御触留拔書	稿本	2冊	天明8年写	169/50	20/10	31/3	天明7年に漂流した雲州美保関の舟人清蔵からの聞き書き。西河は寛政10年正月に清蔵に会って漂流の様子を尋ねており、聞いた内容を『坐臥記』のうちに記している。この3-2-7も西河の手に成ったものと推測した。
9	須知雑記	稿本	1冊		148	20	29	第1分冊表紙「…ヨリ享保十五年マテ五十六年ノ間ノ御触留拔書一ノ桃義三郎」(…は欠損部分)、第2分冊表紙「享保十六年ヨリノ御触留拔書二ノ桃義三郎」(…は欠損部分)、第2分冊第1丁オモテ「…ハ御番所ニモ無之様ニ相聞候。御三代日…ヨリ御日記・御書出留とも詳有之」。第1分冊最終丁「天明八年申三月 桃義三郎写。朱錠ヲ以書込候ハ義三郎自己之覚書也」。
10	帳秘雑記	稿本	3冊	天明5年・寛政3年	211/45	23/10	39/3	内容は次の通り。「武家諸法度」(慶長度)・「武家諸法度」(延享度)・「家中制法」(宝暦二申正月日)・「御元祖直政公自越前御出陣孫州大坂城攻御供附」・「御当家御系図」・「軍役定」・「定」・「軍役武具定」・「軍役人数定」・「婚礼」(宝暦九卯月十八日)・「婚礼」(明和八卯十一月廿六日)。
11	新政要記	稿本	1冊	天明7年春	136	19	28	第1分冊・第2分冊は天明5年、第3分冊は寛政3年。第1分冊の内容は、「安永九子年十郡小物成井大根崎古志原小物成」以下、藩の歳入に関する文書の写し。第2分冊の内容は、「軍役定」以下、軍役や藩の歳入に関する文書の写し、第3分冊は、墨付6丁、「敏鑑作者由来」(敏鑑名作相伝系図)。
12	癸卯文稿	稿本	1冊	天明3年～	179	21	33	内容は、「郷中制度」・「町家制度」・「昇格制度」・「家中制度」・「役書制度」・「追中制度」・「江戸制度」。最後の2項目は未完。表紙に「天明七丁末春考」とあり。
13	西河先生詩稿	稿本	2冊	寛政元年	90	18	24～25	「笑卯」は天明3年を指す。ただしその後の文章も含む。内容は次の通り。「送園山淑飛之東都序」・「閑喪」・「神主論学説序」・「神主論」・「学説」・「香白石尊遠」・「奉朝日相公」・「斥幕」・「富士嶽説奉朝日相公」・「山中二先生行状」。

14	西河先生稿	写本	1冊	113	19	27	詩文稿。次のような一文を含む。「忠徳、初称武内氏、中称佐々木氏、又改称脇坂氏、至明和八年辛卯冬十一月十七日、所養為桃氏之子、故後皆称桃氏」。
15	東遊行装	稿本	1冊	108	2	50	1-2-3『東都祓役要記』に対応。表紙に「寛政二年戊三月／東遊行装／桃世明」とあり。
16	* 西河先生墓碑銘	写本	1冊	139	19	29	全3丁。園山雄撰。翻刻あり。
3 黄圃の著作等							
1	[左伝抜書]	稿本	1冊	243	13	11	本文1丁目に「桃雄忠」とあり。
2	黄圃先生遺稿	稿本	1冊	191	22	36	草稿を綴じて1冊としたもの。
3	子孝先生手沢書	稿本	1冊	225	24	41	草稿を綴じて1冊としたもの。
4 翠庵の著作等							
1	詩稿律絶	稿本	1冊	185	22	35	内題「詩稿卷之下」。史料名は外題による。全15丁。3-4-2と同系統の史料。
2	拙作詩文稿	稿本	1冊	173	21	33	内題なし。史料名は外題による。外題は題簽が剥落したあとに「拙作詩文稿」と手書。剥落した原題簽には「坐右録 拙作詩文 三」とあり。全16丁。3-4-1と同系統の史料。
3	陪寧我紫瀾二先生探勝地	稿本	1冊	255	24	43	全3丁。「寧我紫瀾二先生」は、田村寧我・海野紫瀾のこと。
4	坐右漫筆	稿本	1冊	218	23	40	内題なし。史料名は外題による。
5	御年譜要記	稿本	1冊	25	10	1	内題「座右漫筆」。史料名は外題による。年譜作成のためのメモが大平を占める。
6	詩経自読	稿本	2冊	44	17	21	第1分冊表紙「自周南至邶風」、第2分冊表紙「邶風至鄭風」。明教館の罫紙を使用。
5 節山の著作等							
1	鄙稿	稿本	18巻16冊	3	15	15	詩文稿。一〜十五。ただし、一が上下に、五が五ノ乾・五ノ下・五ノ坤に分かたれているため、全18巻。また、一の上・下、五の乾・下がそれぞれ1冊となつていいるため、全16冊。各冊表紙には「伏乞 電囑／桃好松首拜／鄙稿（自弘化甲辰至嘉永庚戌） 一上」（第1分冊、く）内は割注）などであり、本文には朱批が加えられている。朱批を加えた人物がわかるのは八のみで、表紙表題の割注に「此一巻係枕山大沼氏之雌黄」とある。
2	鄙稿	稿本	1冊	11	16	18	史料名は内題による。外題は「文部（此一巻係于息軒安井先生之雌黄）」。3-5-1『鄙稿』と同系統の史料。
3	修斎叢書	稿本	17冊	1	14	12	内容の細目は次の通り。「文部一」（弘化3年〜）・「文部二」・「歌部」（嘉永2〜6年）・「歌部」（明治5年）・「詩部三」（嘉永5年〜）・「咏古詩集」（安政3年冬頃識語）・「贈寄文詩」（安政4年頃）・「韓詩外伝考」（嘉永2年識語、2冊）・「大学」（嘉永3年9月起業、同5年2月竣工）・「大学古本説」（嘉永6年識語、1冊）・「坐右漫記」・「摘語」・「皇朝纂論」（安政2年秋識語）・「説史概要」・「日本外史」・「良齋閑話抄」。
4	修斎漫筆	稿本	1冊	15	16	18	全7丁。1丁目は『孔子家語』の抜き書き、2丁目以降は『孝經大義増註抄』と題された草稿。「修斎漫筆」は外題で、「孝經大義」という割注を有する。表紙に「嘉永四辛亥中元ヨリ」とあり。
5	修斎先生文稿	稿本	1冊	14	16	18	内題なし。史料名は外題による。「説神代巻記」以下、全23丁。
6	節山文集	稿本	1冊	10	15	17	表紙なし。1丁目右肩に「節山文集」とあり。「奉送 世子遊学東京序」以下、全38丁。
7	[文稿]	稿本	1冊	235	24	41	「玉造温泉記」以下、全27丁。
8	[文稿ほか]	稿本	4枚	257	24	43	節山の文稿3点。そのほか「出雲藩侍医杉貞庵碑文」（明治13年9月雨森精翁撰）の写しを含む。杉貞庵は節山の実父。
9	八陣図集説	稿本	1冊	37	17	20	内題「八編類纂」。史料名は外題による。

10	小学書輶説	稿本	1冊	嘉永7年暮春識語	129	19	28	妹尾(雨森)精斎著、桃好裕録。妹尾精斎が『小学』の欄外に書き込んだ説を桃好裕が輯録したもの。表紙裏に次のような識語あり。「此書、録精斎妹尾先生書於所藏之小学書之欄外者、其不冒姓名者、係於先生之説也。其曰輶説、裕仮名之耳。嘉永甲寅暮春」。
11	直信流柔道開祖寺田先生行状	稿本	1冊	万延元年7月	150	20	29	翻刻あり。
12	贅言	稿本	21巻存10冊	文久2年7月～慶応2年9月	6 (1)	9	—	第3・7・13・14巻欠。第5・6、10・11、15・16・17、18・19・20・21巻は、それぞれ合1冊。したがって、全21巻のうち、存17巻10冊。第1分冊を例にとると、表紙に記された原題は「改政論 愚存在之大意 一」で、付箋により「改政論」を「贅言」と改題。また表紙には、「文久二年壬戌七月録ノ御番頭斎藤久米殿之囑ニ応して書すノ文久三年四月 上江獻入」とあり。『贅言』は、文久2年から慶応2年にかけて桃好裕が提出した上書を集めたもの。
13	贅言	稿本	存2冊	文久2年7・8月	6 (2)	9	—	3・5-12の最初の2巻に相当する清書本。なお、『贅言』について、3・5-24「修斎先生著書目録」(中川胖)は、「此書ハ先生ノ深ク秘スル所ニシテ未タ見ルコトヲ得ス」と述べている。
14	出雲私史	稿本	1冊		4	8	80	外題「出雲私史神代」。墨付11丁。
15	出雲私史	稿本	12巻9冊	文久2年自序	2	8～9	80～81	文久2年自序。のち明治4年晩春に序文の末尾に識語を加筆。版心に「明教館蔵版」とある單紙を使用。翻刻あり。
16	藩祖御事蹟	稿本	5巻5冊	慶応3年冬識語	12	8	78～79	巻1～3・附録上下の5巻。本編末尾に桃好裕の識語あり。3・5-17の稿本。翻刻あり。
17	藩祖御事蹟	近代活字本	7巻7冊	慶応3年冬識語	270	—	—	巻1～5・附録上下の7巻。本編末尾に桃好裕の識語あり。(松江)辰巳屋忠左衛門刊、活板百部限。
18	[松平綱隆事跡]	稿本	1冊		245	13	11	桃好裕の著作か。第2代松江藩主松平綱隆の事跡を記す。朱筆の訂正多。3・5-19の綱隆の項の記述は、この3・5-18の訂正後の文章を踏まえている。
19	[歴代藩主等事跡]	稿本	1冊	明治6年以降	246	13	11	桃好裕の著作か。藩祖松平直政から最後の藩主松平定安とその弟直応にいたるまでの事跡を記した草稿。全24丁。直応の記事では明治6年の出来事に言及。綱隆の項の記述は、3・5-18の訂正後の文章を踏まえている。
20	肥後見聞録	稿本	3巻3冊	慶応元年自序	7	10	1	1 慶応元年に内命により肥後熊本の国政を視察した際の記録。時習館についての記述などを含む。明治元年冬弘瀬藩鹿山村良行跋。翻刻あり。
21	西遊雜記	稿本	1冊	慶応元年写	219	13	9	慶応元年の西遊の際に熊本藩士のもとで筆写した諸史料から成る。「庚子遊草」(永山二水)、「不尽嶺記」(松崎權堂)、「日光從軫録」(鹽谷宕陰)、「義人纂書序」(安井息軒)、「学校問答書」(横井小楠)など。
22	為学論	稿本	1冊		13	16	18	全19丁。内容は、儒道と皇道の関係についてなどをめぐる学問論。明治初年の成立か。
23	巡郡稿	稿本	1冊	明治5年	128	11	5	外題下に次のようによりあり。「巡郡校自明治五年壬申正月廿二日至二月九日ノ巡旧跡自六月七日至十月二十七日」。明治5年の郷校調査(1-5-14「郷校取調巡郷日記十五」参照)のちに書かれた全13丁の紀行文。
24	* 修斎先生著書目録	写本	1冊	明治4年正月	5	15	17	外題「修斎著書目録」。全7丁。著者中川胖。明治四年正月識語。翻刻あり。
6 著者の判然としない史料								
1	共遺雜稿	稿本	1冊	天保9～12年頃	23	16	19	年代・筆跡から推すと翠庵の著作か。
2	園策	稿本	1冊		81	17	23	『詩品』『紀事本末』『竹書紀年』の抄写本。
3	[諸書拔書]	稿本	1冊		253	24	43	筆跡から推すと白鹿の手に成ったか。
4	[諸書拔書]	稿本	1冊		177	21	33	外題「漢書漫筆」。『漢書』などからの抜き書き。筆跡から推すと翠庵の手に成ったか。
5	[諸書拔書]	稿本	1冊		233	24	41	内題「韓詩外伝五」。内容・筆跡から推すと、節山の手に成った『韓詩外伝考』の草稿か。
6	[諸書拔書]	稿本	1冊		251	24	42	5-6-5とほぼ同じ形態で筆跡も同じ。節山の手に成ったか。
7	[諸書拔書]	稿本	1冊		252	24	42	『大学』に関する説を『朱子語類』などから抄出。筆跡から推すと節山の手に成ったか。
8	[諸書拔書]	稿本	1冊		226	24	41	『太平広記』からの抜き書きか。

9	[松江藩に関係する書物からの抜書]	稿本	1冊		228	13	11	題簽剥離。『雲陽大数録』などからの抜き書き。
10	[出雲国の地誌の抜書]	稿本	1冊		241	24	42	
7 桃家の記録等								
1	桃氏要録并列士録	稿本	1冊	文化6年正月以降	224	2	50	文化6年正月2日の記事まで。
2	列士録	稿本	2冊	安政3年12月以降	36	17	20	第1分冊表紙へ落丁あり。存するのは『列士録』の桃家の項の明和5年～安政3年の部分。
3	* [官員出張旅費規則]	写本	1冊	明治5年正月14日	101	19	26	3-7-4と関係があると見てここに配列した。版心に「松江県」とある用紙を使用。
4	覚	稿本	1通		258	24	43	桃好裕らの出張旅費請求の覚。版心に「島根県」とある用紙を使用。
5	家塾開業願	稿本	1冊	明治7年	236	24	41	家塾明教館開業願。明治7年5月14日桃好裕願（島根県権令井関盛良宛）、18日開届、22日開塾。3-7-6・7は同種の史料。
6	家禄奉還願	稿本	1冊	明治7年	237	24	42	明治7年1月27日桃好裕願（島根県権令井関盛良宛）。明治7年6月27日開届。3-7-5・7は同種の史料。
7	学資寄附願	稿本	1冊	明治8年	238	24	42	明治8年3月14日桃好裕願（島根県令井関盛良宛）。同日開届。家禄奉還にともない、管内の小学校のための献米を金納とすることの願い。3-7-5・6は同種の史料。翻刻あり。
8	桃家蔵書目録(写本)	稿本	1冊	大正2年12月	0	10	1	外題「大正二年十二月／桃家蔵書／写本之部」。
9	大正七年九月七日松平家へ用達書類	稿本	用箋2枚	大正7年	231	24	41	大正7年9月7日に松平家に貸し出した書籍・書類の一覧。
8 書簡等								
1	[桃源蔵宛後藤弥兵衛書状]		1通	[申]6月12日	304 (1)	25	45	包紙に「申七月廿六日達」とあり。
2	[田村寧我宛桃世文書状]		1通	?年3月8日	304 (2)	25	45	
3	[桃氏宛書状]		1通	?年12月2日	304 (3)	25	45	端書「寮長」。寮中規則厳格化の願い。ただしこの書状中で言及されている別紙（寮中規則の改正案）は所在不明。
4	[書状]		1通	?年3月8日	304 (4)	25	45	宛先・差出人・年次等不明。書き出しは「大原郡郷校岡村加茂町両所二有之」云々。
5	[書状]		1通	?	304 (5)	25	45	
6	[桃敏行宛「不昧侯遺品展覧会」案内状]		1通	大正6年9月・10月	306 (1)	25	45	大正6年10月20日から3日間、不昧同好会の主催で三越呉服店において開催された「松平不昧公百年忌辰記念不昧公遺品展覧会」の出品案内（大正6年9月付）・開催案内（大正6年10月付）など合計4点同封。
7	不昧侯遺品展覧会出品目録		1枚	大正6年10月	306 (2)	25	45	上記の展覧会の出品目録。
8	不昧侯遺品展覧会特別室陳列品目録		1枚	大正6年10月	306 (3)	25	45	上記の展覧会の特別室陳列品（伯爵松平直亮出品）の目録。
9	[桃敏行宛田村稔夫書状]		1通	大正14年12月6日	306 (4)	25	45	田村稔夫は島根県松江市母衣尋常・高等小学校校長。文中で「箭山先生追遠祭」に言及。
10	[桃敏行宛村上寿夫書状]		1通	大正14年11月22日	306 (5)	25	45	村上寿夫は松平家家人。この書状は印刷されており、「真寿様御誕生」のお祝いに對する札状として一斉に発送されたもの。
11	[桃敏行宛宮田権之丞書状]		1通	?年5月18日	306 (6)	25	45	年不明。封筒欠。
12	[桃源蔵文稿]		1枚		306 (7)	25	45	自筆かどうか不明。
13	[桃好裕草稿等]		1袋		305	—	—	雑多な史料を含む。
14	記若狹綱子事		1枚		304 (6)	25	45	末尾に「小町新稿首／伏乞／斧正」とあり。小町新が桃家の学者に添削を乞うた文稿。

整理番号	史料名	巻冊	著者	年 代	史料 番号	フィ ム 番 号	紙 様 本 番 号	備 考
4	維新後の松江藩・松江県・島根県の学制改革関係史料等							
1	維新後の松江藩・松江県・島根県の学制改革関係史料等							
1	皇学所規則	1冊			102	19	26	内題なし。史料名は外題による。全12丁。
2	西京大学校次第	2冊			232	24	41	同内容の写本2冊。1冊は全2丁、もう1冊は全3丁。
3	明治己巳九月集議院日誌写	1冊		明治2年写	146	19	29	全14丁。書き出し「皇漢学合併被 仰出候ニ付テハ」云々。
4	大学校則写	1冊			123	19	28	史料名は外題による。全23丁。
5	中小学校規則	1冊	東京府 中学	明治3年写？	98	18	25	史料名は外題による。全28丁。松江藩学校懸の罫紙を使用。内容は、「中学定規」(東京府中学)・「中学規則」・「小学規則」(庚午六月日)・「校中定規」(庚午六月日)。庚午は明治3年。
6	紀州若山藩学則写	1冊		明治4年写	118	19	27	史料名は外題による。表紙には「明治四年四月廿日姫路藩来入外拓候分ノ紀州若山藩学則写」とあり。内容は、「紀州若山藩学則揭示」(明治3年)・「若山藩管内布告之写」・「別冊ノ写 兵賦略則」からなる。
2	明治4年の松江藩(→7月14日松江県→11月15日島根県)の学制改革に関する史料等				93	18	25	「学制改革告示」・「学制論」・「学則并序」からなる。松江藩学校懸の罫紙を使用。
1	学制改革告示	1冊						
2	[松江藩] 学則	1冊	松江藩	明治4年辛未5月	116	19	27	外題「元松江県学則」。修道館設置の趣旨を述べる前半(表題「学則」)と、修道館の学則を規定する後半(表題「学則」)とからなる。松江県の罫紙を使用。【注1】参照。
3	教導所学則	1冊	松江県	明治4年辛未5月	155 (1)	20	29	教導所設置の趣旨を述べる前半(表題「教導所学則」)と、教導所の学則を規定する後半(表題「教導所学則」)と、ただし「教導所」の8字を朱で抹消)とからなる。松江藩学校懸の罫紙を使用。【注2】参照。
4	教導所学則	1冊			155 (2)	20	29	4-2-3の後半部分とほぼ同文。表題の「教導所」の3文字を朱で抹消。松江藩学校懸の罫紙を使用。
5	教導所学則	1冊			124	19	28	4-2-3の後半部分の稿本。史料名は最初「郡市学則」。その後、「郡市」の2字を墨で抹消し「教導所」と傍書、さらにこの「教導所」の3文字を朱で抹消。松江藩学校懸の罫紙を使用。
6	教導所学則表	1枚			259 (1)	24	43	【注3】参照。
7	女学則	1冊	松江県	明治4年辛未10月	125 (1)	19	28	女学設置の趣旨を述べる前半(表題「女学則」)と、女学の学則を規定する後半(表題「女学則」)と、ただし「女」の1字を朱で抹消)とからなる。松江藩学校懸の罫紙を使用。【注4】参照。
8	女学則	1冊			125 (2)	19	28	4-2-7の後半部分の稿本。松江藩学校懸の罫紙を使用。
9	女学則表	1枚			259 (2)	24	43	【注5】参照。
3	学制公布(明治5年8月5日)以後の島根県の学制改革に関する史料等							
1	[学制・小学教則の写し]	1冊			201	23	38	松江県の罫紙を使用。
2	小学規則	1冊	文部省	明治5年壬申7月	297	25	45	版心に「島根県」とある用紙に木版印刷。
3	県下区割帳 地理取調	1冊			183	21	34	一部松江県の罫紙を使用。
4	第一大区神社	1冊			112	19	27	第一大区の神社の由来を記す。区割の調査と関連した史料か。
5	各校機則 第十九中学区	1冊			100	18	26	第十九中学区内の小学校の規則集。全103丁。各小学校から提出された規則の写しをそのまま仮綴にしたもの。
6	規則	1冊		戊[明治7年]6月	256	24	43	版心に「母里」とある罫紙を使用。
7	掟則	1冊			126	19	28	
8	教員心得・級長心得	1冊			99	18	25	冒頭に次のようにあり。「文部省正定ノ小学教師心得ヲ熟読シテ遵守スヘキハ勿論ナレトモ、尙当校丈ニテ可心得条件アリ。左ノ如シ」。
9	下等小学教則ノ書類	1枚			259 (3)	24	43	
10	下等小学試験法	1枚			259 (4)	24	43	
11	[各校教師名一覧]	1枚			259 (5)	24	43	

12] 下等小学教授法・ 四種活用授業法	1冊		298	25	45	版心に「島根県」とある用紙に木版印刷。前者7丁、後者8丁。
4 その他						
1] 啓蒙社大意	1冊	明治4年辛未正月	9	15	17	
2] 共義合設立之義草稿	1冊		249	24	42	版心に「島根県」とある用紙を使用。

【注1】4-2-2は、島根県教育庁総務課島根県近代教育史編さん事務局編『島根県近代教育史』第3巻「資料」（島根県教育委員会発行，1978年）所収。明治4年の「(5) 松江藩学則改定のこ」とこれがあたる。同書所掲の史料では、「明治四年辛未五月四日学制ヲ改メ学則ヲ設クル左ノ如シ」の一文のあとに4-2-2を掲げる。

【注2】4-2-3は、前掲『島根県近代教育史』第3巻所収。明治4年の「(6) 松江藩教導所学則制定のこと」がこれにあたると。同書所掲の史料では、次の一節のあとに4-2-3を掲げる。

「明治四年辛未五月四日、管内処々ニ設クル所ノ郷校及ヒ従来寺小屋ト称スル者、悉ク改メテ教導所ト名ツケ、学則ヲ定メ、教導所取締ヲ置キ、郡吏ヲシテ教導所縣引ヲ兼務セシム。且毎郡一所宛ノ教導所ヲ以テ其長トシ、合セテ之ヲ修道館ニ管轄ス（松江市中ノ教導所ハ直チニ本館ニ総ツ）。因テ前後設クル所ノ教導所百九十余所アリ（教導所都テ私立ニ係ル。独従前郷校若干ノ教官ハ其月給官費ヲ以テ之ヲ給ス）」（句読点は引用者による。（）内は割注）。

【注3】4-2-6は、前出「(6) 松江藩教導所学則制定のこと」の一部として前掲『島根県近代教育史』第3巻所収。

【注4】4-2-7は、前掲『島根県近代教育史』第3巻所収。明治4年の「(7) 松江県女学則制定のこと」がこれにあたると。「明治四年辛未十月五日女児ノ学則ヲ定ム」の一文のあとに4-2-7を掲げる。

【注5】4-2-9は、前出「(7) 松江県女学則制定のこと」の一部として前掲『島根県近代教育史』第3巻所収。

【補注】前掲『島根県近代教育史』第3巻は、「(3) 松江藩修道館書生寮規則制定のこと」という史料を収め、「桃裕行氏蔵」とするが、現在のこの史料は「桃家資料」には含まれていないようである。

整理番号	史料名	巻冊	著者	史料番号	フィルム番号	紙焼製本番号	備考
5 桃家旧蔵書							
1 松江藩と関係の深い史料							
1 越家老翁物語		写本1冊		159	20	30	「越家老翁」は、越前家松平氏の祖結城秀康（徳川家康の次男、松江藩祖松平直政の父）のこと。
2 出雲高直公大坂御陣御供帳		写本1冊		96	11	4	外題「大坂御陣御供帳之写」。
3 明和三成八月治郷公御初入之節宗衍公より諫書写		写本1冊	松平宗衍	153	12	7	外題「宗衍公諫書写」。
4 晏子春秋		近世活字本1冊		273	—	—	外題「松江藩木活字晏子春秋書本」。「諫上第一」「諫下第二」のみ。序文と本文の一部は手書き。会説用のテキストとして印刷されたものか？
5 秘書		写本1冊		137	19	28	著者不明の上書。「寛政十年三月三日夜上ル」。
6 上書写		写本3冊	原胤富ほか	190	22	36	原民右衛門胤富らの上書の写し。文久元～3年。
7 内用留		写本1冊	原胤富	109	11	4	原民右衛門胤富の内用留。
8 円外一川君伝		写本1冊		133	19	28	文中に「桃源蔵曰…」とあり。桃家の学者の著作か？
9 [村上喜一郎行状]		写本1冊		227	13	11	村上喜一郎舎喜(イェヨシ)の行状。村上は泉府方趣向人。桃家の学者の著作か？
10 記森金吾事		写本1冊	[園山西山]	187	22	35	佐野正巳『松江藩学芸史の研究』（明治書院, 1981年）442頁は園山西山の著作であるとす。
11 子朗先生法帖		写本1冊	田村寧我	33	16	20	子朗先生は田村寧我。裏表紙に「主人 桃世文」とあり。
12 瑞光山清水寺記録写		写本1冊		53	17	22	史料名は外題による。「清水寺略縁起」ほか。
13 游清水寺記		写本1冊	山本彝之	234	24	41	全2丁。
14 鐘記		写本1冊		240	24	42	瑞塔山雲樹寺の高麗梵鐘の「記」。桃家の学者の著作か？
15 [詩稿]		写本1冊		230	24	41	冒頭の付箋に次のようにあり。「余大山ヲ出テ松林寺ニ寓ルコト自丙申六月至丁酉六月凡二年、同月復タ松林寺ヲ出テ今マ鰯淵山ニ住、故ニ有其意趣」。
16 職制改正之弁		写本1冊		28	16	20	全21丁。「ベシノ字除イテ可ナリ」など、本文についての意見を見れば述べた付箋が多数貼付されている。この付箋は桃好裕によるものか。なお、桃好裕は、明治2年2月に職制改正御用懸に任ぜられている。
17 松江藩治職制		写本1冊		242	24	42	全13丁。
18 地名箋		写本1冊		171	21	32	表紙に「地名箋／書学所」とあり。書学所で用いられた往来物か？ 山城国以下、国ごとに地名を列挙。府・県・藩・郡ごとに地名を挙げていっている。維新後・廃藩前の史料。
19 地理自通		写本1冊		239	24	42	全6丁。版心に「伝習校」とある用紙を使用。「地理ヲ知ラント欲セハ先ツ我々カ居住スル出雲国ヨリ始ムヘシ」云々。
20 当国二関係旧録由来之届		写本1冊		244	24	42	明治6年1月届。常楽寺住職勝部大謙作成。全4丁。
21 系図書出		1冊		180	12	7	松田勝介系図書出。明治6年1月27日付、島根県参事兵頭正懿宛。全13丁。
22 島根県官員録		近代活字本1冊		296	25	45	明治8年。
23 松平不味伝		近代活字本3冊		291	—	—	松平家編纂部（代表者高橋龍雄）著、篇文社発行。大正6年4月24日刊。松平直亮の松方正義宛書簡を含む。
24 出雲金石文集		写本1冊		293	25	45	信太英（淞北）編。明治26年自序。松平伯爵家所蔵本を昭和3年12月に岡田伝市が筆写した写本。島根県文獻叢書刊行会の原稿用紙を使用。
25 江戸時代来聘朝鮮信使迎接応対唱和筆語図書展観日録 [コピー]		1部	中山久四郎	300	—	—	1933年11月。桃家所蔵『白鹿先生韓人応対詩』への言及を含む。
26 江戸時代来聘朝鮮信使迎接応対筆語唱和図書目録 [コピー]		1部	中山久四郎	301	—	—	小田先生煥寿記念会編『小田先生煥寿記念朝鮮論集』（大阪屋号書店, 1934年）所収の中山久四郎「江戸時代来聘朝鮮信使迎接応対筆語唱和図書目録」のコピー。5-1-25を論文化したもの。同じく桃家所蔵『白鹿先生韓人応対詩』への言及を含む。

27	和漢唱酬における雲漢儒者の活躍：長沢二子（東海・楽浪）と桃白鹿	1部	佐野正巳	302	—	—	神奈川大学人文学会『人文学研究所報』第13号抜刷。
28	[須藤柳圃関係史料]	1袋		303	—	—	人見佐蔵「須藤柳圃伝」草稿など。
2写本							
1	論語筆解	1冊	唐・韓愈	21	16	19	抄写本。
2	読書管見	零本1冊	元・王充耘	38	17	21	下巻のみ。
3	[霊台図など]	1冊		223	24	40	
4	勢語臆断	1冊	契沖	217	23	40	抄写本。第10～12段の部分のみ。
5	[兼日題併唐話]	1冊		168	20	31	外題「享保九甲辰歳正月二十二日兼日題併唐話」。実際は、正月22日だけでなく、2月2日・2月12日・2月22日・閏4月2日・閏4月12日・閏4月22日・5月12日・5月22日の記録も含む。漢詩・唐話の会の記録。
6	文罽	1冊	荻生徂徠	197	23	38	
7	祠堂式及通礼微考	1冊	荻生徂徠	127	19	28	
8	[明律国字解]	4冊	荻生徂徠	40/170	17/21	21/32	第1分冊・第2分冊内題「問刑条例名例律国字解」、第3分冊内題「問刑条例戸律国字解」、第4分冊内題「問刑条例兵律国字解」。
9	文章十訣	1冊	水足博泉	208	23	39	
10	文章三要	1冊		207	23	39	全5丁。
11	太宰徳夫赤穂四十六士論評	1冊	赤松滄洲	156	20	29	「安政五年歳在戊午季夏十日」。表紙に「中村吉卿贈写見恵／夷大屈也（裕案屈忌庇誤）」（◇内劉注）とあり。
12	[『三國通覧図説』地図]	4枚	林子平	299	—	—	「三國通覧」・「朝鮮」・「琉球」・「蝦夷」。
13	大学雜議	1冊	[中井履軒]	121	19	28	
14	松平越中守様御心書	1冊	松平定信	47	17	22	表紙に「桃義三郎家蔵」とあり。全5丁。
15	松平越中守殿ニテ養父奎頭殿一周忌ノ節家中ノ者へ申渡候書付	1冊	松平定信	167	20	31	全11丁。
16	[播州足輕善九郎之事]	零本1冊		294	—	—	
17	御遺状御宝蔵入百ヶ条	1冊		199	23	38	表紙には「東照宮御遺状百箇条／嘉永七年甲寅孟冬六日写」とあり。
18	大学一家私言	1冊	佐藤一斎	122	19	28	
19	大学摘説	1冊	佐藤一斎	203	23	39	
20	論語欄外書	2冊	佐藤一斎	184	22	35	
21	孟子欄外書	2冊	佐藤一斎	193	22	38	上冊裏表紙に「嘉永甲寅初秋写于東邸之寓舎」、下冊裏表紙に「嘉永七年孟秋在于東邸写／桃好裕」とあり。5-2-18～23は一連の写本。
22	周易欄外書	1冊	佐藤一斎	103	19	26	
23	易学啓蒙欄外書	1冊	佐藤一斎	189	22	35	
24	白鹿洞書院掲示	1冊	山崎闇斎集註 佐藤一斎問	92	18	25	
25	山口采	零本1冊	東条義門	85	18	24	下巻のみ。
26	大統歌	1冊	塩谷宕陰	120	19	27	
27	上書集	1冊		162	20	30	佐藤一斎「梅防策」ほか、海防に関わる諸家の上書を集めた写本。
28	聖堂祭式	1冊		221	24	40	
29	畸人十篇	2冊	利瑪竇	182	21	34	
30	悔改信邪穌説略・張遠両友相論	1冊		83	18	23	前者の奥付の写し「耶穌降世一千八百六十年歳次庚申／培端氏著／聖経書房重刊」、後者の奥付の写し「耶穌降世一千八百六十年歳次辛酉／上海美華書館重刊」。
31	三要録	1冊	丁建良	206	23	39	

32	提綱啓古知幾	零本1冊			80	17	22	冒頭の自序の末尾には次のようにあり。「嘉永二年己酉秋九月伯州処士中林武彦子温父授筆於米城読書樓」。
33	治験病名抄	1冊	中林武彦	176	21	33	33	
34	十四経六歌	1冊		222	24	40	40	
35	日撰拔萃	1冊		39	17	21	21	
36	梵字	1冊		188	22	35	35	全5丁。
37	〔漢字辞典〕	零本19冊		295	—	—	—	同訓異義字典。訓の五十音順で配列。「天」(アメ)から始まって「ホ」まで。桃東園が著したという『異字同訓』30巻と何らかの関係があるか。
3 版本								
1	皇明通紀統宗	13巻12冊	明・陳建	292	—	—	—	「新鐫李卓吾先生增補批点」皇明(正統合併)通紀統宗」。元禄9年12月(京都)林九兵衛刊。首巻末尾と第12巻末尾の2ヶ所に桃源蔵の識語がある。後者には次のようにある。「右皇明通紀壹部十二巻敢助松江天倫寺八世元松禪師之志購以為天倫寺之蔵／寛政二年庚戌秋九月／白鹿桃源蔵子深甫識」。なお、3-1-19, 3-1-23, 5-3-5参照。
2	白鹿洞書院揭示考証	1冊	浅見綱斎	285	—	—	—	享保16年季夏(京都)風月荘左衛門刊。
3	唐詩品彙	8巻2冊	明・高棟編	262	—	—	—	享保18年8月(江戸)須原屋新兵衛刊。『唐詩品彙』巻38～45。
4	無隠禪師無孔笛	6巻3冊	無隠道費	283	—	—	—	延享元年季夏(京都)梅村弥右衛門・(京都)田中甚兵衛・(江戸)梅村弥市郎・(大坂)大野木市兵衛刊。
5	荀子全書	20巻10冊	唐・楊倞註	280	—	—	—	延享2年6月(京都)葛西市郎兵衛刊(後印本)。奥付枠外に次のような桃源蔵の識語あり。「荀子全書壹部拾冊与拙著荀子遺乘同謹蔵於天倫寺／寛政庚申夏六月明教館教授桃源蔵」。なお、3-1-19, 3-1-23, 5-3-1参照。
6	金龍尺牘集	2巻2冊	無隠道費	276	—	—	—	寛延3年仲冬自序。(京都)堺屋仁兵衛・(京都)堺屋儀兵衛刊。
7	絶句解	3巻1冊	荻生徂徠	288	—	—	—	宝暦13年仲秋(京都)谷村豊左衛門・(京都)梅村三郎兵衛・(大坂)大野木市兵衛・(江戸)松本新六・(江戸)松本善兵衛刊。
8	絶句解拾遺考証	4巻3冊	宇佐美瀧水	260	—	—	—	明和7年(江戸)村田小兵衛・(江戸)松本善兵衛刊。
9	南郭絶句集	1冊	服部南郭	261	—	—	—	安永3年(江戸)小林新兵衛刊。
10	問学挙用	1冊	皆川淇園	287	—	—	—	安永3年仲冬(京都)河南四郎右衛門・(京都)林伊兵衛刊。
11	潜夫論	10巻5冊	漢・王符	267	—	—	—	天明7年9月(京都)風月荘左衛門・(江戸)前川六左衛門・(江戸)平瀬新右衛門・(江戸)柳生助七・(大坂)梁瀬伝兵衛・(大坂)柳原喜兵衛・(大坂)泉本八兵衛・(大坂)田原平兵衛刊。
12	補修史通点煩	1冊	猪飼敬所	284	—	—	—	享和3年10月(京都)林伊兵衛・(京都)葛西市郎兵衛刊。
13	白鹿洞書院揭示問	2巻2冊	佐藤一斎	271	—	—	—	文政6年9月刊(書肆名なし)。朱熹『白鹿洞書院揭示』・佐藤一斎『白鹿洞書院揭示問』の2巻2冊。
4 近代活字本								
1	聖経類書	2巻1冊		289	—	—	—	
2	御謚号年号読例	1冊	松浦詮編	279	—	—	—	明治26年刊。青山堂書房。
3	異字同訓弁	零本1冊	吉村彰編	282	—	—	—	明治28年編者識語。
4	芝山先生遺稿	2巻2冊	後藤芝山	281	—	—	—	明治41年刊。香川県教育会高松支部編輯発行。

【附表①】桃家歴代一覧

初代	白鹿	生没年月日	享年	幼名／通称 *本字は『列士鑑』で立項されている名	名	字	号	養子関係・姻戚関係など
		享保7～享和元 1722. 11. 至日～1801. 8. 19	80	友之助・硯次郎／大蔵・ 題蔵・源蔵	生盛・ 盛	茂功、のち 子深	百川、のち 白鹿	石見の医者坂根幸祝(方寿)の長男。 桃東園(1687. 10. 10～1760. 12. 28, 名は道隆, 字は仲長)の養子となる。 東園は、江戸の人で、大口屋全生(俳号眠雨、のち曉翁)の弟。 杉氏の娘お縁(1740～1796. 8. 4)を娶る。
二代	西河	寛延元～文化7 1748. 11. 28～1810. 8. 19	63	鉄弥／義三郎	世明・ 忠徳	君義	鰐尾・孟津・ 西河	3-2-14「西河先生稿」中に、「忠徳、初称武内氏、中称佐々木氏、又改称 脇坂氏、至明和八年辛卯冬十一月十七日、所養為桃氏之子、故後皆称桃 氏」とあり。したがって、この目録中に白鹿の著作の筆写者として名前の 見える「武忠徳」「佐忠徳」とは西河のこと。桃家の養子となる前、脇坂 家では、脇坂十郎兵衛の甥、脇坂小庵の三男。 堀江氏の娘お円(のちお律、1765～1847. 12. 4)を娶る(1777. 12. 18)。 早苗氏の娘お村(1791～1849. 12. 25)を娶る(1804. 12. 25)。
三代	黄園	安永8～文化14 1779. 10. 4～1817. 2. 24	39	孝太郎／大蔵・源蔵	維忠	子孝	黄園	坂根太嘩の二男。 黄園の娘お睦(のちお八重、1815. 5. 20～1830. 5. 5)と結婚(1828. 11. 26)。 市川氏の娘お公(?～1845. 12. 26)を娶る(1834. 2. 28)。
四代	翠庵	文化3～明治8 1806. 7. 2～1875. 4. 7	70	文之助／大蔵・題蔵	世文	君章	北湖・翠庵・ 珠願園・鳶巢	杉貞庵の次男。
五代	節山	天保3～明治8 1832. 11. 30～1875. 11. 13	44	勝蔵／硯七・文之助	好裕	君綽	修斎・節山	酒井氏の娘ひやく(1830. 10. 9～1885. 12. 7)を娶る(1858. 6. 11)。

坂根幸祝については、3-1-48所収「寛夢居士祭文」(桃源蔵)・3-1-49「寛夢居士墓碣」(海叔明)参照。

桃東園については、3-1-47「先府君行状」(桃源蔵)・「桃東園墓碣銘并序」(桃源蔵)参照。

桃白鹿の妻杉氏については、3-1-50所収「亡妻杉氏墓碣銘并序」(桃源蔵)・「島根儒林碑伝集」・「碑銘」所収参照。

桃西河については、3-1-51「白鹿先生寿蔵碣銘并序」(桃源蔵)・「島根儒林碑伝集」・「碑銘」所収参照。

桃黄園については、3-2-16「西河桃先生墓碑名」(園山雄、「島根儒林碑伝集」・「碑銘」所収)参照。

杉貞庵については、3-5-8所収「出雲藩侍医杉貞庵碑文」(雨森精翁、「島根儒林碑伝集」・「碑銘」所収)参照。

桃節山については、3-5-8所収「出雲藩侍医杉貞庵碑文」(雨森精翁、「島根儒林碑伝集」・「碑銘」所収)参照。

園山雄については、「文恭園先生碑」(田村寧我、「島根儒林碑伝集」・「碑銘」所収)参照。

(注)「島根儒林碑伝集」：谷口為次『島根儒林伝』(谷口廻瀾先生還暦記念刊行会、1940年、復刻版は、飯塚書房、1977年)所載

「碑銘」：上野富太郎・野津静一郎編『松江市誌』(松江市発行、1941年、復刻版は、名著出版、1973年)所載

「碑銘」：上野富太郎・野津静一郎編『松江市誌』(松江市発行、1941年、復刻版は、名著出版、1973年)所載

【附表②】「桃家資料」翻刻一覧

整理番号	史料名	著者	翻刻書誌情報
1 1	要記第壹	桃源蔵	磯辺武雄「新史料・松江藩儒桃白鹿『要記第壹』について：解題と全文史料」、『教育学雑誌』第28号，日本大学教育学会，1994年。
1 1	5 公記	桃源蔵	磯辺武雄「松江藩儒桃白鹿『公記第二』について：解題・本文史料」、『教育学雑誌』第14号，国士館大学教育学会，1996年。
1 1	6 要記	桃源蔵	磯辺武雄「松江藩儒桃白鹿『要記第三』について：解題・本文史料」、『国士館大学文学部人文学会紀要』第29号，国士館大学文学部人文学会，1996年。
1 1	8 要記	桃源蔵	磯辺武雄「松江藩儒桃白鹿『要記 自安永三年正月至明年未閏十二月』について：解題・本文史料」、『教育学雑誌』第15号，国士館大学教育学会，1997年。
1 2	1 負笈日歴	桃義三郎	佐野正巳『松江藩学芸史の研究』，明治書院，1981年，377～386頁。
1 2	3 東都祇役要記	桃義三郎	前掲『松江藩学芸史の研究』，386～404頁。
1 5	1 公私要記一	桃文之助	磯辺武雄『旧松江藩儒桃節山日記公私要記一』，北樹出版，2001年。影印も含む。
1 5	2 公私要記二	桃文之助	磯辺武雄「松江藩儒桃節山『公私要記二』について：解題・本文史料」(1)(2)(3)(4)，『教育学雑誌』第20・21・23・24号，国士館大学教育学会，2002・2003・2005・2006年。
1 5	3 公私要記三	桃文之助	磯辺武雄「松江藩儒桃節山『公私要記三』について：解題・本文史料」(1)(2)(3)，『教育学雑誌』第25・26・27号，国士館大学教育学会，2008・2009・2010年。
1 5	8 西遊日記	桃文之助	『日本庶民生活史料集成』第20巻，三一書房，1972年。
1 5	11 公私要記十一	桃文之助	桃節山著・桃裕行編『桃節山歿後百年記念 西遊日記・肥後見聞録』，1976年，桃裕行発行。
1 5	12 京役日記十三	桃文之助	磯辺武雄「松江藩儒桃節山『公私要記十一』について（前）（後）」、『教育学雑誌』第12・13号，国士館大学教育学会，2004・2005年。
1 5	14 郷校取調巡郷日記十五	桃文之助	磯辺武雄「松江藩儒桃節山『京役日記』について：解題・影印史料・解説文」，敬文堂，1997年，平成8年度文部省科学研究費補助金〈基盤研究C〉研究成果報告書（研究課題番号06610254）。
1 5	15 郷校取調巡郷日記十五	桃文之助	島根県教育庁総務課島根県近代教育史編さん事務局編『島根県近代教育史』第7巻「資料」，島根県教育委員会発行，1979年。
1 5	16 日誌 皇漢学校	桃文之助	磯辺武雄「松江藩の郷校について：新史料『郷学取調巡郷日記十五』(桃文之助)を中心として」，『国士館大学文学部人文学会紀要』第20号，国士館大学文学部人文学会，1988年。
1 5	17 日誌 南学	桃文之助	磯辺武雄編『郷校取調巡郷日記十五・第十九中学区巡回日記』，蔵南堂書店，1989年。
1 5	18 日誌 南学	桃文之助	磯辺武雄編『郷校取調巡郷日記十五・第十九中学区巡回日記』，蔵南堂書店，1989年。
1 5	19 日誌 南学	桃文之助	磯辺武雄「新史料『儒学校日記』(桃節山)について」，『国士館大学文学部人文学会紀要』別冊第2号，国士館大学文学部人文学会，1990年。
1 5	20 日誌 南学	桃文之助	磯辺武雄「新史料・松江藩儒桃節山『日誌』について（上）（下）」，『教育学雑誌』第18・19号，国士館大学教育学会，2000・2001年。
1 5	21 日誌 南学	桃文之助	磯辺武雄「新史料・松江藩儒桃節山『日誌』(南学)について」，『国士館大学文学部人文学会紀要』第26号，国士館大学文学部人文学会，1993年。
3 1	45 故国相朝日夫子紀功碑	桃源蔵	「碑銘」。
3 1	47 先府君行状	桃源蔵	前掲『松江藩学芸史の研究』，223～225頁。
3 1	51 白鹿先生寿藏碣銘并序	桃源蔵	前掲『松江藩学芸史の研究』，374頁。ただし影印。
3 1	52 * 記白鹿先生寿藏後	園山雄	「島根儒林碑伝集」・「碑銘」。
3 2	5 坐臥記	桃義三郎	「島根儒林碑伝集」・「碑銘」。
3 2	16 * 西河先生墓碑銘	園山雄	桃義三郎『坐臥記』(出雲文庫第1編)，発行者谷口為次，発売所(松江)文明堂，1912年。
3 5	11 直信流柔道開祖寺田先生行状	桃文之助	森就三・北川博邦編『続日本随筆大成』第1巻，吉川弘文館，1979年。
3 5	15 出雲私史	桃文之助	「島根儒林碑伝集」・「碑銘」。
3 5	16 藩祖御事蹟	桃文之助	桃好裕『出雲私史』，(松江)博立社出版部，1892年，和装本3冊。
3 5	20 肥後見聞録	桃文之助	桃節山著・谷口為次編『和訳出雲私史』(出雲文庫第3編)，発行者秦慶之助，発売所(松江)松陽新報社・(松江)文明堂，1914年。
3 5	24 * 修斎先生著書目録	中川胖	桃好裕未定稿・谷口為次和訳『和訳出雲私史』，島根郷土資料刊行会，1971年，前掲出雲文庫第3編の複製。
3 7	学資寄附願	桃好裕	桃好裕『藩祖御事蹟』，(松江)辰巳屋忠左衛門，刊年不明。
3 7	学資寄附願	桃好裕	桃節山著・谷口為次編『松江藩祖松平直政公事蹟』(出雲文庫第4編)，発行者秦慶之助，発売所(松江)松陽新報社・(松江)文明堂，1916年。
3 7	学資寄附願	桃好裕	前掲『日本庶民生活史料集成』第20巻。
3 7	学資寄附願	桃好裕	前掲『桃節山歿後百年記念 西遊日記・肥後見聞録』。
3 7	学資寄附願	桃好裕	前掲『松江藩学芸史の研究』，561～563頁。
3 7	学資寄附願	桃好裕	谷口為次『島根儒林伝』，谷口廻瀾先生遺曆記念刊行会，1940年（復刻版は，飯塚書房，1977年），153～154頁。

(注)「島根儒林碑伝集」：谷口為次『島根儒林伝』(谷口廻瀾先生遺曆記念刊行会，1940年，復刻版は，飯塚書房，1977年)所載

「碑銘」：上野富太郎・野津静一郎編『松江市誌』(松江市，1941年，復刻版は，名著出版，1973年)所載

寛永期に2度作成された中国筋国絵図

— 寛永10、15年出雲国絵図の比較 —

川村 博忠

はじめに

江戸幕府は島原の乱のあと軍用的な観点で里程や河渡りなど交通情報を盛り込んだ地図の必要を痛感して、大目付井上筑後守（政重）の指揮下で緊急に日本総図の編集を行った。それによって成立した日本総図こそいわゆる「慶長日本図」と誤認されていた国立国会図書館本系統の日本総図である。

次に掲げるのは毛利家文庫の『公儀所日乗』（別名『福間帳』^①）の寛永15年5月16日の記事である。この史料は寛永10年（1633）から承応元年（1652）まではほぼ20年間におよんで萩藩の江戸留守居を務めた福間彦右衛門（就辰）が書き残した役務日記である。この記事によると、同日彦右衛門は幕府大目付井上筑後守（政重）邸に呼ばれて、日本総図編集のためとして萩藩へ周防・長門両国の国絵図調進を次のように命じられている。

井上筑後殿江被召寄被仰渡候ハ、御国ノ絵図被仰付可有御差上候、今度日本国中ノ本絵図被仰付候、然処ニ先年中国江被参候御上使仕被上候絵図、少あらましに付而、只今中国之分斗絵図被仰付候、絵図之仕様追而御書立可被下候由被仰渡候、只今絵図被仰付候国者、播磨・備前・因幡・伯耆・備中・美作・備後・安芸・周防・長門、此国々ノ衆江被仰付候事

寛永15年5月といえば同年2月の島原の乱終結の直後である。戦地へ出向いていた井上政重は乱終結のあと急ぎ帰府し3月末、將軍に鎮圧の様子を報告している。井上政重より萩藩への国絵図調進の要請はそれから間もなくであった。日記によると、大目付は国絵図の調進を命ずる理由として、今度將軍より「日本国中ノ本絵図」（日本総図）の作成を命じられたが、「先年」中国筋国廻り上使が提出した国絵図は「少あらまし^{すこし}」であったので、今回は中国筋諸国にのみ国絵図の調進を要請するものであると述べている。「先年」とは寛永10年（1633）の上使国廻り（巡見使）を指すことは疑う余地がない。

ところで、筆者が最初にこの史料を見だしたとき、直ぐには理解ができず解明の必要を感じた課題3点をかかえ込んだ。第1には、先年中国筋国廻り上使が提出した国絵図は「少あらまし^{すこし}」であったというが、地図としてどの程度に粗略であったのだろうか、第2には、今回の国絵図調進は中国筋諸国のみが対象であると大目付は伝えているのに、彦右衛門は日記に10か国のみを列記していて、なぜ出雲・隠岐・石見を記していないのだろうか。第3には、幕府が日本総図を編成しようとするのにどうして下図として中国筋諸国の国絵図のみの徴収で事足りるのか。

当初、不可解であった以上3点についてはその後調査を進める過程で納得できたので、その解明のいきさつを紹介して、寛永期に出雲の寛永国絵図は10年と15年の2度作成されたため、その写本2種類が存在することの理解に供したい。

1. 寛永10年の巡見使国絵図

(1) 日本六十余州図の現存

江戸幕府は寛永10年に幕府開設以来はじめて全国一斉に国廻り上使（巡見使）を派遣した。全国を畿内・南海、関東・東海、中国、九州、奥羽・松前の6区に分けて6班の分担による巡察であった。各班の上使らは寛永10年の冬から翌11年正月までには分担諸国の巡察を終えて江戸へ帰着し、将軍へ巡察の報告と合わせて分担諸国から徴収した国絵図を将軍へ提出した。このことは文献的には既に知られていたが、巡見使が集めた国絵図は写しといえどもその存在は知られておらず、それがどのような内容の地図であったかは不明のままであった。中国筋担当の巡見使が上納した国絵図の「あらまし」の実際を確かめるには、まずは寛永巡見使国絵図そのものを探し出すことが必要であった。

かつて筆者はその巡見使上納国絵図がどこかに残されていないかと探索しまわったところ、秋田県公文書館に全国68か国を各国一枚ずつ小ぶりに仕立てた一揃いの江戸初期国絵図のあることを知り得た。この一揃いの小型国絵図は居城の表現にほぼ共通して（）図式（惣構方郭型）を用い、方郭の枠内に城名を記している。そのほか、各図とも隣国へいたる道筋のすべてに行先の小書き（注記）のあることが特徴的であった。蝦夷と琉球を含めない全国68か国のこの一揃い国絵図こそ寛永巡見使国絵図であろうと推察した。

この全国一揃い国絵図は後日、秋田県公文書館の他に岡山大学附属図書館（池田家文庫）、山口県文書館（毛利家文庫）および土佐山内家宝物資料館にも現存していることが分かった^[2]。そのほか名古屋市蓬左文庫にも書写系統の異なるものを交えて関連国絵図が全国の過半におよんで現存している。各所蔵先に現存するこれら小型国絵図諸本を通覧すると、描法や図式など表現様式の違いによって書写系統の異なるいくつかのグループのあることが分かる。しかし、国ごとの図形や図示内容は基本的に共通していることから、元来これら諸本はいずれも同一の原拠図から派生した写本であると考えられる。

この系統の国絵図には所蔵機関で適宜名称がつけられていて、それぞれに所蔵資料目録での名称は一定していない。秋田県公文書館では一括して「日本六十余州国々切絵図」としており、毛利家文庫では一括して「日本図」の名称をつけている。池田家文庫や蓬左文庫などでは国ごとにばらされて個々の国絵図名称にて整理されている。このようにこの系統の国絵図には全体をとりまとめる一定した呼称がないため、筆者は便宜上、全国揃いのものを秋田県公文書館の目録題にならい、とくに「日本六十余州図」（以下、余州図と略称）の名称をあてることにした^[3]。

(2) 巡見使国絵図の二次的写本か

余州図は既述のように城所の図示記号など描法・表現様式が全国的に統一されている。また陸路は本道と間道を区別することなく細い朱線で表し、本道筋にも一里山は示されない。道筋が国境を越えるところには道筋を引き捨てにして、その道が隣国のどこに至るかを必ず小書きしている。

上使の巡察は全国を6区に分けての分担であったことから、寛永巡見使国絵図は本来、上使の分担区域によって絵図様式や内容に地域差が生じていたはずである。ところが余州図では図式・描法が全国的に統一されていることから、本図は巡見使によって集められた諸国の国絵図を原拠にして、様式の統一を図って描き直した二次的写本であるとみなされる^[4]。たしかにこの全国の国絵図を注意して観察すると、図示内容には地域別に精粗がある。村々の図示密度、郡区分の有無、国境の表現、隣国へ向かう道筋注記の表記の違いなどの地域的な違いは、巡見使の分担区域にほぼ一致している。二次的写本であれば様式・描法の統一はできても内容までは変えられなかったのである。

上記全国一揃いの余州図とは別に東京大学総合図書館（南葵文庫）および熊本大学附属図書館（永青

文庫)にも余州図と図形・内容は共通するものの様式・描写のやや異なる中国筋(山陰・山陽道)諸国の国絵図が全部ではないものの、10数か国分がまとまって現存している。これら国絵図は寺社を景観的に描くなど描写・彩色が丁寧であるほか古城に□の図式を用いないなど余州図とは完全には一致しないが、城所を惣構方郭型の□にて図示するなど基本的様式は余州図に共通している^[5]。

南葵文庫のこの種の国絵図は同じ図が二枚ずつあって、一枚は墨書や彩色の古い古写図であり、他の一枚はそれを新しく模写した新写図である。新写図は色調や字体が統一적であって同一時期に模写されたものとみなされる。新写図には城所に城主名を記す付箋が貼られているので、新写図の模写された時期を知る手掛かりが得られた。記載される城主12名の在任期間を調べると、全員の揃う時期は寛文12年(1672)に限定される。新写図の写されたのがこの年であれば、古写図の成立は寛文12年以前ということになる。

さらに注意深く観察すると、南葵文庫の古写図のうち因幡と伯耆の国絵図に限っては図中に領主名が記載されている。その領主名は因幡では「松平相模守」(鳥取城主)、伯耆では「荒尾内匠」(米子城)、「荒尾志摩」(倉吉町)、「和田飛驒」(河村郡松崎)、「津田内記」(八橋郡八橋)、「福田内膳」(日野郡黒坂)の6名である。領主名は付箋ではなくいずれも図面への直筆であって、字体や墨色からして後世の補記とは考えられない。

松平相模守(光仲)が国替えて備前岡山から因伯2国へ入部したのは寛永9年(1632)であった。伯耆国絵図に記される5名はいずれも鳥取藩主池田家の重臣である。八橋の「津田内記」は津田元匡のことであって、彼は寛永11年まで内記を名乗り、その後は筑後守と改称している。つまりこの国絵図に記される領主6名の揃う時期は寛永9年の松平(池田)光仲のお国替えから、津田内記が筑後守へ改称した寛永11年までの3年間に限定される^[6]。

同様の領主名の記載は永青文庫の国絵図においてもみられる。ただし永青文庫文図では因幡の鳥取城には城主名の記載がなく、伯耆国絵図の5名は南葵文庫図と同じように直筆で記されている。このように因幡と伯耆の領主名を記す国絵図が鳥取藩主池田家に伝わるものではなく、他国の大名家に伝わることは恐らく原図に記されていたものがそのまま写されたとしか考えられない。寛永巡見使の国廻りは池田光仲の因伯2国への国替えの直後であったことから、巡察に來国した上使はとくに池田家の家臣配置について確認したものと思われる。つまりこの国絵図は寛永10年の巡見使国廻りの際に作成されたものであることは疑いない。南葵文庫の古写図および永青文庫国中の中国筋国絵図は二次的写本の余州図が作成される前の巡見使上納国絵図そのものの写である可能性も考えられるのである。

(3) 中国筋国絵図は粗略であったか

寛永国廻り上使の全国への一斉派遣に際して、幕府が上使へ指示した巡察内容の具体的な史料は知れない。したがって、寛永10年の巡見使上納国絵図は内容にどのような特徴があるかは定かでなかった。ただ熊本藩主細川忠利は寛永10年3月国許への書状で巡見上使の任務について「国廻之衆ニ被仰付候ハ(中略)、国々大躰道筋能身候へと迄被仰付候」^[7]と伝えていた。そしてさらに6月には「国廻之衆之儀、道筋境目など見候への儀は表向ニ而、其国之様々の儀聞候而参候への儀必定と、慥成所より申来候」^[8]との情報を伝えている。上使国廻りの主目的が諸大名の治政の監察にあったことはいうまでもないが、表向きには道筋や国境の見分であると伝えられていたのだろう。しかし道筋と国境の見分はあながち口実にとどまるのではなく、実際には元和一国一城令遵守の見届け、古城の見分と同時に全国の道筋と国境の調査が上使の重要な任務であったと考えられる。

余州図は日本68か国の国単位の絵図であって、陸奥国は例外として図幅も各国おおよそ縦・横1メートル前後の大きさで様式、描法、彩色は全国ほぼ一律である。既述のように居城と古城を全国共通した

図式で描き分け、陸路の詳細な図示と国境越え道筋の行き先の小書きが内容の特徴である。沿岸に舟路の図示は一切ない。またいずれの国においても石高の記載はみられない。ただ池田家文庫図だけには各国ごと罫紙（図面の余白）に国高が記されているが、これは原拠図のものではなく国絵図の模写時に補記されたものと考えられる。

ところで余州図の内容を細かく観察すると、先にも述べたごとく全国を6区に分けた上使の分担地域によって記載内容には微妙な違いが生じている。たとえば地図の重要な要素である郡村記載をみると、郡区分の有無や村形で示される村々の図示密度には地域による違いがある。関東、北国および奥羽の3地域では郡による区分が見られず郡名の記載もない。また関東・東海と北国では村形の図示数が少なく国内の郡区分の有りの違いなどが認められる⁹⁾。中国筋の国絵図では国内が郡界線ではっきりと区分されて各郡の郡名が記されており、村形による村々の記載密度も高い。中国筋の国絵図が他地域の国絵図に比較して粗略であるという印象は受けない。むしろより詳しいとさえ感じられるのである。

さらに南葵・永青両文庫の中国筋（山陰・山陽道）諸国の国絵図には隣国へ引き捨てにした道筋の一部先端に行先の注記（小書き）とは別に●、○あるいは○の記号が付されていて注目される。このような○印記号は永青文庫図では但馬・因幡・伯耆・石見・備後の5か国、南葵文庫図では永青文庫の5か国に加えて長門・安芸・備中・備前・美作・播磨・出雲の各国において認められる¹⁰⁾。このような中国筋諸国に限ってみられる○印の記号は道筋の重要度もしくは難易度を示しているかとも思われるが、何を意味するかその真相は分からない。ただ中国筋諸国だけにみられるこのような記号は余州図においては全国いずれにも一切みられない。このような南葵・永青両文庫所蔵の中国筋国絵図の特殊さは、これが巡見使上納国絵図そのものの写ではなかろうかという大胆な推測もできなくはない。すると、二次的写本の余州図はこの中国筋国絵図の様式・描法を基準にして、全国の国絵図を統一的に描き直したものである可能性も考えられよう。

2. 寛永15年の中国筋国絵図

(1) 中国筋国絵図の調進

冒頭に挙げた『公儀所日乗』によって、幕府大目付より国絵図調進を命じられた萩藩の対応を追うと、同藩は幕命を受けたあと国許で防長両国の国絵図を急ぎ調製し、およそ5か月後の同年10月15日に大目付の許へいったん提出したものの、その後さらに指示をうけて若干の書き入れを補足して同月20日に最終的に提出を済ませている¹¹⁾。この間江戸留守居は大目付より3度におよんで急ぎの催促を受けている。同人はそのことをそのつど早飛脚で国元へ連絡しており、幕府はこの日本総図の編集をかなり急いでいたことを窺わせる。

広島藩の『済美録』¹²⁾によると、安芸国絵図は広島藩が自前で、備後国絵図は福山藩との相持によって調製している。広島藩は寛永15年7月20日に狩野派絵師に控図を合わせた清書代4枚分の支払いを済ませているので大目付への提出は萩藩よりも早かったと思われる。その他の中国筋諸国の国絵図も多くは寛永15年の年内には提出されたものと推定される。

大目付の井上政重は萩藩へ国絵図の調進を命ずるに際して「絵図仕立様之儀ハ迫而可被仰渡候」と伝えていた。したがって、後日何らか具体的な絵図仕様が示されたはずであるが、その仕様がいかなる内容であったかは直接的には知り得ない。しかし大目付の命を受けた萩藩が支藩の岩国藩へ対して国絵図調替えのためとして問い合わせていた内容からすると、絵図仕様では道筋の里程、河幅と深さや河渡りの手段など交通に関する注記を図中に盛り込むことが求められていたものと考えられる。

岩国藩の『証記抜粹類聚』¹³⁾に収載される「海上里数川幅間数之事、萩より申来御書付被差出候一途」

によると、岩国藩は寛永15年7月15日に萩藩家老より防長両国の絵図を江戸へ差出すのに必要であるとの理由で、川幅や河渡りの手段についての問い合わせを受けていた。それに応じて岩国藩は河渡りの箇所について次のように回答していた。

- 一、御庄川 陸渡、広さ五拾間、水出候時ハ船にて渡申候、但、洪水之時河広さ難計
 - 一、小瀬川 陸渡、広さ貳拾六間、水出候時ハ船にて渡申候、是も洪水之時河広さ難計
- (以下、省略)

その後萩藩はさらに同年8月6日に岩国藩に対して「江戸御進納之絵図ニ書付申儀ニ付而、得御意候間、道のり急度御付立候て可被差出」と幕府へ調進する国絵図へ書き入れるためとして陸路の里数についても問い合わせていた¹⁴⁾。

幕府大目付井上政重による日本総図の編成は急を要していたようで、寛永15年5月15日に中国筋諸国の江戸留守居（松江藩を除く）を自邸に呼びだして、とりあえず急ぎ国絵図調進を命じたものの、その時点では絵図の作製基準を具体的に指示する用意はできていなかったようである。国絵図調製のための仕立様はその後に指示されたはずであるが、その内容は陸路と海路の里程、とりわけ街道筋の渡渉箇所での「歩渡り」「舟渡り」の注記が要求されていたものと考えられる。

(2) 備前・備中国絵図控の現存

中国筋諸国から幕府へ調進された寛永15年国絵図の控ないしは写がいずれかの国元に残されていないかと探索していたところ、岡山大学附属図書館（池田家文庫）に「寛永古図」と呼び伝えられている備前・備中2枚の小型国絵図の存在を知り得た。両図を仔細に検討したところ、この2枚の国絵図こそ寛永15年国絵図（控）であることを確認することができた¹⁵⁾。備前国絵図は「備前国九郡絵図」、備中国絵図は「備中国絵図」の題目で整理されており、前者は『日本古地図大成』¹⁶⁾に図版が収載されているなど、両図の存在は早くから知られていたにもかかわらず、従来その成立についての考証が十分でなかった。両図の料紙、絵図様式はまったく一致しており、この両国の国絵図が同じ目的で同時期に作成されたものであることは明らかである。

備前・備中両国のうち備前は岡山藩主の一円知行であるのに対して備中は多くの領主が分割知行するため、備中国絵図には畠紙（絵図余白）に領主別知行内分け（領知目録）が掲載されている。したがって各領主の在任期間を検討すれば、両図の成立時期を割り出すことが可能である。なかでも注目されたのは、備中のうち成羽藩の山崎甲斐守（家治）知行分に限っては「山崎甲斐守先知」と記されていることである。「先知」とは先の知行地を意味する。山崎家治は島原の乱終結直後の寛永15年4月に肥後天草へ転封して富岡城主となっている。備中成羽では山崎家治転封のあと、一時同国松山城主池田長常が在番し、寛永16年6月に至り常陸下館より水谷勝隆が入封している。

このことは「備中国絵図」の成立が山崎家治の天草転封より、水谷勝隆の成羽入封までの寛永15年4月から翌16年6月までの1年2か月の間であることを語っている。さらに領知目録に記載される全領主の揃う時期を確認すると、公家・社寺分を除く大名13名（山崎家治を除く）全員が先の1年2か月の期間を満たしていた。池田家文庫の備前・備中2枚の国絵図は幕府大目付の命に従って岡山藩が調進した国絵図の控であることは間違いないものと確認できた。

(3) 島根県購入の出雲・隠岐国絵図

平成15年(2003)度に島根県古代文化センター（現、島根県立古代出雲歴史博物館）の依頼で、古い出雲・隠岐国絵図の鑑定のため松江へ出向いた。某古書肆より購入が検討されていて、すでに同センターに預

かり置かれていた現物を観察すると、図示内容から寛永期の国絵図の写しとみられるものの、出雲国絵図では末次城が景観的に表現されていて、道筋に一里山の図示がみられるなど、寛永10年のいわゆる余州図系統の図とは異なっている。すでに明らかになった池田家文庫の備前と備中両国絵図にも一里山が見られることから、寛永15年図の可能性も考えてみたが、池田家文庫図と比較すると図面の大きさが一回り小さくて描写・彩色も粗雑に感じられた。さらに判断に迷ったのは、彦右衛門の日記に幕府より国絵図調進を命じられた中国筋の国々として列記した国名のなかに出雲・隠岐・石見の3か国が含まれていないことであった。その迷いから鑑定書に寛永15年国絵図と断定するのを躊躇した。

しかし、その後も寛永15年国絵図である可能性について気掛かりであったことから、某古書肆の目録に出雲・隠岐の両国絵図と同系統のものが他にも出ていないかを確認したいと思い、後日古代文化センターの岡宏三氏に電話して同目録の関係部分をコピーして送ってもらった。目録に写真を付して載る同系統の国絵図は他に播磨・但馬・周防・長門のみであって、予想した通り中国筋の国に限られており、寛永15年国絵図は中国筋の全部の国で調進されていた可能性が強まった。彦右衛門日記にて雲・隠・石の3か国が欠けているのは多分単なる書き落としであろうと考えるようになった。古代文化センターが購入した出雲・隠岐両国の国絵図は、やはり寛永15年国絵図の写であるとの思いが強くなった。

(4) 寛永15年中国筋14か国の国絵図一括出現

大分県臼杵市の臼杵図書館に所蔵される旧臼杵藩の藩政資料中に大量の近世絵図が含まれていることは以前から注目されていたが、その全容は長らく知られないままであった。臼杵市では国の補助を受けて平成13年（2001）度から3か年でこの大量の近世絵図群の調査が行われることになり、筆者も調査委員長として調査を担当した。この調査の過程で、絵図群中に中国筋14か国の寛永15年国絵図が全部一括して残っていることが判明した¹⁷⁾。その中に出雲・隠岐・石見が含まれるほかに但馬も入っている。この14か国はまぎれもなく寛永10年の中国筋巡見上使の分担範囲である。

新しく出現した臼杵図書館の該当図のうち備前と備中を、先に寛永15年国絵図として確認していた池田家文庫の両国図の場合と比較照合すると、まず目につくのは図幅寸法の違いである。池田家文庫図に比べて臼杵図書館図は一回り小さい。一里山の間隔を測って縮尺を推定すると、池田家文庫図は4寸1里（3万2400分の1）程度での仕立てであるが、臼杵図書館図は2寸1里程度とみなされる。池田家文庫図は厚めの楮紙に裏打ちを施していて、丁寧な極彩色の仕上げで美麗であるのに対して、臼杵図書館図は料紙が薄紙であって彩色も淡彩で、地名や小書きなどの文字記載もやや雑である。

表現上の主な違いとしては、①池田家文庫図では方位表示に東西南北の四文字を外向きに記しているが、臼杵図書館図では内向きである。②郡界線が前者は金泥色であるのに後者は黒太線で表している。③朱筋の道筋を前者は街道と間道を太細で分けて表しているが、後者にはその区別がみられない。そのほか小書き（注記）の多さ、その記載表現の違いなどに相違が認められるものの、基本的な内容は共通していて両者が同一種類の国絵図であることは疑いない。

池田家文庫図は岡山藩が調進した備前・備中両国の国絵図の控として国許に残されてきたものであろう。それに対して臼杵図書館図は中国筋諸国から調進された寛永15年国絵図の全部を、半分に縮小して一括して写した模写図とみなされる。島根古代文化センターが購入した両国の国絵図を臼杵図書館図と照合したところ、一部に小書きの省略ないしは写し忘れなどがあるものの、内容はほぼ同じであった。

(5) 萩藩江戸留守居の日記に雲・隠・石3か国を欠いた理由

中国筋全部の寛永15年国絵図の写本が一括して残っていたことで、寛永15年国絵図は『公議所日乗』に記される通り、やはり基本的には中国筋諸国からのみの調進であったことが裏付けられた。萩藩江戸留守居の彦右衛門が日記にこのたび国絵図調替を命じられたのは「中国之分斗^{ばかり}」と書いて、そのうえで

「只今絵図被仰付候国」はとして10か国の国名を列記しているが、そのなかに出雲・隠岐・石見および但馬4国を記さなかったのは単なる書き落としではなかった。彦右衛門が井上政重邸へ呼び出されて萩藩へ防長の国絵図調進を命じられた当日、同様の命を受けたのは日記に列記された10か国のみであったと推察される。

後日気づいたのだが、雲・隠・石3か国の国絵図調製に責任を有する松江藩はちょうどこの時期に藩主交代の直後であった。松江藩主の京極忠高は寛永14年6月に嗣子なく江戸で没したために京極家は断絶していた。そのため松江藩主は松平氏に引き継がれ、翌15年4月に信濃国松本から松平直政が松江へ入部している。幕府大目付井上政重が日本総図の再製に取り組んだ寛永15年6月は松江藩ではまさに新藩主が着任したばかりであった。そのため松江藩へ命じられるはずの雲・隠・石3か国の国絵図調進の発令は、萩藩への要請と同時にではなくそれより若干遅れたものと判断される。上記のような事情で萩藩江戸留守居の同日の日記に3か国が記載されていないのは自然であった。ただ日記には雲・隠・石3国のほかに但馬の記載を欠いているが、但馬を欠く理由は現在のところ不明である。

(6) 日本総図編集に中国筋の国絵図のみ徴収の理由

第3の課題は幕府が日本総図を編成するのにどうして中国筋諸国の国絵図を徴収するだけで事足りたかの疑問であった。それが不可解であったため中国筋以外の国での国絵図調進の痕跡は見出せないか広く諸藩の史料を探索していたところ、唯一米沢藩が寛永16年2月に井上政重より国絵図調進の命を受け、翌月調進していることを確認できた¹⁸⁾が、それ以外の国での事例を見出すことはできなかった。ただ米沢藩については同藩に限る特別の理由による徴収の可能性のあることが推察された。

先の『公儀所日乗』の大目付による通達文面を採録した萩藩の『秀就様御代之記録物』¹⁹⁾では「今度の惣国之絵図御念入候付」と日本総図改訂の理由を説明している。「今度の惣国之絵図」という限り、幕府は既存の日本総図を持っていたのである。その既存の日本総図こそ佐賀県立図書館（蓮池文庫）本系統の三枚組の大型日本図であると考えられる。その日本総図では出羽国であるはずの米沢が陸奥国に含めて描かれている。米沢藩は本拠を出羽国置賜郡に置きながら、江戸初期には領地が陸奥国の伊達・信夫郡の全域にまで及んでいたためである。のち寛文4年（1664）に藩主の上杉綱勝が嗣子を決めないまま急逝したことにより、米沢藩は15万石に削封されて領地は出羽国内に限られることになった。したがって寛文15年に大目付井上政重が編成した日本総図では既存の日本総図と同じように米沢領は陸奥国に含めて描かれている。つまり井上政重は寛永15年日本図編成の最終段階で、先の日本総図にて米沢領の描かれ方に疑念をいだき領地確認のために、同藩にたいし特別に米沢領国絵図の提出を求めたものと推定される。

ところで、筆者の第3の疑問に関しては後日、①渡部淳氏の論文²⁰⁾が報告されたこと、②寛永15年日本図の下書き図²¹⁾とみなせる未完成の日本図を探し出せたこと、の二つによって当初の疑念を解消することができた。渡部氏は大目付井上政重による寛永15年日本図編成についての筆者の論考に関連して、同時期にこの件に関して井上政重は土佐藩に対してはいかなる指示をしていたかを土佐藩史料を精査して得た報告がなされた。それによると、寛永15年末に土佐藩江戸留守居は井上政重邸へ呼び出されて、広間に広げられていた「日本図を絵図壺枚ニ被成候」（日本図、後述の下書き図ではないかと考えられる）と慶長土佐国絵図を前にして国内の交通難所、阿波と伊予への道筋とその里数、人馬通いの可否、山坂および渡河箇所での「舟渡し」「歩渡し」の別、九州への船路の里数などの下問を受けたが答えに窮したため同夜は藩邸に帰って、藩士や土佐出身の商人などから情報を集めた結果を書付にして翌日政重邸に届けた。留守居は聞き取りでは不明なことも多いことから国元へも問い合わせている。しかしその数日後に政重の家臣が慶長土佐国絵図を持参して土佐藩邸へ出向いてきて、再度近隣国および

土佐国内の交通難所と九州へ至る交通の子細を尋ねている。その上で下問に対する回答を書面にまとめて当日の夜までに提出するようにと命じて帰った。

井上政重が土佐藩から集中的に交通情報を収集した時期は、まさに中国筋諸国の国絵図が調進されて日本図の編集に取り掛かっていた頃であるとみなされる。寛永15年日本図の編成はその目的からして西国へ向けての交通情報に重点が置かれており、しかも地図製作は急を要していた。西国への交通上もっとも重要なルート为中国筋からだけは改めて国絵図を徴収したが、同じく重要な四国については下問による情報収集で済ませたのである。井上政重が日本総図編成のために国絵図を徴収したのはやはり中国筋諸国からのみであったことが明確になった。

寛永15年日本図の下書き図は東京大学総合図書館（南葵文庫）で見だせた。該当するのは同館所蔵の「日本全国図」（92×133cm）である。本図は国ごとの区画を施し、山地は全国的に名高い山だけを素描して、一般の山々は描写がなく、川筋だけを多く描いているのが目立つ淡彩の^{あらえず}匱絵図である。図面いっぱい小書きの文字が書き込まれていて、記載文字も丁寧ではない。日本全体の図形は寛永15年日本図に合致することは一見して明らかである。城所を□印の城形で示して江戸、京都（二条）、大坂、府中（駿府）の幕府持城を別扱いにするほか、図中の記載内容は寛永15年日本図（国会図書館本）と大きな違いはない。大きさは寛永15年日本図に比べると縦横およそ半分であって、縮尺を半分にして画かれた下書き図とみなされる。

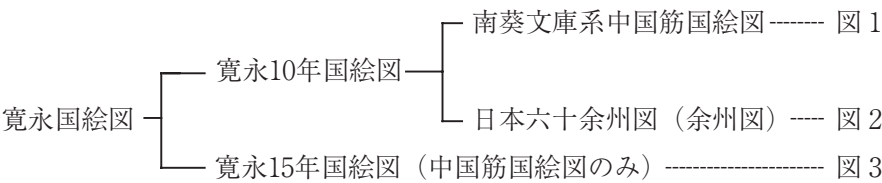
この匱絵図に無数記される小書きに注目すると、陸路と海路の里程および渡渉地の河渡りの注記など交通関連の小書きがほとんどである。とりわけ道筋の渡河地点に「歩渡」「舟渡」の別を示す小書きが目立っていて、寛永15年日本図の内容上の特徴に一致している。この匱絵図に記される渡河方法の小書きを、完成図の写本である寛永15年日本図（国会図書館本）の場合と国別に比較してみると、全国的には両方で一致ないしは近似する国々が多いなかで、中国筋諸国と四国に限っては小書きを欠く国が目立っている。まったく記載を欠く国は出雲・石見・備中・周防・長門・阿波・讃岐・土佐・筑前の9か国であって、筑前をのぞけば他はすべて中国と四国の国々である。つまり幕府は寛永15年日本図を編成するのに中国および四国地域における交通注記、とくに渡河方法についての情報が不足していて、下書き図への小書きが満たされずにいたものと推測される。

幕府は島原の乱で既存の日本総図が役立たなかった反省から、乱終結のあと軍用的な用途で実用的な日本総図の必要性を感じて、緊急に大目付井上政重が担当してその編成に着手した。ただ全国の国絵図の調進を待っているのは時間がかかることから、西国へ向けての交通上もっとも重要な中国筋に限ってだけは改めて国絵図を徴収したが、あとは寛永10年の寛永巡見使上納国絵図や慶長国絵図など幕府所持の国絵図を混用して応急的に編成したものと考えられる。寛永10年と15年両日本図の図形を比較すると、中国地域の違いは顕著であって寛永15年日本図の編成に寛永15年の中国筋国絵図が下図に利用されていることは明らかである。出雲国絵図は寛永10年と15年両国絵図の図形に大きな違いがないためその確認は必ずしも明確ではないが、長門や隠岐などをみると寛永15年の国絵図と日本図の関連が一見して明らかである。

結びにかえて—寛永10、15年出雲国絵図の比較—

寛永期の国絵図を整理すると寛永10年国絵図と寛永15年国絵図（中国筋諸国と米沢領のみ）に大別される。ところで寛永10年国絵図も全国揃いの「日本六十余州図」（余州図）のほかに微妙に様式の異なる南葵文庫系の中国筋国絵図が現存している。余州図は巡見使の分担区域によって様式にばらつきのあった巡見使上納国絵図を全国で様式の統一を図って描き直した二次的写本とみなされる。寛永10年

国絵図のうち南葵文庫系の中国筋国絵図は居城を惣構方郭型の□図式で表すなど基本的には余州図系統ではあるが、古城の図式に□印を採用していないことや社寺の景観表現など余州図の様式とは完全には一致していない。さらに顕著な違いは引き捨てにした国境越え道筋の先端に行先の小書きとは別に●、○および○の記号を付している。余州図のうち中国筋国絵図にはこのような記号はみられない。この記号が何を意味するかの確証はないものの、おそらく道筋の難易度を示すのではなかろうか。南葵文庫系の中国筋国絵図と余州図には様式の完全な一致はないものの、居城の特有な図式の共通性のほか描写・彩色の類似性があることから、筆者はこの南葵文庫系中国筋国絵図こそ寛永10年の巡見使上納国絵図（一次写本）であって、余州図はこの中国筋国絵図を参考にして全国の巡見使上納国絵図を統一的に描き直したものであろうと推定している。



現存する寛永期の出雲国絵図を分類すると上の系列図に示す如くである。図版に示す寛永10年国絵図のうち、図1は南葵文庫本、図2は池田家文庫本、そして図3の寛永15年国絵図は島根県立古代出雲歴史博物館本である。寛永期の3種類の出雲国絵図の様式・内容を分かりやすく比較すると表1の通りである。

表1 寛永10年・15年出雲国絵図の比較

	寛永10年国絵図		寛永15年国絵図
	南葵文庫	余州図	
寸法	111×151cm	120×165cm	100×117cm
方位記号	文字記号内向き	同左	同左
構図	四辺対置	南を天	南を天
居城	□、末次城	□、末次	景観描写
古城	文字「古城」（朱）	□、「古城」（墨）	文字「古城」（墨）
郡	界線（黒）、郡名（朱）、村色分け	短冊枠（赤）、郡名（墨）	短冊枠（白）、郡名（墨）
村	丸形、村名	小判型、村名	丸型、村名
寺社	景観描写	短冊枠（橙）	景観描写
道筋	朱線	同左	同左
交通注記	（隣国）…へ出道	（隣国）…へ出ル	（隣国）…へ何里何丁
舟路里数	なし	なし	有り

先ず寛永10年国絵図の2種を比べてみる。南葵文庫系図と余州図ともに末次城を□の記号（惣構方郭型）で表して共通している。ただ余州図は古城を□の記号で示して四角の枠内に「古城」と墨書きしているのに対して、南葵文庫系図では図式を用いず、単に朱筆で「古城」と記すのみである。また余州図では寺社をも短冊形の枠付で名称を記すだけに図式化しているが、南葵文庫系図では景観的に描写して社寺の名称を朱筆で記している。そのほか村形を余州図は全国一様に小判型（俵型）で表すが、南葵文庫系図では丸輪型である。

次に寛永10年国絵図（余州図）と寛永15年図を比較してもっとも目立つ相違は居城・古城・社寺の表現および交通注記の種類である。寛永10年図が居城に□の独特の記号を用いて表現するのにに対して、寛永15年図は景観描写である。寛永15年出雲国絵図（図3）では末次城の城名は記さず城郭を景観描写して、城下の町筋を描いている。寺社については先述のように寛永10年図のうち余州図では短冊形

の枠付に図式化されているが、寛永15年図では景観描写である。寛永15年図は既述のごとく交通情報の重視を特徴としていることから、陸路には一里山を図示するほか国境越道の行き先までの里程を小書きで示している。また海路も山陽筋では舟路を示すが山陰筋では舟路は示されないものの、出雲の場合は島根半島東端に「三保関ヨリ隠岐国嶋後迄三拾六里」と隠岐の嶋後までの海上里数注記があり、宍道湖と中海にも水面の里数を記載している。寛永10年図には陸・海ともこのような里数記載は一切みられない。

注

- (1) 山口県文書館（毛利家文庫）所蔵。この史料についてはのち山本博文氏の『江戸お留守居役の日記』（講談社学術文庫、2003）によって広く世間に知られるようになった。
- (2) 拙編『寛永十年巡見使国絵図 日本六十余州図』解説、柏書房、2002、4－7頁。
- (3) 前掲2)の図集タイトルに使用した。
- (4) 前掲1)、19－20頁。
- (5) 前掲1)、拙稿「寛永国絵図の縮写図とみられる「日本六十八州縮写国絵図」、歴史地理学37－5、1995、1－9頁。
- (6) 前掲5)、12－14頁。これら人物の時代考証については当時鳥取県立博物館学芸員であった坂本敬司氏のご教示を得た。
- (7) 『細川家史料十一』（大日本近世史料）、東京大学史料編纂所、1988、11－608番。
- (8) 前掲7)、11－647番。
- (9) 前掲2)、19頁。
- (10) 前掲2)、7頁。
- (11) 拙稿「江戸幕府撰日本図の編成について」、人文地理33－6、1981、45頁。
- (12) 広島市立中央図書館蔵、浅野家文庫。
- (13) 岩国徴古館蔵。
- (14) 前掲13)。
- (15) 拙稿「寛永期における国絵図の調製について」『地域—その文化と自然—』（石田寛先生退官記念論文集）、福武書店、1982、487－489頁。
- (16) 中村拓編『日本古地図大成』、講談社、1972、96～97頁。
- (17) 拙稿「寛永日本図の改訂とその実像」（藤井譲治他編『大地の肖像—絵図・地図が語る世界—』、京都大学学術出版会、2007）、298－325頁。
- (18) 『上杉家御年譜』四（米沢温故会、1977）、寛永16年2月29日、同年3月24日の記。
- (19) 山口県文書館（毛利家文庫）所蔵。
- (20) 渡部淳「寛永十五年国絵図徴収に関する史料をめぐって」、土佐山内家宝物資料館研究紀要3、2005、17～25頁。
- (21) 拙稿「現存した寛永15年日本図の下書き図」、地図48－3、2010、1－9頁。

図 寛永10年・15年出雲国絵図の比較

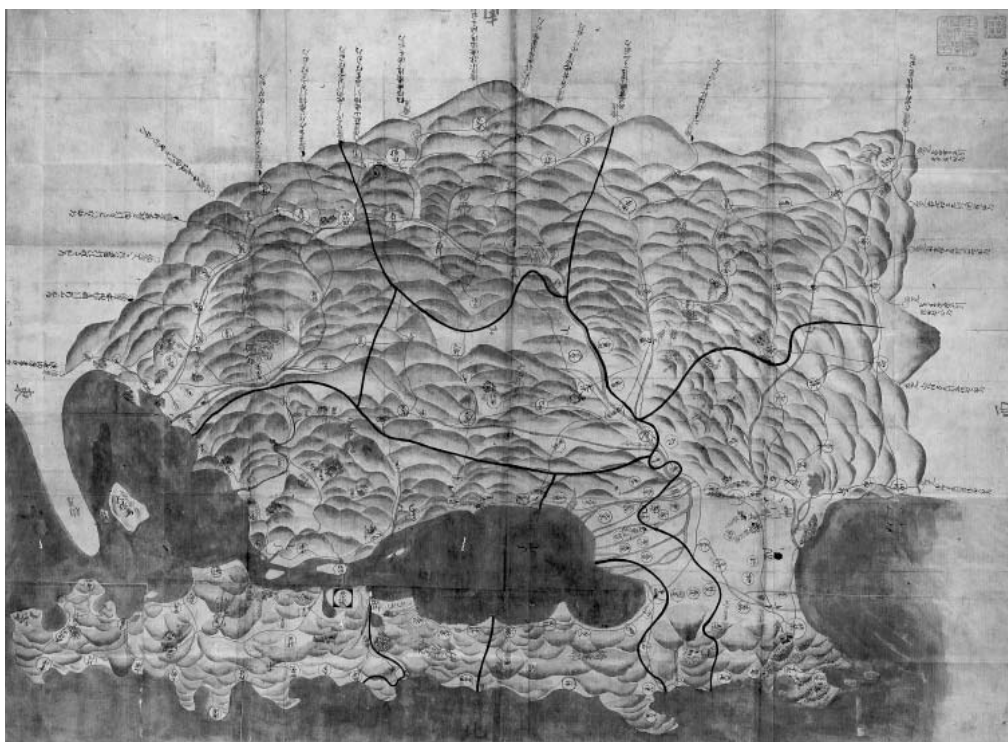


図1 寛永10年出雲国絵図写、東京大学総合図書館（南葵文庫）蔵

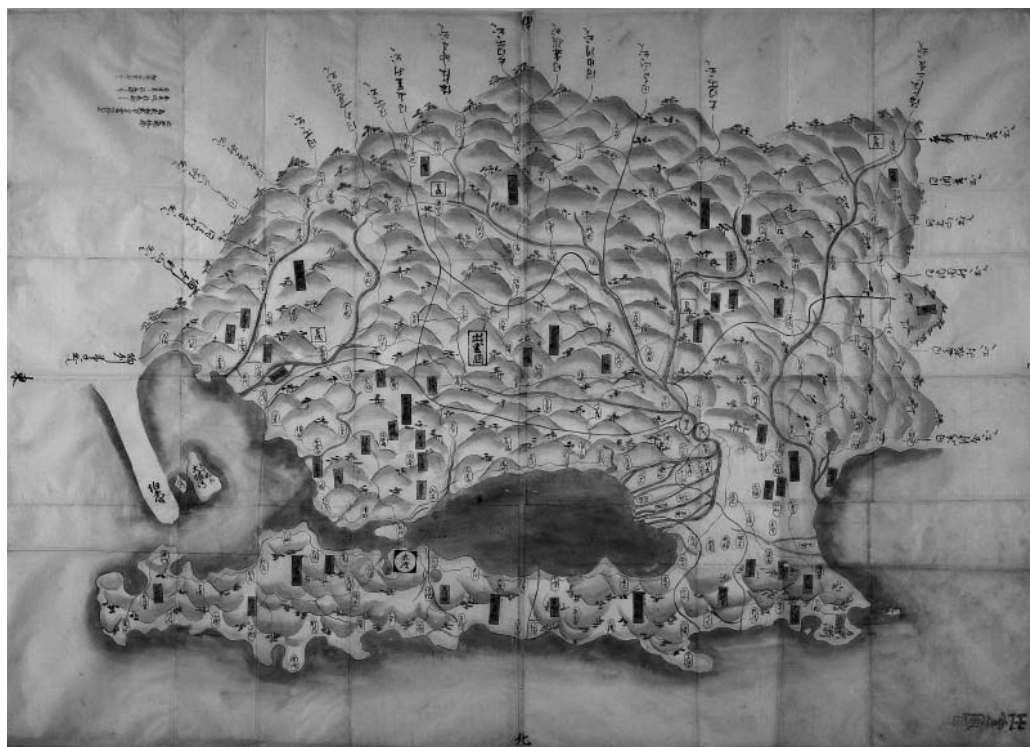


図2 寛永10年出雲国絵図写（余州図）、岡山大学附属図書館（池田家文庫）蔵

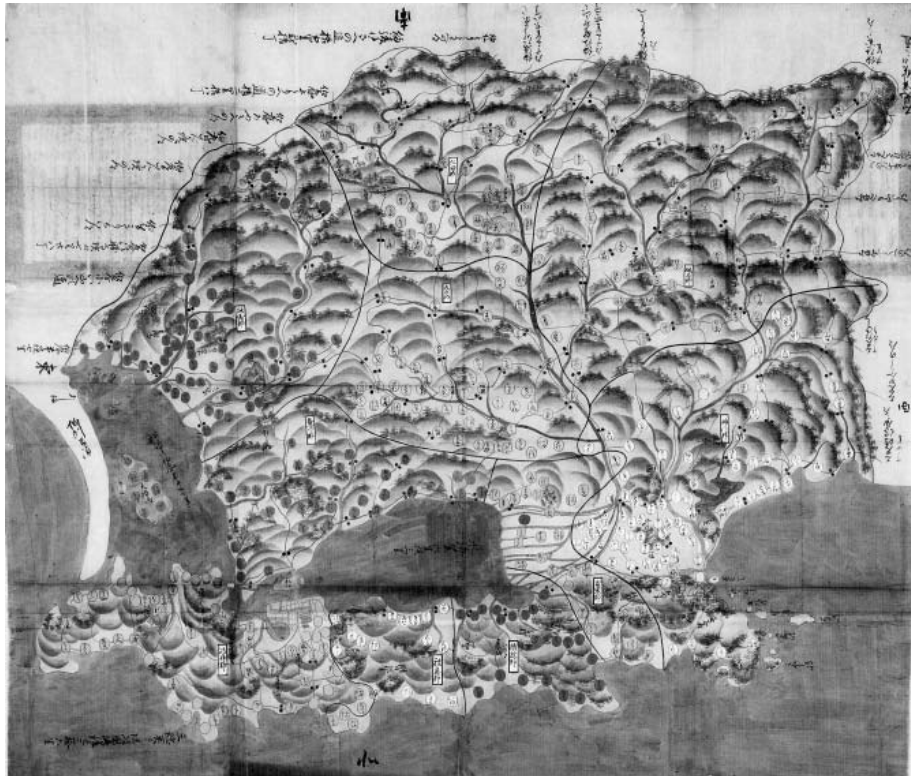


図3 寛永15年出雲国絵図写、島根県立古代出雲歴史博物館蔵

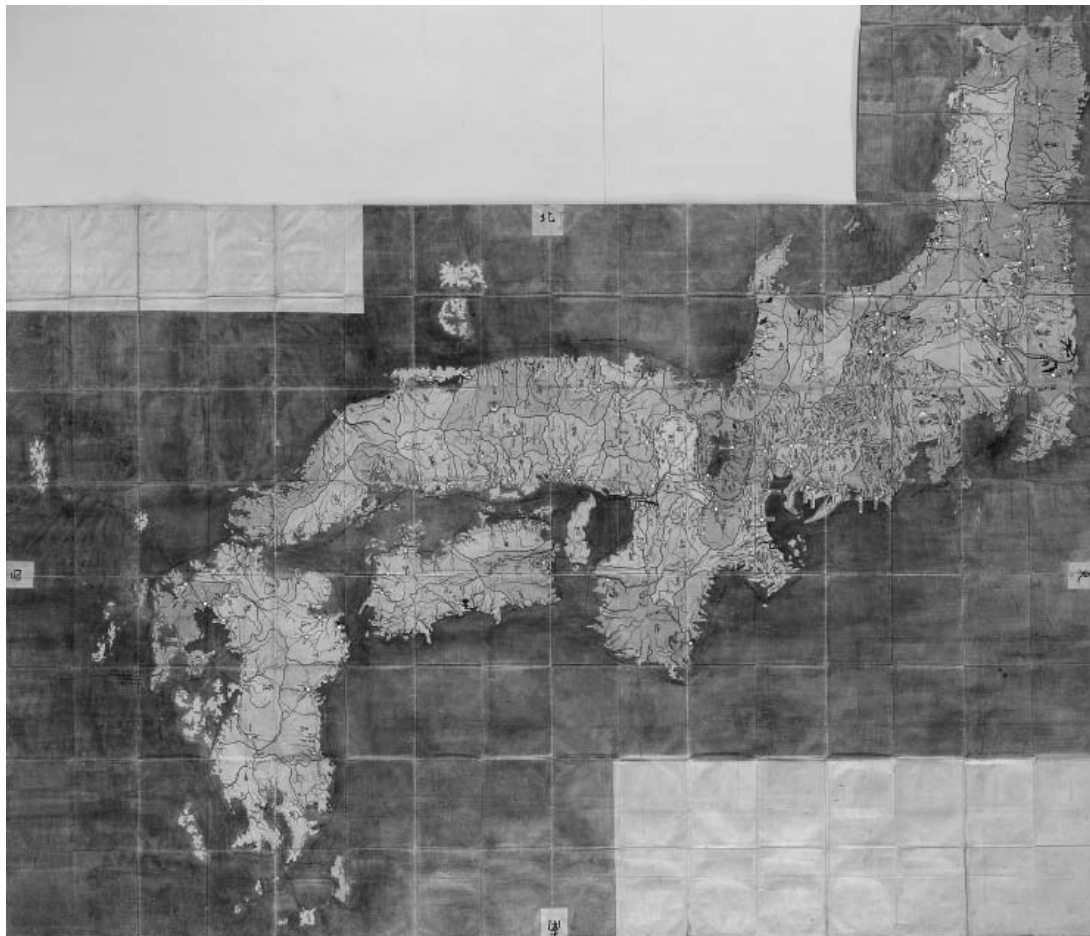


図4 寛永15年日本図写（「慶長日本図」と誤認されていた国会図書館本）、国立国会図書館蔵

松江市史編纂日誌

1. 松江市史編纂における主な活動状況

(平成22年度)

平成22年

期 日	内 容	備 考
4月27日	考古専門部会	〔議題〕 ①平成22年度活動計画の検討 ②史料編「考古資料」の内容検討
5月 1日	「市史編纂だより③」発行 (市報松江5月号に掲載)	〔タイトル〕 松江の歴史像に迫る本 ふるさと文庫で発刊
5月 9日	民俗部会	〔議題〕 ①別編「民俗編」の編集方針の検討 ②平成22年度の調査計画の検討
5月15日	松江市史シンポジウム	〔第一部〕 基調報告「今なぜ『松江市史』の編纂なのか」 〔第二部〕 パネルディスカッション「松江の歴史像を探る」
5月16日	松江市史合同部会	〔議題〕 ①史料編「近世Ⅰ」における差別的表現の取り扱いについて ②各部会の進捗状況について ③啓発活動（市民との意見交換や情報提供）について
5月16日	古代専門部会	〔議題〕 ①史料編「古代・中世Ⅰ」の史料掲載方針の検討 ②原稿スタイルの検討
5月16日	中世史部会	〔議題〕 ①史料編「古代・中世Ⅰ」の今後の作業内容の確認
5月16日	近世史部会	〔議題〕 ①今後の作業内容の確認
5月16日	近現代史料調査	合同汽船関連史料調査（島根県立図書館）
5月19日	自然環境部会	〔議題〕 ①編集計画（工程表）の検討
5月31日	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の資料集成の検討 ②個別遺跡解説の原稿提出状況の確認
6月16日	松江市内寺社史料調査 検討委員会	〔議題〕 ①事業計画について ②調査先（候補）について ③調査方法について
6月21日	民俗調査	城東地区聴き取り調査
6月25日	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の資料集成の検討 ②個別遺跡解説の原稿提出状況の確認
7月 2日	民俗調査	白潟地区聴き取り調査
7月26日	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の出土文字資料の編集方針の検討
7月29, 30日	古代専門部会	〔議題〕 ①史料編「古代・中世Ⅰ」の掲載史料の選別作業の実施 ②執筆分担の検討
8月 1日	「市史編纂だより④」発行 (市報松江8月号に掲載)	〔タイトル〕 後世に残したい松江市の「自然」・「景観」を募集します
8月6, 7日	絵図調査	山口県内絵図調査（大矢編集委員）
8月 7日	民俗調査	城北地区聴き取り調査
8月8-10日	中世史料調査	史料編「古代・中世Ⅰ」の掲載史料（秋上家文書）の原本校正
8月10-12日	古代史料調査	愛知県西尾市岩瀬文庫所蔵史料調査（大日方編集委員）
8月11日	松江市史部会長会議	〔議題〕 ①史料編「近世Ⅰ」における差別的表現の取り扱いについて ②各部会の進捗状況について
8月12, 13日	古代史料調査	奈良県内出土木簡調査（佐藤編集委員・平石専門委員）
8月18日	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の個別遺跡解説の原稿提出状況の確認
8月18-30日	佐太神社所蔵史料調査	
8月21日	民俗調査	城西地区聴き取り調査
8月25日	絵図・地図部会	〔議題〕 ①史料編「絵図・地図」の編集方針、今後の作業内容の確認
9月 1日	史料調査協力員の会	〔議題〕 ①松江市史編纂事業について ②史料（資料）に関する情報提供について

期 日	内 容	備 考
9月6-10日	松江藩家老三谷家文書調査	
9月 7日	近現代史調査	菅田町での聴き取り会
9月 9日	近現代史部会	〔議題〕①通史編の基本構成及び執筆分担の検討
9月10日	近現代史料調査	大庭公民館所蔵史料調査
9月14日	松江城部会	〔議題〕①別編「松江城」の編集方針、調査計画の検討
9月15-19日	近世史料調査	秋田・山形県内史料調査（小林編纂委員・岸本編集委員）
9月17日	考古専門部会	〔議題〕①史料編「考古資料」の個別遺跡解説の原稿提出状況の確認
9月18, 19日	絵図調査	兵庫・岐阜県内絵図調査（大矢編集委員、上杉専門委員）
9月19日	松江城部会	〔議題〕①絵図・地図部会、近世史部会との役割分担の検討
10月 1日	「市史編纂コラム①」掲載 (ホームページ)	〔タイトル〕堀尾但馬の子孫・堀尾方善の後半生
10月13, 14日	近現代史料調査	大庭公民館所蔵史料調査
10月14日	絵図調査	広島大学所蔵絵図調査（大矢編集委員、乾編纂委員）
10月19日	自然環境部会	〔議題〕①進捗状況の確認 ②今後の予定の検討 ③通史編「自然環境・原始・古代」の執筆計画の検討
10月20日	松江城部会（建築史G会）	〔議題〕①建築史G会の体制構築について ②別編「松江城」の構成・執筆分担等について ③今後の調査予定等について
10月24日	民俗部会	〔議題〕①今年度の調査日程の確認 ②調査細目（執筆細目）について ③平成22年度調査報告会について
10月25日	考古専門部会	〔議題〕①史料編「考古資料」の個別遺跡解説の原稿提出状況の確認 ②通史編「自然環境・原始・古代」について ③東京国立博物館所蔵遺物調査について
10月26日	近現代史調査	菅田町での聴き取り会
10月26日	「市史編纂コラム②」掲載 (ホームページ)	〔タイトル〕銀山と松江藩との借金バトル
11月 1日	「市史編纂だより⑤」発行 (市報松江11月号に掲載)	〔タイトル〕箱底からの宝の出現
11月1, 2日	古代専門部会	〔議題〕①史料編「古代・中世Ⅰ」の掲載史料の選別作業の実施 ②キコロジ遺跡出土墨書土器・中殿遺跡出土木簡の釈文確認 ③今後の予定の検討 ④通史編「自然環境・原始・古代」についての検討
11月 4日	松江城関連調査	大井町岩汐石切場調査
11月 9日	朝日寺所蔵史料調査	
11月16-18日	松江城関連調査	石材産地（岩石）調査（先山専門委員）
11月17-19日	近現代史料調査	大庭公民館所蔵史料調査
11月19日	考古専門部会	〔議題〕①史料編「考古資料」の個別遺跡解説の原稿提出状況の確認 ②東出雲町の遺跡について ③年代観の確認 ④12月に行う原稿確認について
11月23日	松江城関連調査	松江城石垣調査（乗岡専門委員）
11月25日	松江市史編纂委員会	〔議題〕①松江市史編纂基本計画の変更について ②平成22年度の事業経過報告について ③平成23年度の事業計画について ④市史の体裁について
11月26日	近現代史料調査	八束支所・美保関支所所蔵史料調査
11月26日	絵図調査	東京都内絵図調査（大矢編集委員、上杉専門委員、高安専門委員）
11月29日	神魂神社所蔵史料調査	
11月29, 30日	松江城関連調査	松江城下町遺跡調査（松尾専門委員）
12月 1日	「市史編纂コラム③」掲載 (ホームページ)	〔タイトル〕上空に現れる謎の物体

期 日	内 容	備 考
12月6-8日	佐太神社所蔵史料調査	
12月10日	松江城部会（城郭史G会）	〔議題〕 ①章・節立てについて ②ページ割りと体裁について ③今後の調査活動について ④部会員の増員について
12月12日	絵図・地図部会	〔議題〕 ①絵図地図名の命名基準について ②史料編「絵図地図」の掲載資料の選定
12月14日	近現代史料調査	八束支所所蔵史料調査
12月15, 16日	信楽寺所蔵史料調査	
12月19日	考古専門部会	史料編「考古資料」原稿確認会
12月19日	近世史部会	〔議題〕 ①史料編「近世Ⅰ」の編集について ②史料編「近世Ⅱ」（藩法集）の編集について ③史料編「近世Ⅲ」の編集について ④通史編の執筆分担の検討と次回以降の予定 ⑤史料調査状況等の報告 ⑥絵図部会との調整
12月21日	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の原稿集約状況について ②東出雲町の遺跡について ③12/19の原稿確認会の結果について
12月24日	松江城関連調査	大井・大海崎石切場調査
12月25, 26日	松江城関連調査	松江城・城下町調査（松尾専門委員、山上専門委員）
12月29日	考古専門部会	史料編「考古資料」原稿確認会

平成23年

期 日	内 容	備 考
1月 6日	考古専門部会	史料編「考古資料」（旧石器時代）原稿読み合わせ
1月 7日	部会長会議	〔議題〕 市史講演会の検討、各部会からの報告 など
1月8, 9日	古代専門部会	〔議題〕 ①史料編の掲載史料の選定、凡例の検討、原稿読み合わせ ②史料編「古代・中世Ⅰ」における古代・中世の頁配分の検討
1月16日	考古専門部会	史料編「考古資料」（古墳時代）原稿読み合わせ
1月19日	考古専門部会	〔議題〕 ①史料編「考古資料」の原稿提出状況の確認 ②史料編「考古資料」の字数・行数・字体・フォントの検討
1月30日	考古専門部会	史料編「考古資料」（古墳時代）原稿読み合わせ
2月 1日	「市史編纂だより⑥」発行 （市報松江2月号に掲載）	〔タイトル〕『秘書』の発見
2月 3日	考古専門部会	〔議題〕 史料編「考古資料」の原稿提出状況の確認、凡例の検討
2月3, 4日	洞光寺所蔵史料調査	
2月12日	考古専門部会	史料編「考古資料」（古墳時代）原稿読み合わせ
2月13日	考古専門部会	史料編「考古資料」（奈良・平安時代）原稿読み合わせ
2月14, 15日	古代史料調査	奈良県内出土木簡調査（佐藤編集委員・平石専門委員）
2月16日	松江城部会	〔議題〕 ①別編「松江城」の構成の検討 ②これまでの調査・研究成果の確認 ③今後の調査・研究の検討 など
2月18日	考古専門部会	史料編「考古資料」（古墳時代）原稿読み合わせ
2月23, 24日	信楽寺所蔵史料調査	
2月28日 ～3月 1日	絵図調査	東京都内絵図調査（川村専門委員）
3月 1日	「市史通信No.1」発行 （市報松江3月号に折込）	〔内容〕 ①『松江市史』第1回配本・史料編「近世Ⅰ」の概要紹介 ②専門部会ごとの各部会長の抱負 ③刊行計画、編纂体制の概要紹介
3月 5日	松江城関連調査	富田城石垣調査（乗岡専門委員）

期 日	内 容	備 考
3月 7日	近現代史料調査	松江市役所文書調査（能川編集委員、鬼嶋編集委員）
3月 8日	近現代史部会	〔議題〕 ①市内巡見（八束町、市内団地） ②金沢市史編纂に関する話題提供（能川編集委員） ③史料編の構成の検討 など
3月8,9日	近世史料調査	草津宿関連史料調査（鳥谷編集委員）
3月 9日	近現代史料調査	島根県立図書館所蔵資料調査（鬼嶋編集委員）
3月9～11日	古代史料調査	本居宣長記念館所蔵史料調査（森田専門委員）
3月10日	考古専門部会	〔議題〕 史料編「考古資料」の原稿提出状況・協力者一覧の確認
3月10,11日	近現代史料調査	東京都内史料調査（居石編集委員）
3月13日	考古専門部会	史料編「考古資料」（古墳時代）原稿読み合わせ
3月22,23日	古代専門部会	〔議題〕 ①平成23年度の部会活動の検討 ②史料編「古代・中世Ⅰ」の口絵・凡例・史料解説の検討 ③史料編「古代・中世Ⅰ」の原稿の読み合わせ ④通史編の構成の検討 など
3月24,25日	松江城関連調査	三刀屋城跡調査（中井専門委員）
3月25日	『松江市史研究2号』発行	〔内容〕 ・「応仁・文明の乱と尼子氏」（原専門委員） ・「島根県民俗学関連雑誌等目次総論」（山崎専門委員） ・「宗教施設と宗教者からみた近世出雲の特徴」（小林編集委員） ・「松江市史編纂日誌」 ・「附 松江市史編纂基本計画」
3月28日	部会長会議	〔議題〕 ①各部会からの報告 ②市史講座の確認 ③平成23年度事業計画の検討 ④史料編の凡例の検討 ⑤編集委員会の議題の検討 など

2. 松江市史料編纂室史料調査活動一覧（目録作成分）

平成22年度末現在

（平成22年度）

調査先・史料名	史料所在地	備 考
圓流寺	松江市西尾町	松江市内寺社史料調査事業
普門院	松江市北田町	〃
神魂神社	松江市大庭町	〃
犬山家	松江市宍道町	
大念寺	松江市東本町	
一川家	松江市	
織原家	松江市堂形町	
村山家	京都府京都市	
吉村家	大阪府大阪市	
吉城家	松江市外中原	
志立家	秋田県	

3. 松江市史料編纂体制図（平成24年3月21日現在）

委員名											
区分	役割	◎ 藤岡大拙 ・ (同上) ・ 高安克己	・ 安部登 ← (文化財保護審議会会長) ・ 勝部昭	◎ 乾隆明 ○ 井上寛司	・ 岡部康幸 ・ 小林准士	・ 安部己図枝 ・ 竹永三男	・ 薦谷典子 ・ 喜多村正 ・ 大矢幸雄 ← (専門家)	◎委員長 ○副委員長			
(編纂委員会)	・市史編纂全般に関わる基本的事項の協議 ・市史編纂の成果を市民に還元していく事項の協議 ※住民、行政、専門家が一体となり市史を作り上げるため、地元有識者、専門研究者で構成する。	・高安克己	・勝部昭 ・大日方克己 ・佐藤信 ・西尾克己	◎井上寛司 ・川岡勉 ・長谷川博史 ・西田友広	○小林准士 ・岸本寛 ・鳥谷智文 ・東谷智 ・三宅正浩 ・渡辺浩一	・竹永三男 ・伊藤康宏 ・居石正和 ・能川泰治 ・鬼嶋淳	・喜多村正 ・大矢幸雄	◎委員長 ○副委員長			
	・市史全体の編集 ・必要な史料(資料)の調査・整理及び総括 ※市史全体の編集を中心となつて行うため、各分野の専門研究者で構成する。	・高安克己	・勝部昭	◎井上寛司	○小林准士 ・岸本寛 ・鳥谷智文 ・東谷智 ・三宅正浩 ・渡辺浩一	・竹永三男	・喜多村正 ・大矢幸雄	◎委員長 ○副委員長			
部会長	・編纂事業の具体的な内容の企画・立案 ※各部会の部会長で構成する。 ・市史各巻の内容を検討 ・必要な史料(資料)の調査・整理 ※市史各巻の編集を中心となつて行うため、担当専門分野の専門研究者で構成する。	◎高安克己 ・佐藤仁志 ・越川敏樹 ・秋村喜則 ・浜田周作 ・田坂郁夫	◎勝部昭 《考古専門部会》 ○西尾克己 ・丹羽野裕 ・山田康弘 ・松本岩雄 ・平石充 《古代専門部会》 ○大日方克己 ○佐藤信 ・平石充 ・野々村安浩 ・森田喜久男	◎井上寛司 ○西田友広 ○川岡勉 ○長谷川博史 ・原慶三	◎小林准士 ○岸本寛 ○鳥谷智文 ○東谷智 ○三宅正浩 ○渡辺浩一 ・伊藤昭弘 ・宇野田尚哉 ・沢山美果子 ・多久田友秀 ・佐々木倫朗 ・西島太郎	◎竹永三男 ○伊藤康宏 ○居石正和 ○能川泰治 ○鬼嶋淳	◎喜多村正 ○中村幹雄 ・足立正智 ・藤原宏夫 ・山崎簡枝 ・喜多村理子 ・山崎亮 ・品川知彦 ・中上明 ・永井猛 ・酒井董美 ・浅沼政志	◎大矢幸雄 ・川村博忠 ・高安克己 ・上杉和央 ・渡辺理絵 ・乾隆明 ・内田融 ・阿部志朗 ・安高尚毅	◎部会長 ○編集委員 orGL		
(専門部会)	・部会で議論した内容に基づく執筆 ※市史各巻の執筆を行うため、部会の専門委員と部分執筆を行う執筆者で構成する。	編集委員、専門委員、その他									
執筆者											
事務局		【史料編纂室】 室長:稲田信、副主任:木下誠、主任編纂官:内田文恵、専門調査員:北村久美子・居石由樹子・福井将介・沼本龍、囑託:石井悠・岩橋康子									

松平直政論 — 西国における政治的位置 —

三宅 正浩

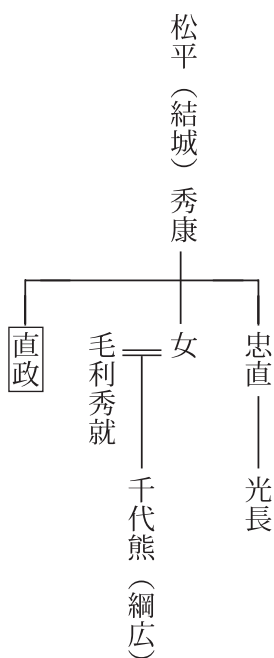
はじめに

本稿は、松江松平家初代の松平直政を取り上げ、幕藩領主の世界におけるその政治的役割を解明し、近世幕藩制における松江松平家の位置づけについて展望しようとするものである。

従来、近世大名の所領配置や江戸幕府の大名統制策については、いわゆる親藩・譜代・外様という大名分類を前提に、幕府権力が如何に全国へと浸透していったのかという視角から検討されてきた。^① 寛永一五年（一六三八）の松平直政の松江入部についても、江戸幕府の対西国「外様」対策の一環として「親藩」である松江松平家が配置されたという理解が一般的であり、例えば藤野保氏は、「対西国政策を戦略の中心とする家光にとって、京極松江藩の解体は山陰に徳川権力を浸透させる絶好のチャンスとなった」と述べている。^② しかし、親藩・譜代・外様という三分類については、すでに松尾美恵子氏が「將軍との親疎関係を表現する語として存在したことはあっても、幕府が類別した三分法としてのものではなかった」^③ことを指摘しており、松江への直政の入部を「親藩」対「外様」の構図で考えることは見直すべきである。直政の松江入部が徳川一門の創出の一環であったという従来からの指摘自体は間違いではなからうが、大名の所領配置については、大名同士の関係性の中で捉えていくことが有効である。^④

大名同士の関係性を検討する際に注目すべきは、縁戚関係である。かつて高木昭作氏は、土佐山内家の元和改革の事例から親類大名による政治指導の存在を指摘したが、^⑤その政治指導は高木氏のいうような幕府の意向を直接受けたものではなく、幕府を背景にしつつも大名相互の関係性の中でなされたものと理解すべきである。この点、朝尾直弘氏による「『家』の結合が『公儀』の結合の重要な部分をささえていた」という指摘は的確であろう。こうした視角から、本稿では松平直政と他の諸大名、特に毛利家との関係に注目して考察を進めることにする。

〔系図〕（※関係者略図）



一 松江入部の政治的背景

松平直政が出雲国を拝領して松江に入部することが決定したのは、寛永一五年（一六三八）二月二一日である。直接的な理由は、出雲国を領してい

た京極氏が断絶したことであるが、京極氏に替わる出雲の国主として、なぜ直政が選ばれたのかを考える必要がある。これについて『松江藩祖直政公事蹟』⁷⁾は次のように述べる。

中国西国辺の諸大藩皆嘗て徳川家と肩を比せし者にて、今は君臣ともいふべき程の姿に為りたれども其心中は猶いまだ測り難し、何とぞ御一門の内にて徳威備はり給ふ御方を中国辺に封じて不虞を戒めんと思召す処に、西国に於て異教の賊の事起り、やゝ戮に就かんとする勢にはあれども、此上又如何なる変の生せんも計られず、愈々其任に当るべき人を求め給ひ、出雲国は一方に僻在して其間にはさまれ、土地堅固にして剰さへ富饒の国なれば、西の方の鎮衛とせんには屈竟の地なりとて、公をこゝに封ぜられしとなり

しかし、この文の後に「此本文の事はいまだ何の書にも見当らざれども（後略）」と注記してあることからわかるように、この説には明確な出典や根拠はない。直政が出雲国を拝領した理由については、当時の政治状況や松江入部後の役割から再検討する必要がある。

さて、直政の松江入部が決定した寛永一五年二月一日は、島原天草一揆の最中であつた。この二月初旬には、中国・四国の大名に將軍家光から暇が出され、帰国して島原への出陣準備をすることが指示されていた。実際には一揆勢が立て籠もつた原城が二月二八日に落城して一揆は終結するのであるが、江戸においては未だ一揆鎮圧の目途はたつておらず、さらなる長期化も想定されていた。したがつて、こうした状況をふまえれば、直政が出雲国を拝領した理由の一つとして、直政への軍事的期待をあげることができよう。直政は大坂の陣に出陣して戦闘に参加した経歴があり、その軍事的経験が考慮された可能性は高いのではなからうか。しかし、直政が選ばれた理由につ

いてはそれのみで理解することはできない。

藤野保氏は、直政の松江入部について、当該時期の家光政権期の大名転封策、すなわち外様大名の改易強化を通じた徳川一門・譜代大名の全国的配置の一環であつたことを指摘する⁸⁾。ただ、直政の松江入部の事情について、その政治的背景を直接示す史料は見当たらない。そこで、家光政権期、特に寛永期の西国における大名編成について、類例を検討する。

まず、寛永九年、小笠原忠真が播磨明石一〇万石から豊前小倉一五万石へ加増転封された事例をみる。小笠原忠真の転封と同時に甥の小笠原長次、弟の小笠原忠知・松平重直も豊前周辺に配置されたこの一斉加増転封は、徳川譜代大名を九州北部の豊前周辺に集中的に配置したものであつた⁹⁾。注目すべきは、この転封について、豊前国の前領主で肥後熊本へ移つた細川忠利の父忠興が「小右近殿（小笠原忠真）三人豊前へ御出候由、さてハ心安存候事」¹⁰⁾と歓迎していることである。これは、細川忠利の室が小笠原忠真兄弟の姉妹であるという縁戚関係による。こうした大名相互の関係性は、譜代・外様に区分して両者を対立的に捉えていたのではみえてこない。小笠原一門の豊前転封は、徳川権力の九州進出によって周辺のいわゆる外様大名に緊張を強いたという構図ではなく、大名同士の関係性を前提になされた大名配置・編成であつたといえる。

次に、寛永一二年に松平定行が伊勢桑名一萬石から伊予松山一五万石へ加増転封され、同時に、松平定行の弟定房も伊予今治に転封された事例をみる。この事例についても、従来から四国への徳川権力の進出という理解がなされており、それ自体は間違いではないが、周辺の大名との関係性も考慮されていたことを押さえておく必要がある。すなわち、隣国土佐国を領する山内忠義の室は松平定行・定房の姉妹であるという縁戚関係があつた。次の

史料は、松平定行兄弟の加増転封を、江戸にあった山内忠義が国許の家臣に知らせた書状の一部である。

一、与州松山を松平(定行)隠岐殿、同今張を松平美作殿(定房)拝領二候

一、桑名ハ松平越中殿(定通)、永島ハ松平能登殿(定政)拝領二而、一昨日廿八日被

仰渡、事之外忝 上意共二候つる、一門衆一度ニ右之仕合、天下之外

聞於爰元上下驚耳事可令推量候、隠岐殿兄弟与州へ被遣候事、国双二

我等在之候故、一所ニと被 思召候ての事にも可在之やと令取沙汰よ

し二候

將軍家光が、土佐国の山内家の存在を考慮して、縁戚関係にある松平定行兄弟を隣国である伊予国に配置したという情報が流れていたことがわかる。小笠原忠真の事例とあわせて考えれば、外様国持大名の近国に縁戚関係にある大名を配置するというあり方が大名たちの間での共通認識となっていたことが想定できる。

これらの事例をふまえ、寛永一五年の直政の松江入部についても同様の視点からみてみると、うかび上がってくるのは周防・長門両国を領する毛利家との関係である。当時の毛利家の当主毛利秀就の室は、松平直政の姉であった(系図参照)。ここから、出雲国の新領主として直政が選ばれた重要な理由の一つとして毛利家との縁戚関係があった可能性を指摘できる。

実際、直政の松江入部が決定した直後の毛利家の動きをみると、当日の二月一日には、毛利家江戸留守居役の福岡就辰が、直政の出雲国拝領の情報入手してただちに直政の屋敷へ祝いを述べに向向っており、国許へも知らせの早飛脚を送っている。そして、同月一六日には、直政が松江に向けて江戸を発足したことを国許へ伝達しているのである。⁽¹³⁾ 毛利家としては、縁戚関係にある直政が近国へ転封になったことを強く受け止めていたことがわか

る。

以上、直政が松江に入部することになった理由、政治的背景を検討してきた。指摘できる理由は、①徳川一門としての西国進出という側面、②直政の軍事的経験が期待されたという側面、に加え、③毛利家との縁戚関係が作用していたことに本稿では注目しておきたい。

次章では、松江入部後の直政と毛利家との関係を具体的にみていくことにする。

二 毛利家との関係

松平直政と毛利家との関係について、まずは次の史料に注目する。次の史料は、正保二年(一六四五)に松江の直政が、長門国萩の毛利秀就に送った書状である。⁽¹⁴⁾

猶以、千代熊殿ほうそう被成候二いかにもかるく御座候由、千万く目出度奉存候、御満足之段推量仕候、先いそき以飛脚申上候、以上

一筆致啓上候、其元弥御無為ニ御座被成候哉、承度奉存候、然者於江戸両上様御機嫌能被為御座成候由、目出度御事御同事ニ奉存候、左様ニ御座候へ者、千代熊殿ほうそう被成候由申来候、いかにもかるく御座候由、誠二目出度御大慶推量仕候、拙者も御同前ニあんと仕候、先書ニも如申上候、若君様(家綱)四月中ニ御官位之由、拙者体も三月中ニ参勤可仕由御奉書致拝見候、三月中比ニも江戸へ参着仕候様ニと存候間、貴様御事必無御油断、早々御参勤御尤二候、今度など、おそく御参上被成候者、江戸ニ而とりさたも可有御座候間、不及申上候へ共、早々御国ヲ御立可被成候、恐惶謹言

正月廿八日

松平出羽守^(直政)

(花押)

松長州様^(毛利秀就)

御中

まず、「千代熊」(秀就子、毛利家世子、後の毛利綱広)が疱瘡を煩ったが軽くすんだとの知らせをうけ、直政が祝いを述べている。千代熊の母の弟、つまり叔父であるという関係から(系図参照)、直政が日常的に毛利家と交際関係があったことが窺える。そして後半部分では、將軍世子家綱の任官の予定を伝え、それに間に合うように江戸に参勤することを毛利秀就に指示している。毛利秀就の参勤時期について直政が指示している事例は他にもある。時期が遡るが、次の史料は寛永一六年に推定できるもので、同じく毛利秀就宛の直政書状である。

猶々、御心入之段、忝存候、以上

遠路御飛札辱奉存候、公方様御機嫌能被成御座之旨、切々申来候、次其元御無事之由、珍重存候、就中江戸御参勤之儀、今廿二三日之時分可有御下向之由、御尤存候、松平安芸守殿も来月二日之比御下之由被仰聞候、御近国之事候之間、被仰合御尤候、拙者儀、昨日如申上候廿日居城を罷立候、被入御念被仰聞忝存候、猶於江戸可得御意候、恐惶謹言

松平出羽守

二月廿一日

直政(花押)

松長州様^(毛利秀就)

貴報

江戸への参勤時期を毛利秀就に指示しているが、あわせて安芸広島の浅野光晃の参勤時期を伝え、近国なので示し合わせて参勤することを指示している。直政に(おそらく)浅野光晃が参勤時期を伝えていたことがわかり、直政は近国、すなわち中国地方の大名たちの参勤時期を調整・指導する立場にあったのではないかと思われるのである。次章で後述するが、こうした直政の参勤時期の指示の背景には、幕府の意向が働いていたことにも注意しておきたい。

さて次に、毛利家における秀就の死去、千代熊の相続に伴う直政の役割を考察する。

次の史料は、慶安四年(一六五一)正月六日の毛利秀就の死去をうけて、直政が毛利家の重臣八名に宛てた書状、及び指示を書き付けた覚書である。

猶以、か様之時分二者何方へも御横目衆被指遣儀候間、仰出有之者、

於其地御馳走旁行当無之様ニ、内々可有御心得候、已上

一筆令申候、今度長門守不慮二御煩出候処、種々御養生候得共不相叶、去ル六日二御死去之由、扱々笑止千万成仕合、不及紙面候、各心中察入候、此上者弥御国仕置等肝要候間、家中町在々迄猥敷儀無之様ニ、両国之しまり専要二候、日数も立候者、早速公儀御用等茂可有之候間、七日か十日之御法事も、此書状之参着已前二相済可申候条、益田玄蕃方・児玉淡路・梨羽頼母、右三人者早々御当地江被参、千世熊殿継目之御礼も相叶候様二御訴訟可被申候、吉川美濃守方父子江茂以書状申入候間、此旨を相談候而、両国之仕置之儀、長門守殿常々御申付候二無相違、公儀召無之内者、毛利宮内・毛利右京・益田越中・児玉民部・国司備後、右五人万端被入精、九州中国御用等之海上舟已下迄も、不欠御用様可被申付候、委曲福原相模・相森兵庫可被申達候、恐々謹言

正月十六日

松 出羽

直政 御判

毛利宮内殿

毛利右京殿

益田越中殿

児玉民部殿

国司備後殿

益田玄蕃殿

児玉淡路殿

梨羽頼母殿

御国元江之覚

一、権現宮^(家康)之御誓紙、并井伊兵部少輔^(直政)殿誓紙、急度取寄可申事

一、御所様・大納言様江御遺物之御道具、早々差上可被申事^(家綱)

一、御国元御仕置、不断長門様被仰付候ことく、嚴重ニ被相守候様ニ可然御事候

一、もはやおそく候へ共、御用人等髪そり不申様ニ可然候事

一、長門守殿供被申衆無之様ニ尤二候、或切腹、或とんせゐ被相留可然候、公儀内儀之ため件之心得可然候

一、増田玄蕃・児玉淡路兩人參勤仕管之由、松平伊豆守^(信綱)殿江申入置候間、乍御太儀早々參府尤候事

一、両国留守居仕置等、吉川美濃守致在萩、万申付旨、是又伊豆守殿江申入候事

以上七ヶ条

直政は、毛利家の重臣たちに対して長門・周防両国の「仕置」を嚴重にすべきことを述べた上で、千代熊への相続実現のために家臣三人の江戸への出府を指示し、公儀の御用を欠くことがないように伝えている。続く覚書においては、関ヶ原合戦後に毛利家の存続を担保した家康の誓紙等を江戸に取り寄せること以下、毛利秀就死去の混乱を押さえ、無事に千代熊へ相続できるように指示を与えている。注目したいのは、六ヶ条目によれば、益田玄蕃・児玉淡路が江戸に出府することを直政が幕閣の松平信綱へ伝えている点である。同様に七ヶ条目からは、吉川広正が在萩することを松平信綱に伝えていることがわかる。これは当然毛利家から幕府への正式な報告ではなく、親類の直政が独自に幕閣に内々に毛利家の対応を伝達したものと考えられる。直政がこうした役割を担うことができたのは、徳川一門として幕府に近い立場にあつたからであろう。毛利秀就死去時の直政の行動は、毛利家の親類としての立場と、幕府に近い立場という二つの立場からなされたものであると理解できる。

さて同年、千代熊が幼年で毛利家を相続したことに伴い、幕府は国目付を毛利家に派遣することになる。国目付派遣に際して將軍家綱が千代熊宛で発給した黒印状⁽¹⁷⁾をみると、二ヶ条目の家老が相談して「仕置」を申し付けるようにとの記載に続けて、「難相極儀於有之者、松平越後守、松平出羽守^(直政)可得差図、依事之品可致言上事」とある。千代熊の母を通して縁戚関係にある松平光長と直政を、將軍家綱が正式に後見・相談役として認定しているのである(系図参照)。続けて三ヶ条目では、隣国での有事に勝手に出陣することを禁じ、「為近国之間、出羽守并目付之面々可受差図事^(松平直政)」と、近国であることを理由に直政の指示を受けることを規定した。さらに、同日付で国目付に宛てて出された家綱黒印状⁽¹⁸⁾をみると、国目付の果たすべき役割について記載

する中で、「兩人難計儀は、近国之事候間、松平出羽守相談可仕、依事江戸え可致注進事」と、国目付二人が決めがたいことは近国であるから直政に相談するようにと命じており、將軍の上使である国目付が相談する相手としても直政が指名されていたことがわかるのである。

直政が毛利家の親類として幕府関係の事柄を指南している事例をもう一つ紹介しておきたい。次の史料は、寛文三年（一六六三）に毛利家の重臣三名が毛利家一門の吉川広正家臣五名に宛てた書状の一部であり、吉川広正の隠居をめぐる内容のものである。

一筆令啓達候、当御地御静謐、殿様其外上々様益御機嫌克被成御座候、
（吉川広正）内蔵助様此節之御気色如何御座候哉、承度奉存候、然者、内蔵助様御隠居之儀、此中越後様・出羽様被遊御内談、先日酒井雅楽頭殿へ淡路・
（松平光長）（松平直政）（忠清）
二郎兵衛御使二被差出、被得御内意候へハ、残御老中へも被仰上可然之由、御指図ニ付而、兩人阿部豊後守殿・稲葉美濃守殿へも御使二被指出
（後略）

吉川広正の隠居許可を幕府に願ひ出るに際し、親類大名の松平光長・直政に相談した上で幕閣の酒井忠清に交渉している。国目付派遣の事例と同様に、当主の母の縁に繋がる松平光長と直政という両者が毛利家の相談役としての立場を占めていたことがわかる。つまり、毛利家の相談役としては松平光長も役割を果たしていたわけであるが、国目付の事例でも見たように、直政の場合は所領が近国であるという事情もあり、例えば参勤時期の指示は、松平光長は行っていない等、直政に比べて松平光長の役割は限定的である。

以上、直政は毛利家の親類であり、領地が近く、且つ直政が幕府に近い立場の人物であったという理由から、毛利家に対して幕府関係の事柄を中心に指導し指示する立場にあり、その立場は幕府の公認するものであった。

三 西国における政治的役割

まず、前章で指摘した毛利家に対する松平直政の役割のうち、参勤時期の指示に関連して、次の史料に注目する。次の史料は寛永一八年（一六四一）のものと思われる毛利秀就宛の直政書状である。⁽²⁰⁾

自是以書状可得御意と存候処、被入御念御飛札、忝致拝見候、貴様夜分江尻二被成御一宿之由、尤二存候、拙者義も由井二泊申候、今日三嶋迄参候、明廿一日佐川、廿二日神奈川、廿三日二江戸着可仕と存候、拙者儀者、西国中国衆ふ跡二可致参府之旨二御座候間、貴様、拙者ふ先様御着二而も可然候間、今明日之内二も先へ御通可被成候哉、大井川など御無事二被成御越候由、珍重存候、猶於江戸可得御意候、恐惶謹言

卯月廿日

松平出羽守

直政（花押）

（毛利秀就）
松長州様

貴報

直政・毛利秀就の両者ともに参勤のために東海道を江戸に向けて移動中であり、毛利秀就が江尻に宿泊したことを聞いた直政は、自身の現在地を伝え、翌日以降の旅程を知らせた上で、毛利秀就に直政を追い抜いて先に行くようにと指示している。その理由は、直政が「西国中国衆」よりも後で江戸に参勤することを指示されているからであると述べられている。幕府は直政に、中国地方の大名の中で最後に参勤するように命じていたのである。ここから、前章の内容と合わせて考えると、直政の毛利家に対する参勤時期の指示は、幕府の意向をうけたものであることが想定できる。そして、直接的に示され

ているわけではないが、幕府が直政に対して他の大名たちの後で参勤することを指示していたという事実からは、直政は、中国地方の大名たちを監督するような立場を期待されていたことが窺える。

続いて篠山争論における直政の役割を紹介したい。ここでいう篠山争論とは、土佐国の山内家と伊予宇和島の伊達家の間で争われた国境争いである。⁽²¹⁾ 争論の具体的な内容は省略するが、明暦三年（一六五七）に山内忠義が争いを幕府評定所に持ち込もうとして周囲から止められ、結局、万治二年（一六五九）になって内済によって決着するという経緯を辿る争論である。この争論の前提には同時期に同じく山内家と伊達家の間で争われた国境争いである沖島争論があり、沖島争論では明暦二年に争いが幕府評定所に持ち込まれ、万治二年に山内家側に有利な裁定が出ていた。⁽²²⁾ したがって、引き続いての争論であることが考慮され、政治的配慮から、篠山争論は幕府評定所に持ち込まれることが避けられ、且つ両者が納得のいく解決が求められたのである。

次に掲げるのが争論の内済内容の覚書である。⁽²³⁾

覚

一、笹権現堂弥山伊予土佐両国可有御用候、依断此上神主を従土州、別当者従予州可有御居候、此外法式可為如先規之事

一、予州之内、正木村庄屋助之丞儀、自往古代々笹権現由緒有之由、大檀那可為頭人之事

一、西小河平傍示境迄土佐領へ、此為代地東小河平之内ニ而右坪数程宇和島領江可有御渡之事

右、今度土州領宇和島領境目出入ニ付、美作守より出羽守江頼入、被致相談、扱を以如斯相済申者也

万治貳乙亥年十一月十五日

松平出羽守内^(直政)

伊藤弥兵衛（花押）

同

塩見小兵衛（花押）

松平美作守内^(定房)

戸塚助大夫（花押）

松平土佐守様御内^(山内忠義)

野中伯耆殿

淡輪四郎兵衛殿

伊達大膳大夫様御内^(宗利)

鈴木仲右衛門殿

伊藤与左衛門殿

宛先は山内家と伊達家の担当家臣となっており、差出者として、直政の家臣伊藤弥兵衛・塩見小兵衛が、松平定房の家臣戸塚助大夫と共に署名している。松平定房は伊予今治三万石の大名であり、山内家と縁戚関係があり、山内家の相談役的立場にあった人物である。その松平定房が「出羽守江頼入」、つまり直政に依頼して、両者の家臣の名前で内済内容が示されて争論が決着したのである。

ではなぜ、松平定房と直政が内済を取り持つことになったのであろうか。その事情について、次の史料は内済の覚書が作成された翌々日付で松平定房が山内忠義（忠義子、山内家世子）に出した書状である。

尚々、今度出羽守殿事外御情を被出、漸致落着候、前廉松伊豆守殿^(松平信綱)へ被遂御内談、其上を以今度之通ニ相済申様ニ承及候、何茂追而可申達候間、不能詳候

一筆致啓上候、然者御国と伊達大膳大夫殿両地境目出入儀、最前公事当夏御理運被仰出候処、又候哉間茂無之御同人と論所之儀、如何思召、^(山内忠義)土佐守殿より某内証ニ而指計相済候様、最前被仰下候付而、松平出羽守殿頼入候処、色々御肝煎、漸御扱致落着、此十四日、野中伯耆、伊達大膳^(宗利)大夫殿より家老耆人、某方より戸塚助大夫、出羽守殿へ被召寄、御振廻被下落着様子被仰聞、向後和談有之様被仰渡、其上落着以来為無相違、出羽殿御家来兩人、次戸塚助大夫落着之文言致加判、伯耆方へ一通、大膳殿方へ一通、遣相済申事御座候、(中略)

十一月十七日

松平^(山内忠義)対馬守様

人々御中

松平美作守

定房(花押)

この松平定房書状によれば、山内忠義が松平定房に内済の取り持ちを依頼したところ、松平定房が直政に頼んで「色々御肝煎」、一四日に山内家から家老の野中伯耆、伊達家から家老一名、松平定房から家臣戸塚助大夫の三名が直政の屋敷に行き、先の覚書に記された内容が定められたことがわかる。松平定房は、「今度出羽守殿事外御情を被出」と、直政の活躍で争論が決着したことを尚々書で述べており、さらに今回の内済は、直政があらかじめ幕閣の松平信綱に内談した上でのものであったらしいと伝えている。⁽²⁶⁾続いて、次の史料は内済が話し合われたという一四日付で直政が山内忠義に宛てた書状の一部である。

(前略) 随而御領分宇和島領境目出入二付而、如何様ニ茂落着候様ニと松平美作守殿迄委被仰越候趣、得其意存候、加様之義、遠慮存候へ共、美作守殿相談仕、双方御異見申、其上御老中へも内証御物語申達、今度

相済申候、於拙者珍重存候噺と在之上者、双方共不可過堪忍候間、左様御心得可被下候、委曲従美作守殿可有御申達候、此上弥御和合候様ニと野中伯耆方へも申述候、早々御報可申入処、一途相済候而と存知致延引候、恐惶謹言

この直政書状によれば、篠山争論について山内忠義が松平定房に対して「如何様ニ茂落着候様ニ」と頼み、それを受けた松平定房と直政が相談して意見を出し合い、さらに幕府老中へも内々に報告した上で、今回の内済がなされたという。

ちなみに、直政の内済の方針について、山内家側はかなり疑心暗鬼に陥っていたらしい。⁽²⁶⁾次の史料は家老野中伯耆から直政についての報告を受けた山内忠義の返書の一部である。

一、篠山之儀、先日委被申越候以後埒も明不申候由、可為其通候、^(松平直政)出羽守殿も彼方へ御心寄候様ニも在之、又左様ニも無之哉とも被存候へ共、とかく依怙の方へ御心寄候と被存候旨、扱又今度出羽守殿より^(松平定房)美作守殿へ之使ニ塩見小兵衛・伊藤弥兵衛と申もの参、出合被申候処ニ、小兵衛ハ大依怙もの、弥兵衛ハ左様ニも無之候よし、委細得其意候

直政が、伊達家側へ心を寄せているようでもあり、そうでもないようであるが、いずれにせよ客観的公平性を以て内済を行うのではないらしいと伝えられている。類推に過ぎないが、これは直政が幕府の意向を受けて政治的バランスを考慮して内済を行おうとしていた可能性を示唆しているのかもしれない。

さて、山内忠義が松平定房に内済を依頼したのは、松平定房が山内家の相談役的立場にあり、且つ伊達家と同じ伊予国に所領を有していたからではな

かろうか。しかし、松平定房は山内家との縁戚関係から中立の立場たり得ず、内済の取り持ちを直政に依頼したのであろう。なぜ直政であったのかについては想像する他ないが、一つには山内家と伊達家の双方が納得する人物として直政が評価されていたのであろうし、さらにいえば、内済の過程で幕府に内々の報告がなされていたことから、幕府との関係も考慮して直政が選ばれたのではないだろうか。前述した参勤時期の指示の事例ともあわせて考えれば、直政は西国において諸大名と幕府を繋ぐ役割を果たすような存在としての立場を有していたと想定されるのである。

ここで、以上のような直政の政治的位置をまとめてみたい。

毛利家からみれば、直政は親類として相談役の立場にあり、さらに幕府に近い立場から毛利家を指南する役割を果たしていた。直政は、幕府に近い立場の人物として諸大名から認知され、諸大名と幕府を繋ぐ存在、誇張して言えば徳川一門大名として公儀を体現する將軍の代理的な存在であったと評価することもできるかもしれない。それが、後世の「西の方の鎮衛」⁽²⁷⁾といった評価に繋がったとも思えるのである。

直政は、幕府から何らかの明確な職や役割を与えられていたわけではなく、あくまでも「松平直政」という個人として政治的に役割を担う存在であった。そうした意味では、それぞれ固有の事情があるため一括することは避けるべきかもしれないが、類例として井伊直孝・松平忠明・松平定行・松平定綱・永井尚政・保科正之といった人物をあげることができる。詳述はしないが、これらの人物も、何らかの職掌を担ったというよりは、個人として特定の役割を果たしていたと評価できる。⁽²⁸⁾なお、個人が特定の政治的役割を担うこうしたあり方は、近世前期に特有のものであり、近世前期の時代状況の中で把握していく必要がある。

おわりに ― 格式と由緒の形成 ―

本稿では、特に毛利家との関係に留意しながら松平直政の西国における政治的位置を考察してきた。では、こうした直政の立場を、松江松平家の立場として理解してもよいかというと、そうではない。直政の役割は次代には継承されないのである。すでに述べてきたように、直政の立場・役割は、あくまでも近世前期という時代状況の中で「松平直政」という個人に付随したものであり、松江松平家という家の立場・役割ではなかったことに注意しておくべきである。本稿を「松平直政論」とした所以はここにある。

しかしながら、直政の立場・役割が、後に松江松平家の格式・由緒として機能していったこともまた事実である。

例えば、直政は寛文三年（一六六三）の靈元天皇即位に際して將軍の名代として上洛するが、それが先例となり、享保元年（一七一六）には五代宣雄が、宝暦五年（一七五五）には六代宗衍が、將軍の名代として上洛する役割を果たしている。この將軍名代としての上洛について、『治国譜』⁽²⁹⁾では朝日丹波郷保の意見として次のように記載している。

偕又大樹公御上洛ノ事アルトキハ御名代トシテ国々ノ旧例ニ任セテ上京ノ事アリ、此レ公役ナリト云トモ、勅任ノ儀ハ人ノ欲スル所ナリ、我君侯ノ御上京モ御順期恐ラクハ遠カラジ、（中略）御参内ノ事ハ、上ノ御転位ト云ヒ、其ウヘ御在世一度ノ御国役ナルユヘ、一国中ノ力ヲ以テ御費用ヲ勤ムヘキコト当然ノ道理ナル

『治国譜』は別の箇所では松江松平家について「我侯神孫ナルヲ以テ貴キコト御三家ニ亜ク、列国比肩スル者亦多シトセス」とも述べている。直政の果たした役割が、後に松江松平家の「御在世一度ノ御国役」として認識され、

松江松平家の格式を示すものとして機能していったことがわかる。

最後に、後世の松江松平家における直政認識として、『秘書』⁽³⁰⁾の記載を用いておきたい。

(松平直政)
高真院様には格別之御器量者にて、中々雲州位之ちさき事にてハ御済不被遊、山形之御合印は出羽之山形御望之旨、右様之大振なる思召と相聞候へハ、万々御張り被遊候、御勢ヒ自然と御物入りも不軽趣にも御座候哉

直政が「格別之御器量者」であつたことから様々な出費が嵩み財政難に陥つたとの文脈であるが、決して直政を非難しているわけではない。むしろ、誇るべき家の初代として直政を意識している。「松平直政」という存在が、松江松平家の格式・由緒、アイデンティティとして機能し、ある意味では松江松平家のあり方を規定していったと評価することもできるのである。

〔付記〕本稿は、二〇一一年度科学研究費補助金（研究活動スタート支援）「近世大名の編成秩序に関する研究」による研究成果の一部である。

注

- (1) 例えば、藤野保『新訂幕藩体制史の研究』（吉川弘文館、一九七五年）等。
- (2) 藤野保『近世国家史の研究』吉川弘文館、二〇〇二年、四九五頁。
- (3) 松尾美恵子「近世大名の類別に関する一考察」（『徳川林政史研究所 研究紀要』昭和五九年度、一九八五年）。
- (4) 拙稿「近世初期譜代大名論」（『日本史研究』五七五、二〇一〇年）を参照。
- (5) 高木昭作『日本近世国家史の研究』岩波書店、一九九〇年、第X章。
- (6) 朝尾直弘『將軍権力の創出』岩波書店、一九九四年、二五九頁。
- (7) 松陽新報社、一九一六年。
- (8) 藤野前掲『新訂幕藩体制史の研究』。

- (9) 拙稿前掲「近世初期譜代大名論」。
- (10) 『大日本近世史料 細川家史料 四』（東京大学出版会、一九七四年）。
- (11) 例えば、四国地域史研究連絡協議会編『四国の大名』（岩田書院、二〇一一年）などを参照。
- (12) 「山内忠義書状」（山内家文書「長帳」甲一七、土佐山内家宝物資料館所蔵）。
- (13) 「公儀所日乗」（毛利家文庫、山口県文書館所蔵）。
- (14) 「松平直政書状」（毛利家文庫、山口県文書館所蔵）。
- (15) 「松平直政書状」（毛利家文庫、山口県文書館所蔵）。
- (16) 『萩藩閥閥録』（山口県文書館、一九六七年）。
- (17) 「武家殿制録」（『近世法制史料叢書』第三、弘文堂書店、一九四一年）。
- (18) 「武家殿制録」。
- (19) 『大日本古文書 吉川家文書二』（東京帝国大学文学部史料編纂掛、一九二六年、一二七八号）。
- (20) 「松平直政書状」（毛利家文庫、山口県文書館所蔵）。
- (21) 篠山争論については、横川末吉『野中兼山』（吉川弘文館、一九六二年）等を参照。
- (22) 横川前掲『野中兼山』。
- (23) 『山内家史料 第二代忠義公紀第四編』（土佐山内神社宝物資料館、一九八一年）。
- (24) 『山内家史料 第二代忠義公紀第四編』。
- (25) 『山内家史料 第二代忠義公紀第四編』。
- (26) 『山内家史料 第二代忠義公紀第四編』。
- (27) 前掲『松江藩祖直政公事蹟』。
- (28) 拙稿「近世前期蜂須賀家と親類大名井伊直孝」（『彦根城博物館研究紀要』一七、二〇〇六年）。
- (29) 『松江市史』史料編五近世Ⅰ（松江市、二〇一一年）に収録。
- (30) 『松江市史』史料編五近世Ⅰに収録。

執筆者紹介

徳岡 隆夫	島根大学名誉教授
高安 克己	島根大学名誉教授
大矢 幸雄	松江市立中央図書館長
勢村 均	島根県水産技術センター内水面浅海部長
越川 敏樹	島根県立宍道湖自然館ゴビウス館長
池淵 俊一	島根県埋蔵文化財調査センター企画員
大日方 克己	島根大学法文学部教授
川村 博忠	元山口大学教授
宇野田 尚哉	大阪大学大学院文学研究科准教授
三宅 正浩	福島大学人間発達文化学類准教授

表紙写真 左:寛永10年出雲国絵図写、東京大学総合図書館(南葵文庫)蔵
右:寛永15年出雲国絵図写、島根県立古代出雲歴史博物館蔵

※便宜的に北を上とした。

松江市歴史叢書 5 松江市史研究 3 号

発行 平成24年 3 月21日
松江市教育委員会（文化財課史料編纂室）
〒690-8540 島根県松江市末次町86番地

印刷 (有)太陽平版
松江市馬潟町356番地6

Historical Library of Matsue City 5

March 2012

MATSUE SHISHI KENKYU No.3 Research of Matsue City's History

- History of O'hashi River shown in the old maps from the Late Edo to Meiji Periods
..... TOKUOKA Takao • TAKAYASU Katsumi • OYA Yukio (1)
- Seasonal and annual fluctuations in fishing haul from fixed fishing nets in the Shimane peninsula coastal region
during the 2000s SEMURA Hitoshi (17)
- Fish fauna in the coastal area of Matsue, Shimane, Prefecture, Japan KOSHIKAWA Toshiki (33)
- Yayoi Era Iron Corpus IKEBUCHI Shunichi (43)
- 'Izumo-type' vessels with miniature jars or cups mounted on shoulders IKEBUCHI Shunichi (59)
- Charts of Izumo Provincial Governors(Kokushi),701-1156 OBINATA Katsumi (75)
- Catalogue of Manuscripts of Momo Hakuroku and Other Confucianists in Shimane Prefectural Library
..... UNODA Shoya (87)
- Kuniezu of the Chugoku area made two times in years of the Kanei era year
— Comparison of two Izumo Kuniezu which made at 10 and 15 years in the Kanei era — KAWAMURA Hirotsada (109)
- Matsue City Historiographic Journal Historical sources compilation room (121)
- Lord Matsudaira Naomasa:
His Political Position in the Provinces at Western Japan MIYAKE Masahiro [1]

松江市教育委員会
Matsue City Board of Education
Suetsugu, Matsue-city, Shimane-pre, Japan

ISBN978-4-904911-14-3
C3321 ¥2000E

松江市教育委員会
定価(本体2000円【税別】)

